

秋田県文化財調査報告書第74集

中 田 面 遺 跡
重 兵 衛 台 I 遺 跡
重 兵 衛 台 II 遺 跡
根 洗 場 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書

1980・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財発掘調査報告書

— 昭和54年度 国営能代開拓建設事業関係 —

昭和55年3月

序

昭和51年から開始されている国営能代開拓建設事業は、54年度には埴川工区が対象でした。対象地内には数多くの遺跡が存在します。文化財保護の立場から、工法変更等で遺跡保存をはかることを目標としてきましたが、中田面遺跡は、諸般の事情から保存不可能になったため、記録保存を目的に発掘調査されることになったものです。

本報告書は、中田面遺跡のほか、用排水路建設に係る重兵衛台Ⅰ・重兵衛台Ⅱ・根洗場遺跡の発掘調査を集録したものです。この報告書の刊行が、地方史研究や文化財愛護に寄与することができれば幸いです。

発掘調査から本報告書刊行に至るまで、東北農政局能代開拓建設事業所、能代市教育委員会ならびに峰浜村教育委員会には何かと便宜を計っていただきました。心から感謝の意を表すしだいです。

昭和55年 3月31日

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

例 言

- 1 本報告書は、国営能代開拓建設事業に伴う中田面・重兵衛台Ⅰ・重兵衛台Ⅱ・根洗場遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 中田面遺跡に関する諸発表・報告と本報告の記述に相違ある場合は、本報告の記述を正確なものとする。
- 3 発掘調査・報告書作製にあたっては、下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

磯村朝次郎(県立博物館)、遠藤巖(秋田大学)、太田実(県教委)、武田孝義(武田事務所)、佐藤成右(能代市木工指導所)、藤田暁男(能代工業高校)、板橋範芳(大館市史編纂室)、阿部義平(文化庁)、林謙作(北海道大学)、藤沼邦彦(東北歴史資料館)、桑原滋郎(多賀城跡調査事務所)、吉岡康暢(石川県立郷土資料館)、山本正敏(富山県埋蔵文化財センター)、瀬川司男・高橋與右衛門(岩手県埋蔵文化財センター)、沼山源喜治(北上市史編纂室)、本堂寿一(北上市立博物館)、井上喜久夫(宮内庁・陵墓課)。

- 4 報告書の執筆は、永瀬福男、熊谷太郎、田口都、大高博康が討議し、それぞれ分担して実施した。文末に執筆者名を記した。Ⅱの3は、白石建雄(秋田大学)・工藤英美(岩館小)氏等の討議を経て、工藤英美氏が執筆されたものである。

なお、報告書中の挿図は、おもに下記の方々の手によるものである。石器実測は、諸澤早苗・丑沢美記子、土器実測は、山内泰子、地形図・遺構実測図のトレースは、宮腰智子・渡辺章子・京久美子、拓本は、鈴木光子・渡部香代子、土器復元は、佐々木金正・芹田利秋の諸氏による。そのほか整理作業員のみなさんにも協力していただいた。

- 5 石質鑑定は、渡辺昂(県立博物館)氏に御教示いただいた。
- 6 図版に使用した航空写真は、東北農政局開拓建設事業所所蔵のものである。
- 7 土色の記載については、「標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
- 8 挿図は遺構を約 $\frac{1}{50}$ に、遺物を約 $\frac{1}{3}$ に縮尺して掲載した。
- 9 掘立柱建物跡の実測図で、柱穴内の点線は柱痕跡を示す。

目 次

中 田 面 遺 跡

I はじめに	
1 発掘調査に至るまで	1
2 調査の組織と構成	1
II 遺跡の立地と環境	
1 立地と環境	2
2 歴史的環境	3
3 中田面付近の地形と地質	3
① 調査にあたって	3
② 地形概要	4
③ 段丘群	4
④ 中田面遺跡付近の地形・地質	5
III 発掘調査の概要	
1 遺跡の概観	5
2 調査の方法	5
3 調査の経過	7
IV 調査の記録	
1 遺構と遺物	8
① 竪穴住居跡	8
② 掘立柱建物跡	18
③ 井戸	44
④ 土壇	49
⑤ おとし穴状遺構	71
⑥ 溝	72
2 遺構外の遺物	80
V まとめ	
1 遺構について	82
2 遺物について	86
3 年代について	87

表 目 次

第1表	S B 01柱穴計測表.....18	第14表	S B 14柱穴計測表.....34
第2表	S B 02柱穴計測表.....18	第15表	S B 15柱穴計測表.....34
第3表	S B 03柱穴計測表.....18	第16表	S B 16柱穴計測表.....37
第4表	S B 04柱穴計測表.....20	第17表	S B 17柱穴計測表.....37
第5表	S B 05柱穴計測表.....23	第18表	S B 18柱穴計測表.....37
第6表	S B 06柱穴計測表.....23	第19表	S B 19柱穴計測表.....37
第7表	S B 07柱穴計測表.....25	第20表	S B 20柱穴計測表.....39
第8表	S B 07柱穴計測表.....25	第21表	S B 21柱穴計測表.....40
第9表	S B 09柱穴計測表.....25	第22表	S B 22柱穴計測表.....40
第10表	S B 10柱穴計測表.....29	第23表	S B 23柱穴計測表.....43
第11表	S B 11柱穴計測表.....29	第24表	S B 24柱穴計測表.....43
第12表	S B 12柱穴計測表.....29	第25表	S B 25柱穴計測表.....44
第13表	S B 13柱穴計測表.....33	第26表	井戸分類表.....85

挿 図 目 次

第1図	中田面遺跡周辺地形図及び遺跡分布図	第15図	S I 04出土土器.....13
第2図	中田面付近の段丘分布図..... 3	第16図	S I 05実測図.....14
第3図	井戸 (S E 07) の断面図..... 4	第17図	S I 05出土土器.....15
第4図	中田面付近の総合柱状図..... 4	第18図	S I 06・S E 01実測図.....16
第5図	中田面付近の地質模式図..... 5	第19図	S I 06出土土器.....16
第6図	中田面遺跡の地形と発掘調査区... 6	第20図	S I 07実測図.....17
第7図	中田面遺跡の地層..... 7	第21図	S I 07出土土器.....17
第8図	中田面遺跡遺構分布図(折り込み)	第22図	S I 08出土土器.....18
第9図	S I 01実測図..... 8	第23図	S B 01実測図.....19
第10図	S I 02・S K 22実測図..... 9	第24図	S B 02実測図.....20
第11図	S I 02出土土器..... 9	第25図	S B 03実測図.....21
第12図	S I 03・S I 09実測図.....10	第26図	S B 04・05・19・21実測図.....22
第13図	S I 03出土土器.....11	第27図	S B 04柱穴出土土器.....23
第14図	S I 04・08・S K 14実測図.....12	第28図	S B 06実測図.....24
		第29図	S B 07・S D 01実測図.....26

第30図	S B 08実測図	27	第55図	S K 06出土土器・土錘	51
第31図	S B 09・25実測図	28	第56図	S K 07出土土器	52
第32図	S B 10実測図	31	第57図	S K 08出土土器	53
第33図	S B 11実測図	32	第58図	S K 09出土土器	53
第34図	S B 12実測図	33	第59図	S K 10出土土器	53
第35図	S B 13実測図	34	第60図	S K 07～24実測図	54
第36図	S B 14実測図	36	第61図	S K 16出土土器	55
第37図	S B 15実測図	37	第62図	S K 18出土土器	56
第38図	S B 16実測図	39	第63図	S K 26出土土器	56
第39図	S B 17実測図	40	第64図	S K 30出土土器	57
第40図	S B 18実測図	41	第65図	S K 26～40実測図	59
第41図	S B 20実測図	42	第66図	S K 38出土土器	60
第42図	S B 22・23・S D 47実測図	43	第67図	S K 41出土土器	60
第43図	S B 24・S D 48実測図	44	第68図	S K 41～61実測図	62
第44図	S E 01出土土器	44	第69図	S K 71出土土器	64
第45図	S E 02～05実測図	45	第70図	S K 76出土土器	65
第46図	S E 02出土土器	46	第71図	S K 62～79実測図	66
第47図	S E 05出土鉄器	47	第72図	S K 80～104実測図	67
第48図	S E 07出土土器	47	第73図	S K 89出土土器	68
第49図	S E 08出土土器	48	第74図	S K 105～110・T P 01～05実測図	71
第50図	S E 06～10実測図	48	第75図	S D 02・S K 13・19実測図	73
第51図	S K 01出土土器	49	第76図	S D 03・34・33・53実測図	77
第52図	S K 02～06実測図	50	第77図	遺構外出土遺物	81
第53図	S K 02出土土器	51	第78・79図	掘立柱建物跡模式図(1)・(2)	83・84
第54図	S K 03出土土器	51	第80図	建物と井戸との関係予想図	85

図 版 目 次

図版 1	航空写真	図版 6	(1) S I 01 (2) S I 02
図版 2	遺跡遠景	図版 7	(1) S I 02・03・09 (2) S I 03・09
図版 3	(1) I 区発掘調査前 (2) II 区発掘調査前	図版 8	(1) S I 06・S E 01 (2) S I 06カマド
図版 4	(1) I 区調査風景 (2) II 区調査風景	図版 9	(1) S I 04・08 (2) S I 05
図版 5	発掘調査区	図版 10	(1) S I 07 (2) S I 07遺物出土状態
		図版 11	(1) S B 17 (2) S B 13

- 図版12 (1)S B11・S I 07 (2)S B 18
- 図版13 (1)S D01の確認面 (2)S D01・S B
07・S K06
- 図版14 (1)S D06の確認面 (2)S D06・S B
03
- 図版15 (1)S B23・S D47 (2)S D47南部分
- 図版16 (1)S B22・23 (2)S B24・S D48
- 図版17 (1)S B04・05・19・20・21 (2)S B06
- 図版18 (1)S B10 (2)S B12
- 図版19 (1)S B15 (2)S B08の東端・S B15
- 図版20 (1)S B01・S D05 (2)S B16
- 図版21 S B08
- 図版22 (1)S I 06とS E01 (2)S E01
- 図版23 (1)S E02埋土層 (2)S E02
- 図版24 (1)S E03 (2)S E10
- 図版25 (1)S E06 (2)S E06
- 図版26 (1)S E05埋土層 (2)S E05
- 図版27 (1)S E07 (2)S E09
- 図版28 (1)S K01 (2)S K05
- 図版29 (1)S K06 (2)S K07
- 図版30 (1)S K08 (2)S K09
- 図版31 (1)S K10 (2)S K08・11
- 図版32 (1)S K14 (2)S K15
- 図版33 (1)S K16 (2)S K17・18
- 図版34 (1)S K05・30 (2)S K31
- 図版35 (1)S K36 (2)S K38
- 図版36 (1)S K43 (2)S K70
- 図版37 (1)S K71 (2)S K89
- 図版38 (1)T P01 (2)T P02
- 図版39 (1)S D03 (2)S K12・S D03
- 図版40 (1)S D38・41 (2)S D51
- 図版41 (1)S D33・34の確認面 (2)S D33・34
- 図版42 (1)S D53 (2)S D46
- 図版43 (1)S D20・25・58 (2)S D58の延長か
- 図版44 遺物出土状態 (1)S I 02の土師器小
甕 (2)S I 05の土師器杯 (3)S I 05
の須恵器杯
- 図版45 遺物出土状態 (1)S K30の須恵器壺
(2)S K06の須恵器蓋 (3)S K89の珠
洲系土器
- 図版46 遺物出土状態 (1)S E05の鉄器(刀
子) (2)S E01の播鉢 (3)土壌内の
土錘
- 図版47 遺物出土状態 (1)S D47の青磁 (2)
溝内の土錘 (3)溝内の土錘
- 図版48 遺物出土状態 (1)柱穴内の土錘 (2)
紡錘車 (3)砥石
- 図版49 青磁出土状態
- 図版50 遺構内出土遺物 (1)・(2)S I 02 (3)
~(5)S I 03
- 図版51 遺構内出土遺物 (1)・(2)S I 04 (3)
~(8)S I 05
- 図版52 遺構内出土遺物 (1)~(3)S I 06 (4)
~(9)S I 07
- 図版53 遺構内出土遺物 (1)~(6)S K01 (7)
S K02
- 図版54 遺構内出土遺物 (1)~(5)S K06 (6)
~(11)S K07
- 図版55 遺構内出土遺物 (1)S K08 (2)・(3)
S K09 (4)・(5)S K10 (6)~(10)S K
16
- 図版56 遺構内出土遺物 (1)~(3)S K26 (4)
~(7)S K30 (8)S K38
- 図版57 遺構内出土遺物 (1)~(5)S K41 (6)

	S K 71 (7)・(8) S K 76 (9) S K 89	図版59 遺構外出土遺物 (1)石器 (2)・(3)弥生式土器 (4)~(8)須恵器 (9)土師器
図版58 遺構内出土遺物 (1) S E 01 (2)・(3) S E 02 (4) S E 05 (5)・(6) S E 07 (7) S E 08		図版60 遺構外出土遺物 (1)珠洲系土器 (2) (3)青磁 (4)土錘 (5)砥石 (6)鉄釘

重兵衛台 I 遺跡

I	はじめに	
1	発掘調査に至るまで	1
2	調査の組織と構成	1
II	遺跡の立地と環境	
III	発掘調査の概要	
1	遺跡の概観	1
2	調査の方法	3
3	調査の経過	3
IV	調査の記録	
1	遺構と遺物	3
①	土壙	3
②	溝	3
2	遺構外の遺物	5
V	まとめ	

挿 図 目 次

第1図	重兵衛台 I 遺跡の地層	1
第2図	重兵衛台 I 遺跡の地形と発掘調査区	2
第3図	S K 01~12実測図	4

図 版 目 次

図版1	(1)発掘調査前 (2) S K 04	図版2	(1) S D 02 (2) A 区発掘調査後
-----	---------------------	-----	-------------------------

重兵衛台 II 遺跡

I ．はじめに

1	発掘調査に至るまで	1
2	調査の組織と構成	1
II	遺跡の立地と環境	1
III	発掘調査の概要	
1	遺跡の概観	1
2	調査の方法	3
3	調査の経過	3
IV	調査の記録	
1	遺構と遺物	3
①	竪穴住居跡	3
②	土壇	6
③	溝	9
2	遺構外の遺物	10
V	まとめ	

挿 図 目 次

第1図	重兵衛台Ⅱ遺跡の地層	1	第6図	S I 03実測図	6
第2図	重兵衛台Ⅱ遺跡の地形と発掘調査区	2	第7図	S I 03出土遺物	6
第3図	S I 01実測図	3	第8図	S K 01～12実測図	7
第4図	S I 02実測図	4	第9図	S K 13～26実測図	8
第5図	S I 02出土土器	5	第10図	採集土器	10

図 版 目 次

図版1	(1)発掘調査前 (2)S I 01とS D 02	図版4	(1)S I 03遺物出土状態 (2)C区発掘調査後
図版2	(1)S K 04遺物出土状態 (2)S D 04	図版5	遺構内出土遺物
図版3	(1)S I 02 (2)遺物出土状態 (3)土師器		

根 洗 場 遺 跡

I はじめに

1	発掘調査に至るまで	1
---	-----------	---

2	調査の組織と構成	1
II	遺跡の立地と環境	
III	発掘調査の概要	
1	遺跡の概観	1
2	調査の方法	2
3	調査の経過	3
IV	調査の記録	
1	遺構と遺物	3
①	土壇	3
②	溝	3
2	遺構外の遺物	3
V	まとめ	

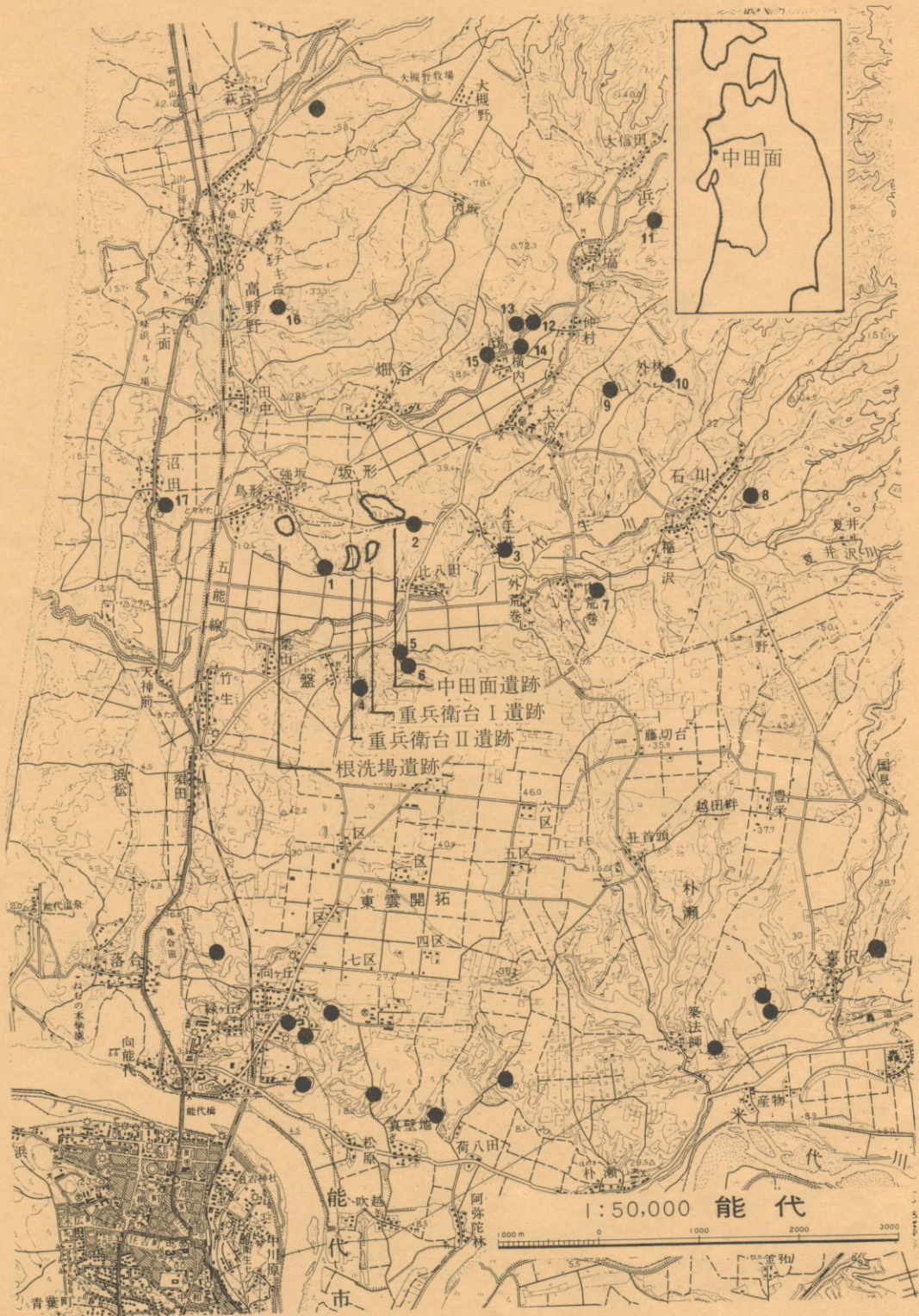
挿 図 目 次

第1図	根洗場遺跡の地層	1	第4図	2層出土土器	4
第2図	根洗場遺跡の地形と発掘調査区	2	第5図	2層出土石器	5
第3図	S K01・02実測図	3			

図 版 目 次

図版1	(1)発掘調査風景 (2)~(4)遺物出土状態	図版3	出土遺物 (1)~(4)縄文式土器 (5)~(7)石器
図版2	出土遺物		

中 田 面 遺 跡



第1図 中田面遺跡周辺地形図及び遺跡分布図

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

能代開拓建設事業は、米代川の右岸、左岸を対象とする国営総合農地開発事業である。対象地域は、能代市、峰浜村、山本町、八竜町の4市町村におよび、その面積は、3,671haである（註1）。昭和54年度の工事対象地区は、埴川工区であり、当地域内には、周地の遺跡が8ヵ所存在する。昭和53年11月には、これら遺跡の範囲確認調査が実施された（註2）。8遺跡のうち7遺跡は工事変更等で破壊からまぬがれ、工事変更の不可能な中田面遺跡が、発掘調査されることになった。（永瀬）

2 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

調査期間 昭和54年4月16日～昭和54年9月20日

調査地 秋田県山本郡峰浜村坂形字中田面

発掘面積 11,736m²

調査員 永瀬福男 秋田県教育庁文化課 社会教育主事
熊谷太郎 " 文化財主事

補佐員 田口 都

補助員 大高博康、佐々木金正

事務局 高橋 司 秋田県教育庁文化課 課長（現大曲市教育長）

門間光夫 " 参事兼課長補佐

越智秀一 " 課長補佐

飯塚喜一 " 学芸主事

松永俊一 " 係長

富樫泰時 " 学芸主事

川越 讓 " 主事

石塚清光 " 主事

新泉美知子 " 主事

竹内 誠 東北農政局能代開拓建設事業所開発課 課長

小野寺宏之 " 係長

調査作業員 安宅美代記、小栗義信、佐藤甚吉、鈴木昭信、鈴木要、鈴木兼三、鈴木三郎、

鈴木徳三郎, 鈴木由夫, 鈴木豊, 伊藤久米治, 伊藤善吉, 鈴木政治, 川村専十郎, 山崎豊吉, 佐藤礼司郎, 佐藤清吉, 佐藤清八郎, 佐藤長一郎, 金平秀夫, 金平秀克, 工藤竜市, 成田芳道, 三浦松五郎, 島田範昭, 鈴木清光, 工藤兵八郎, 工藤甚七, 小嶋拓, 朝香利彦, 米森伴宗, 鈴木一, 鈴木助松, 桧森好広, 武田光雄, 工藤憲一, 工藤清一, 工藤敬作, 工藤貞秀, 佐々木徳松, 大高博康, 佐々木金正, 芹田利秋, 安宅ナミ子, 安宅ミセ, 小栗カネ, 小栗志貴子, 小栗ツルエ, 小玉ヒデ, 小玉リセ, 佐藤チセ, 佐藤チヨ, 鈴木イマ子, 鈴木和子, 鈴木キヨ, 鈴木セイ子, 鈴木テイ子, 鈴木貞子, 鈴木ノエ, 鈴木則子, 鈴木ヒデ, 鈴木英子, 鈴木八重子, 鈴木ヤス子, 伊藤トクエ, 伊藤ハナ, 伊藤ヒナ, 伊藤マサ, 佐々木勝子, 佐々木キヨ, 原田恵知子, 鈴木リノ, 鈴木銀征子, 小栗君子, 小栗アケミ, 鈴木ツタヨ, 川村真樹子, 後藤アヤコ, 大高幸子, 高橋広美, 村木夕紀子, 住吉優子, 大高栄子, 工藤テツ, 工藤イワ子, 川村チサ, 川村ハチコ, 工藤チセ, 工藤礼子, 小野キクエ, 後藤博子, 川村リツ, 後藤フミ, 成田キクエ, 工藤テル, 武田和子, 鈴木トシ, 鈴木トシ子, 藤島ミチエ,

整理作業員 鈴木光子, 渡辺章子, 諸澤早苗, 丑沢美記子, 山内泰子, 宮腰智子, 京久美子, 越後谷敏子, 渡部香代子, 安田富子, 鈴木仁美, 工藤優子, 工藤田鶴子, 板倉久美子, 鈴木鐘子, 三浦恵, 石木田京子, 納谷鈴子, 若狭鏡子, 堀内裕子, 大倉聖子, 金谷祐子, 鈴木正一。

調査協力機関 東北農政局能代開拓建設事業所

能代市教育委員会

峰浜村教育委員会

(永瀬)

II 遺跡の立地と環境

1 立地と環境

中田面遺跡は、北緯40°16′—40°17′・東経140°03′—140°04′に位置する。遺跡の北を遠望すると、青森県との県境をなす白神山が東西に横走する。遺跡の西方約3.5kmに日本海があり、南方約6kmに米代川が西流し、日本海に注いでいる。

遺跡は、西方にのびる舌状台地上に位置する。標高約30m。沖積地との比高は約10m。台地の北には埜川が、南には竹生川が西流し、それぞれ日本海に注いでいる。

台地上は、畑地・水田・森林に利用されている。台地周辺の沖積地は、大部分水田である。
(永瀬)

2 歴史的環境

埴川・竹生川の周辺の台地上には、中田面遺跡のほか、約20ヵ所の周知の遺跡が存在する(註3)。根洗場・外林(遺跡分布図の9)・杉沢野(4)は、縄文時代前期に属する遺跡である。なお、杉沢野遺跡は縄文時代晩期の遺物も多量に出土する。

沼田遺跡(17)からは、奈良時代に属すると考えられる土師器(杯・甕)が出土している。重兵衛台Ⅰ・重兵衛台Ⅱ・城土手(15)・高野野(16)遺跡からは、平安時代に属する土師器そのほかの遺物が出土している。

古代末～中世に属すると考えられる館跡は、平泉チャシ(19)・作館(7)・荻の城(13)・古館(8)・大館(12)・山城(11)・内林(10)遺跡である。

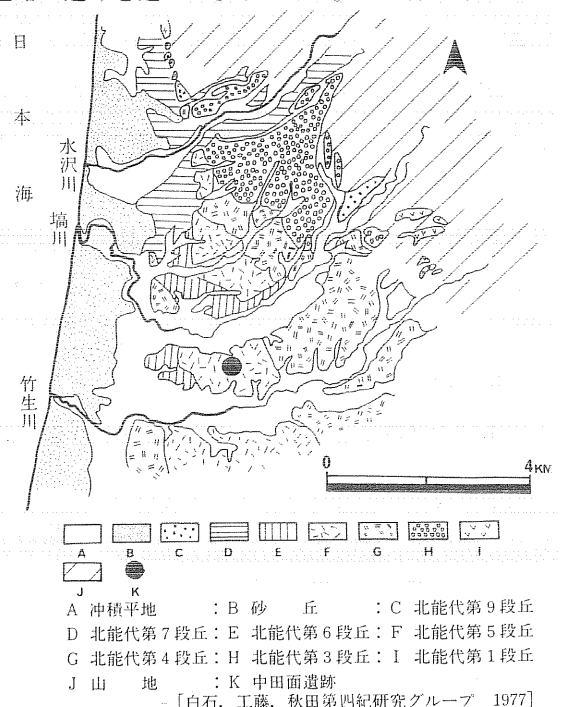
中田面遺跡の周囲に現存する集落は、鳥形・強坂・栗山・小土・比八田・荒巻・小手萩・畑谷・田中である。これらの集落は、「出羽国秋田郡知行目録」(天正19年)・「秋田実季分限帳」(文禄元年)・「秋田実季侍分限帳」(慶長6年)などの中世文書(註4)にすべて登場する。したがって、中世末には中田面遺跡周辺の開発はだいぶ進んでいたと考えられる。松山安東氏の居城である霧山城は、遺跡の南方約13kmのところの所在する。

秋田藩の脇街道である八森街道は、中田面遺跡の近くを通ったようである。「正保四年出羽国一國絵図」(註5)では、中田面遺跡の南に現存する道路を使用していたことが理解できる。この道路沿いには、重兵衛台Ⅰ・Ⅱ、ガニガ台遺跡等古代の遺跡が存在する。日本海に通ずるこの道路は、古代からの主要な道路であったと考えられる。(永瀬)

3 中田面遺跡付近の地形・地質

① 調査にあたって

この報告書では、中田面遺跡の位置を中心に、ほぼ東西1.5km・南北1kmを段丘とその構成層について精査したものである。なお、調査にあたっては、「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」(白石・工藤ら, 1977)(註6)の段丘区分を踏襲した。



第2図 中田面付近の段丘分布図

地層の色彩表現については、「新版標準土色帖」(農林省農林水産技術会議事務局, 1970)を用いた。

② 地形概要

当調査地域は、急峻な地形をしめす白神山地が、やがて広大な台地をもつ能代地域と続く、その中間に位置する。付近の水沢川では、山地から運んできた土砂で扇状地状の段丘が形成されていたり、段丘構成層も近くの山地の地質を反映した砂礫から成り立っていたりして、山地と平地の中間帯の特徴が良く現われている。

付近を流れる河川は、山間部では一般に北東—南西方向に流れるが、段丘分布地域にはいと弓状に西方に湾曲するのが特徴である(第2図参照)。このことは、後述する北能代第6段丘の形成にも関与しているものと思われる。

③ 段丘群

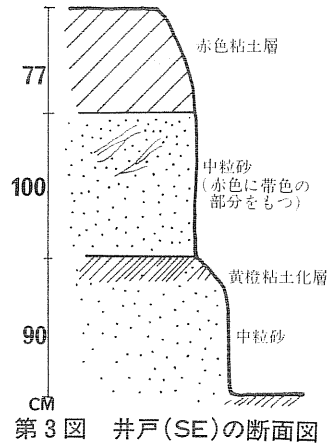
調査地域にみられる段丘は、北能代第6段丘・北能代第5段丘・北能代第4段丘の3段丘であるが、その東方には、高位段丘である北能代第1段丘が、山麓の縁辺部に帯状に点在する。また、北方には北能代第3段丘が、峰浜村大槻野を中心に特異な形(扇状地状)をして分布する。

北能代第4段丘は、砂や砂礫から構成されていて、最近の研究(潟西団体研究会, 1979)(註7)によると、これらの地層は本内砂層と松木沢礫層に対比される。そして、この地層が関東地方の下末吉層に対比されると言われている。

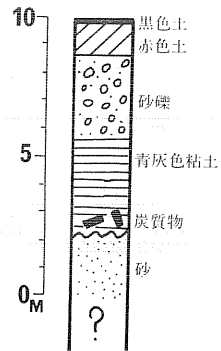
北能代第5段丘は、一般に厚い砂礫層からなり、厚いところでは10mを越える。しかし、今回の調査で判明したことは、当地域の段丘の中央部には、それに対応する砂礫が全くみつからず、単に段丘崖付近にだけ堆積している(第5図参照)ということである。

中田面遺跡はこの面上にあり、高度は30m・沖積面との比高は10mほどである。

北能代第6段丘は、北能代第5段丘の西端および南端に現われ、段丘の構成礫も亜角礫の泥岩類が多く、後背地にみられる地層に由来するものと思われる。また、米代川流域で普遍的にみられる花こう岩の礫は全く認められなくなるなど、これらの事実から、この段丘は埴川、竹生川による河岸段丘であることが推測できる。



第3図 井戸(SE)の断面図



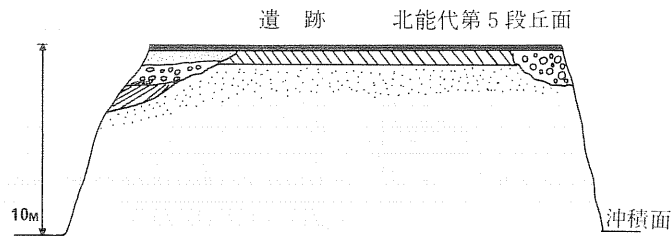
第4図 中田面付近の総合柱状図

④ 中田面遺跡付近の地形・地質

当遺跡は前述の通り北能代第5段丘上にあり、黒色土のすぐ下位には燈色の粘土層（通称、赤色土）が1 m前後形成されている（第4図参照）。

その下位には赤色の中粒砂が続き、厚さは2 m以上あると思われるが、その下位については全く不明である。砂の重鉱物を検鏡すると、磁鉄鉱が非常に多いことがわかる。これがこの地層を赤色にしている原因であろう。なお、この砂層中に粘土化した部分が不規則にみられる。

この段丘の段丘崖付近では、上述の砂層を削って青灰色泥があり、基底部には木本の炭質物が多数みられる。層厚は約3 mほどであり、その上位には、さらに3 mほどの細粒～中粒で亜角礫の泥岩類が重なっていて、花こう岩類ははいっていない。（工藤）



第5図 中田面付近の地質模式図

III 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

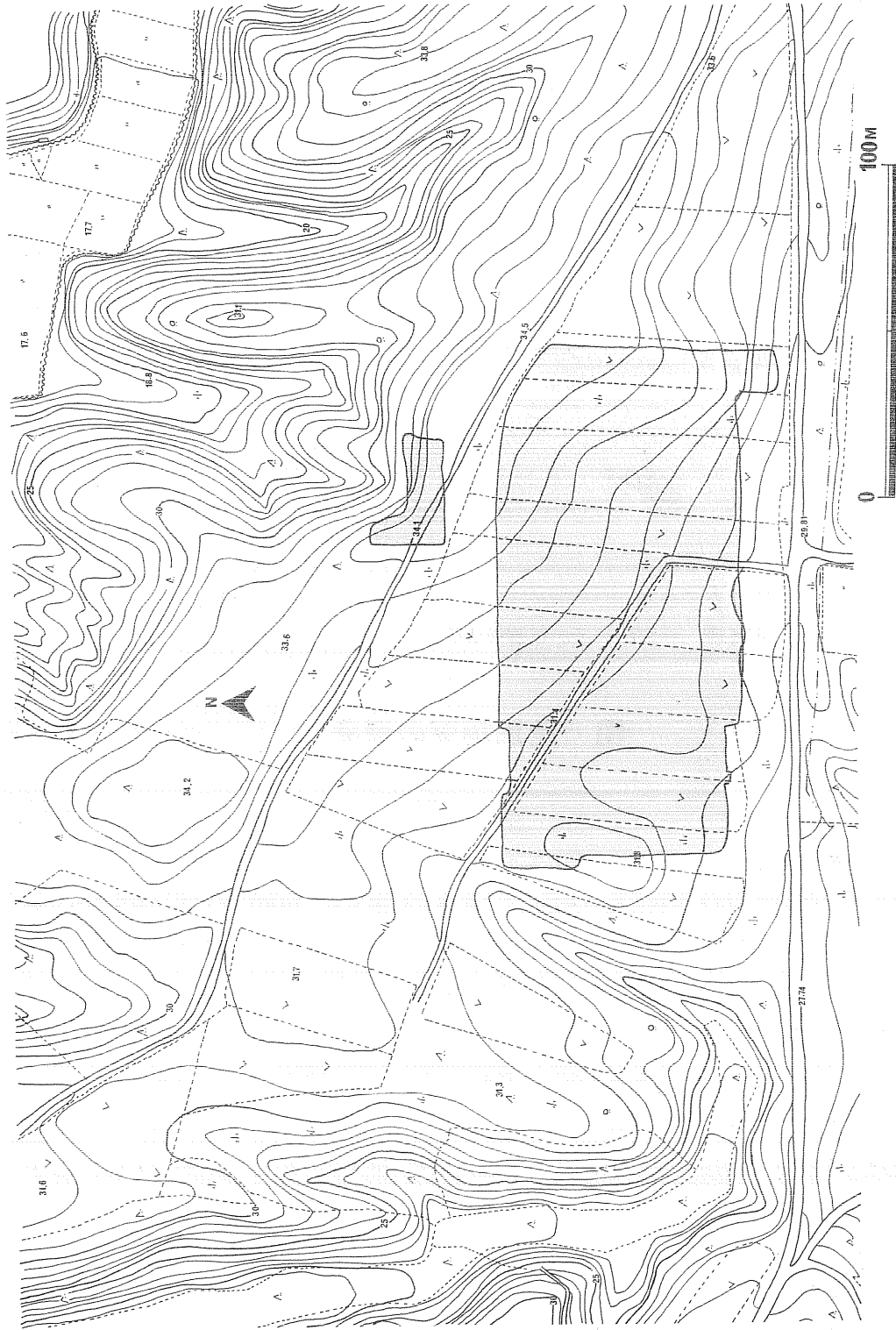
遺跡は、東西にのびる舌状台地の先端近くの北縁に位置する。昭和53年11月に実施された範囲確認調査で、遺跡の面積は、約28,200m²あることが確認されている。遺跡の西と東は小谷で区切られ、南側は鳥形部落⇄比八田部落の道路が通っている。遺跡の東側の一部は、土取りのため破壊されていた。

標高は遺跡の北側で34m、南側で30mを測る。したがって、遺跡は南向きの緩い斜面に立地する。沖積地との比高は約10mである。

遺跡の地層は、I層が黒褐色土層(10～15cm)、II層が暗褐色土層(10～20cm)、III層がローム層(約70cm)、その下は砂層となる。（永瀬）

2 調査の方法

発掘調査はグリッド方式で実施した。遺跡の南西隅に任意の原点を設定し、東方向と北方向



第6図 中田遺跡の地形と発掘調査区

にグリッドを配置した。グリッドの南北方向は、磁北方向に一致する。グリッドの規模は4 m×4 mである。グリッドの名称は、南北にアルファベット、東西に算用数字を用い、これらの組合わせで表現した。

表土の除去作業は、一輪車とベルトコンベアを併用して実施した。

遺構の実測は、遣り方測量で実施した。遺構の記号は下記の通りである。

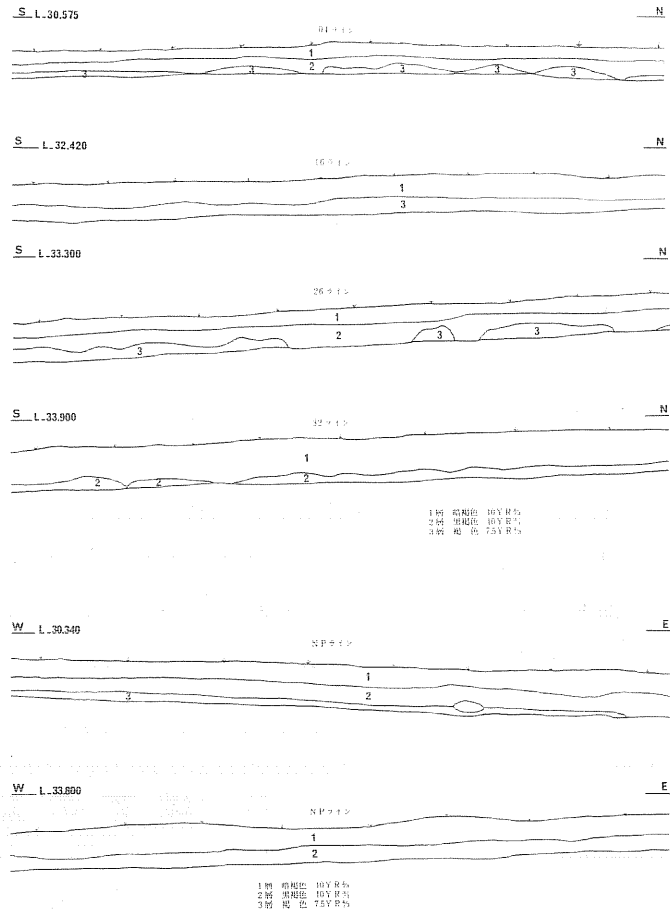
- S I—竖穴住居跡
- S B—掘立柱建物跡
- S K—土塙
- S E—井戸
- S D—溝
- T P—おとし穴状遺構
- R M—ローム・マウンド

そして、発見順にS K01, S K02…のように通し番号を付した。なお、ローム・マウンドとは、井戸・溝などを掘ったときの粘土・砂などの集積をいう。(永瀬)

3 調査の経過

調査は、4月16日から9月20日まで実施した。

4月16日の午前中は、鳥形公民館において作業員を対象に、スライドを使用し発掘調査の仕方を説明。午後は現場で調査のための諸準備。17日から調査区の西端から調査を開始。19日になると土塙・溝が検出される。土器・石器も出土する。20日、青磁片も出土し、中世の遺構も検出される可能性がでてきた。26日からは東端から西方向への調査を開始。便宜上、調査区の西半分をI区、東半分をII区として記述していく。28日、I区では柱穴が検出され、掘立柱建物のプラン検出につとめる。II区では、竖穴住居跡・土塙・溝が検出されはじめたほか、土石器・須恵器などの遺物も出土。5月1日、石組炉をもつ竖穴住居跡(S I 01)を確認。2日、S I 03を確認。4日、S I 02・S D 01を確認。7日、土塙の検出多数。10日、S I 01の精査。11日、S I 01



第7図 中田面遺跡の地層

S K01・S I02の精査。14日, I 区の土層の実測。S D01の精査開始。15日, S I04を確認。S D02
 S I03・S D03の精査開始。19日, S I02・S K01の埋土層の実測。23日, S K05・07・09・16~18, S
 D04の精査。26日, S K06・S K12の精査。28日, S E01・S E02の確認。精査開始。S E01で井側の
 遺材検出。30日, S I04の精査。土壌の精査, 埋土層の実測。31日, S E02の精査。6月2日, S E02
 の埋土層の実測。4日, S E03の精査。6日, S E05の精査。7日, S E06の精査。9日, S E05・S
 I05の埋土層の実測, S E06の精査。12日, S I06を確認。S I06とS E01・S K25は重複。13日,
 掘立柱建物跡を確認。19日, S E06・07の精査。23日, I 区の遣り方測量のための杭打ち開始。7月
 3日, S B08をはじめ, 調査区中央部でも掘立柱建物跡が検出。9日, S K51~53検出。17日, 溝の
 精査開始。19日, S I07・08・S K61~68の精査。20日, I 区の遺構実測開始。25日, S B16を確認。
 8月1日, S E08の確認。6日, II 区の平面実測のため遣り方測量の杭打ち。16日, S D41~43, S
 E08の精査。22日, II 区の遺構実測の開始。24日, S K72~74の精査。31日, 掘り残しのグリッドの
 表土除去作業。9月4日, S D33・34を追求するため調査区を設定。9日, S B01~S B25までの
 建物跡をすべて検出。10日, 写真撮影のための清掃。15日, 現地説明会。18・19日, 写真撮影。20日,
 写真・実測の補足作業。発掘機材の撤去。(永瀬)

IV 調査の記録

1 遺構と遺物

① 竪穴住居跡

SI 01竪穴住居跡 平面形は南側が不明だが, 半
 径2.5mの円形プランを呈するものと思われる。

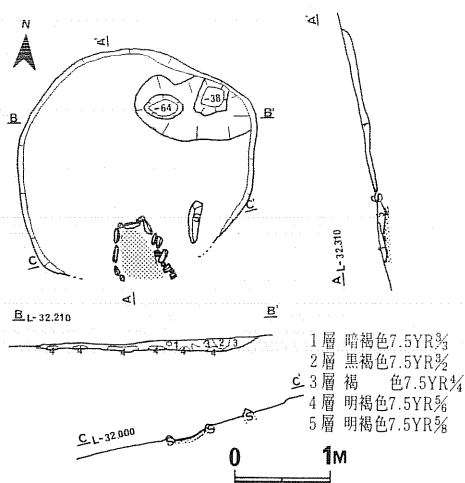
炉の位置から主軸はN-15°-W。

壁の立ち上がりは緩く, 6~8cmと浅い。

床面も壁と同様に, 非常に強くしまり, 地山の
 傾斜に伴い, 北から南に緩く傾く。

柱穴らしい痕跡は認められない。

炉は南に開いたコ字状石組炉が住居プランの南
 側に偏在する。南北70×東西50cm程の大きさで,
 石は大小の河原石を16個使用しているが, この炉
 の東に同様な石がおかれてあり, かってこの炉の



第9図 SI 01実測図

縁石として使用した可能性もある。この炉の中には非常に薄く焼土が堆積していた。

SI 02 竪穴住居跡 S I03の西隣りに位置する。北壁と西壁隅でSK22と隣接するが、付属施設かはわからない。

1辺3.00mの隅丸方形を呈し、主軸はN-65°-Eを示す。

壁は北壁が70°程のきつい傾斜で、16cm立ち上がり、他は10cm程で緩やかに傾斜する。

床面はやや起伏があるが、全体的に堅く、床全面に2cm程の厚さで炭化物が散在していた。

柱穴らしい痕跡はない。

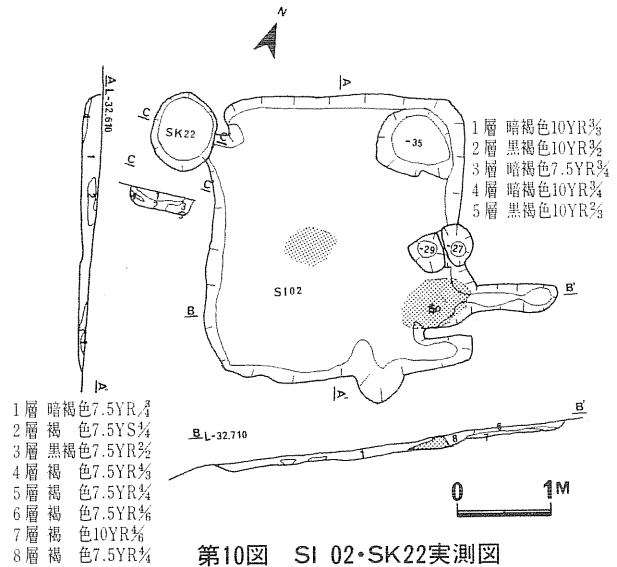
カマドは東壁の南寄りにあり、燃焼部には焼土が厚く堆積する。煙道部は天井が崩れ落ち、溝状に巾30cmで1.30m伸びている。なお、燃焼部に10cm程の石を立て、土師器の小型甕がかぶせてあった。支脚として使用されたものと思われる。さらに、住居跡中央から西壁寄りに、50×40cmの範囲で焼土が確認されている。

出土遺物には土師器・須恵器があり、1は底面から出土した須恵器杯である。色調はにぶい橙色を呈しているが、口縁部は灰褐色あるいは暗赤褐色で、焼成は良好である。回転糸切り底で無調整。2はカマドの燃焼部に伏せられていた土師器の小型甕で、内外面ともににぶい赤褐色を呈し、内面の底部付近には炭化物が付着する。胎土には小石を含んでいる。回転糸切り底で無調整。この他に、土師器甕の破片・小型土錘の半分欠損したものがある。

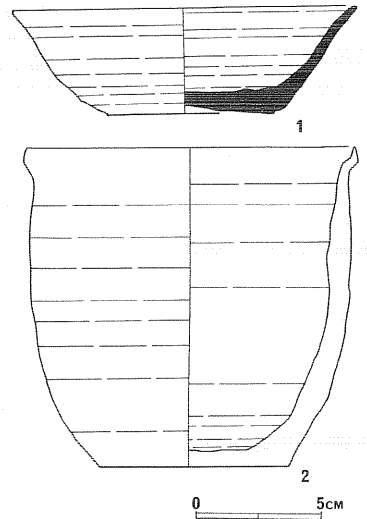
SI 03 竪穴住居跡 S I02の東隣りに位置する。又S I09と重複する。本遺構はS I09より新しいと思われる。

平面形は1辺が5.60mの正方形を呈し、主軸はN-60°-Eを示す。

壁は北壁が良好で、65°傾斜して20cm立ち上がるが、他は60°の傾斜で4cmの壁高と浅い。床面は少し起伏がみられるが、非常に堅くしまっている。この床面全体に炭化物が薄く堆積してい



第10図 SI 02・SK22実測図



第11図 SI 02出土土器

た。

柱穴はP₁～P₄の4個の支柱穴が確認されている。又、P₅・P₆・P₇には焼土・炭化物が多量に混入していた。

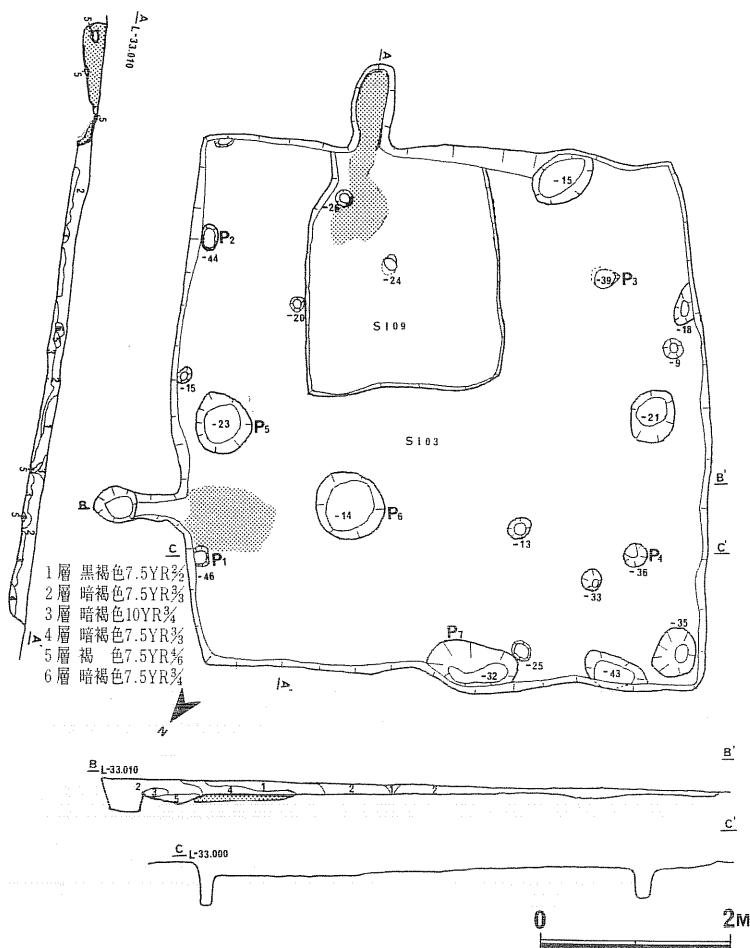
カマドは北東壁の北寄りに位置している。焚口部及び燃烧部には焼土が堆積しており、天井部が崩れた煙道部は溝状を呈し、長さ約50cm・巾30cmを測る。煙出部に至ると急に落ち込み、ピットを形成している。深さは37cm。

本遺構は埋土からの出土遺物が多く、1と2の他に

土師器杯の破片・須恵器破片があり、土師器杯の中には、内面を黒色処理したものもある。1は土師器甕で、胴部に比べて口縁部が厚く、外反しており、口唇部は丸味をもつ。胎土に小石を含み、色調は橙色。床面出土の2は土師器甕で、口縁部は外反したあと上に少し立ち上がる。この部分に細い一条の沈線が巡っている。胴部上半部には内面にカキ目がみられ、下半部は内外面とも平行のあらいタキ目が施されている。胎土には多くの砂粒が含まれている。焼成は良好。

SI 04 竪穴住居跡 北西隅でS I 08を切り、南西隅をS D 01に切られる。従って、本遺構はS I 08より新しく、S D 01より古いものと思われる。

平面形は長軸5.50m・短軸4.40mの長方形を呈し、主軸はN-65°-Eを示す。



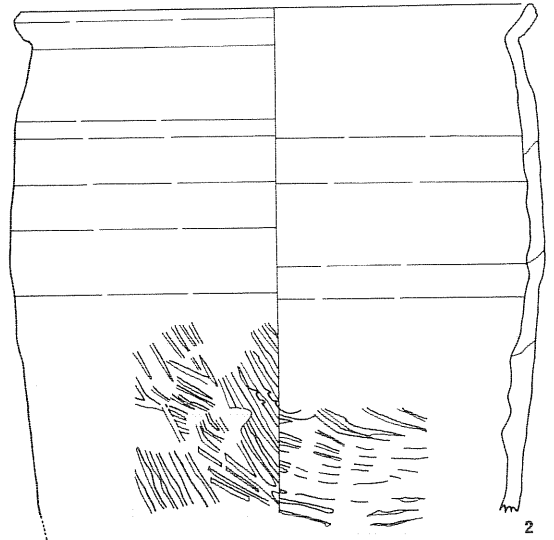
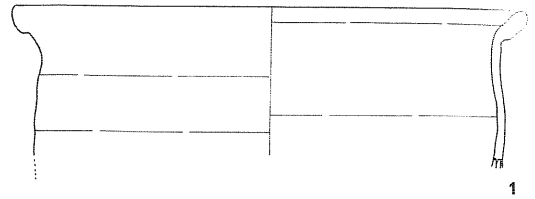
第12図 SI 03・09実測図

壁は約65°程の傾斜で、10cm立ち上がる。
床面は堅くしまっているが、西側は起伏が激しい。

柱穴はややずれがみられるが、P₁~P₄の4個が支柱穴と思われる。

カマドは東壁の南寄りに位置している。かなり崩れており、2.70×0.60mの範囲で全体的に焼土が堆積しているのみである。

出土遺物は埋土からのものが多く、1・2・3の他に、内面を黒色処理された土師器杯の破片や、半分欠損した土錘などが出土している。又、底部に「×」の刻線のある土師器杯が床面から出土している。1は埋土から出土した須恵器の高台付皿の高台部である。底部は回転糸切り。色調は灰白色。2は床面から出土した土師器甕である。胴部は緩く膨らみ、



第13図 SI 03出土土器



口縁部は強く外反してから内湾する。胴部中央には、部分的に縦方向のヘラケズリの痕がみられる。色調は浅黄橙色で、胎土には小石を含む。3は埋土から出土した土師器甕で、胴部は緩い膨らみをもち、口縁部は外反してから、内湾気味に立ち上がる。この境目のところで稜を形成する。橙色を呈し、胎土には多くの小石を含む。摩滅が激しく、調整痕はみられない。

SI 05 竪穴住居跡 平面形は1辺4.80mの正方形を呈す。

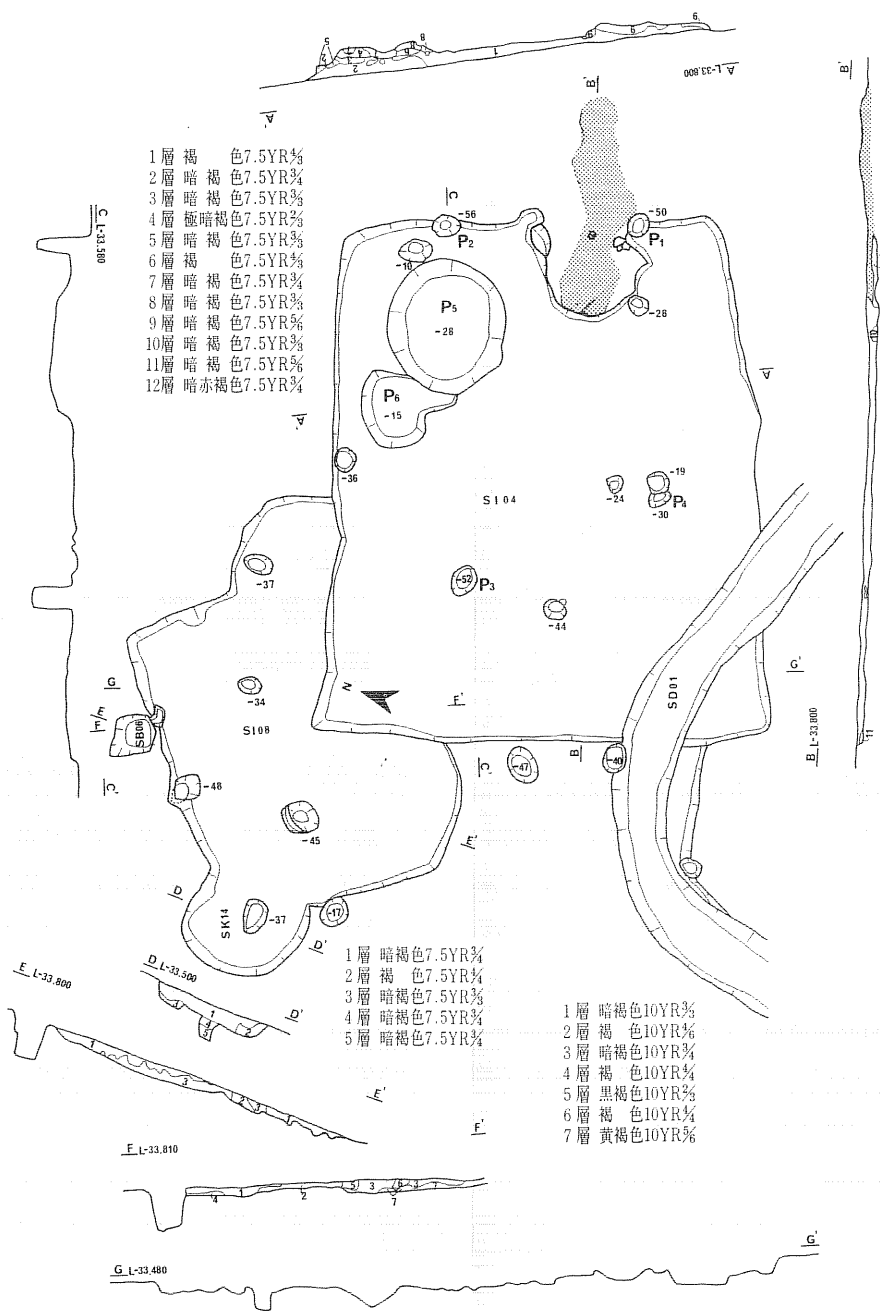
壁は南西壁が良く残り、ほぼ垂直に30cm程立ち上がる。

床面は平坦で良くしまっている。

柱穴は不明。

カマドは南東壁の南寄りにあるが、全体的に崩れ落ち、1.70×0.60mの範囲で焼土が堆積するのみである。

出土遺物は、他の竪穴住居跡に比べて多い方で、主として床面からの出土である。土師器や須恵器の杯に混じって、土師器甕や、タタキ目のある須恵器壺の破片などが出土している。1・3・4・5・8・9は床面から、2・6・7は埋土から出土している。1は須恵器杯で、口縁部を欠損している。内外面ともにロクロ成形の痕が明瞭に残り、胴部から底部に至る部分は、



- 1層 褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 2層 暗褐色 7.5YR $\frac{4}{4}$
- 3層 暗褐色 7.5YR $\frac{3}{4}$
- 4層 極暗褐色 7.5YR $\frac{2}{4}$
- 5層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 6層 褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 7層 暗褐色 7.5YR $\frac{4}{4}$
- 8層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 9層 暗褐色 7.5YR $\frac{3}{4}$
- 10層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 11層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 12層 暗赤褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$

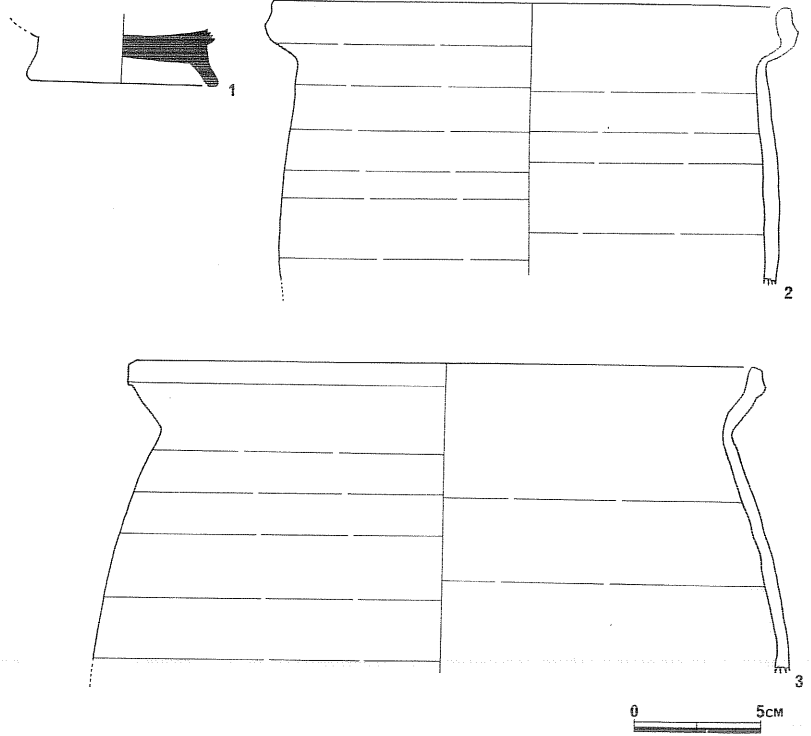
- 1層 暗褐色 7.5YR $\frac{4}{4}$
- 2層 褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 3層 暗褐色 7.5YR $\frac{3}{4}$
- 4層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$
- 5層 暗褐色 7.5YR $\frac{5}{4}$

- 1層 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$
- 2層 褐色 10YR $\frac{5}{4}$
- 3層 暗褐色 10YR $\frac{3}{4}$
- 4層 褐色 10YR $\frac{5}{4}$
- 5層 黑褐色 10YR $\frac{3}{4}$
- 6層 褐色 10YR $\frac{5}{4}$
- 7層 黃褐色 10YR $\frac{5}{4}$

第14図 SI 04·08 · SK14実測図



緩やかに丸味を帯びて作られている。底部は回転糸切りで、無調整。胎土には細かい砂粒を含み、灰白色を呈す。2は須恵器の高台付皿である。回転糸切りで切り離している。高台部は欠損。全体的には灰白色、部分的にはオリーブ黒色を呈す。胎土には砂が含まれる。



第15図 SI 04出土土器

3は器高の低い須恵器杯で、巻き上げによって成形している。色調は灰白色を呈す。4は土師器杯で、底部を欠損している。内面を横方向のミガキをかけたあとと黒色処理を施してある。胎土には細かい砂粒を含み、にぶい橙色を呈す。5は土師器杯で、成形に巻き上げ技法を用いていることがわかる。色調はにぶい橙色。6は土師器杯で、底径に比べて口径が大きい器形を呈す。回転糸切り底で無調整。にぶい橙色を呈し、口縁部の内外面、特に内面には多くのススが付着しており、燈明皿として使用されたものと思われる。胎土には砂粒を含む。7は高台付杯で、内外面ともロクロ成形の痕が明瞭に残る。回転糸切り底。胎土には小石を少し含み、色調は灰白色を呈す。8は土師器甕の口縁部で、段がつき外反する。部分的に粘土紐のつき足しができる。胎土には小石を含んでおり、色調は淡橙色。9は須恵器壺で、外面には縦方向、内面には同心円のアテ痕が口縁部より少し下から施されている。外面口縁部には、平行のタタキ目をすり消した痕跡がみられる。胎土には小石を含み、色調は暗青灰色を呈す。

SI 06 竪穴住居跡 SE01・SK25によって切られている。本遺構の方が古い。

平面形は1辺が4.40mの隅丸正方形を呈し、主軸はN-85°-Eを示す。

壁は約60°の傾斜で15cm立ち上がる。

床面は堅くしまっているが、起伏が激しい。

柱穴は1個がSE01によって切られているが、P1~P3の3個が支柱穴と思われる。

カマドは東壁の北寄りに位置し、燃烧部に焼土が堆積している。煙道はきつい傾斜で入り込むが、煙出部は崩れてしまったのか確認できなかった。

出土遺物は1・2・3の他に、土師器甕の底部が出土している。すべて埋土からの出土である。1は口縁部欠損の須恵器杯である。胴部から底部へ至る部分は丸味をおびており、底部はかなり厚い。内面にはロクロ成形の痕が明瞭に残る。右回転。底部は回転糸切りで、無調整。2は須恵器の高台付皿で、かなり厚手である。ロクロ成形の痕が明瞭で、右回転であることがわかる。回転糸切り底。胎土には細かい小石を含み、色調は青灰色。3は土師器杯で、底径に比べて口径が大きい。胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切りで切り離し無調整。口唇部に少しスガが付着する。胎土には細かい砂粒を多く含んでおり、色調はにぶい橙色を呈す。

SI 07 竪穴住居跡 SB11掘立柱建物跡の柱穴と重複し、本遺構が古い。

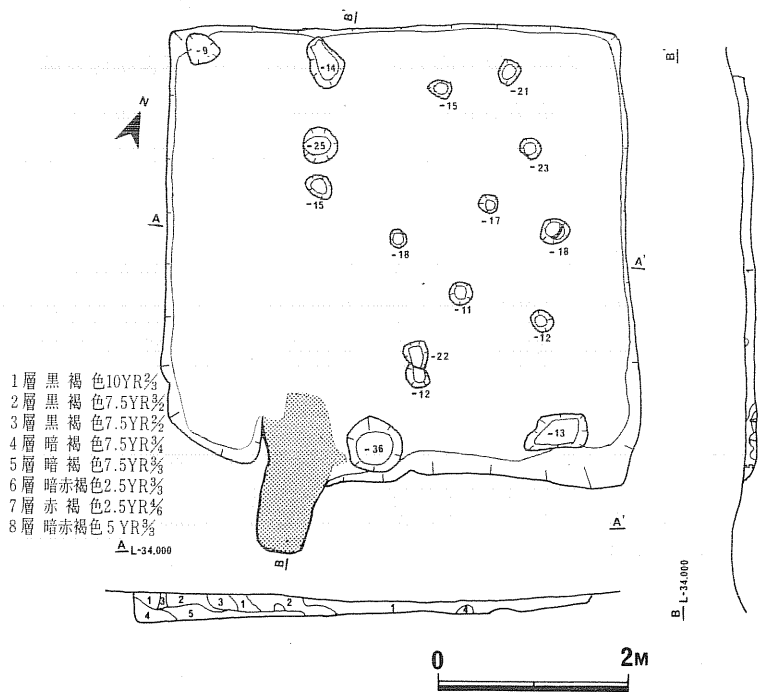
平面形は1辺が2.80mの隅丸方形を呈し、主軸はN-60°-W。

壁は約50°傾斜し、20cm立ち上がる。

床はほぼ平坦。柱穴は不明。

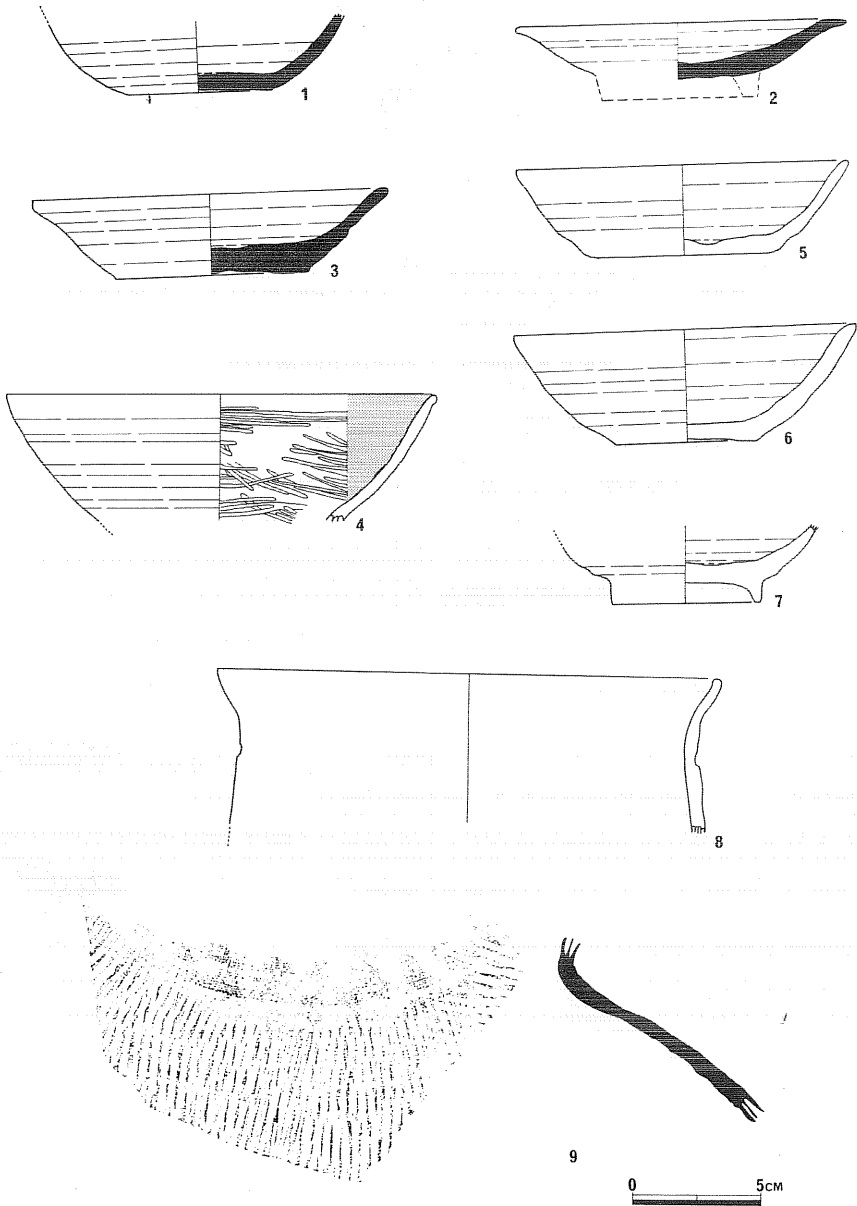
カマドは南東壁の南寄りに位置し、燃烧部には焼土が堆積していた。ほとんどが崩れてしまい不明瞭である。

出土遺物は多量で、床面あるいはピット内からのものがほとんどを占める。全体的にみて土師器甕の破片が多い。1はカマドから出土した須恵器杯である。切り離し技法は不明。2は床面出土の土師器甕の口縁部で浅い段を有して外反する。内面及び外面口縁部に横方向、胴部は縦方向のカキ目がみられる。胎土には小石を含み、にぶい黄橙色を呈する。3はカマドから出土した土師器甕で、口縁部は浅い段を有して

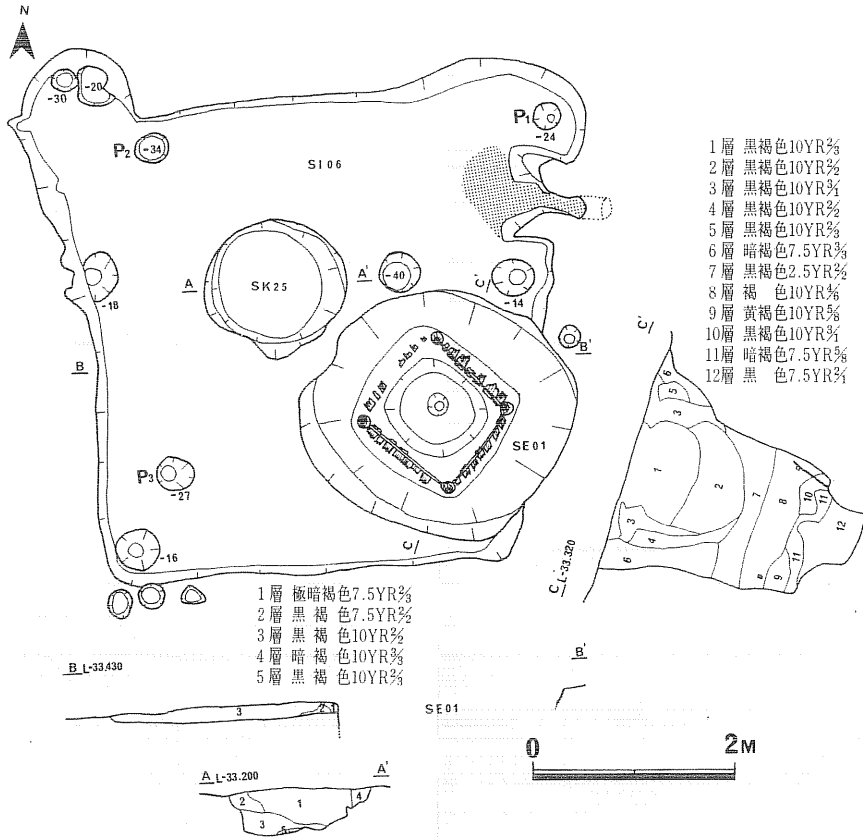


第16図 SI 05実測図

くびれ、直線的に外反する。内面は横方向、胴部は縦方向のカキ目がみられる。胎土には小石を多く含み、色調は淡橙色を呈する。4はカマド西隣りのピットから出土した土師器甕で、口縁部は浅い段をつくってから、強く外反している。胴部には、輪積み技法による成形のためできたと思われる粘土紐のつなぎ目が明瞭に残る。その巾は平均2cm程である。内面及び外面口縁部には横方向、胴部は不規則な斜め下へのカキ目が施されている。胎土には小石を含み、にぶい橙色を呈す。5はカマド西隣りのピット内から出土した土師器甕である。底部はとび出



第17図 SI 05出土土器

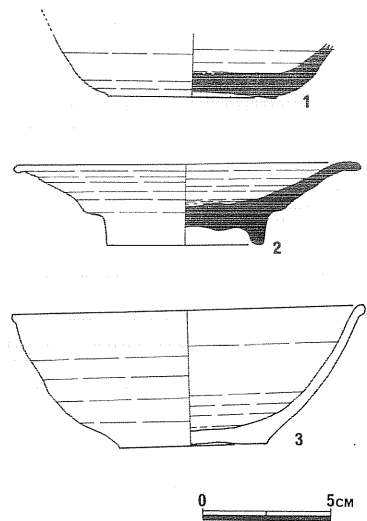


第18図 SI 06・SE01実測図

した平底で、すそが少し開き、木葉痕がついている。胴部は内面に縦方向のヘラナデ、外面は縦あるいは斜めにカキ目が施されている。胎土には小石が多く含まれ、色調は淡橙色を呈す。6はカマド西隣りのピットから出土した土師器甕で、底部は厚くとび出した平底で、胴部との接合部が明瞭である。胴部は内面が横方向、外面は縦方向のカキ目がみられる。胎土には小石を多く含み、色調は浅黄橙色を呈す。

SI 08竪穴住居跡 SI 04・SK 14と重複する。本遺構はこれらより古い。

平面形は、SI 04によって切られているため、正確なプランは不明である。



第19図 SI 06出土土器

壁もかなり破壊されているが、現状では40°程の傾斜で10cm立ち上がっている。

床面は起伏が激しいが堅くしまっている。

出土遺物は、埋土から出土した須恵器破片のみである。外面には平行なタタキ目が、内面には放射状のタタキ目が施される。

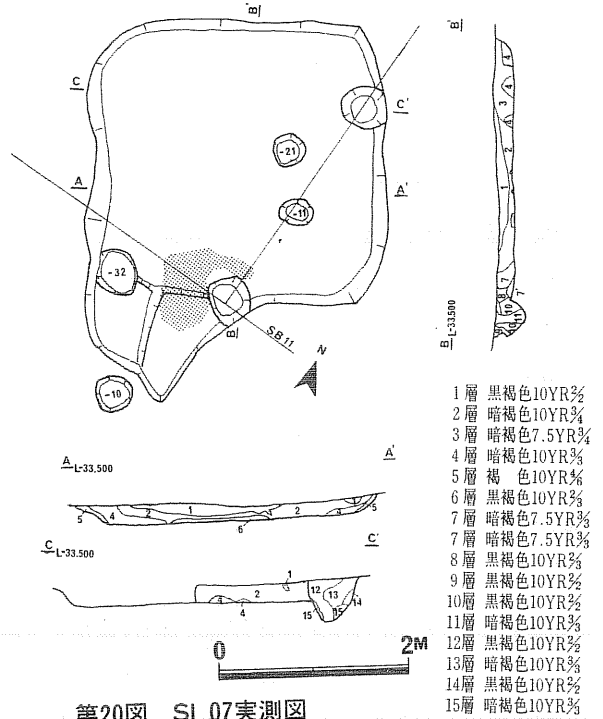
SI 09 竪穴住居跡 SI 03と重複する。

SI 03が新しいと思われる。

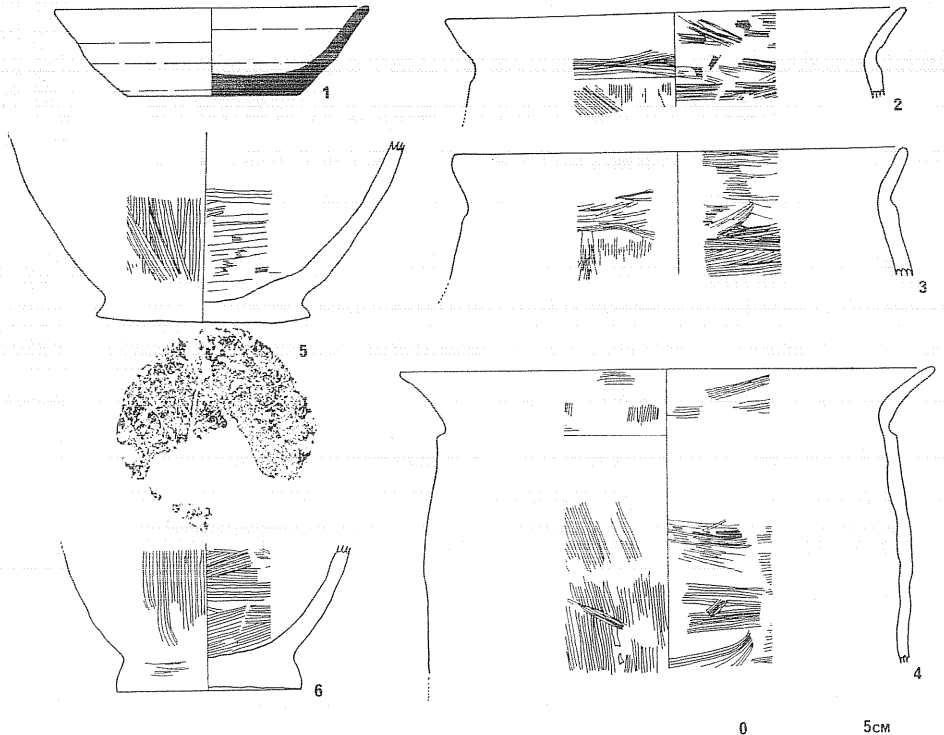
平面形は、長軸2.30m・短軸2.00mの長方形を呈し、主軸はN-35°-Wを示す。

床面はSI 03よりやや低く、起伏があるが、堅くしまっている。

カマドは、南東壁の北寄りに位置する。煙道部は天井部が崩れており、検出時に

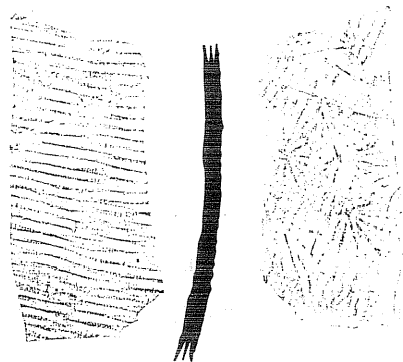


第20図 SI 07実測図



第21図 SI 07出土土器

においては、焚口部・燃烧部・煙道部に至るまで、びっしり焼土がつまっていた。なお、煙道部は巾45cm・長さ70cm程の溝状を呈している。(田口)



第22図 SI 08出土土器

② 掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡 地山直上の黒褐色土層で検出。北側の底部分を除き、この面で柱穴(柱痕跡とも)が明瞭に確認できた。

身舎部分は梁行2間・桁行3間であり、この4面に底を付する総柱建物である。南北6.40m・東西9.68m。

北東端の柱穴は、精査するも明確には確認できなかった。ただ痕跡が極めて浅く、不定形ながらわずかに認められた。柱穴の深さは、底部で最深36cm、平均28cm。身舎部は60cmを最深とし、平均42cmである。直径は平均値が底部で31cm、身舎部で41cmと明らかに身舎部が深さ、直径とも数値が大である。又、柱痕跡の直径は底部、身舎部でそれぞれ10~16cmである。SD05が遺構内を貫通し一部は柱穴と切り合っているが、柱穴が時期を後にしてつくられたものである。建物は東西棟西棟であるが、E-6°-Sを示す。

SB02掘立柱建物跡 地山上面にて検出。遺構の立地する地形は南方に傾斜しており、上方から流れこんだと思われる土砂の堆積により、土層は厚く攪乱気味であった。確認された遺構は梁行2間・桁行3間で南北方向に建てられ、わずかにゆがみのある長方形を呈す。南北4.88m・東西4.08m。

南西端の柱穴は精査したが検出されなかった。柱穴プランはP₃が方形であるのを除いて、円形もしくは楕円形であり、その直径は43cmを最大にして平均33cm、深さは最深74cm、平均57cmである。遺構内平面において炭化物がわずかに検出されるが土面状況の変化はうかがえない。

遺構プラン内を溝、SD17が貫通するが、関連性は明らかでない。

建物は南北棟であるが、N-33°-Eを示す。

SB03掘立柱建物跡 2層の下層部から地山上面にかけて多くの柱穴が検出された。確認された遺構の構造は梁行2間・桁行3間で長方形プランを呈するが、北面側柱列中間の柱穴は検出できなかった。南北9.00m・南西4.60m。

柱穴の深さは88cmを最大として平均58cm、直径は平均38cmである。

周囲の地形は南東に向かって傾斜しているが、遺構を囲むSD06周辺は、ほ

0 5cm

P	長径		深
	長径	短径	
1	37	31	25
2	37	35	26
3	29	27	26
4	33	33	26
5	48	37	28
6	29	25	21
7	30	28	24
8	28	26	21
9	30	25	18
10	24	18	26
11	30	25	24
12	33	26	27
13	34	30	24
14	30	25	32
15	38	33	34
16	35	30	34
17	35	30	33
18	63	46	50
19	33	31	38
20	53	42	49
21	38	36	44
22	42	36	50
23	49	43	58
24	41	35	44
25	47	44	60
26	43	38	45
27	50	43	57
28	38	38	16
29	30	25	26

第1表 SB01柱穴計測表

P	長径		深
	長径	短径	
1	30	28	49
2	41	35	74
3	39	38	60
4	30	30	65
5	24	17	44
6	47	47	60
7	40	37	60
8	29	26	53
9	36	33	53

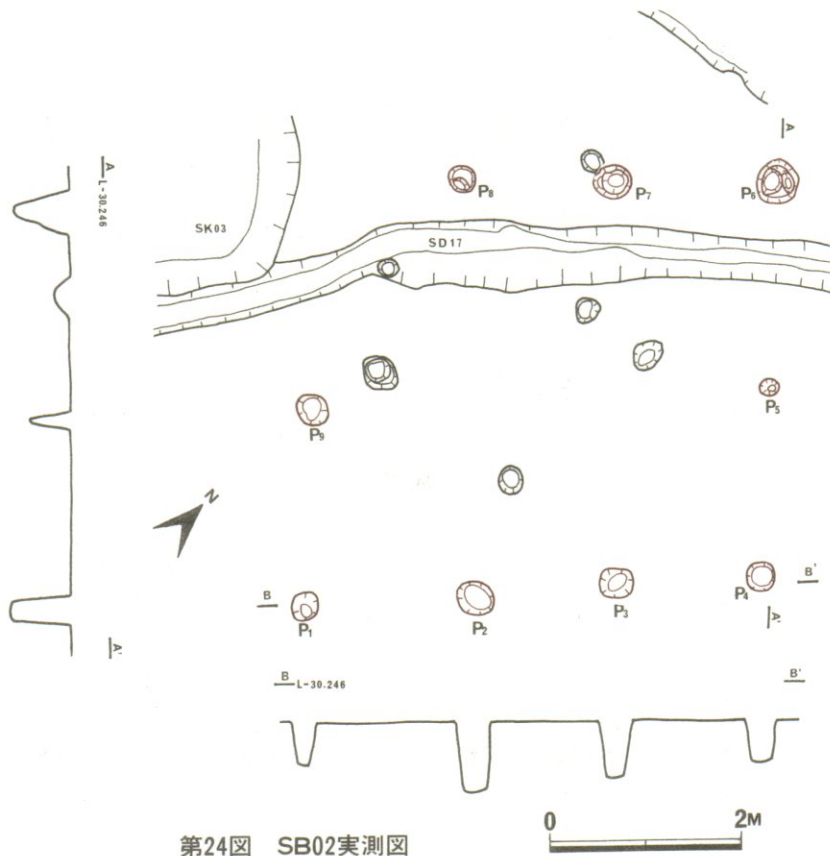
第2表 SB02柱穴計測表

P	長径		深
	長径	短径	
1	58	50	50
2	21	13	46
3	50	29	50
4	44	39	53
5	42	38	66
6	38	31	55
7	33	29	52
8	30	24	88
9	45	41	63

第3表 SB03柱穴計測表



第23图 SB01实测图



第24図 SB02実測図

ほぼ平坦の地形を呈し周辺よりも土面が硬くしまり気味である。このことより斜面を削平整地したことが考えられる。

P₂はSK02と切り合っているが柱穴プランは土壌埋土上面より検出された。P₂自体極めて短直径のものであり、そのまま柱アタリとして考えるならば、このP₂は土壌に付属した性質のものとも考えられる。遺構はSD06の中心部にすえられており、又本遺跡では、類例が他にもあることから、建物の周囲に溝をまわす形態が特徴的にとらえられ、SD06はSB03に付属する可能性が考えられる。

建物は南北棟であるが、N-5°-Wを示す。

柱穴埋土から珠洲糸襷胴部片が出土している。外面には深い条線状のタタキ痕、内面には径3.5cm程のクボミ状のアテ痕を有す。胎土は緻密で小礫をほとんど含まないが焼成は不良である。灰白色を呈す。

SB04掘立柱建物跡 3層及び地山直上にかけて、多くの柱穴が確認され少なくとも4棟の建物遺構(SB04, SB05, SB19, SB21)が重複することを確認した。

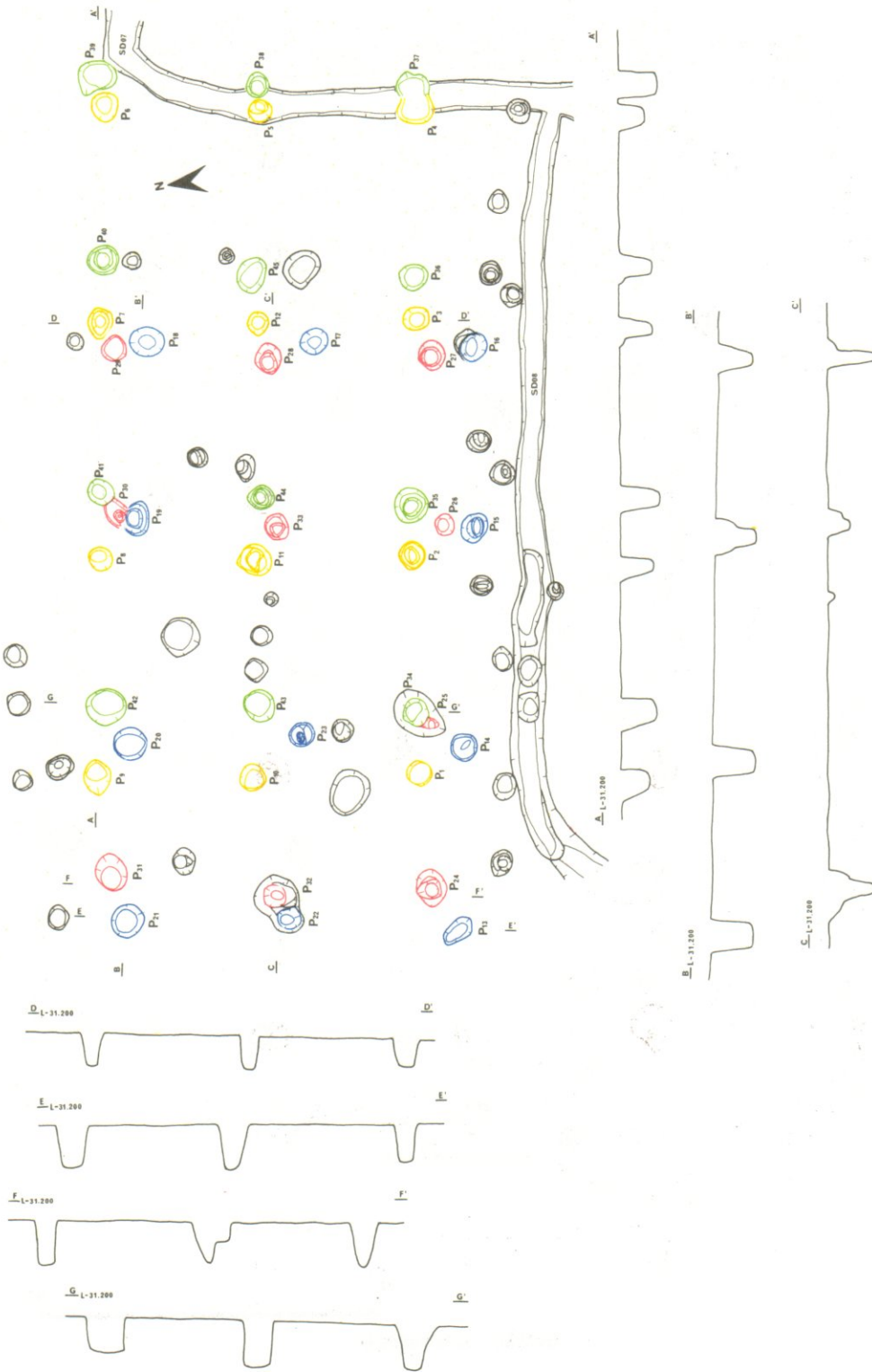
2層下に多くの炭化物が暗褐色土に散布混入されて厚さ約6m程の3層を

(cm)		
P	長さ	直径 深
1	37	36 55
2	39	39 40
3	40	37 44
4	53	35 40
5	36	30 43
6	43	32 48
7	45	38 51
8	35	33 50
9	54	40 45
10	41	37 53
11	49	44 40
12	35	33 51

第4表 SB04柱穴計測表

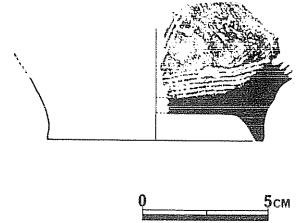


第25図 SB03実測図



第26图 SB04-05-19-21实测区

形成し、さらに柱穴群の大半の埋土にも(4遺構の柱穴を含めて)同様の土質が見られることから、本建物群のいずれかが焼失された可能性がある。遺構は梁行2間、桁行3間で、SB21とはほぼ同一場所で重複して、ともに総柱の建物である。遺構は柱穴P₄でSB21の柱穴と重複しているが、両建物の新旧関係は明らかにできなかった。同様にSD07



第27図 SB04柱穴出土土器

とP₅, P₄が重複しているが、これは溝内埋土上面で柱穴プランを確認、SD06がSB04及びSB21に先行する。柱穴の深さは55cmを最深とし平均45cmで、建物は東西棟だが、E-5°-Sを示す。

遺物は柱穴P₁₁の掘り込面下10cm埋土中より播鉢底部が検出された。胎土は緻密で極小礫を含むが、焼成は不良であり、灰白色の色調に薄い赤褐色の焼きむらを生ず。ロクロ成形した後高台を付しており、内面におろし目を底部から上部に放射状に引いている。

(cm)			
P	長さ	直径	深
13	53	29	58
14	40	38	43
15	43	39	32
16	47	43	50
17	40	38	49
18	51	45	52
19	49	41	60
20	50	49	63
21	49	48	63
22	44	39	67
23	57	35	33

第5表 SB05柱穴計測表

SB05掘立柱建物跡 確認された全体の構造は梁行2間・桁行3間で、ほぼ長方形プランの建物である。東西8.56m・南北5.00m。

柱穴は、深さが67cmを最深とし、大半が52~63cmを呈す。プランはP₁₁が不整楕円形であるのを除いてほぼ円形もしくは楕円形で、大半の直径が38~48cm、平均43cmを示す。柱穴は上面から柱痕跡が確認されるも、攪乱されており、輪郭はあいまいである。SB05のP₁₉とSB19のP₃₀が一部重複するが、時期的関係は明らかでなかった。建物は東西棟であるが、E-6°-Sを示す。

SB06掘立柱建物跡 地山直上の黒褐色土層にて検出。この面で全ての柱穴が明瞭に確認できた。

全体の構造は、身舎部分の東面に庇を一面付した建物である。身舎部分は梁行2間・桁行5間。建物は南北棟であるが、N-32°-Wを示す。南北13.60m、東西7.92m。本遺跡の中では3番目に規模の大きいものであり、庇を一面付する建物としては唯一のものである。

柱穴プランは身舎部分では、P₂を除いて全てが方形もしくは隅丸方形であり、全体として7割方が方形プランであるのは、遺跡内ではSB18と共に2例だけである。柱穴の大きさ、深さは身舎部分と庇部分とで明らかに相異している。

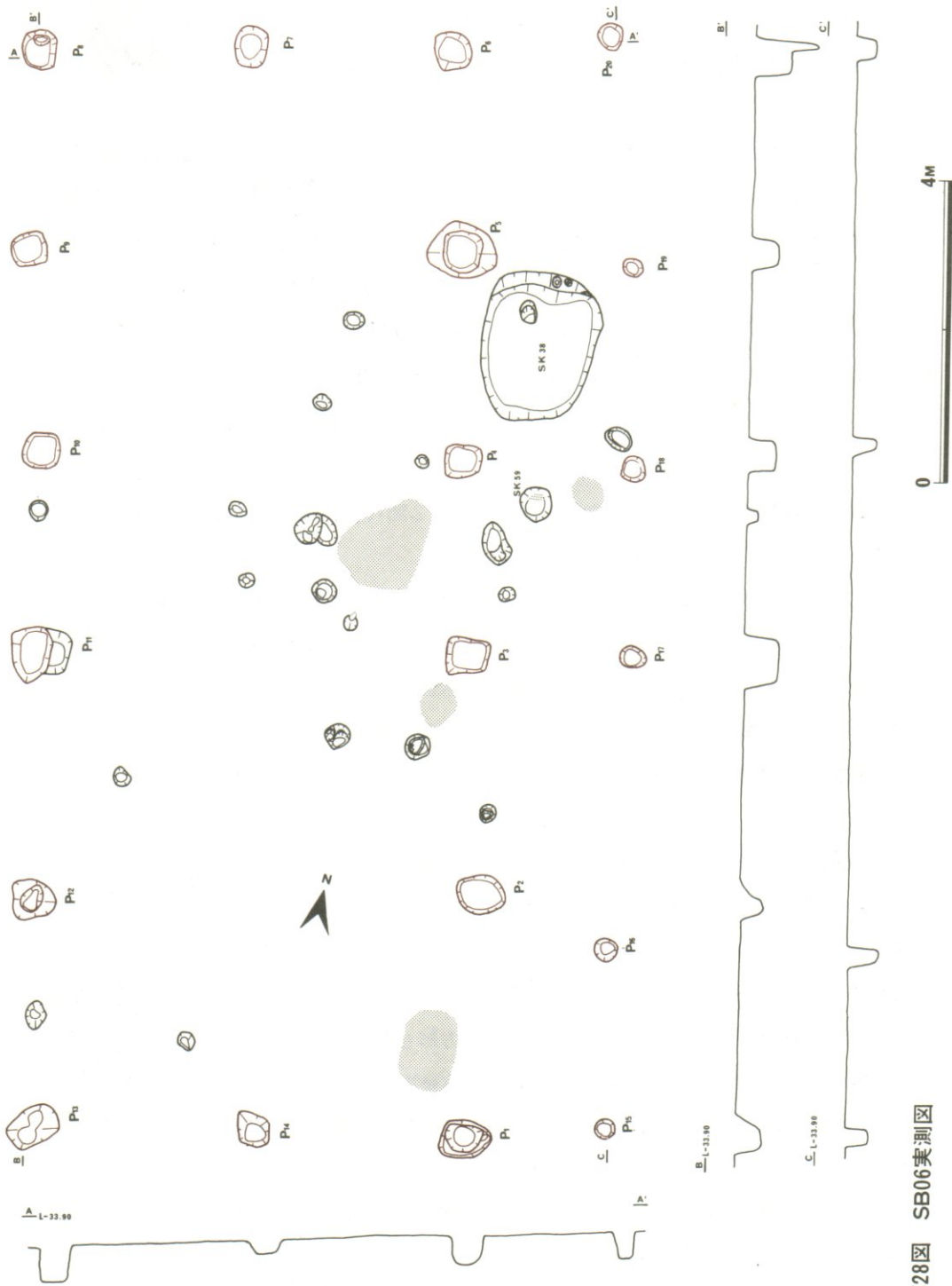
P			
15	27	25	32
16	31	30	40
17	35	29	22
18	35	31	20
19	24	23	27
20	35	31	28
1	70	49	40
2	66	53	32
3	58	45	55
4	51	46	31
5	93	71	37
6	50	48	30
7	57	45	19
8	54	47	50
9	49	47	36
10	51	49	35
11	72	50	45
12	65	59	29
13	73	48	26
14	42	43	45

第6表 SB06柱穴計測表

すなわち、身舎部分はプランの大部分が一辺42~52cm、深さは55cmを最深として平均38cmである。庇部分は柱穴プランが楕円形、不整楕円形になり直径が平均24cm、深さは40cmを最深とし大半は平均28cmに近値を示す。

P₁・P₃・P₅・P₁₀より須恵器、土師器片を検出した。土師器は底部に回転糸切り痕を留める。

遺構が立地する場所は、わずかながら東西に傾斜する地形上にあるが、整地等の土面変化は



第28图 SB06实测图

伺えない。遺構内中央部に小柱穴群、焼土マウンド、土壌が存在するが、SB06との関連性は不明。又SB06がその遺構内部に東柱を有しないことから床を得ていた可能性が薄いことと兼ね合わせ、現存高60cmの焼土マウンドは少なくとも建物が構築された以前のものである可能性は薄いであろう。SB06は、その構築状況（片面庇付建物）柱穴プラン（方形プランを多く用いている）桁行の方向（南北方向）等から遺跡内の他の多くの建物遺構とは時期を異にすると考えられる。

SB07掘立柱建物跡 SD01溝と共に地山直上の黒褐色土層にて検出された。全体の構造は梁行2間・桁行3間で長方形のプランを呈す。東西5.72m・南北3.88m。

柱穴は円型プランを呈し、その直径は平均34cm、深さは最深55cmで平均45cmを示す。柱痕跡は埋土上面より明瞭に確認できその直径は9cm～16cmである。遺構はゆるやかな斜面の微高地に位置するが、周溝プラン内外とも平面状況に変化はみられない。

建物は東西棟であるが、E-22°-Nを示す。

SB08掘立柱建物跡 地山直上の黒褐色土層にて多くの柱穴が確認された。

遺構は身舎部分が梁行2間・桁行5間で4面に庇を、さらに東側に孫庇(?)、南側に縁(?)を持つ。本遺跡内では最もしっかりとした構造と最大の規模を示すものである。南北16.40m・東西9.28m。

建物は東西棟であるが、E-4°-Sを示す。柱穴プランは全て楕円もしくは円形であり、直径は身舎・庇部分とも大差なくわずかに平均値で、身舎部分が約3cm長く48cmを呈している。深さも大差はみられず、身舎部分57cm・庇部分56cmを最深として40～50cm内外を示している。但し、南面桁行側柱の場合、平均の直径29cm、深さ18cmと極めて数値が小さく、他の庇様の場合と異った性格（例一縁束等）を有している可能性がある。柱穴は約4割が上面より柱痕跡を確認でき、その直径は身舎部で平均18cmである。

SB09掘立柱建物跡 地山直上の暗褐色土層で検出。確認された全体の構造は梁行2間、桁行3間の側柱建物であるが、内部に建物と関連すると考えられる柱穴が1個ある。東西9.22m・南北4.56m。建物の方位は東西棟であるが、E-8°-Sを示す。

柱穴プランは円形及び楕円形で上面から柱痕跡の確認はできなかったが、底面に柱アタリのクボミを有しているものが3例、柱穴の深さは59cmを最深とし、平均48cmであり北及び東部分の柱穴が深い傾向にある。直径は56cmを最大とし平均48cmであり柱痕跡は平均20cm内外に合わされる。

(cm)		
P	長径	短径 深
1	35	35 55
2	28	26 54
3	33	30 50
4	35	30 44
5	33	32 38
6	42	37 31
7	18	16 40
8	34	34 39
9	27	25 45
10	36	35 54

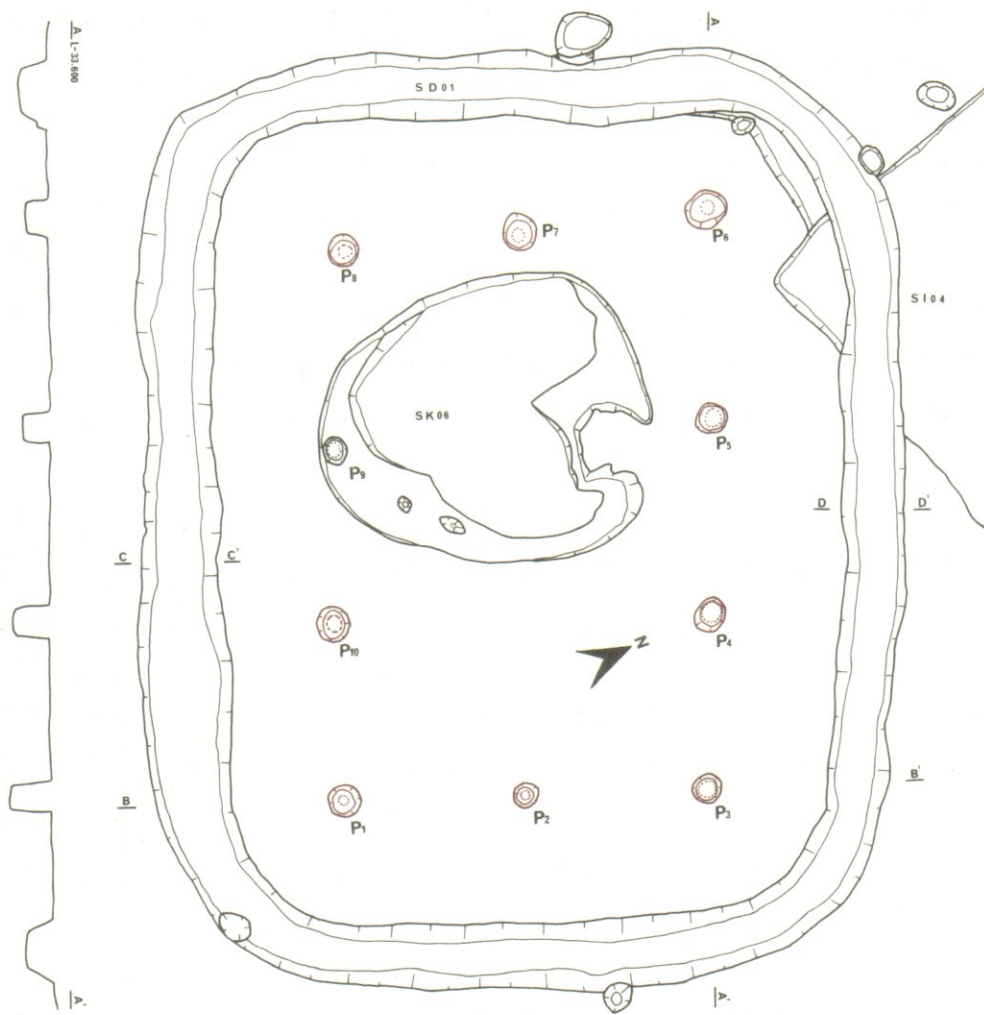
第7表
SB07柱穴計測表

	P			P		
	長径	短径	深	長径	短径	深
庇	1	46	45 52	29	29	56 57
	2	47	40 48	29	30	50 45
	3	45	41 44	30	30	47 47
	4	54	38 41	31	38	54 32
	5	50	49 56	32	50	47 26
	6	57	47 51	33	35	52 24
	7	49	47 37	34	55	53 36
	8	45	44 38	35	70	60 39
	9	57	50 50	36	59	49 35
	10	51	47 40	37	42	36 32
	11	52	49 37	38	49	47 36
	12	50	50 25	39	42	38 41
	13	50	47 22	40	53	48 47
	14	50	42 23	41	50	38 55
15	39	39 24	42	40	39 56	
16	54	45 24	43	43	40 41	
17	55	53 20	44	62	44 42	
18	55	52 22	45	48	41 41	
19	54	44 31	46	33	28 47	
20	55	56 51	47	23	21 34	
21	47	42 35	48	33	26 9	
22	46	40 40	49	35	33 14	
23	44	40 38	50	32	31 11	
24	44	46 42	51	31	31 11	
25	45	40 45	52	30	30 10	
26	50	45 49	53	37	34 13	
27	47	42 42				

第8表
SB08柱穴計測表

(cm)		
P	長径	短径 深
1	51	42 54
2	52	42 54
3	50	47 58
4	62	57 59
5	38	37 59
6	43	36 52
7	51	36 44
8	52	51 38
9	40	37 40
10	47	45 47
11	40	38 39

第9表
SB09柱穴計測表



B₁-33.600

C₁-33.545

D₁-33.545

- 1層 暗褐色 10Y R ¼
- 2層 黒褐色 10Y R ½
- 3層 暗褐色 7.5Y R ¾



第29図 SB 07 · SD 01 実測図



SB 09 (青) P₁~P₁₁
 SB 25 (茶) P₁₂~P₂₅

第31图 SB 09・25实测图

0 2M

遺構内平面状況は、ロームマウンドが北東部に位置し、P₁と切り合っている。ロームマウンドが新しい。

SB10掘立柱建物跡 2層の下層部から検出され始めたが、全体の柱穴が検出できたのは地山面上まで掘り込んでからであった。

確認された全体の構造は、身舎部は梁行2間・桁行2間であり総柱を呈する4面庇建物である。南東端の柱穴は検出出来なかった。東西11.00m・南北8.12m。

柱穴は身舎部分の方が庇部分より若干ながら深さ、直径の平均値が上回っている。すなわち身舎部分では直径が37cm、深さ46cmの平均値を示す。SB10の桁行列の柱穴深さを見ると南面に行くに従い浅くなる傾向にあるが、これは傾斜面に立地しているためであろう。柱痕跡は明確ではないが、確認出来るものは多く、その直径は平均16.5cmである。柱痕跡は必ずしも柱穴内中央に位置せず縁に偏しているものが多い。

P₈付近に現存高14cmのロームマウンドが位置しているが、このマウンドは褐色土の締まり気味のものであり後述SB12のものと同性格であろう。SB10はSB14と北面を一部重複しているが、時期的前後関係は明らかでない。ただ、建物の方向が両者とも東西方向でSB10がE-18°-S、SB14がE-17°-Sと極めて近似の方位を示す。

SB11掘立柱建物跡 2層の下層部にて検出。内部に柱痕跡を有している。全体の構造は梁行2間・桁行3間の総柱建物である。東西9.50m・南北4.70m。

柱穴の深さは最深53cm、浅いので16cm、大半は40cm台であり、柱穴直径は平均40cm、柱痕跡直径は平均14cmである。

SB11はゆるやかに傾斜する地に位置するが、遺構内平面に変化は何もない。

SI07と重複しており、切り合う柱穴の埋土状況から見て、SB11が新しい。

建物は東西棟であるが、E-14°-Sを示す。

SB12掘立柱建物跡 遺跡が立地する地形は、ゆるやかに傾斜しており、発掘中雨が降ると土砂が下方に流れ込み堆積する状況であった。そのため付近はある程度土層が攪乱され北部よりも厚い堆積である。

SB12の柱穴確認は、この流出堆積されたであろう3層の暗褐色土を除去、地山褐色土面まで掘り下げる事によって確認された。全体の構造は、身舎部分で2間・2間であり、4面に庇が付する総柱建物であり、4辺の長さが同値に近い正方形プランを呈する。東西7.76m・南北7.68m。

柱穴のプランは円型又は楕円型を呈し、その深さは庇部分のものが、身舎部分のものより深くなっており、この様な特色は本遺構中SB12だけである。前

(cm)			
	P	長さ	直径 深
庇	1	31	32 41
	2	34	31 38
	3	33	33 46
	4	30	28 16
	5	48	44 66
	6	35	34 65
	7	24	21 46
	8	49	37 67
	9	44	43 52
	10	49	47 41
	11	40	46 36
	12	46	33 38
	13	35	30 34
	14	30	29 34
15	31	27 26	
身	16	41	35 33
	17	42	38 48
	18	40	39 59
	19	39	36 58
	20	44	40 54
舎	21	46	41 41
	22	49	48 41
	23	51	43 40
	24	44	43 44

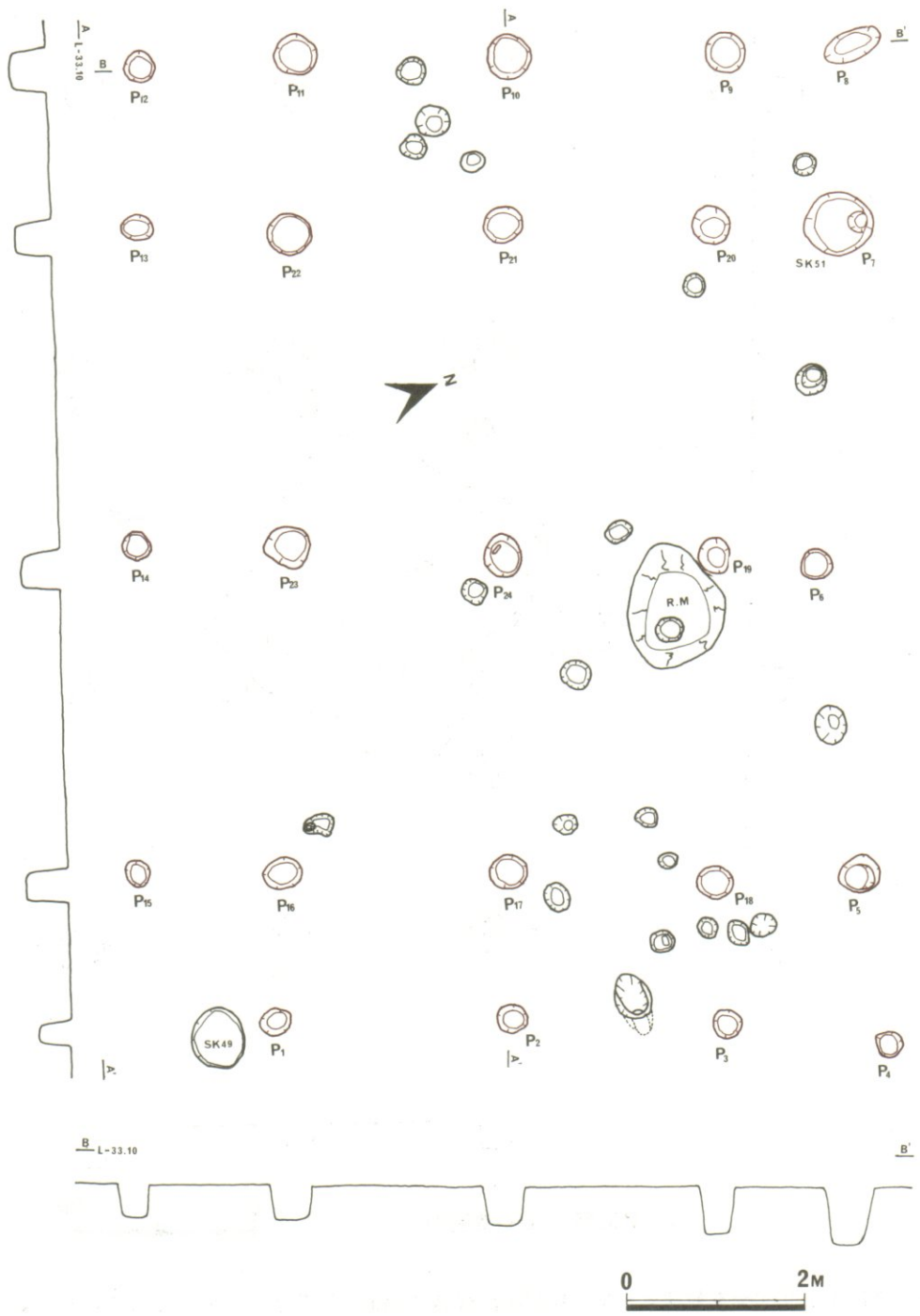
第10表
SB10柱穴計測表

(cm)			
	P	長さ	直径 深
1	43	43 39	
2	42	42 25	
3	50	42 44	
4	47	43 47	
5	47	42 42	
6	50	40 51	
7	40	39 29	
8	43	40 24	
9	45	41 45	
10	50	43 38	
11	48	43 50	
12	46	42 16	

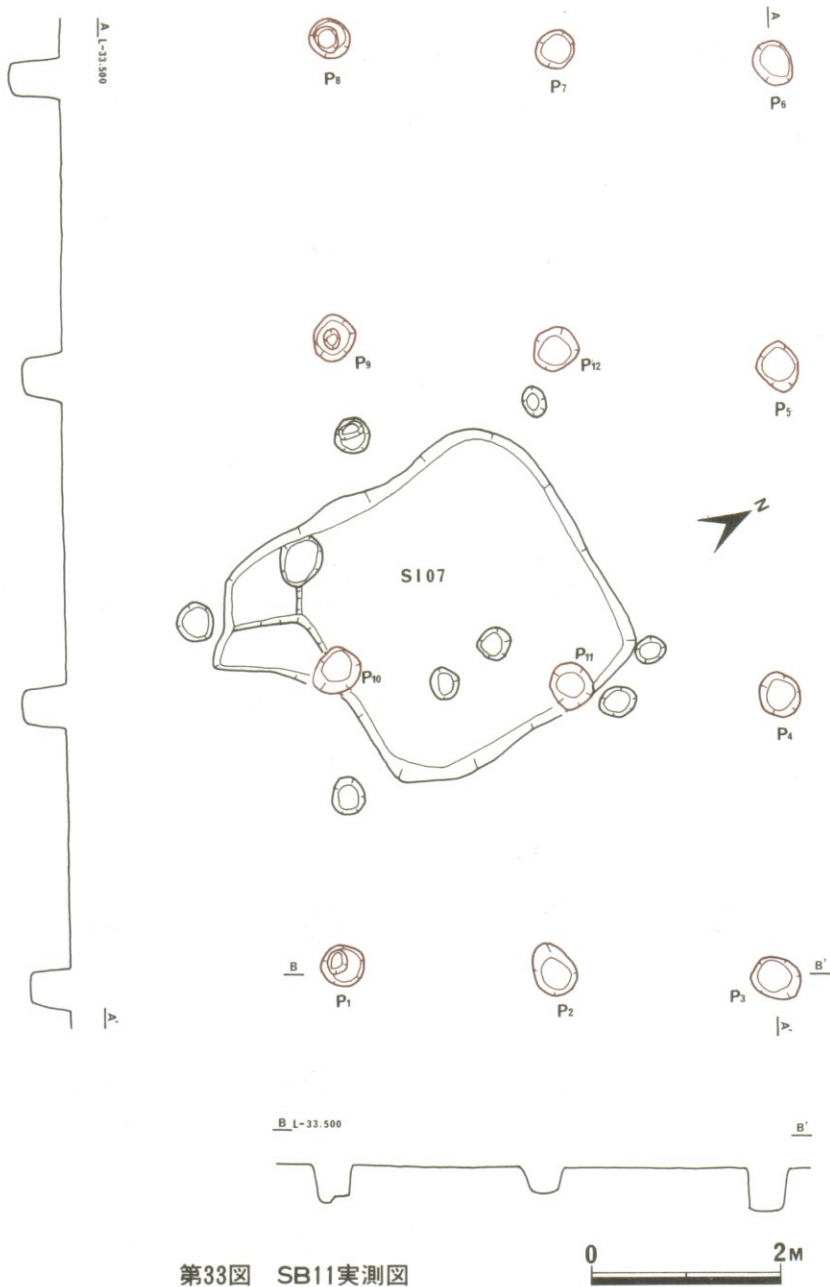
第11表
SB11柱穴計測表

(cm)			
	P	長さ	直径 深
庇	1	48	36 43
	2	50	43 40
	3	44	37 54
	4	61	54 59
	5	49	37 44
	6	33	29 60
	7	46	40 44
	8	37	35 45
	9	41	40 40
	10	41	41 40
	11	43	35 28
	12	40	39 29
	13	42	36 27
	14	40	40 29
	15	53	50 48
	16	27	21 20
身	17	37	30 34
	18	45	41 46
	19	35	32 58
	20	39	39 36
	21	42	32 27
	22	47	44 23
	23	55	63 28
舎	24	44	35 34
	25	58	44 23

第12表
SB12柱穴計測表



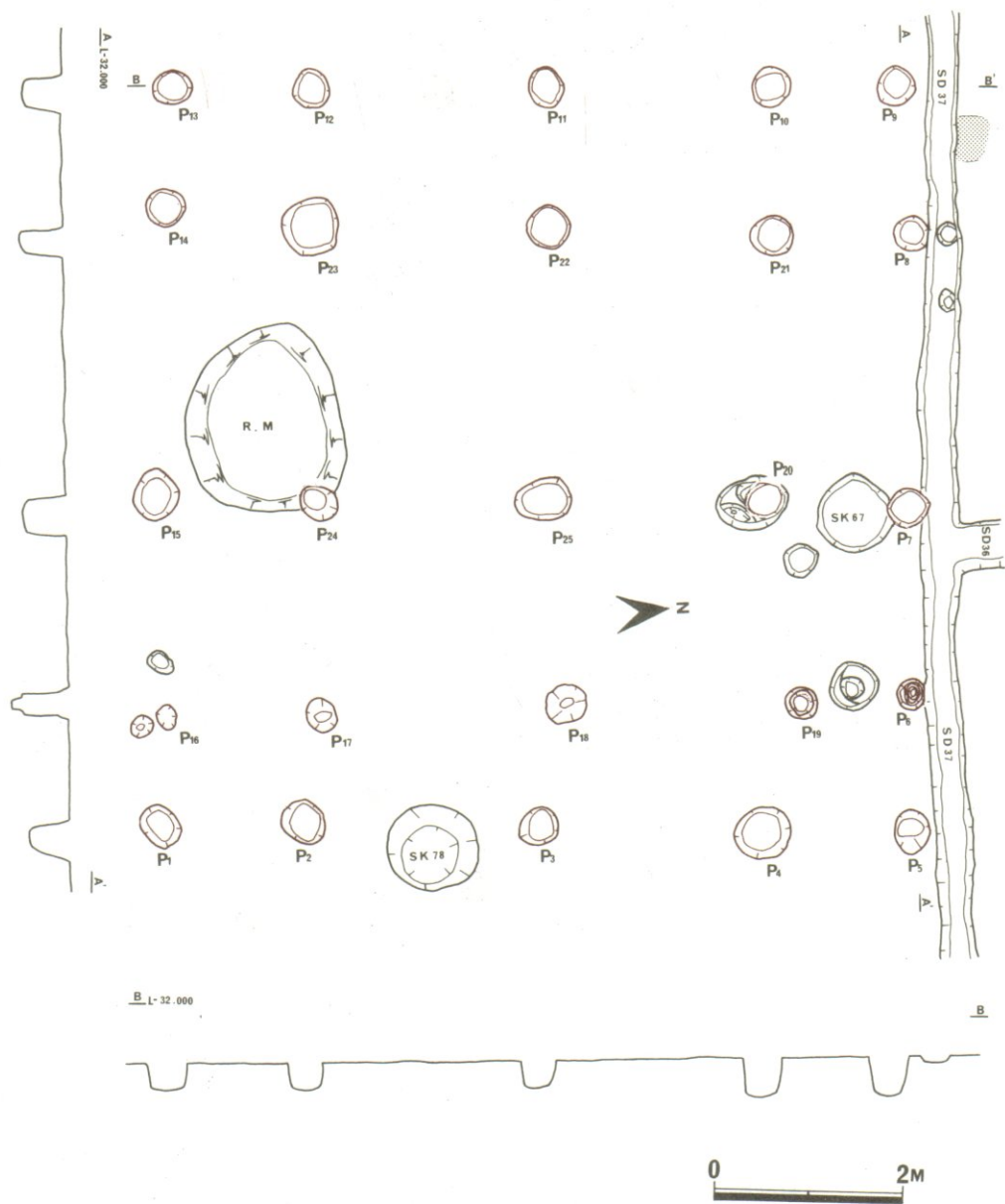
第32図 SB10実測図



第33図 SB11実測図

者が検出面より60cmを最深として平均41cm，後者は58cmを最深として平均34cmである。又，その直径の平均値は，身舎部で43cm底部で40cmを示す。

遺構内にはロームマウンドが位置し，この上面で柱穴痕が確認されることから，建物が新しい。マウンドは全体的に黒色混りの褐色土で攪乱しており，周辺の井戸等の遺構を構築すると

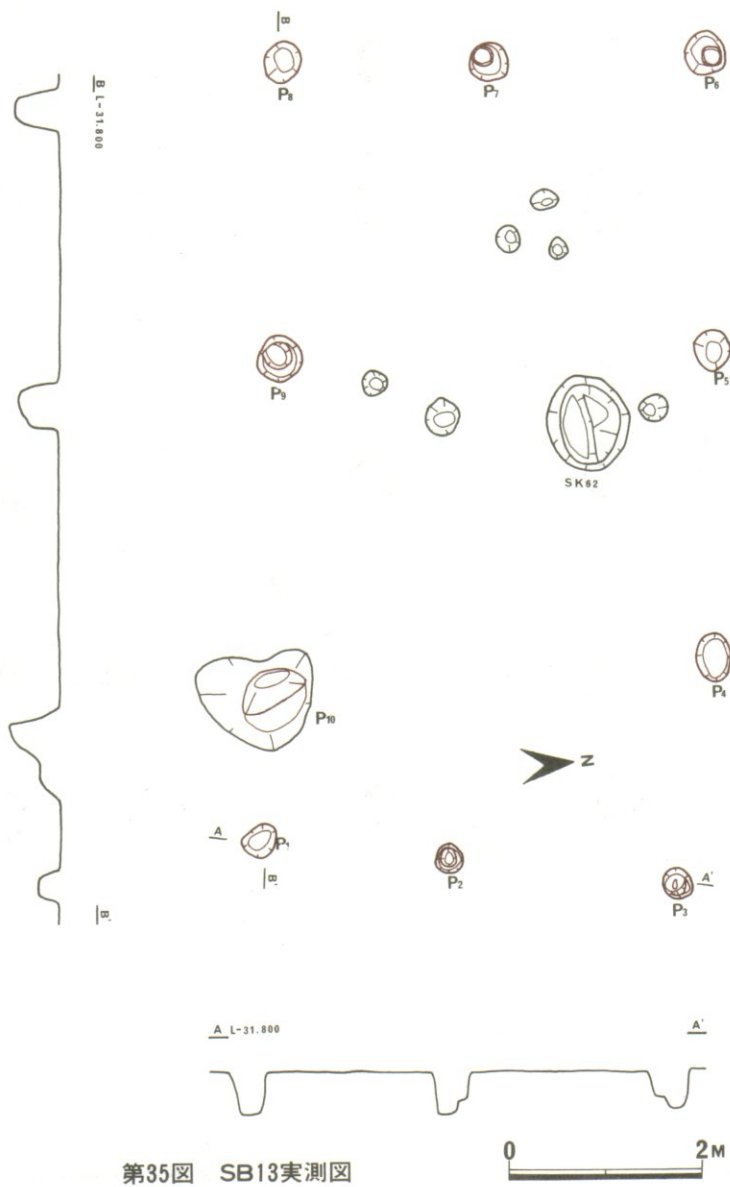


第34図 SB12実測図

き掘り出された土を捨てよせたものと思われる。柱穴P₇はSD37と一部重複しているが、時期的相異は明らかでない。

建物の方位は、東西棟で、E-8°-Sを示す。

SB 13掘立柱建物跡 遺構は地山面にて検出された。SB13は、本遺跡内では最も南部に位置し、かつ北面上方からの流出された土砂が堆積をなすため、埋土の各層位は厚く攪乱気味の状態であった。



第35図 SB13実測図

確認された全体の構造は梁行2間・桁行は東西で3間であるが北面桁行と東面梁行の延長する北東端の柱穴は確認できなかった。遺構プランは、全体として長方形を示す。東西8.04m・南北4.48m。

柱穴の平面プランは、円形もしくは楕円形でその直径は平均40cmであり、底面に柱アタリのクボミを有するものが5例、その直径は平均42cm、深さは53cmを最深とし平均42cm。建物の方位は東西棟であるが、E-70°-Sを示す。

(cm)		
P	長径	短径 深
1	38	33 27
2	30	28 46
3	35	30 33
4	50	35 43
5	43	41 53
6	45	44 46
7	45	40 47
8	42	38 47
9	45	45 43

第13表
SB13柱穴計測表

SB14掘立柱建物跡 2層の下層部で検出され始めるが関連柱穴の全てを確認できたのは地山面上のも検出し終ってからであった。

確認された遺構は4面に庇を付する総柱の建物であり、身舎部分は梁行2間・桁行4間である。本遺跡中では、SB08に次ぐ規模を持つ。東西15.48m・南北8.12m。

柱穴の深さは身舎部分が64cmを最深とし平均44cm、庇部分が65cmを最深とし平均36cmと、身舎部が深い傾向にある。柱穴プランはP22が上面で方形気味であるのを除いて円形もしくは不整楕円形であり、その直径は、身舎、庇部分とも平均42cmで明確な開きはない。柱穴は柱の建て替えが行われたと思われるもの4個を数える。底面に柱アタリのクボミを有するものが8例ありその直径の平均値、庇、身舎部分とも大差なく19.5cmを呈す。柱穴内部に小石を有するものが10個あり、内4個が2個以上の石を有する。内部から検出された小石は長軸12cm～24cmのものが大半を占める。形はいずれも厚みのある扁平な河原石を主とし、2例が壁面に位置する他は、底面もしくは底面近くで、その多くは根固めの石に用いられたと考えられる。

	P	長径	短径	深
庇	1	24	20	26
	2	34	32	21
	3	34	33	63
	4	46	42	32
	5	31	29	17
	6	45	40	25
	7	53	44	36
	8	51	40	44
	9	48	48	52
	10	47	39	50
	11	42	28	34
	12	49	38	38
	13	50	43	38
	14	46	40	37
身舎	15	42	37	37
	16	53	44	28
	17	63	44	38
	18	31	23	26
	19	36	36	33
	20	28	25	50
	21	35	32	43
	22	38	35	39
	23	47	35	46
	24	42	42	48
	25	31	29	50
	26	45	35	55
	27	41	39	50
	28	50	44	64
29	50	47	40	
舎	30	53	53	28
	31	38	34	43
	32	25	23	48

第14表
SB14柱穴計測表

SB14はほぼ平坦な地に位置しており、遺構内には土壇4基(SK34・SK33・SK48・SK50)、ロームマウンド2基位置している。土壇はいずれも柱穴と切り合っているが、土壇が先行している。

建物の方位は、東西棟でE-17°-Sを示す。

SB15掘立柱建物跡 2層の下層部にて全ての柱穴が明瞭に検出された。

全体の構造は四面庇建物であり、身舎部分は、梁行2間、桁行3間であり、全体として整った長方形プランを呈する。東西9.96m・南北7.52m。

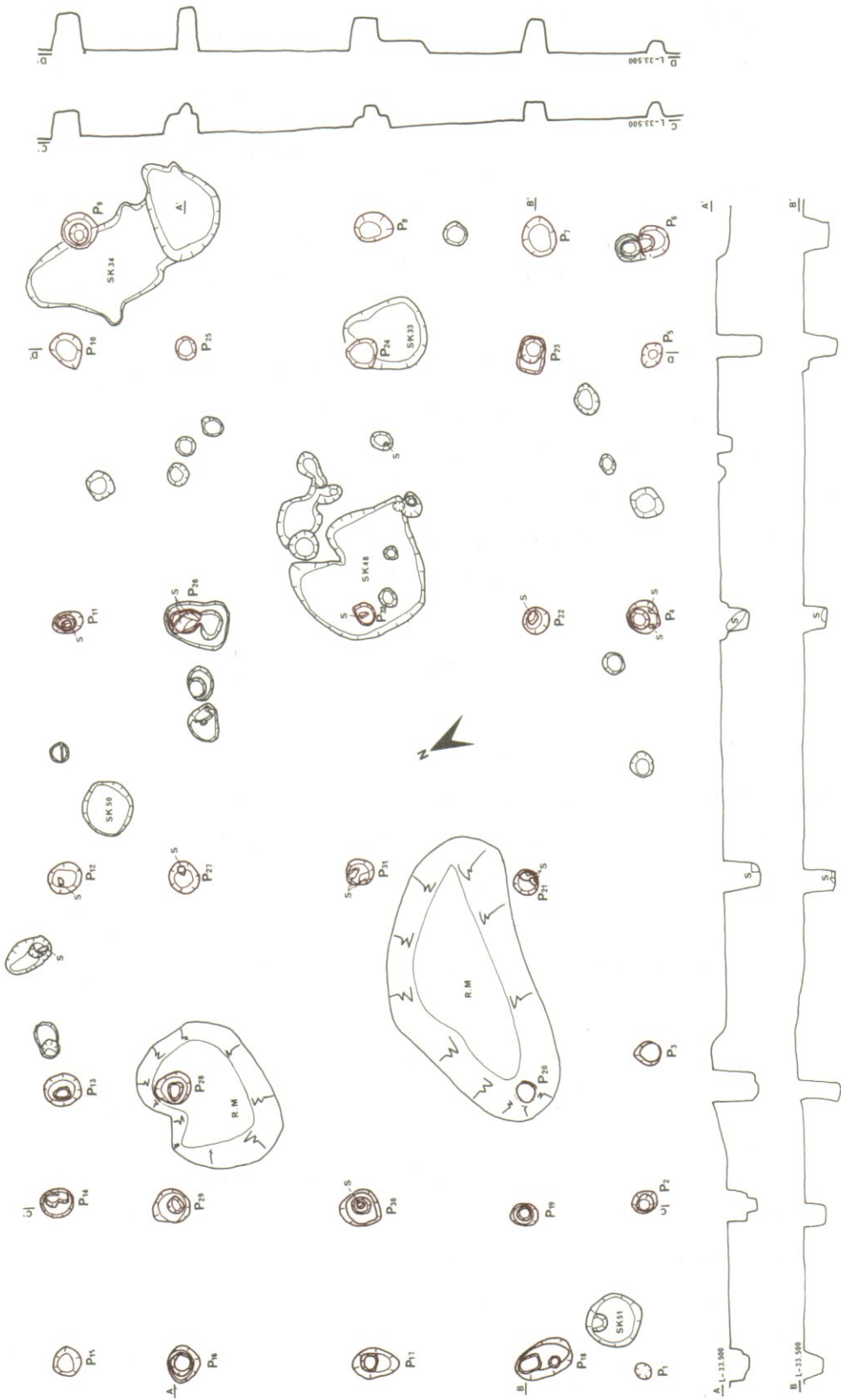
柱穴の平面プランは円形もしくは楕円形であり、上面からその大半が柱痕跡を確認できた。直径はその平均値が庇部分42cm、身舎部分49cmであり柱痕跡は庇部分が16cm、身舎部分が19cmで庇と身舎部分で多少の開きを示す。深さは庇、身舎部分それぞれの最深が67cm, 70cm, 平均深さ50cm, 60cmとなり、庇部分のものが浅い傾向にある。又底面に柱アタリのクボミを有するもの5例確認された。柱穴埋土には、炭化物が全体的に少量含まれ、柱痕跡部分は粘質性の黒色土でその周囲を黒色土粒混入のかなり締まり気味の褐色土がリング状にまわっている。

	P	長径	短径	深
庇	1	41	37	46
	2	41	36	67
	3	78	58	62
	4	39	39	60
	5	40	35	50
	6	57	45	50
	7	40	35	62
	8	37	37	50
	9	44	42	49
	10	37	35	51
	11	44	35	55
	12	44	34	49
	13	49	40	48
	14	49	39	54
	15	48	45	48
	16	43	41	43
	17	37	35	53
身舎	18	61	51	68
	19	62	48	62
	20	43	40	70
	21	53	52	68
	22	47	45	57
	23	55	52	67
	24	50	48	63
舎	25	50	50	61
	26	50	45	46
	27	49	47	62

第15表
SB15柱穴計測表

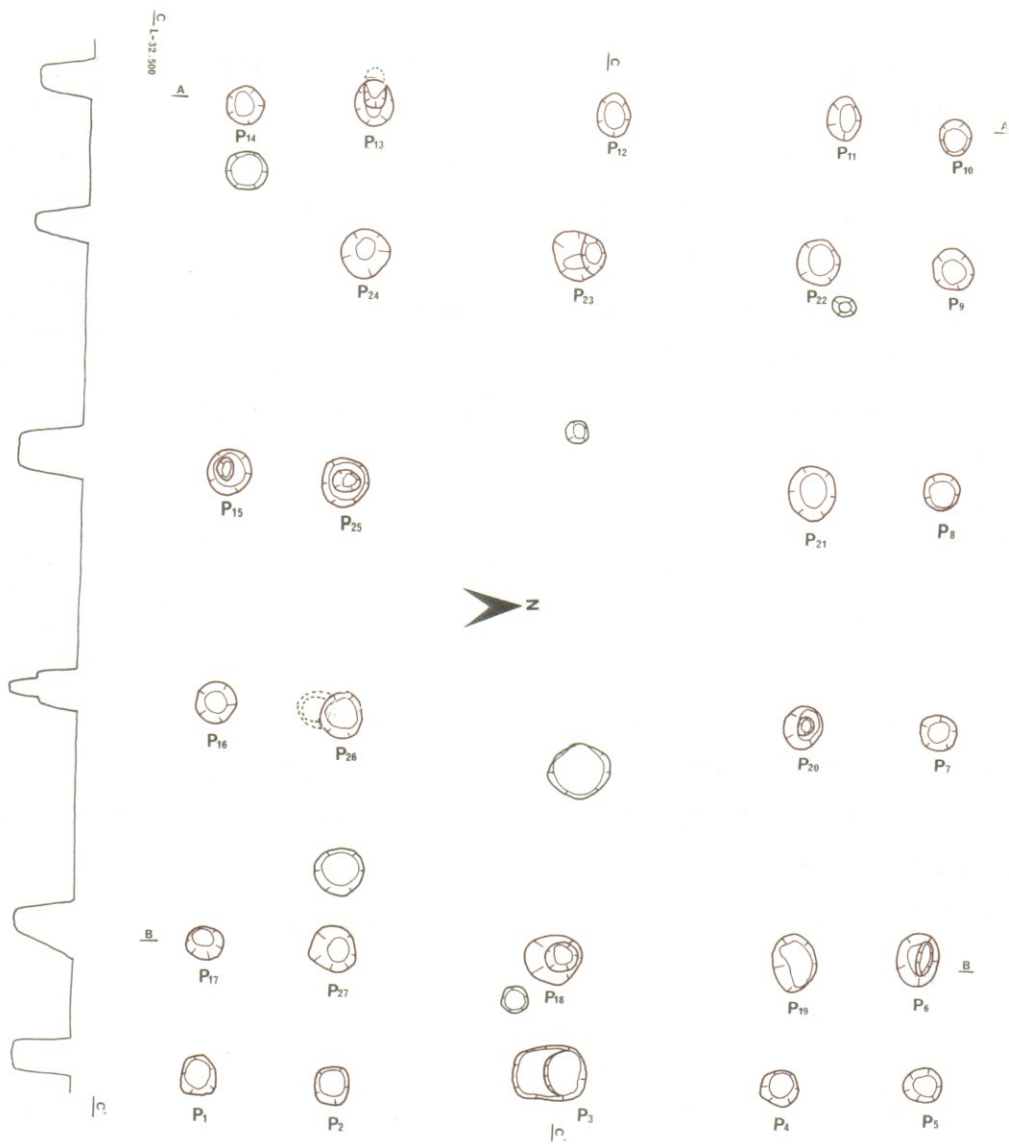
また、遺構内平面は周囲に比し多少しまり気味であるが上面での土質、整地等、その他の変化はみられなく、炭化物の採出もない。

建物の方位は、東西棟でありE-4°-Nを示す。



0 4 M

第36图 SB14实测图



A L-32.500



B L-32.500



第37图 SB15実測図



SB16掘立柱建物跡 2層の下層部にて検出、この面で柱穴は明確に確認でき、又大部分が柱痕跡を有している。

全体の構造は北面部分が調査外なので確認できなかったが、庇部分がさらに一面北側に付属した四面庇建物の可能性が考えられる。身舎部分が梁行2間、桁行2間。東西9.64m、南北6.20m。

柱穴の深さは庇部分の場合58cmを最深とし、40cm内外に、身舎部分の深さは67cmを最深とし平均は54cm内外であり、身舎部分のものが深さを増している。直径は33cmを平均とし、庇、身舎部分とも近値を示している。柱痕跡部分の直径は16~24cm。

建物方位は東西棟で、E-3°-Sを示す。

SB17掘立柱建物跡 2層の下層部から地山面にかけて全体の柱穴が検出された。遺構は南西にゆるやかに傾斜する場に立地している。南北6.96m・東西5.48m。

確認された全体の構造は梁行2間・桁行3間で長方形気味の形を呈する。

柱穴のプランはP₆が方形気味であるのを除き、円形もしくは楕円形である。

柱痕跡は輪郭が明確でなかった。柱穴は52cmを最深とし、平均35cmである。直径は60cmを最大に他は平均33cm前後と小さい。

遺構内平面状況は、地形自体がゆるやかに傾斜しているが土面変化はみられず、炭化物はほとんど検出されない。

建物の方位は南北棟であるが、N-32°-Wを示す。

SB18掘立柱建物跡 地山上面にて検出。

SB18立地周辺には、多くの柱穴が検出されたが、SB18を構成する方形の柱穴はこの群の中でも特色的であり、他は円形もしくは楕円形の柱穴である。

全体の構造は梁行2間・桁行3間の総柱建物である。南北6.52m・東西3.60m。柱穴は全て38-40cm、深さは40cmを最深として平均30cmと浅い。

SB14と重複するが、時期的前後関係は明確でない。

建物の方位は南北棟であり、N-15°-Wを示す。東西6.52m。南北3.48m。

SB19掘立柱建物跡 地山面及び3層の下層にて検出。

確認された全体の構造は梁行2間・桁行3間で長方形プランの建物である。南北4.80m・東西7.88m。

柱穴は、P₂₅(深さ46cm)を除いて全て約60cmの深さを示す。柱穴プランは円形もしくは楕円形だが、他の柱穴と一端を重複するものもあり一定でなく、約

(cm)			
P	長径	短径	深
1	39	33	46
2	37	36	47
3	38	32	58
4	38	31	42
5	33	30	34
庇	6	39	37
	7	30	27
	8	29	26
	9	37	33
	10	34	29
	11	24	22
身	12	40	38
	13	38	37
	14	43	34
	15	30	29
	16	40	38
	17	33	28
舎	18	41	39
	19	38	31
	20	30	29

第16表
SB16柱穴計測表

(cm)			
P	長径	短径	深
1	50	59	42
2	34	34	25
3	40	38	40
4	30	24	33
5	40	28	36
6	70	54	41
7	32	21	16
8	35	32	38
9	42	40	28
10	38	34	52

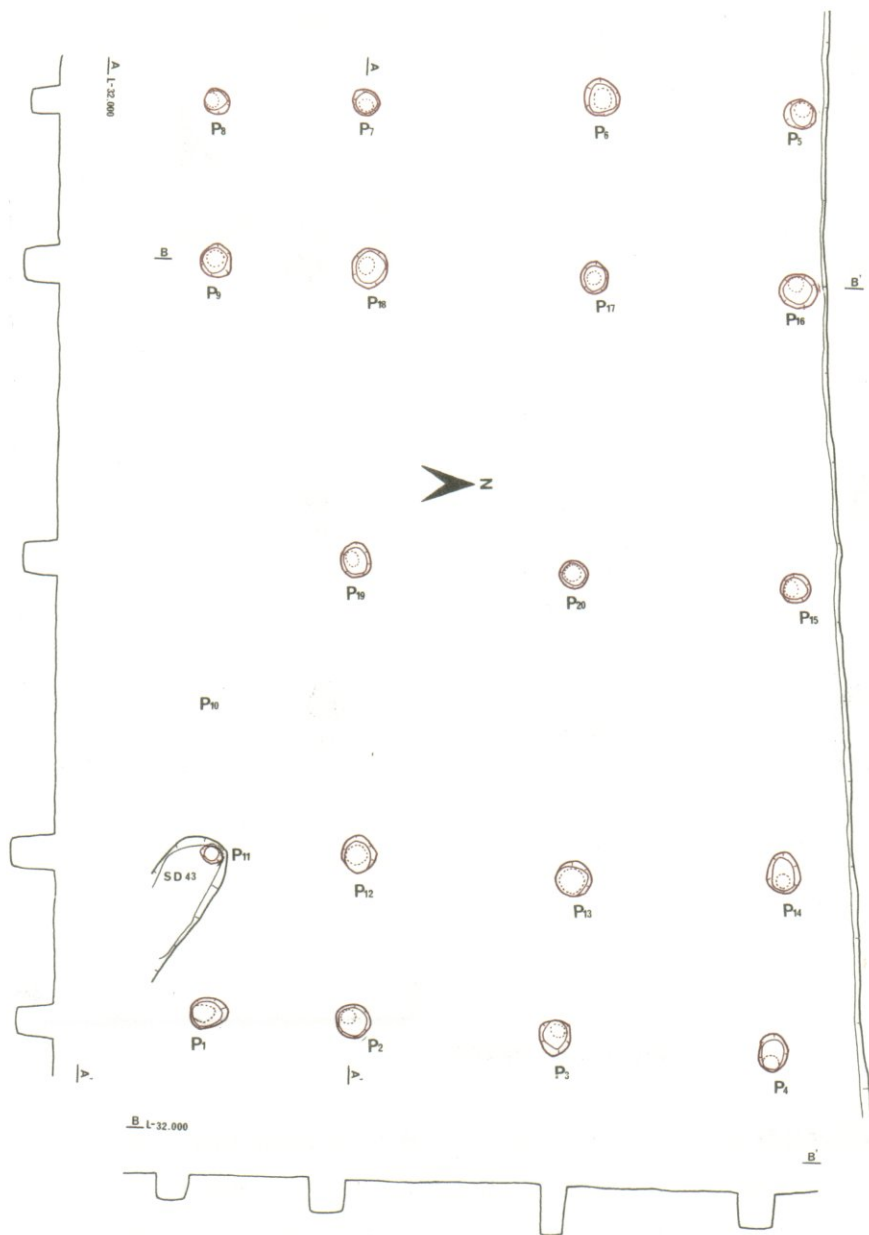
第17表
SB17柱穴計測表

(cm)			
P	長径	短径	深
1	32	30	30
2	47	42	30
3	46	40	40
4	37	34	23
5	47	45	27
6	38	33	32
7	41	40	38
8	40	37	35
9	38	34	20
10	56	39	25
11	36	32	30
12	35	33	37

第18表
SB18柱穴計測表

(cm)			
P	長径	短径	深
24	55	46	59
25	23	16	45
26	31	30	66
27	43	40	62
28	43	40	59
29	37	37	69
30	32	30	64
31	55	47	66
32	36	31	68
33	39	35	32

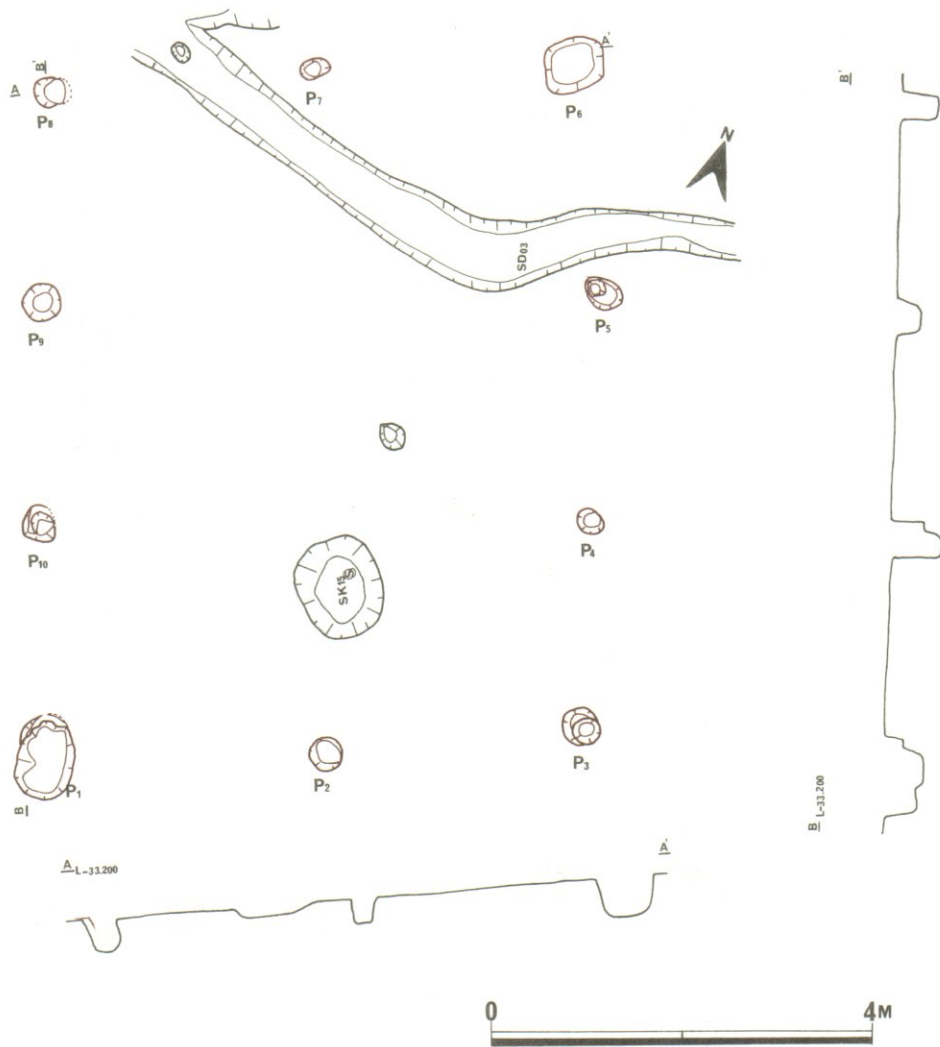
第19表
SB19柱穴計測表



第38図 SB16実測図

40~50cmのものが中心を占める。

建物の方位は東西棟であるが、E-5°-Sを示す。



第39図 SB17実測図

SB20掘立柱建物跡 遺構が立地する地区は、3層下に炭化物を多量に含有する土層を有するが、SB20はこの3層上面及び下層にて、他の多くの柱穴と共に検出された。

全体の構造は梁行2間・桁行3間で長方形プランを呈す。東西7.36m・南北3.80m。

柱穴は円形もしくは楕円形の平面プランを呈す。柱穴上面の直径は平均44cmを示すが一定しておらず、底面に柱アタリのクボミを有するもの3例を示し、その直径は平均18cmである。深さは平均45cmだが、梁行列で西面が約50cm、東面が約40cmと異なっており、これも地形が東西にゆるやかに傾斜していることによるものと考えられる。

遺構内平面には多量の炭化物が散布されており、又、周辺の多くの柱穴にも

(cm)		
P	長さ	直径 深
1	36	36 42
2	43	32 41
3	32	30 46
4	54	46 32
5	40	39 54
6	40	39 58
7	37	36 55
8	34	32 55
9	50	40 35
10	35	32 36

第20表
SB20柱穴計測表

含まれていることから、一帯が焼失した可能性がある。

建物の方位は東西棟で、E-5°-Wを示す。

SB21掘立柱建物跡 確認された全体の構造は梁行2間・桁行3間の総柱建物である。東西9.16m・南北4.64m。

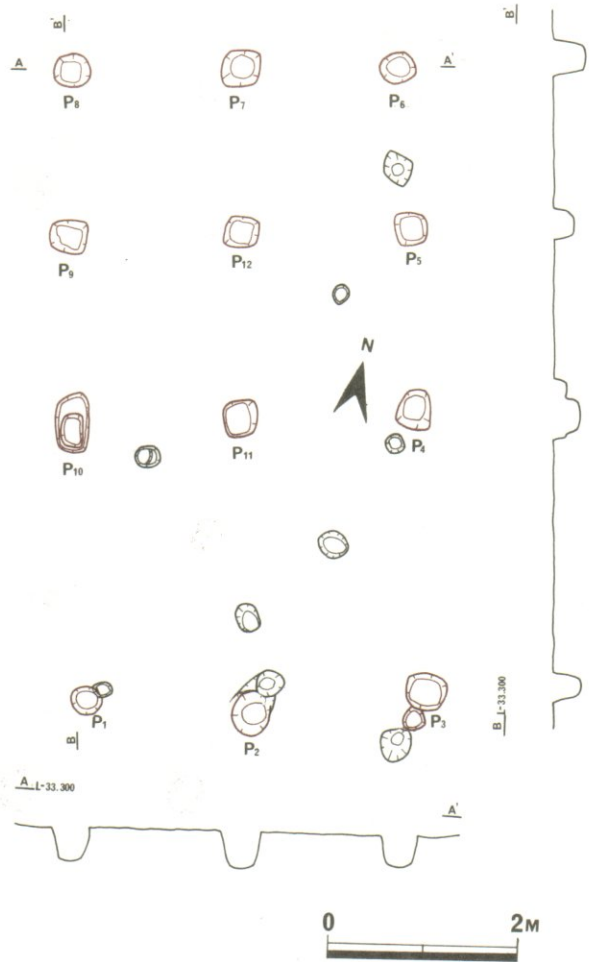
柱穴の深さは北面と西面の側柱部分で50~60cmであり、他面は40cm内外と浅くなっている。これは地形が南東に向かいゆるやかに傾斜しているためと考えられる。柱穴の平面プランは全て円形もしくは楕円形で、平均直径45cmを呈し、上面から柱痕跡をうかがえるものもあるが、その大半は輪郭が明瞭でない。柱穴埋土は褐色粒混入の粘質性黒色土であり、炭化物を全体的に多く含む。

建物の方位は、東西棟でE-6°-Sを示す。

SB22掘立柱建物跡 2層にて検出される。重複するSB23・SD47とはほぼ同一平面上で確認された。

全体の構造は2間・2間の身舎を有する4面庇の建物である。南東端の柱穴は精査を行なったが確認されず、北西端のP₂₄も極めて浅いものであった。東西9.56m・南北8.16m。

柱穴は上面から多くの場合円形の柱痕跡を確認できた。柱穴の平面プランは円形であり、その直径は身舎部分が庇部分より平均で約7cm程大きく36cmである。掘り方は12個が2段に掘り込まれ、底面に柱アタリを有するもの9個。その直径は底部では12cm、身舎部分で16cmの平均値を示す。深さは46cmを最深とし身舎部分で30~46cm、庇



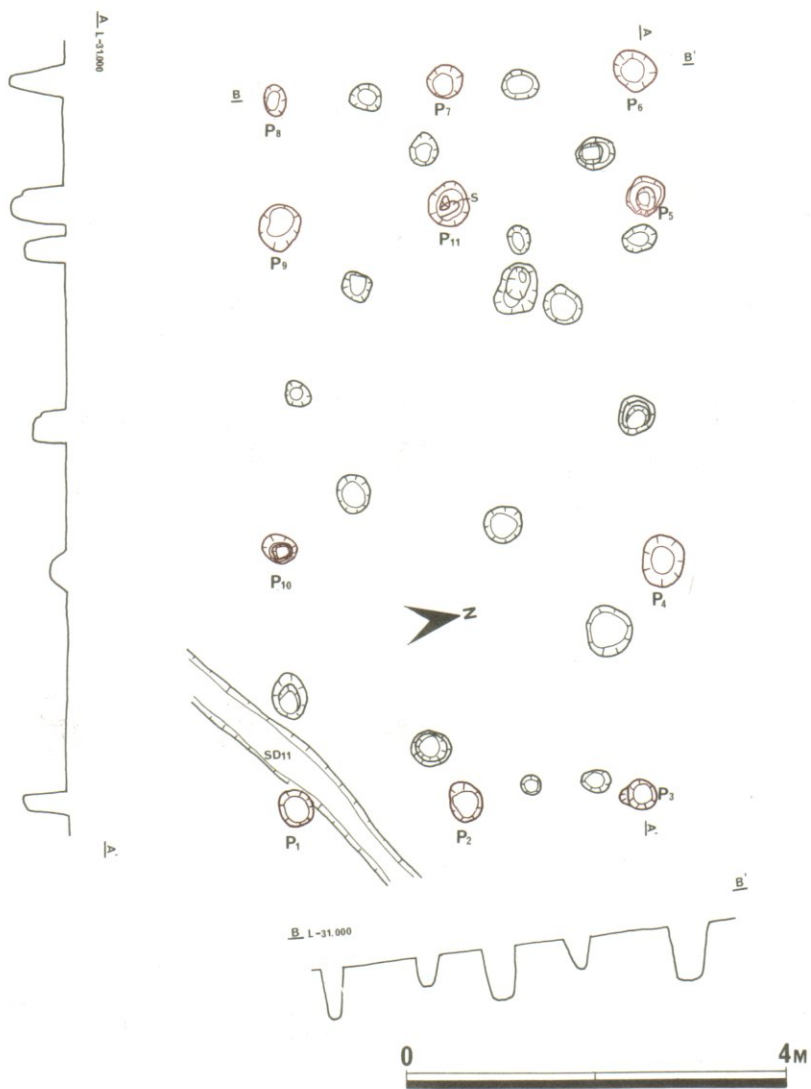
第40図 SB18実測図

第21表
SB21柱穴計測表

(cm)		
P	直径	深
34	40	39
35	53	50
36	41	40
37	49	36
38	39	35
39	59	42
40	50	46
41	61	37
42	57	54
43	49	44
44	37	36
45	53	43

第22表
SB22柱穴計測表

(cm)			
底	P	直径	深
	1	30	29
	2	30	28
	3	37	36
	4	25	25
	5	32	29
	6	32	28
	7	30	28
	8	26	21
	9	39	37
	10	36	35
	11	30	29
	12	31	29
	13	30	29
	14	29	25
	15	24	23
	16	33	32
身	17	33	33
	18	41	28
	19	44	42
	20	44	43
	21	40	40
	22	35	36
	23	38	36
	24	33	33



第41図 SB20実測図

部分では6～33cmを測り、平均値で身舎部分が9cm程深い。

SB22の柱穴、P₁₃・P₁₅はSD47と重複しているが、SB22が後時期につくられたものである。したがってSB03項で述べた如く、SD47はSB23に付属する遺構との考えに立つなら、重複する2建物遺構は、SB22がSB23の後につくられたものであろう。

建物の方位は、東西棟であるが、E-14°-Wを示す。

SB23掘立柱建物跡 2層の下層部で検出された。

遺構は隅丸方形で環状にめぐる溝内のほぼ中央に位置する。確認された建物遺構は2・2間のゆがみを持つ正方形プランを呈する。東西3.88m・南北3.84m。

柱穴の平面プランは円形であり、その直径は最長30cmで平均長26cmにはほぼ合致する。深さは45cmを最深とし、これもほぼ平均値39cmの深さに近値を示す。上面から柱痕跡は確認されないが、底面に柱アタリのクボミを有するものの2個。その直径は平均12cmである。

(cm)			
P	直径	深	
25	34	10	47
26	28	10	46
27	28	24	45
28	22	19	39
29	23	23	35
30	23	22	44
31	27	27	42
32	25	22	29

第23表
SB23柱穴計測表

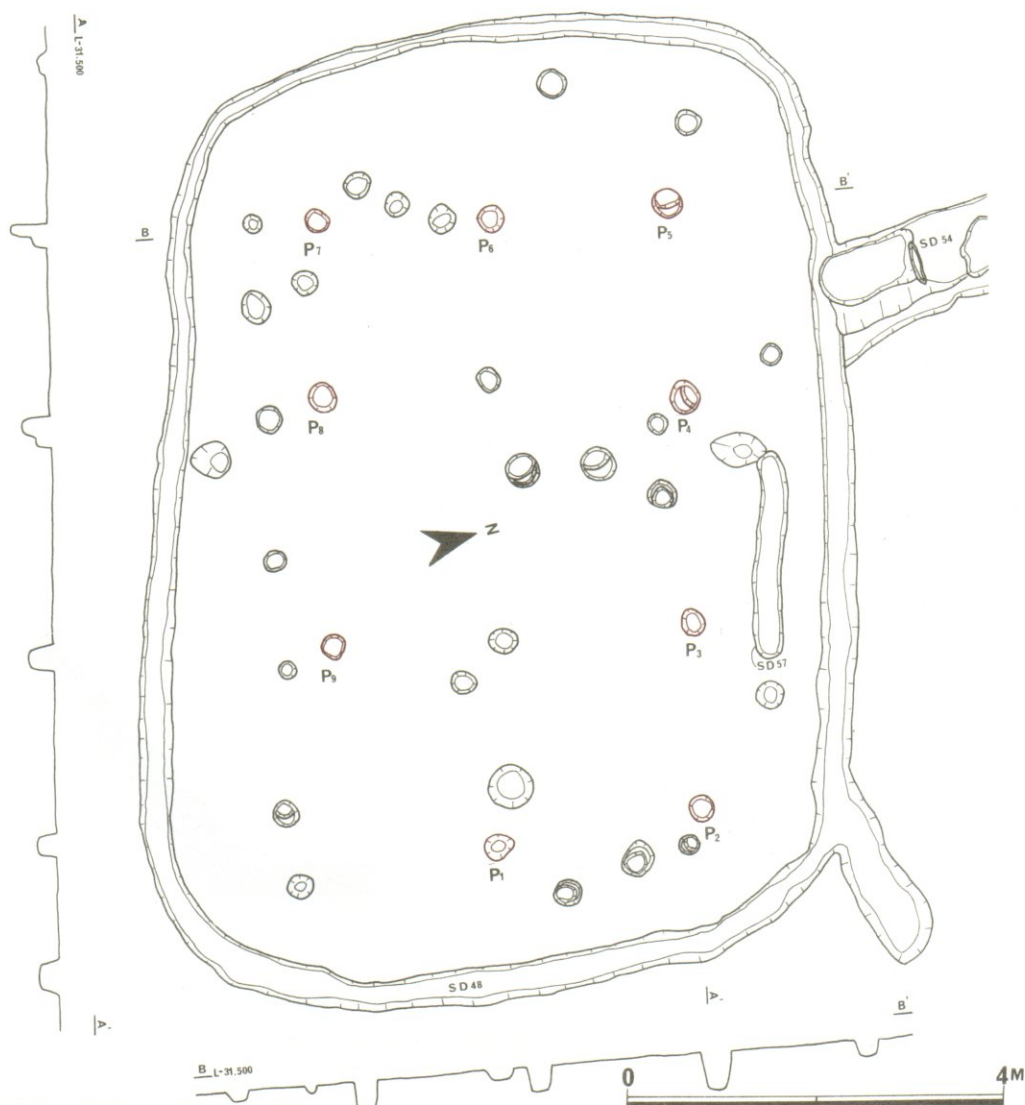
SB24掘立柱建物跡 2層の下層部で隅丸方形プランを呈す環状溝と共に検出された。

全体の構造は梁行2間・桁行3間であるが南東端の柱穴は確認できなかった。東西6.32m・南北3.84m。

柱穴の上面プランは円形であり、その直径は平均29cmを測る。深さは40cmを最深として20~35cm内に掘られ、全体的に小さく浅いものである。柱痕跡

(cm)			
P	直径	深	
1	32	27	20
2	24	24	20
3	29	23	27
4	32	30	20
5	31	30	48
6	29	28	28
7	25	25	31
8	31	29	35
9	32	24	29

第24表
SB24柱穴計測表



第43図 SB24・SD48実測図

は明瞭に確認できないが、底面に柱アタリのクボミを有するものが2個検出され、その平均直径は11.5cmである。

遺構は遺跡内では高地に位置し、土面の乾燥が早く、プラン内部はしまりぎみである。

東西棟であるがE-13°-Sを示す。

SB25掘立柱建物跡 遺構は2層の下層部で最初検出されたが、東面側柱通りのP12・P23・P24はさらに掘り込み、地山面で検出された。

確認された全体の構造は梁行3間・桁行5間でほぼ長方形のプランを呈する。東西11.96m・南北7.04m。柱穴プランは円形もしくは楕円形で直径は52cmを最大とし平均39cm内外に8割方が同値を示す。柱痕跡は2例認められたが、その平均直径は18cmであった。深さは67cmを最深とし平均43cmだが、北面側柱通りのものが深くなっており、これは地形が南面に傾斜していることによるものだろう。柱穴はSD36の溝と切り合っているが、埋土状況からみて柱穴が新しい。

建物の方位は東西棟であるがE-8°-Sを示す。(熊谷)

(cm)		
P	長さ	直径 深
12	50	45 36
13	49	47 30
14	53	49 26
15	37	34 18
16	49	47 54
17	51	52 67
18	36	35 42
19	37	32 53
20	30	30 54
21	37	36 34
22	30	29 31
23	29	26 25
24	55	52 47

第25表
SB25柱穴計測表

③ 井戸

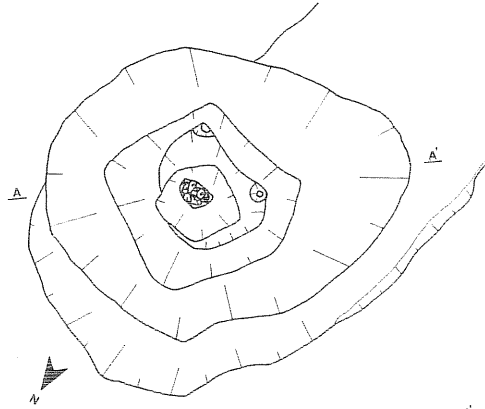
SE01井戸 地山直上2層の下層部(黒褐色土)にて検出。SE01はSI 06遺構と重複しているがSI01が新しい。

掘り方の上面プランは隅丸方形で、最初すり鉢状に掘り込まれ、上面下60cm程で方形プランに転じ、段を形成した後、ほぼ垂直に底面まで落ち込む。底面には直径80cm、深さ35cmの井筒部分のクボミを有している。

本遺構は内部に井側が現存しており、上面下190cmの平坦部に浅い小穴を四隅に掘り隅柱をすえた、隅柱横棧型である。隅柱は一端を鋭く削り尖頭にした部分を、上にして浅く埋め込まれており、上端部より下方30~40cmの所に柄穴をうがって、横棧を一段わたしている。その外側に現存する長さ50~60cmの縦板を各面七枚づつ立てかけるが、上部は腐巧しており不明である。隅柱は木幹を荒けずりし、底部の表

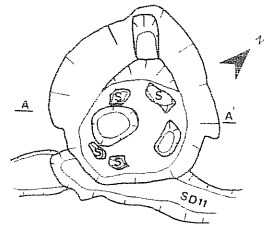
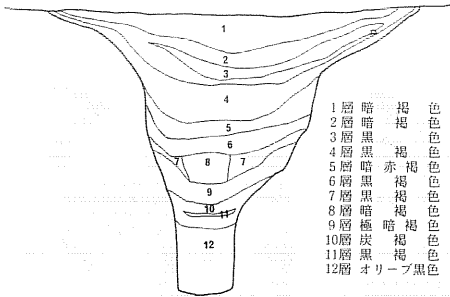


第44図 SE01出土土器



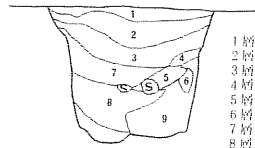
A L-31.300

SE 02

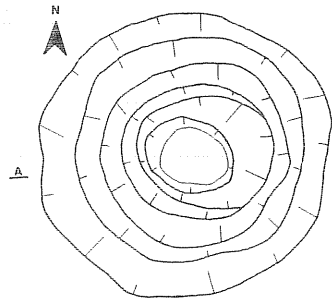


A L-30.000

SE 03

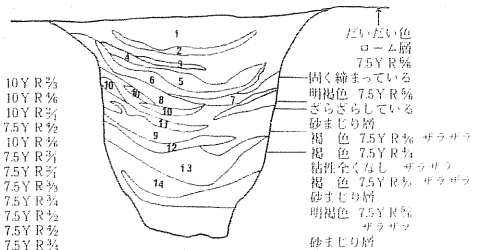


1層 暗褐色 10Y R 7/5
 2層 暗褐色 7.5Y R 7/5
 3層 暗褐色 10Y R 7/5
 4層 暗褐色 10Y R 7/5
 5層 暗褐色 10Y R 7/5
 6層 暗褐色 10Y R 7/5
 7層 暗褐色 10Y R 7/5
 8層 暗褐色 7.5Y R 7/5
 9層 暗褐色 10Y R 7/5

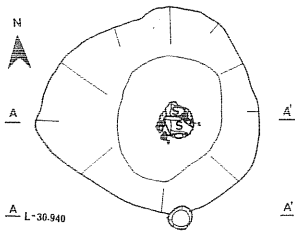


A L-32.610

SE 05

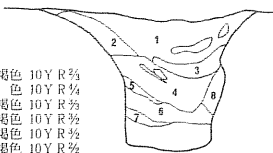


だいたい色
 ローム層
 7.5Y R 7/5
 固く締まっている
 明褐色 7.5Y R 7/5
 さらさらしている
 砂まじり層
 褐色 7.5Y R 7/5 サラサラ
 褐色 7.5Y R 7/5
 粘土全くなし サラサラ
 褐色 7.5Y R 7/5 サラサラ
 砂まじり層
 明褐色 7.5Y R 7/5
 サラサラ
 砂まじり層



A L-30.940

SE 04



1層 黒褐色 10Y R 7/5
 2層 褐色 10Y R 7/5
 3層 暗褐色 10Y R 7/5
 4層 黒褐色 10Y R 7/5
 5層 黒褐色 10Y R 7/5
 6層 黒褐色 10Y R 7/5
 7層 褐色 10Y R 7/5
 8層 暗褐色 10Y R 7/5
 9層 黒褐色 10Y R 7/5

第45図 SE 02 ~ 05 実測図



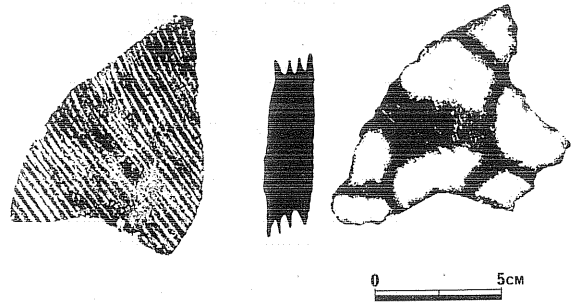
面を焼いている。横棧は、断面を三角形に荒削りし、縦板は巾ほぼ10cm程に統一して木目に沿って極めてシャープな削りを入れている。材質はいずれも杉である。

播鉢と青白磁片が出土した。青白磁は鮮やかな青白色の釉調で、表面に結晶状の貫入がみられる。播鉢は、ほぼ原型をうかがえるが、摩耗が厳しく器表面の痕跡はほとんどわからない。底面の直径は12.5cmで、厚さ1.5cm程の底部を形成する。現存状態で器高は11.5cm、口径は27.8cmで、胎土は礫を含み部分的に器表面に浮き出ている。焼成は良くなく、色調は内外面とも白色系統のベージュ色である。

SE02井戸 2層の下層部にて検出。上面プランで不整形をなし、最初ゆるい傾斜ですり鉢状に落ち込む。その後上面下90cmで段を持ち外側にふくらみぎみに、ほぼ垂直に下りてゆき、南西部分は上面下、70cmでさらに一段形成、その後再び急傾斜で底面まで落ち込む。

内部遺構としては、上面下90cmに、隅柱痕穴が2個確認され、木組井戸であろう。

遺物は埋土一層より珠洲系土器片、8層より珠洲系土器片及び須恵器片が出土した。珠洲系土器の甕胴部片は外面に条線のタタキ目を有し、内面には円礫状の押圧具によると思われる長軸3~4cmの楕円もしくは円状のクボミを有す。胎土は粗砂を含有。焼成は比較的よく、内外面とも青灰色を呈す。



第46図 SE02出土土器

SE03井戸 2層の下層部で検出。確認された全体の構造は北西方向にふくらみを持つ不整楕円形プランを呈す。

全体を通じ不整楕円プランで、軽い放物線状を描きながら底面まで落ち込んでいる。底面には長軸41cm、短軸21cm、深さ14cmの楕円形及び30cm、20cm、4cmの不整楕円形のクボミを有す。また、礫が4個底面に存在した。遺構は南端部でSD11と一部重複するが、SD11が時期的に先行している。内部施設の痕跡は確認されず素掘り井戸である。

SE04井戸 本遺構の位置する周辺は特に2層下に炭化物混入の暗褐色土が、厚さ約6cmの層をなし、3層を形成している。SE04はその3層のほぼ中層で検出された。全体の構造は西方向にふくらみを持つ楕円形プランを呈す。

掘り方は上面下60cmまですり鉢状にゆるやかに落ち込むが、その後ほぼ垂直に底面まで掘られる。底面中央部には直径44cm、深さ6cmのクボミがあり、この部分をおおうように大小6個の石が検出された。

内部施設の痕跡は確認されず、素掘り井戸である。

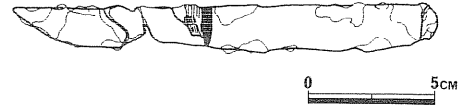
SE05井戸 2層の下層部で検出。

全体を通じ円形プランである。掘り方は広口状でほぼ放物線を描き、上面下2m地点で軽い段を形成しながら、直径50cm、深さ30cmのクボミ状の底面をなす。

内部施設の痕跡は確認できず、素掘り井戸である。

埋土4層には多量の炭化物が含まれている。

出土遺物は9層から刀子が出土した。柄部を欠くが現存する刀部長16.1cm、巾は最大で1.7cmである。刀部は両面を砥ぎ直刀である。

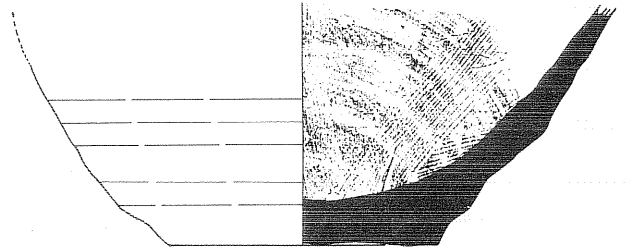


第47図 SE05出土鉄器

SE06井戸 2層の下層部で検出。全体の構造は上面プランがほぼ円形をなすが、上面下約1.40m地点で方形になり、軽い段を形成。この部分に井側のものと思われる厚さ10~12cmの板材片が8片検出された。板材は木目にそって極めてシャープに削られている。底面は直径94cm、深さ14cmの円形状のクボミを形成している。

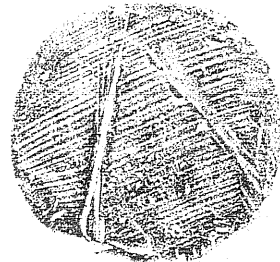
遺物は埋土中層より青磁が出土。高台を付した碗の底部片で釉調は褐色ぎみの黄緑色、内面には貫入がみられる。

SE07井戸 2層下層面にて検出。上面プランは隅丸方形を呈し、上面下80cmでほぼ方形になり、段を形成。この部分に隅柱痕3個を検出。30cm程ゆるやかに傾斜した後、垂直に近く底面まで落ち込む。底面のほぼ中央部には直径20cm、深さ10cmの円形のクボミを呈す。



SE07周囲はわずかながら小高くなり土質も周辺と異なっている。

遺物は埋土中層から珠洲系播鉢が出土。ロクロ調整が施され底部に静止糸切り痕を留める。内面は回転ヘラケズリ調整をなし、19~20条の沈線を1単位とする、幅2.5cmのおろし目を施す。

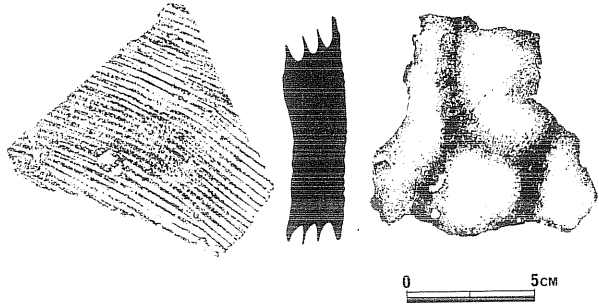


第48図 SE07出土土器

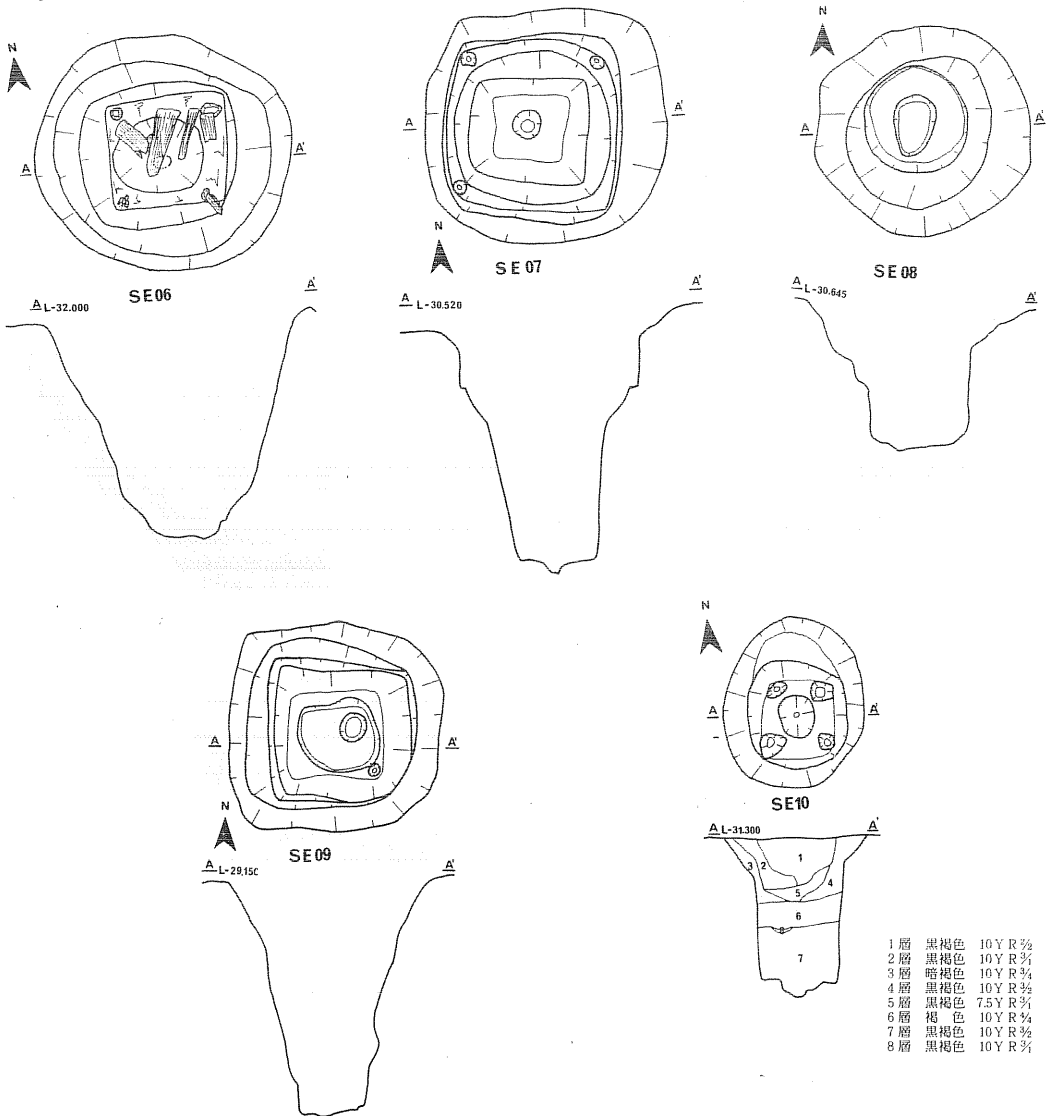
SE08井戸 2層の下層部で検出。全体を通じ平面プランが円形を呈し掘り方は最初ゆるやかにすり鉢状に掘られ、上面下50cmで明確な段を形成。その後、垂直に底面まで落ち込む。底面は深さ10cmの楕円状のくぼみを呈する。

内部施設の痕跡は確認できず、素掘り井戸である。

遺物は埋土5層より珠洲系の甕片が出土。外面には条線状のタタキ目を部分的に入り組ませている。内面は円礫状の押圧具によるとと思われる直径3.5cm程の円形のクボミを有する。胎土は粗砂を含み、部分的に表



第49図 SE08出土土器



第50図 S E 06 ~ 10 実測図



面に浮きでている。焼成は比較的良好で青灰色を呈す。

SE09井戸 地山面にて検出。上面プランが隅丸方形をなす。

掘り方は上面から急傾斜で落ち込みながら方形プランを呈していく。上面下2mで軽く段を形成しこの部分に隅柱痕を1個検出した。他は、部分的に崩壊した様相がうかがえ、消失したものである。その後、直径80cmの不整形円形を呈して40cm程円筒状に垂直に掘り込まれ、さらに底部は直径28cm、深さ5cmのクボミを呈す。

SE10井戸 地山面にて検出。上面は楕円形を呈し、上面下40cmまで播針状にゆるやかに掘り込まれ、この面で明確な段を形成、平面プランを方形に転じ、その後、垂直に底面まで掘り込まれる。段部には、4個の隅柱痕が確認された。底部には長軸40cmの楕円形のクボミが、深さ18cmでロート状に掘られる。

遺構周囲に柱穴が確認され、上屋としてのプラン構造が考えられる。

遺物は埋土6層より器形は不明であるが底部片出土。外面は体部から底部周辺にかけ太い条線状のタタキ目を斜位に施し、底部には静止糸切り痕が認められる。(熊谷)

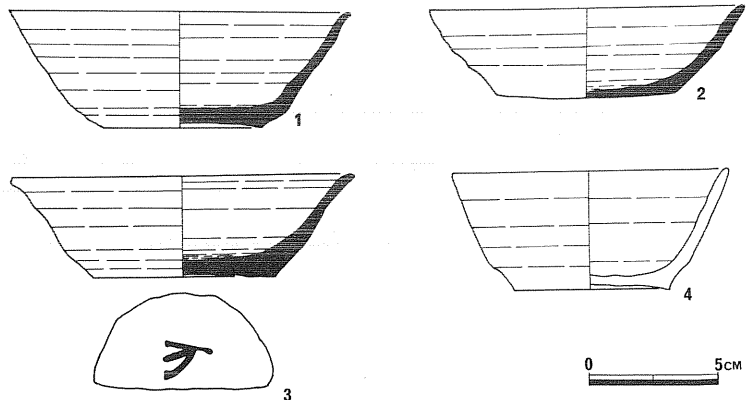
④ 土壌

SK01土壌 平面形は長軸2.50m・短軸2.20mで不整形円形を呈す。深さ30cm。

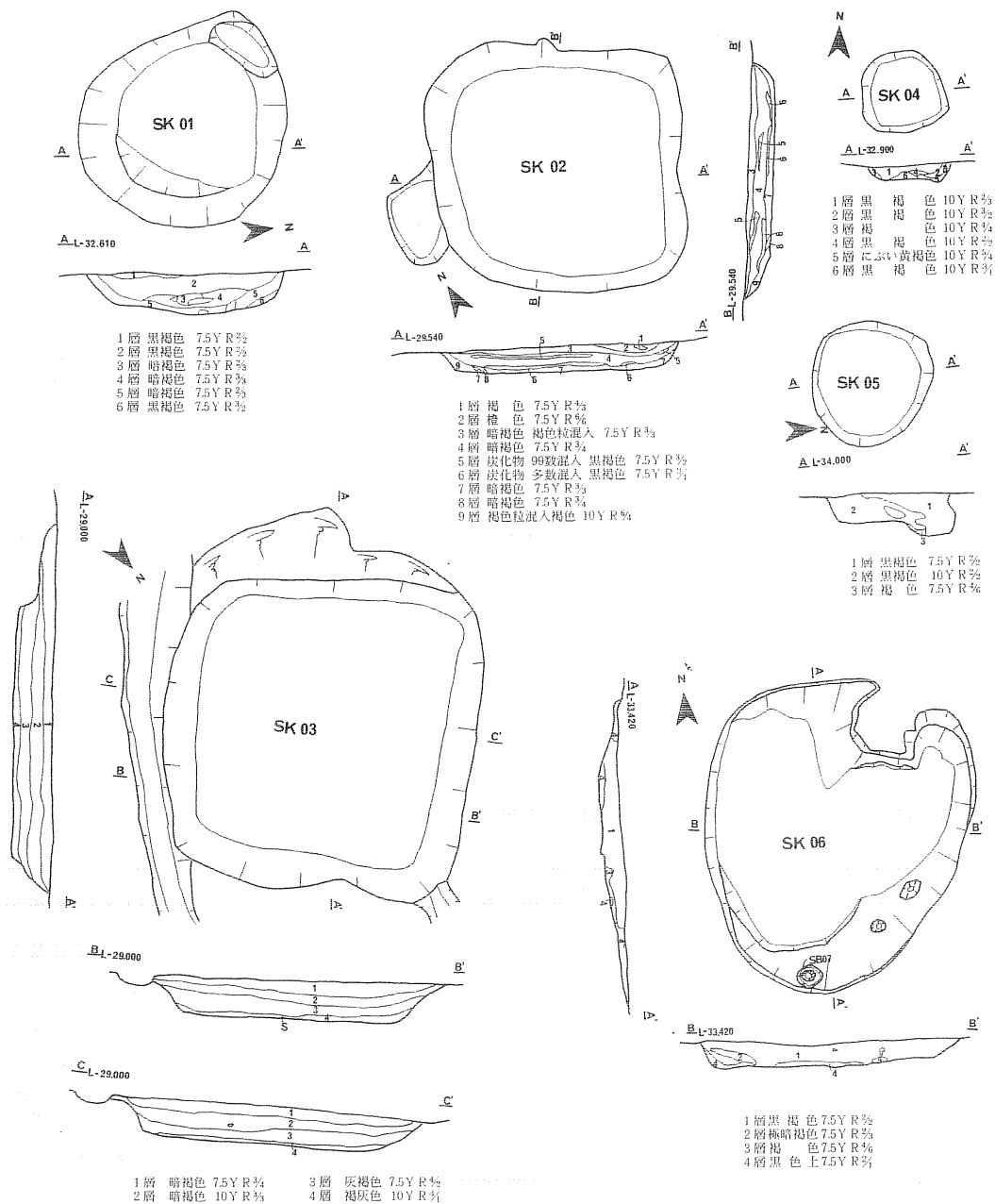
床面はやや起伏があるが堅い。

出土遺物は多く、土師器甕・土師器杯・須恵器杯・鉄滓などが出土している。1は床面出土の須恵器杯で、にぶい赤褐色を呈している。内面には炭化物が付着している。底部は回転糸切りで切り離し、文字は読みとれないが、墨書土器であることがわかる。2は埋土出土の須恵器杯で、巻き上げ技法による成形の後ロクロで形を整えている。胎土には小石を含み、灰黄色を呈す。回転糸切り底で、無調整。3は床面出土の土師器杯で、無調整の回転糸切り底に「万」という文字が書かれている墨書土器である。焼成は良好で堅く、色調は橙色で、口縁部は重ね焼きのせいか炭化物が付着している。4は埋土出土の土師器で小型である。回転糸切り底で炭化物が付着している。胎土には小石を含み、色調は浅黄橙色を呈す。

SK02土壌 平面形は1辺2.80mの隅丸方形



第51図 SK01出土土器



第52図 SK 01～06 実測図

を呈す。深さ25cm。

床面は平坦であるが、柔らかく粘性がある。

埋土は自然堆積で、中間に炭化物を多く含む層がある。

第53図は埋土から出土した珠洲系土器で、外面には比較的細かいタタキ目、内面には珠洲焼特有の押圧具痕がある。色調は青灰色。この他に埋土から土師器底部破片・鉄滓・底面からは

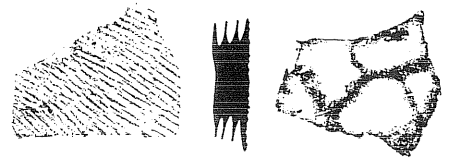
青磁の破片が出土している。

SK03土壙 SD05と重複し、本遺構の方が古いと思われる。

平面形は1辺が1.80mの隅丸方形を呈す。深さ20cm。

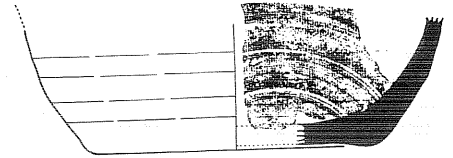
床面は平坦で良好。この床面上を炭化物と焼土の混入した層が覆っていた。

遺物は埋土から須恵器の底部、床面から第54図の須恵器底部破片が出土している。内面にロクロによる水挽き成形の痕が明瞭に残り、底部は回転糸切りで無調整。胎土には小石を少し含み、色調は灰色を呈す。



第53図 SK02出土土器

0 5cm



第54図 SK03出土土器

0 5cm

SK04土壙 平面形は直径0.90mの不整円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好で、床面上に炭化物の薄い層が、壁には焼土層が見られ、全体的にも焼土・炭化物を含んでいる。

SK05土壙 平面形は直径1.40mの正円形を呈す。深さ30cm。

床面はほぼ平坦。

埋土は北側から土砂が流れ込んだ形跡を示している。

出土遺物はすべて埋土からで土師器杯・甕などの底部や、須恵器の破片が少しある。

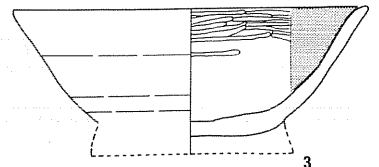
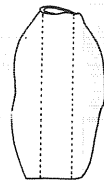
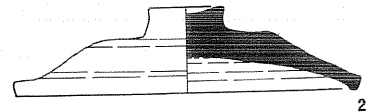
SK06土壙 SB07の柱穴のひとつと重複している。本遺構はSB07の柱穴に切られていたのでSB07より古いと思われる。

平面形は長軸3.50m・短軸3.00mの不整円形を呈す。深さ20~30cm。

床面は起伏が激しいが堅くしまっている。

埋土上面には焼土・炭化物の粒子が混入していた。

出土遺物はすべて埋土からのもので、須恵器杯・自然釉のかかった須恵器・土師器杯や甕などが出土している。1は須恵器の高台付皿である。底部がほとんど残っていないため切り離し技法は不明。胎土に少し砂



0 5cm

第55図 SK06出土土器・土錘

を含み、色調は灰色。2はかなり厚めの須恵器蓋で、内面にロクロの使用痕が明瞭に残り、右回転であることがわかる。暗灰黄色を呈す。3は土師器の高台付杯で、内面を黒色処理している。内面はロクロ使用による指紋がみられる。底部は回転糸切りで切り離され無調整。胎土に細かい砂粒を含み、色調は浅黄橙色。4は淡橙色の土錘である。

SK07土壙 平面形は長軸1.40m・短軸1.00mの楕円形を呈す。深さ約15cm。

床面はしまっていて堅いが、やや起伏がある。床面上に薄い木炭層があった。

本遺構も出土遺物が多くすべて埋土中であるが、床面に近い部分に集中していた。1は須恵器杯の底部で摩滅が激しい。底部はへら切りで、胴部から底部へ至る部分は丸味をもつ。胎土には細かい砂粒を含み、色調は灰白色。

2は須恵器杯で、回転糸切り底、無調整。文字は不明だが墨書土器である。内面にロクロ使用の痕が残り、右回転であることがわかる。灰黄色を呈す。3は口縁部を欠損した土師器杯である。摩滅が激しいため詳細は不明。橙色を呈す。

4は土師器甕で口縁部は段を有し強く外反する。口縁部には横方向胴部は不規則なカキ目が見られる。内面はすべて横方向のカキ目である。胎土には細かい砂粒を含みに

ぶい橙色を呈すが、内面の口縁部には炭化物が付着している。5は

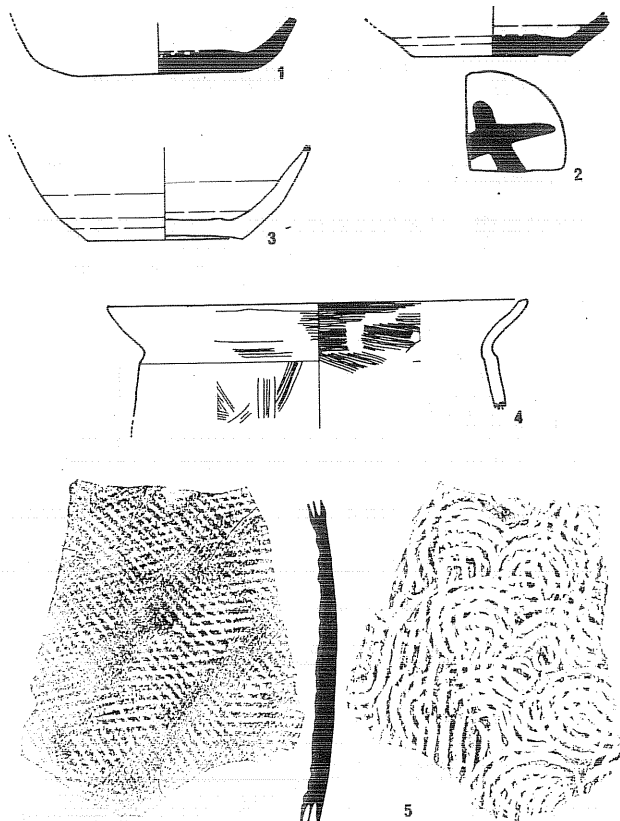
須恵器で、内面には同心円状のアテ痕、外面には斜めに交差させた平行なタタキ目の上を上から下にへらナデの痕がみられる。色調は暗青灰色、内面は灰オリーブ色を呈す。以上の他にも、須恵器や土師器の杯、甕の破片が出土している。

SK11と接する。平面形は長軸2.80m・短軸1.80mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は焼土が薄く散在しておりやや起伏がある。

出土遺物は埋土上面からの須恵器高台付皿1点のみである。厚手で回転糸切り底。高台部は張り付けた痕が明瞭に残る。胎土には細かい砂粒を多量に含み、色調は灰色を呈す。

第56図 SK07出土土器



第56図 SK07出土土器

0 5cm

須恵器で、内面には同心円状のアテ痕、外面には斜めに交差させた平行なタタキ目の上を上から下にへらナデの痕がみられる。色調は暗青灰色、内面は灰オリーブ色を呈す。以上の他にも、須恵器や土師器の杯、甕の破片が出土している。

SK08土壙 SK11と接する。平面形は長軸2.80m・短軸1.80mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は焼土が薄く散在しておりやや起伏がある。

出土遺物は埋土上面からの須恵器高台付皿1点のみである。厚手で回転糸切り底。高台部は張り付けた痕が明瞭に残る。胎土には細かい砂粒を多量に含み、色調は灰色を呈す。

SK09土壙 平面形は長軸3.00m・短軸2.20mの不整円形を呈す。深さ20cm。

床面は平坦で堅くしまっている。

埋土には若干焼土の塊が入る。

出土遺物はすべて埋土からである。1は須恵器杯の底部でへら切りの痕を残している。胎土には小石を含み、黄灰色を呈す。2は土師器杯で摩滅が激しいが、わずかに回転糸切り底であることがわかる。胎土には細かい砂粒を含み、浅黄橙色を呈す。タタキ目のある須恵器も出土している。

SK10土壙 平面形は長軸2.80m・短軸2.30mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は起伏がある。

出土遺物は土師器や須恵器の杯・土師器の甕が出土しているが、すべて埋土からである。1は土師器杯で、摩滅が激しく詳細は不明。底径は口径に比べて小さく、内湾して立ち上がる。胎土には細かい砂粒が含まれる。色調は橙色。2は口縁部欠損の土師器杯である。底部は回転糸切りで無調整。胎土には細かい砂粒を含み色調はにぶい橙色を呈す。外面には炭化物が付着している部分がある。焼成は良好で堅い。なお、本遺構の床面直上から炭化したクルミが出土している。

SK11土壙 SK08と隣接する。平面形は長軸2.80m・短軸1.20mの溝状を呈す。深さ約65cm。床面はやや起伏があるが良好。

SK12土壙 SD03によって切られている。従って本遺構はSD03より古い。

平面形は長軸2.60m・短軸1.50mの楕円形を呈す。深さ15cm。

床面はやや起伏がある。

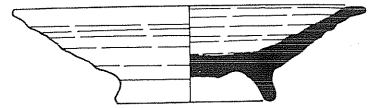
SK13土壙 SD02によって切られている。本遺構はSD02よりも古い。

平面形は長軸2.90m・短軸1.70mの楕円形を呈す。深さ約10cm。

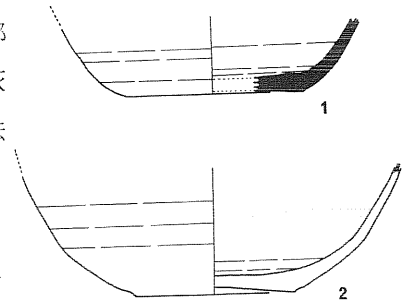
床面は起伏が激しい。

埋土の一部に、炭化物を多く含む部分がみられる。

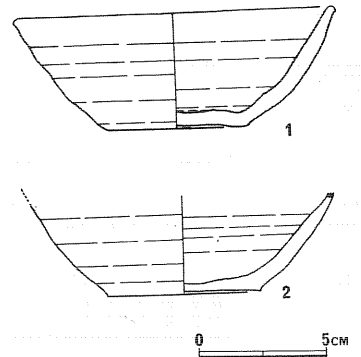
遺物は、埋土から高台付皿と思われる須恵器と土師器破片が、2点出土するのみである。須恵器の底部には回転糸切り痕が認められる。



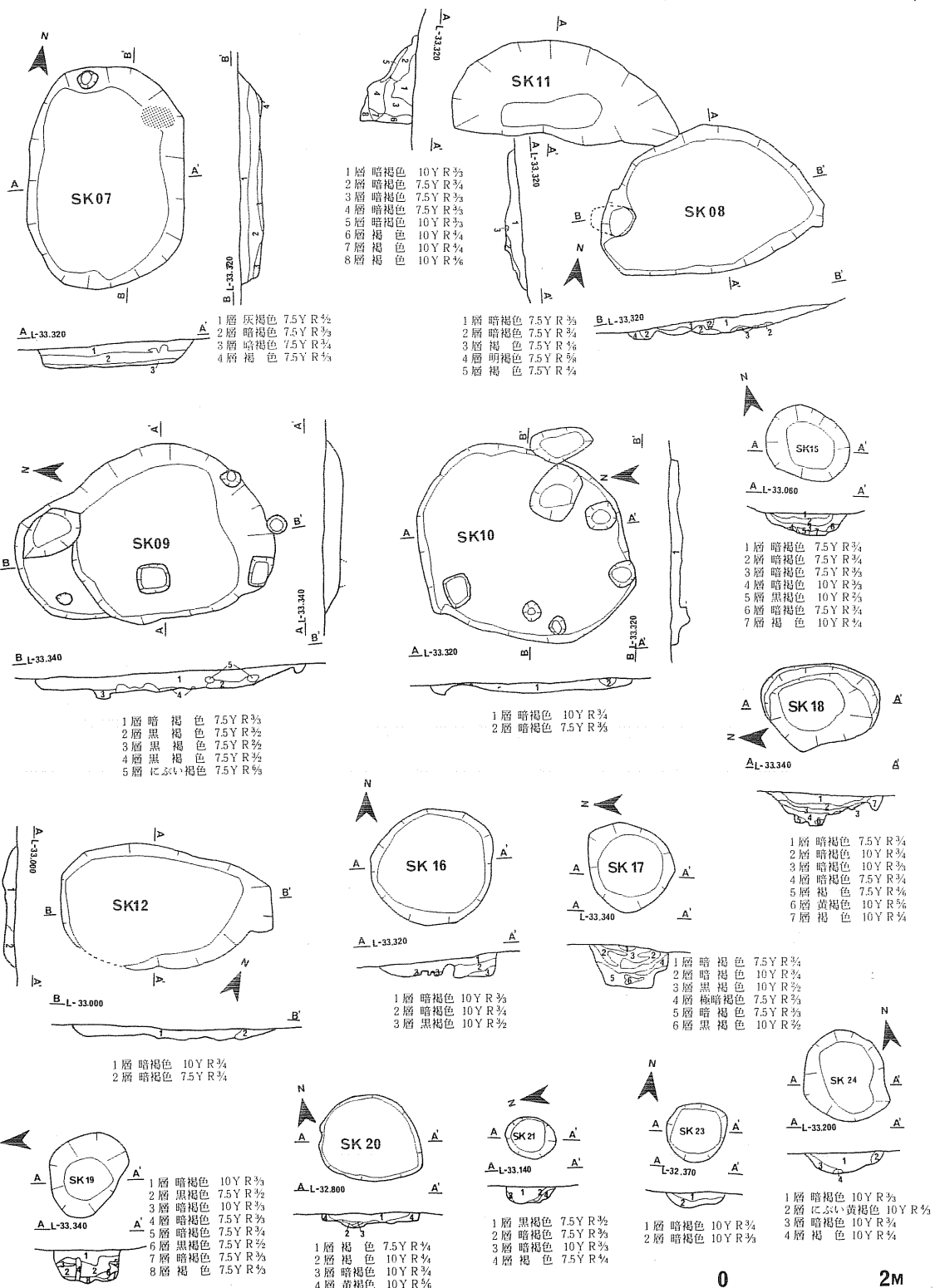
第57図 SK08出土土器 0 5cm



第58図 SK09出土土器 0 5cm



第59図 SK10出土土器 0 5cm



第60图 SK 07 ~ 24 实测图



SK14土壙 SI08と重複している。本遺構は確認面においてSI08を切っていた。

平面形はSI08を掘る前の段階で、直径1.20mの正円形を呈す。深さ10cm。

床面はやや起伏があり中央に浅いピットが存在する。

遺物は土師器の小片が1点、埋土から出土しているだけである。

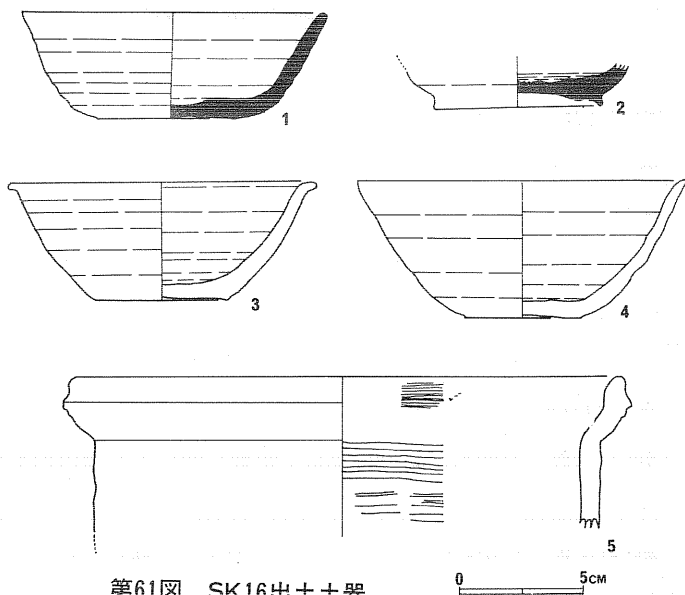
SK15土壙 平面形は長軸1.00m・短軸0.85mの不整形円形を呈す。深さ30cm。

床面はやや起伏がある。

SK16土壙 平面形は直径1.45mの正円形を呈す。深さ30cm。

床面は起伏がみられるが堅くしまっている。

出土遺物には土師器杯・須恵器杯があるが、すべて埋土からのものである。1は須恵器杯で胴部から底部に至る部分が丸味をもつ。無調整の回転糸切り底で、口径に比べて底径が小さめに作られている。灰黄色を呈す。2は須恵器碗の底部で低い高台がつく。高台部は本体から引き出されているようである。回転糸切り底。内面にはロクロ使用の痕が明瞭で、右回転であること



第61図 SK16出土土器

とわかる。胎土には砂粒が含まれ、色調は青灰色を呈す。焼成は良好。3は土師器杯で他のものより少し小型で厚味がある。回転糸切り底で無調整。胎土には小石を含み、色調は淡赤橙色を呈す。4は土師器で口径に比べて底径が小さい。底部は回転糸切りで無調整。胎土には細かい砂粒を多量に含む。色調は底部付近が暗オリーブ灰色で、他は橙色を呈す。二次的加熱を受けているようだ。5は土師器甕で、口縁部は外反して稜をつくり内湾して引き出される。外面にはロクロ整形の痕が、内面には横方向のカキ目がみられる。胎土には小石を含み、色調は橙色を呈す。

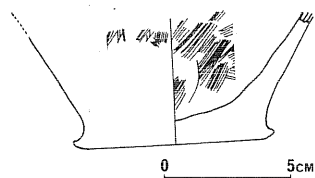
SK17土壙 平面形は直径1.10mの不整形円形である。深さ50cm。

床面はなだらかな皿状を呈し堅くしまっている。

埋土の中間に、焼土と炭化物が入り込んでいる層がある。

SK18土壙 平面形は長軸1.50m・短軸1.00mの不整形円形を呈す。深さ20～30cm。

床面はなだらかな皿状を呈し堅くしまっている。
 埋土にはロームの粒子やブロックが多量に混入していた。
 遺物は床面から出土した土師器甕の底部のみである。胴部外面には縦方向、内面は横方向のカキ目がみられ、底部は厚くとび出している。胎土には小石が多く含まれ、色調は淡橙色を呈す。



第62図 SK18出土土器

SK19土壙 平面形は長軸1.10m・短軸0.90mの不整形円形を呈す。深さ40cm。

床面はやや起伏がみられる。

SK20土壙 平面形は長軸1.30m・短軸1.00mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面はほぼ良好。中央にピットがあり焼土の層がみられた。

埋土にも全体的に焼土・炭化物が多く混入する。

SK21土壙 平面形は直径0.60mの正円形を呈す。深さ20cm。

床面はほぼ良好。

SK22土壙 SI02と東壁を接している。

平面形は長軸0.80m・短軸0.65mの楕円形を呈す。深さ20cm。

床面はほぼ良好。

SK23土壙 平面形は長軸1.15m・短軸1.00mの不整形円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

SK24土壙 平面形は長軸1.15m・短軸1.00mの不整形円形を呈す。深さ25cm。

床面は良好。

SK25土壙 SI06を切っていた。ゆえにSI06より新しいものと思われる。

平面形は直径1.40mの正円形を呈す。深さ40cm。

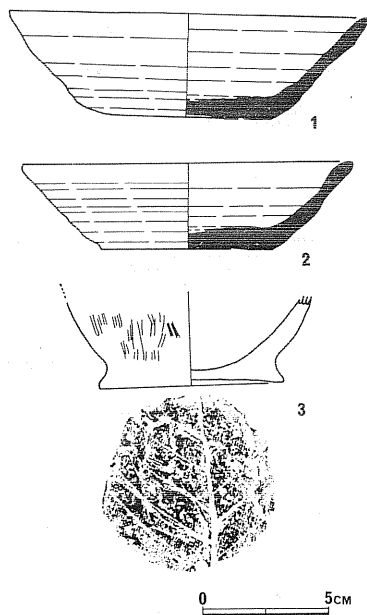
床面は緩やかに皿状に窪み、良好。

遺物は埋土から須恵器の杯や土師器の破片が出土している。

SK26土壙 平面形は直径1.30mの不整形円形を呈す。深さ20cm。

床面はやや起伏があるが、たいへん堅くしまっている。

遺物はほとんど埋土からであり、土師器高台付杯・須恵器杯の破片が出土している。1は須恵器杯で胴部から底部に至る部分は、丸味をおびる。底径は口径に比べて小さいが、器高はあまり高くない。底部は回転糸切りで無調整。



第63図 SK26出土土器

胎土には細かい砂粒を含み、色調は明褐灰色を呈す。2は須恵器杯である。底部は回転糸切りで、無調整。色調は褐灰色。床面出土の3は土師器甕の木葉痕がついた底部で飛び出しており胴部にはりつけた痕がわずかに残っている。胴部外面は縦方向、内面は横方向のカキ目が見られる。胎土には小石を多く含み、色調はにぶい橙色。

SK27土壙 平面形は長軸1.00m・短軸0.70mの不整円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK28土壙 平面形は長軸1.10m・短軸0.90mの隅丸長方形を呈す。深さ20cm。

床面は平坦でたいへん堅くしまっている。

埋土の中間に炭化物を多量に含む層がある。

遺物はすべての埋土からのもので、土師器甕や杯・タタキ目のある須恵器の破片が出土している。

SK29土壙 平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ15cm。

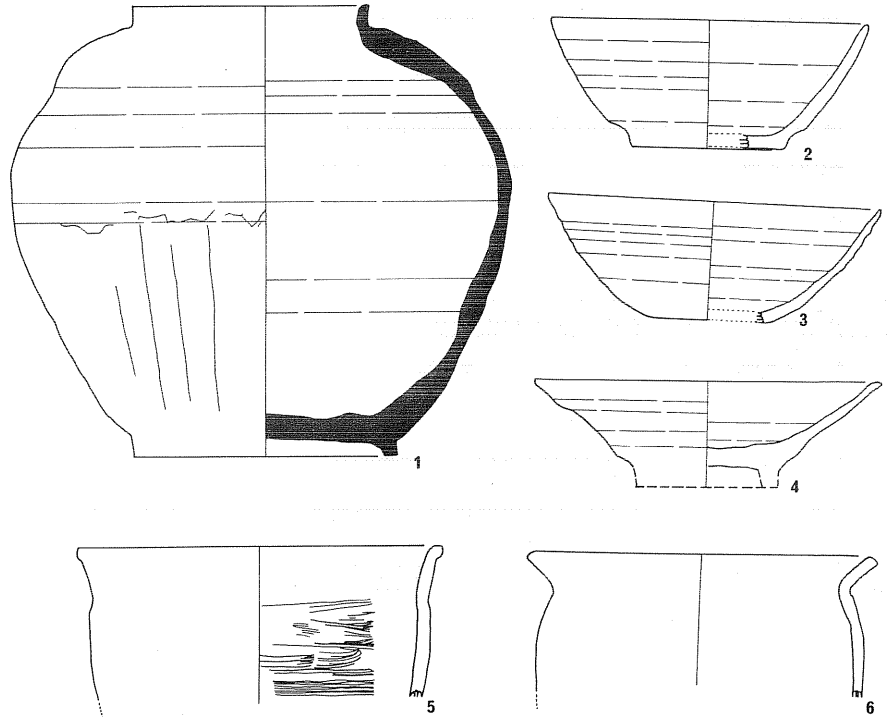
床面は良好。

遺物は全て埋土からで、土師器杯や甕・内外面にタタキ目のある須恵器などが出土している。

SK30土壙 平面形は長軸2.40m・短軸2.10mの隅丸長方形を呈す。深さ30cm。

床面は起伏が激しい。

出土遺物は多いが、ほとんど埋土からである。1は須恵器壺で、東壁と北壁の隅のピット内からふたつに割れた形で出土した。胴部の上方に膨みを持ち、上半部は口クロ痕と



第64図 SK30出土土器

0 5cm

もに、意識的につけられたような沈線が巡り、下半部は下から上への、ヘラナデを施している。底部は高台が付き、回転糸切りで切り離した後、指で押し消したような痕が見られるが、あまり外量の砂粒が付着しているため詳細は不明。更に、この底部についている高台は張り付けていることがわかる。色調はオリーブ黒色。3は土師器杯で摩滅が激しい。口径に比べて底径が小さい器形をしている。色調は淡橙色を呈す。4は土師器の高台付皿で、底部の切り離しは不明。胎土には細かい砂粒が含まれ、色調は橙色を呈す。5は土師器甕の口縁部で外面は摩滅が激しい。口縁部はあまり外反せず、ほぼ垂直に立ち上がるが、口唇部は少し折り返された縁が巡っている。内外面とも横方向のヘラナデがなされている。胎土には小石を含み、色調は明赤褐色。6は土師器甕で小型になるものと思われる。口縁部は括れてから強く外反する。外面の口縁部と内面は横方向、外面の胴部は縦方向のカキ目がわずかに見られる。胎土には小石を多く含み、色調は淡橙色で内面の口縁部には炭化物が付着しているため黒色化している。2は土師器杯でわずかに残る底部から回転糸切り底と思われる。橙色を呈す。これらの他に、砥石・土師器の杯や甕・須恵器の杯や甕・六条の沈線の巡る土師器などが出土している。

SK31土壙 平面形は長軸2.30m・短軸1.40mの楕円形を呈す。深さ30cm。

床面は皿状に窪み、やや起伏がある。

出土遺物はすべて埋土からで、土師器・須恵器の杯やタタキ目を施した須恵器がある。

SK32土壙 平面形は長軸1.20m・短軸1.00mの楕円形を呈す。深さ40cm。

床面は緩く皿状に窪む。

遺物は埋土から、須恵器杯の口縁部破片が1点出土しているだけである。

SK33土壙 SB14の1柱穴と重複している。平面形は長軸1.20m・短軸0.90mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は良好。

遺物は須恵器杯の底部と土師器の小片の2点のみである。

SK34土壙 SB14の1柱穴によって切られているので本遺構の方が古いと思われる。

平面形は長軸2.90m・短軸1.10mの不整形を呈す。深さ10cm。

床面はやや起伏があるがほぼ良好。

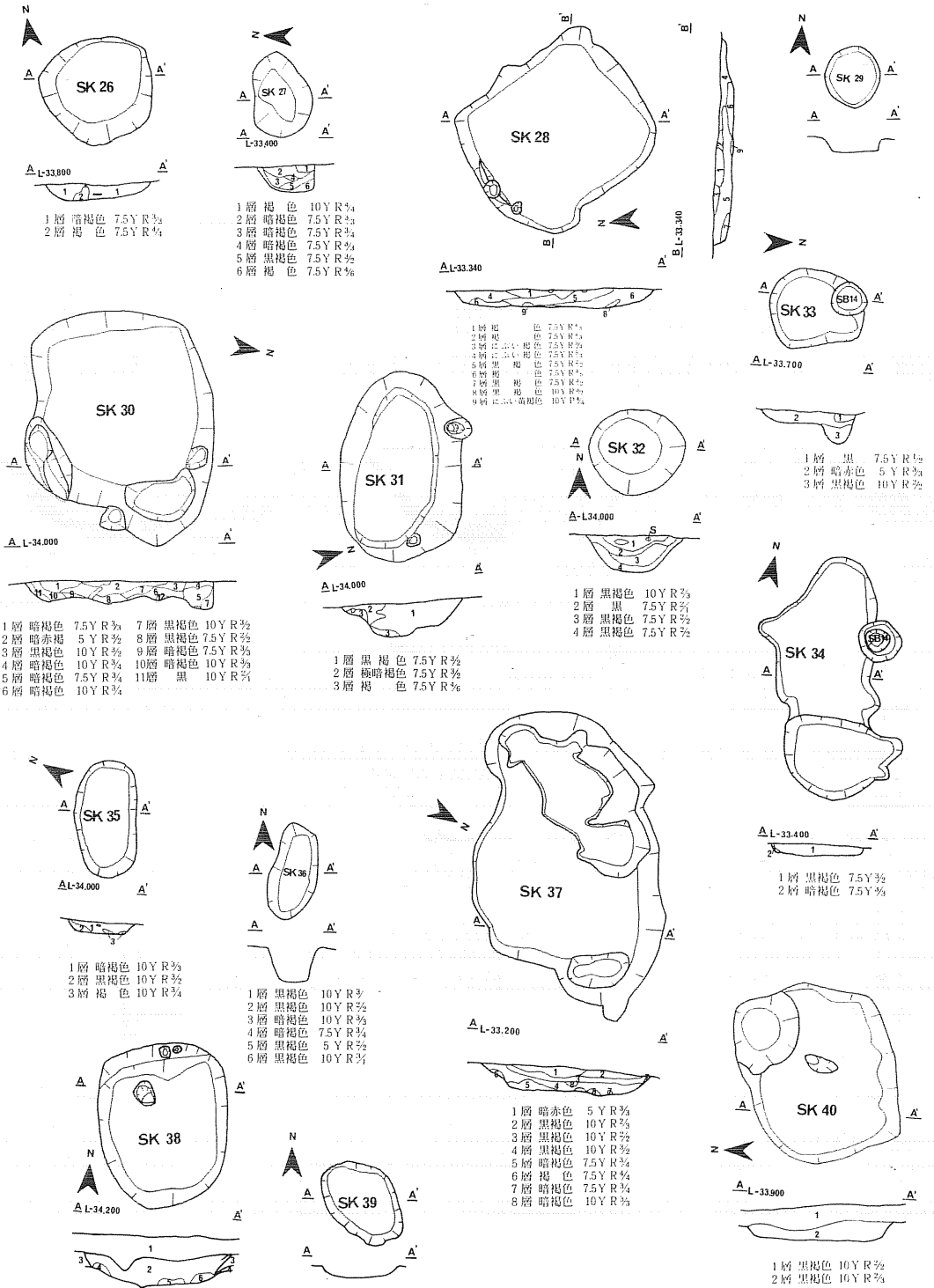
遺物は埋土より須恵器杯の口縁部破片・土師器の小片を出土したのみである。

SK35土壙 平面形は長軸1.40m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は良好。

遺物は埋土から土師器及び須恵器の杯の破片・内外面にタタキ目のある須恵器が出土している。

SK36土壙 平面形は長軸1.15m・短軸0.55mの楕円形を呈す。深さ約40cm。



第65图 SK 26 ~ 40 实测图



床面は良好。

SK37土壙 平面形は長軸3.80・短軸2.20mの不整形を呈す。深さ20cm。

床面はやや起伏がある。

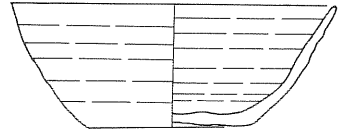
遺物は土師器・須恵器とも杯・甕の破片が埋土から出土している。

SK38土壙 平面形は長軸2.00m・短軸1.50mの隅丸長方形

を呈す。深さ30cm。

床面はやや起伏がある。

遺物は床面出土の土師器杯が出土しており、摩滅が激しく、底部の切り離しや調整痕は不明。胎土には細かい砂粒を含み、色調は淡橙色を呈す。埋土からは土師器片が出土している。



0 5cm

第66図 SK38出土土器

SK39土壙 平面形は長軸1.20m・短軸0.80mの不整形円形を呈す。

深さ10cm。

床面は良好。

SK40土壙 平面形は長軸2.20m・短軸1.80mの不整形を呈す。深さ20cm。

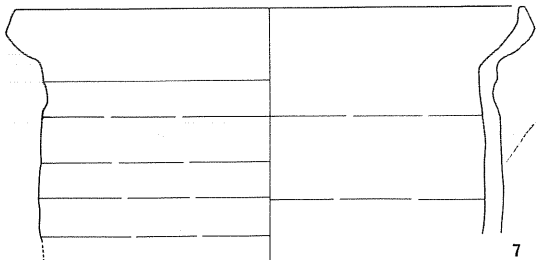
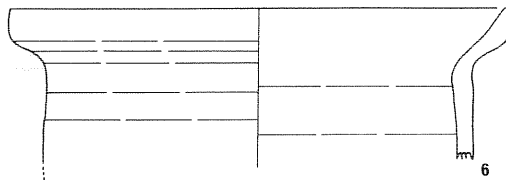
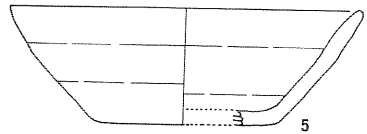
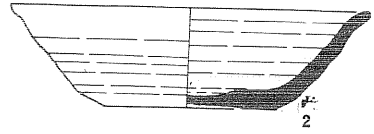
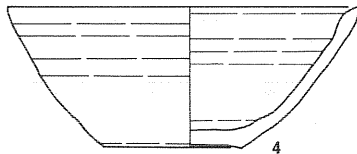
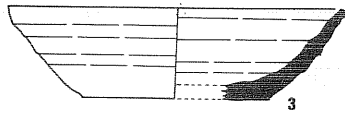
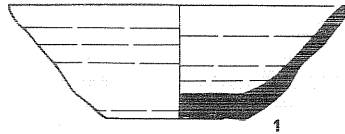
床面は良好。

遺物はすべて埋土からの出土で、土師器杯や甕・タタキ目のある須恵器がある。

SK41土壙 平面形は長軸2.20m・短軸1.80mの不整形円形を呈す。深さ20cm。

床面は平坦で良好。

出土遺物は多いがすべて埋土からのものである。1は須恵器杯で



第67図 SK41出土土器

0 5cm

口径に比べて底径が小さい。摩滅が激しいので詳細は不明であるが、底部は回転糸切りで、無調整である事がわかる。灰黄色を呈す。2は須恵器杯で、口径に比べて底径が小さい器形を呈す。胴部から底部に至る部分は丸味を持ち、口縁部が外反する。やや厚手で回転糸切り底。胎土には小石を少し含み、色調は灰色を呈す。3は須恵器杯で摩滅が激しい。灰白色を呈す。4は土師器杯でかなり厚手。底径は口径に比べて小さく、器高も高目でやや内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切りで無調整。胎土には細かい砂粒を含み、色調はにぶい赤褐色を呈す。5は土師器杯で少し厚手である。摩滅が激しいので詳細は不明。胎土に小石を含み、色調は淡赤褐色を呈す。6は土師器甕の口縁部で摩滅が激しい。内外面とも横方向のカキ目がみられる。胎土には小石を多く含み、色調は橙色を呈す。7は土師器甕で、口縁部は外反し丸味をもって内湾する。焼成は良好で胎土には小石を少し含む。色調は橙色。

SK42土壙 平面形は直径0.75mの正円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK43土壙 平面形は直径0.95mの正円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

遺物は埋土からの土師器小片1点だけである。

SK44土壙 平面形は長軸3.50m・短軸2.10mの楕円形を呈す。深さ5～8cm。

床面はやや起伏がある。

遺物は埋土からの土師器小片1点だけである。

SK45土壙 平面形は長軸0.85m・短軸0.65mの楕円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK46土壙 平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ50cm。

床面は平坦で良好。

遺物は北隅の床面から刀子が出土している。

SK47土壙 平面形は直径1.45mの不整形を呈す。深さ30cm。

床面はやや起伏がある。

SK48土壙 平面形は長軸1.80m・短軸0.70mの不整形を呈す。深さ7cm。

床面はやや起伏がある。

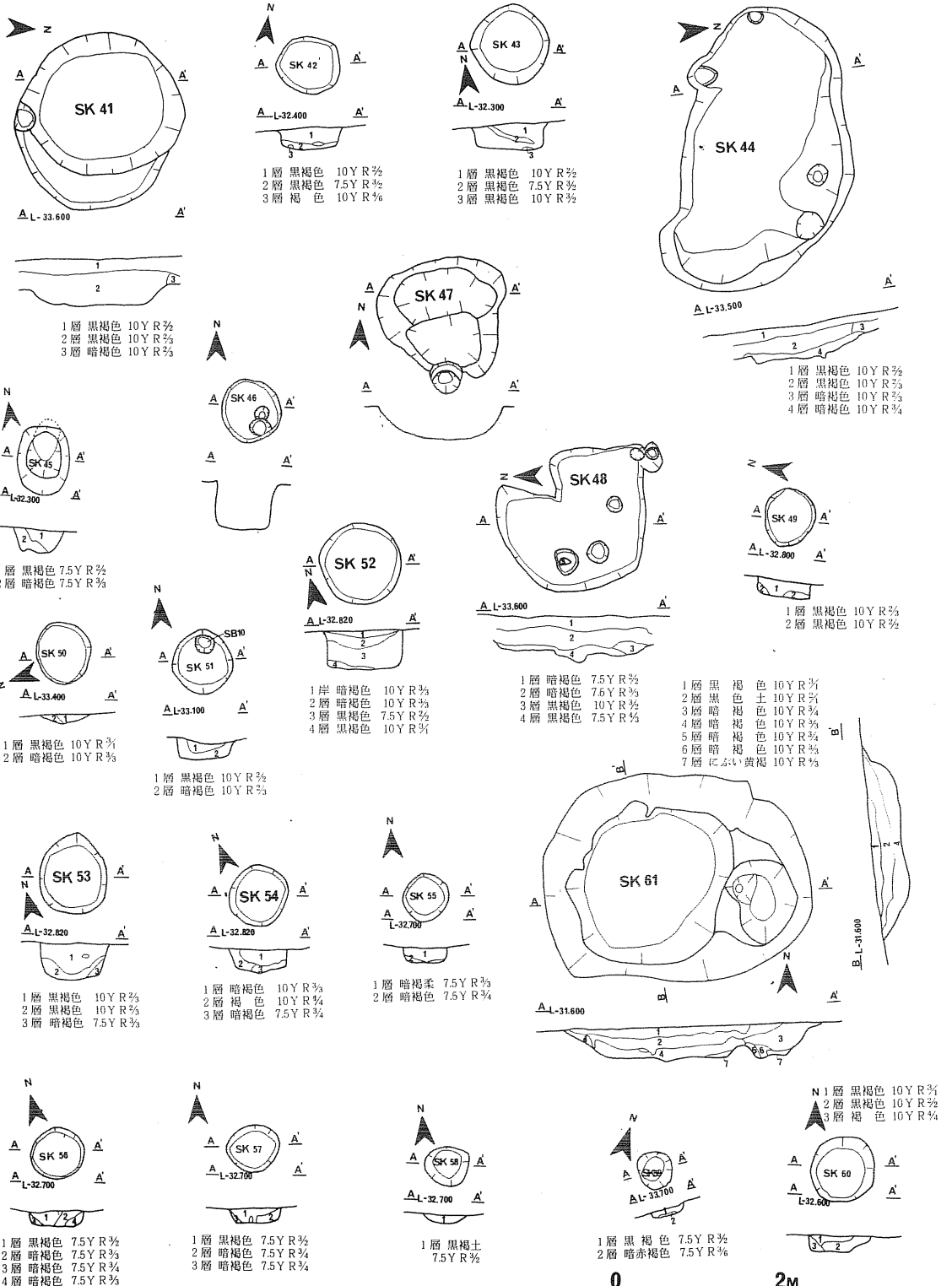
SK49土壙 平面形は直径0.65mの正円形を呈す。深さ20m。

床面は平坦で良好。

SK50土壙 平面形は直径0.73mの正円形を呈す。

床面は皿状を呈し、深さ10cm。

埋土にはロームの粒子やブロックが多量に混入していた。



第68图 SK 41 ~ 61 实测图

SK51土壙 SB10の1柱穴によって切られている。

平面形は直径0.75mの正円形を呈す。深さ20cm。床面は平坦であるが柔らかく、粘性がある。

SK52土壙 平面形は直径0.85mの正円形を呈す。深さ40cm。床面は良好。

埋土にはロームの粒子が多量に混入している。

SK53土壙 平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ40cm。床面は緩い皿状を呈す。

SK54土壙 平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ25cm。床面は中央に浅い窪みがあるが、他はほぼ平坦で良好。

SK55土壙 平面形は直径0.56mの正円形を呈す。深さ20cm。床面は良好。

SK56土壙 平面形は直径0.60mの正円形を呈す。深さ16cm。床面は緩く皿状に窪んでいる。

SK57土壙 平面形は直径0.60mの正円形を呈す。深さ18cm。床面は良好。

SK58土壙 平面形は直径0.50mの正円形を呈す。深さ20cm。床面は緩く皿状を呈す。

SK59土壙 平面形は直径0.40mの正円形を呈す。深さ10cm。床面は良好。

埋土全体に炭化物を含み、下層は焼土粒子を多量に混入する。遺物は埋土からで、土師器小片と内黒土師器破片のみである。

SK60土壙 平面形は直径0.80mの正円形を呈す。深さ20cm。床面は平坦で良好。

SK61土壙 平面形は長軸3.25m・短軸2.50mの不整形円形を呈す。深さ40cm。床面はやや起伏があるが堅くしまっている。

遺物は埋土から土師器及び須恵器の甕の破片が出土している。

SK62土壙 平面形は長軸0.80m・短軸0.60mの楕円形を呈す。深さ40cm。床面は良好。

SK63土壙 平面形は直径0.80mの正円形を呈す。深さ40cm。床面は良好。

SK64土壙 平面形は長軸2.10m・短軸1.60mの不整形円形を呈す。深さ20cm。

床面はほぼ平坦。

埋土には全体的に焼土粒子が混入しており、床面上には炭化物が散在していた。

SK65土壙 平面形は長軸1.20m・短軸0.85mの不整形を呈す。深さ20cm。

床面はやや起伏がみられる。

SK66土壙 平面形は長軸0.80m・短軸0.70mの不整形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

SK67土壙 SB12によってわずかに切られている。

遺構は、SB12より古いものと思われる。

平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ15cm。

床面は緩い皿状を呈す。

SK68土壙 平面形は長軸1.20m・短軸1.00mの楕円形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

SK69土壙 平面形は直径0.90mの正円形を呈す。深さ40cm。

床面は良好。

埋土には全体的に炭化物を含み、ごく上層には焼土を含む部分がある。

SK70土壙 平面形は長軸2.60m・短軸1.20mの隅丸長方形を呈す。深さ20cm。

床面は起伏が激しいが堅くしまっている。

四隅には主柱穴らしい配列の良い4個のピット(P₁~P₄)が検出された。

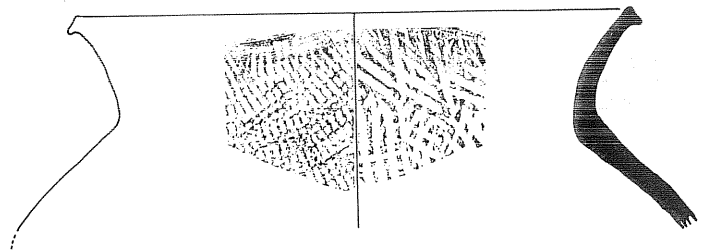
なお、P₅の埋土上層には多量の焼土・炭化物が広がっており、ピット内にも焼土粒子を混入していた。竪穴住居跡の可能性も考えられる。

SK71土壙 平面形は長軸2.95m・短軸2.20mの隅丸長方形を呈す。深さ30cm。

床面はやや起伏があり、あまりしまってはならず粘性が強い。

南壁の東寄りの部分に焼土の広がりが薄くみられ、埋土上層にも焼土が堆積している部分があった。

遺物はすべて埋土からである。第69図は須恵器壺で外面は格子目ふうタタキ目、内面は平行なタタキ目を不規則につけてある。口頸部は垂直に立ち上がっており、自然釉が薄くかかっている。胎土には細かい砂粒を含み、色調は外面が暗青灰色、内面は青灰色を呈す。この他に土



第69図 SK71出土土器



師器底部も出土している。

SK72土壙 平面形は直径が0.70mの正円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

SK73土壙 平面形は直径1.00mの正円形を呈す。深さ40cm。

床面はほぼ平坦。

遺物は砥石が出土しており、どの面ともかなり摩滅している。

SK74土壙 平面形は直径0.70mの正円形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

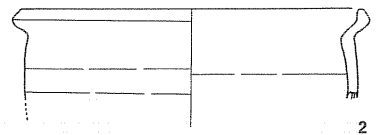
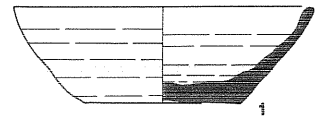
SK75土壙 平面形は長軸0.80m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ約20cm。

床面は良好。

SK76土壙 平面形は長軸2.10m・短軸1.20mの不整形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

遺物はすべて埋土からで、1・2の他に土師器杯・タタキ目のある土師器や須恵器・須恵器杯等の破片が出土している。1は須恵器杯で巻き上げ技法で成形し、ロクロで形を整えている。色調は灰黄色を呈す。2は土師器甕の口縁部で小型である。内外面にわずかではあるが横方向のカキ目が認められる。胎土には小石を含み、色調は浅黄橙色を呈す。



第70図 SK76出土土器

SK77土壙 平面形は直径0.65mの正円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

SK78土壙 平面形は直径0.90mの正円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK79土壙 平面形は調査部分だけではその全体を想像することはできない。深さ35cm。

床面はやや起伏がみられる。

埋土は南側から土砂が流れ込んだような形跡をみせる。

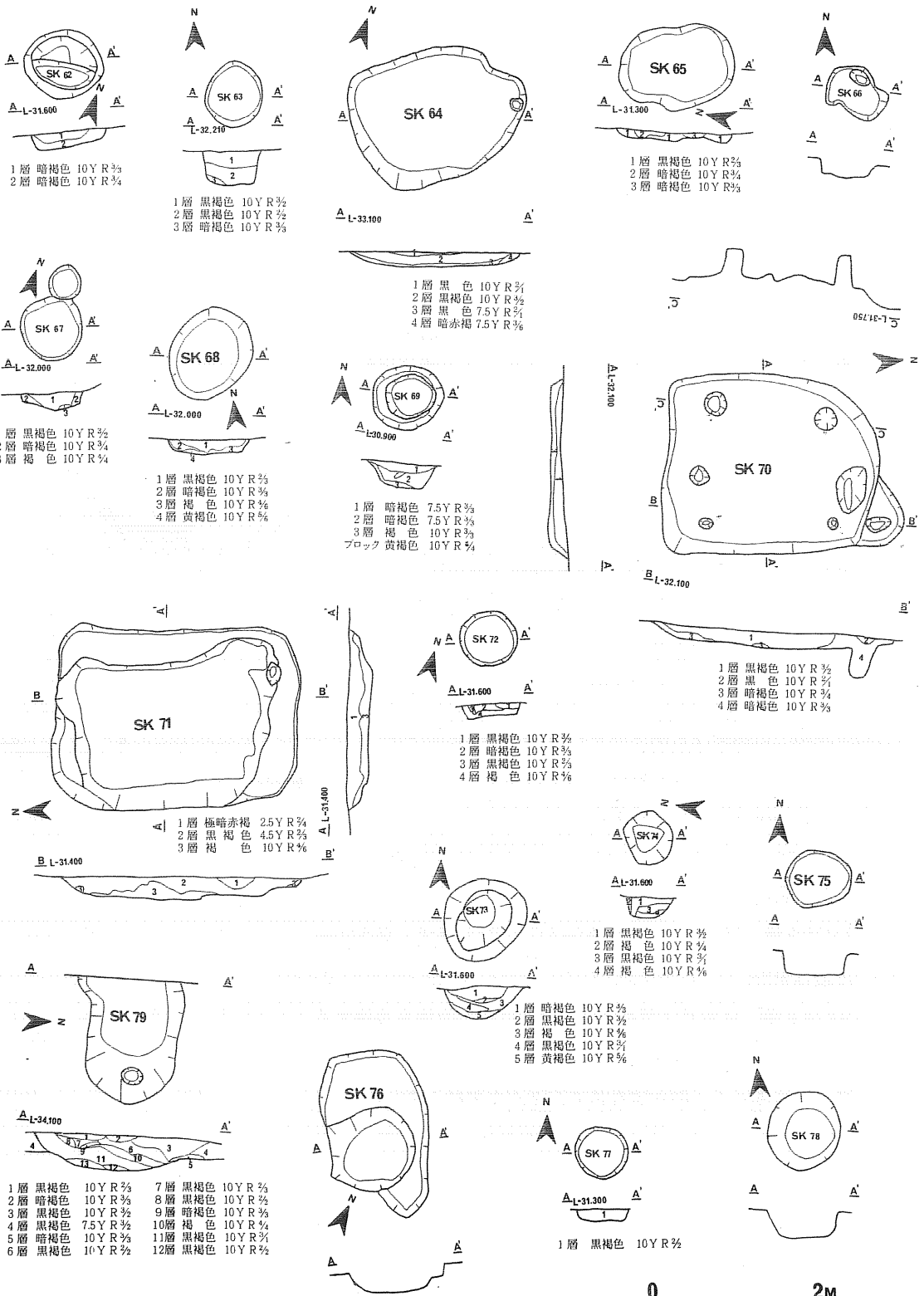
SK80土壙 平面形は長軸1.50m・短軸1.00mの不整形を呈す。深さ25cm。

床面は平坦で良好。

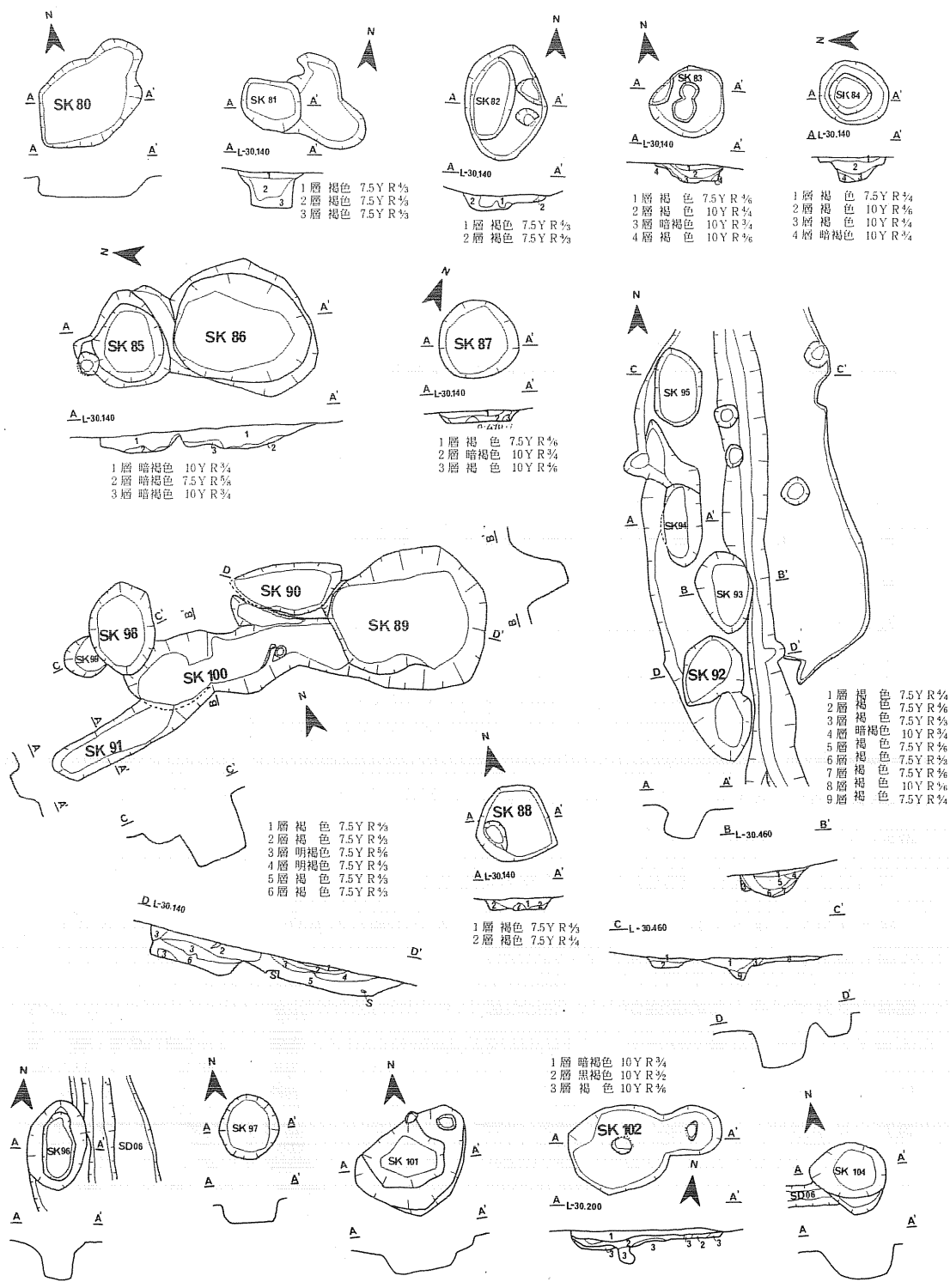
SK81土壙 平面形は長軸0.70m・短軸0.60mの隅丸長方形を呈す。深さ40cm。

床面は良好。

埋土は全体的に焼土や炭化粒子を含むが、特に中央の層に集中している。



第71図 SK 62 ~ 79 実測図



第72図 SK 80 ~ 104 実測図



SK82土壙 平面形は長軸1.90m・短軸1.00mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は良好。

遺物は縦に半分に割れた土錘が出土している。

SK83土壙 平面形は直径0.90mの不整円を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

埋土の中央の層は焼土・炭化物を少々含む。

SK84土壙 平面形は長軸0.80m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK85土壙 北隅はSB03の1柱穴に切られSK86と隣接している。

平面形は直径1.00mの不整円形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

SK86土壙 SK85と隣接する。

平面形は長軸1.75m・短軸1.50mの楕円形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

SK87土壙 平面形は直径1.00mで正円形を呈す。深さ10cm。

床面は良好。

SK88土壙 平面形は直径0.90mの不整円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

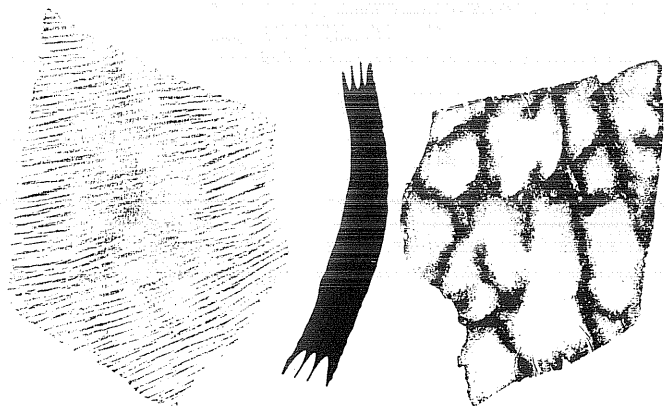
SK89土壙 SK90及びSK100と重複しており、本遺構はSK90より古く、SK100より新しいと思われる。

平面形は長軸1.90m・短軸1.60mの不整円形を呈す。深さ20cm。

床面は堅くしまっており、珠洲系土器が1点と大小15個の河原石が散在し、さらに北壁中間

にずり落ちる状態で河原石が1個検出されている。この床面から出土した河原石は部分的に焼けた痕跡がみられた。埋土は全体的に焼土粒子あるいは焼土塊を含み、特に上面には焼土の堆積が確認されている。

出土遺物は上記した床面からの、珠洲系土器が1点のみである。外面には細く鋭利なタタキ



第73図 SK89出土土器

目が施され、内面にも珠洲焼特有の押圧具痕がみられる。胎土には小石を含み、色調は灰色を呈す。

SK90土壙 SK89と重複しており、本遺構はSK89より新しいものと思われる。

平面形は長軸1.10m・短軸0.60mの楕円形を呈す。深さ35cm。

床面はほぼ平坦。

SK91土壙 SK100と重複しており、本遺構はSK100より古いものと思われる。

平面形は長軸が切られているので、現状では0.80mを測り、短軸は0.20mで東西に伸びる溝状を呈す。深さ15cm。

床面はやや皿状に窪んでいる。

SK92土壙 SD06と重複する。SD06は本遺構が埋まった状態で掘られているので、後者は前者より古いと思われる。

平面形は長軸0.90m・短軸0.80mの不整形円形を呈す。深さ40cm。

床面は良好。

SK93土壙 SD06と重複しており、本遺構は1番古いものと思われる。

平面形は長軸1.00m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK94土壙 SD06と重複している。本遺構はSD06より古いものと思われる。

平面形は長軸1.00m・短軸0.50mの小判形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK95土壙 SD06と重複しており、本遺構上にSD06の埋土が覆いかぶさっていたので、本遺構はSD06より古いものと思われる。

平面形は長軸0.90m・短軸0.60mの小判形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

SK96土壙 SD06と重複しており、本遺構が埋まってからSD06が構築されているため、本遺構はSD06より古いものと思われる。

平面形は長軸1.00m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ40cm。

床面は良好。

SK97土壙 平面形は長軸0.75m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ25cm。

床面は良好。

SK98土壙 SK99・SK100を切っているので本遺構の方が新しい。

平面形は長軸1.10m・短軸0.80mの楕円形を呈す。深さ約65cm。

床面は堅くしまっている。

SK99土壙 SK98によって東壁を切られているので本遺構の方が古いと思われる。

平面形はSK98によってかなり切られているため、推定ではあるが直径0.50mの正円形を呈するものと思われる。深さ20cm。

床面は良好。

SK100土壙 SK89・SK91・SK98と重複しており、本遺構はSK91より新しく、SK89・SK98より古いものと思われる。

平面形は長軸2.50m・短軸0.70mの不整形を呈す。深さ50cm。

床面は良好。

SK101土壙 平面形は長軸1.40m・短軸1.00mの不整形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK102土壙 SB03の1柱穴と重複しており、埋土上面においてSB03が本遺構より新しいことが確認されている。

平面形は長軸1.80m・短軸0.50mのひょうたん形を呈している。おそらく2土壙が重複しているものと思われるが、新旧関係も不明であり、1土壙として記した。深さ20cm。

床面は東の方が浅く、やや西に傾いている。堅くしまっており良好。

SK103土壙 平面形は長軸1.20m・短軸0.50mの楕円形を呈す。深さ40cm。

床面は平坦。

SK104土壙 SD06と重複しているが、本遺構が埋まってしまってからSD06が構築されているため、本遺構はSD06より古いものと思われる。

平面形は長軸0.90m・短軸0.85mの不整形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。

SK105土壙 平面形は長軸1.00m・短軸0.80mの不整形を呈す。深さ20cm。

床面は良好。

SK106土壙 平面形は長軸0.90m・短軸0.65mの楕円形を呈す。深さ15cm。

床面は良好。

SK107土壙 平面形は長軸0.90m・短軸0.70mの楕円形を呈す。深さ10cm。

床面は良好。

SK108土壙 平面形は直径0.70mの不整形を呈す。深さ25cm。

床面は良好。

SK109土壙 平面形は直径1.50mの不整形を呈す。深さ15cm。

床面は皿状に緩く窪んでいる。

SK110土壙 平面形は長軸2.40m・短軸1.00mの不整形を呈す。深さ30cm。

床面は良好。(田口)

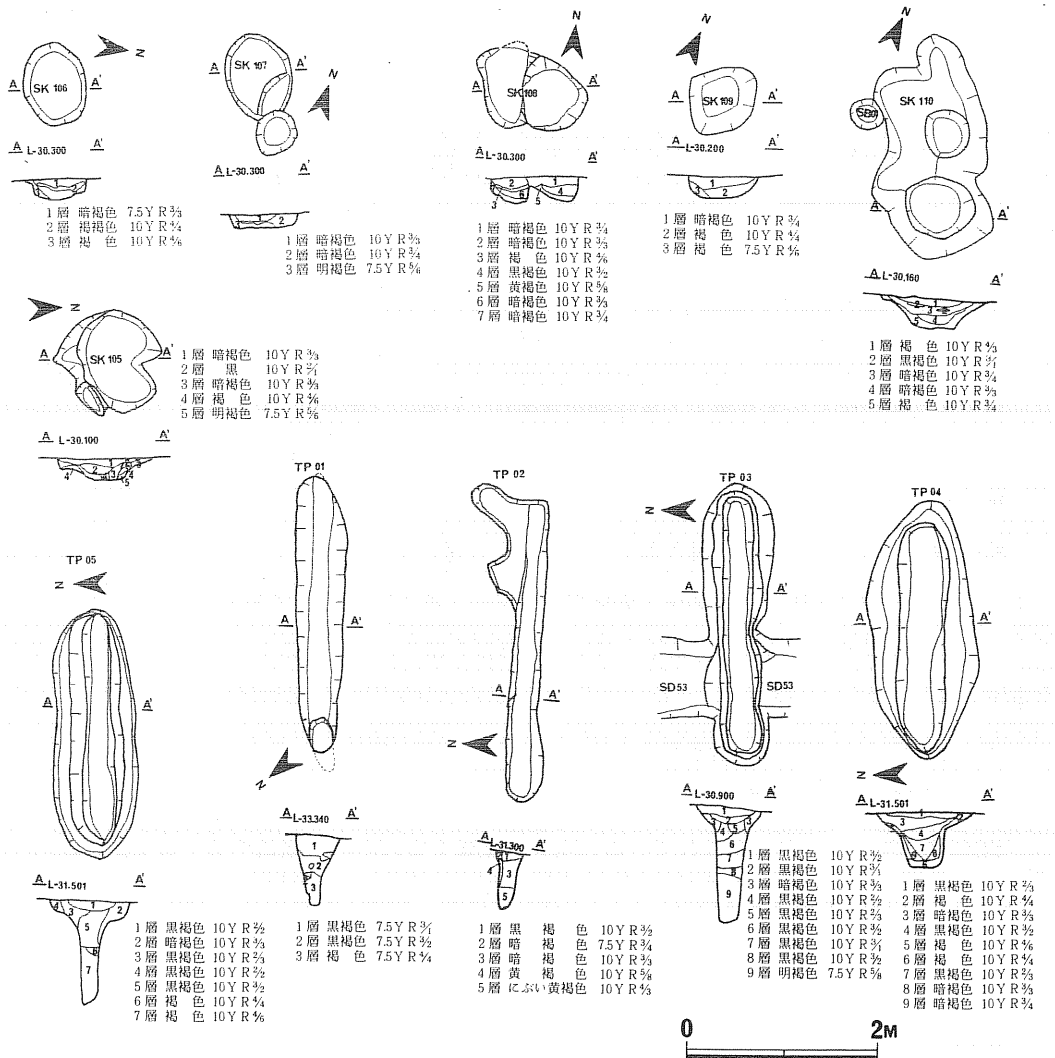
⑤ おとし穴状遺構

TP01おとし穴状遺構 平面形は長さ3.00m・巾0.50m・深さ0.75mの溝状を呈し、長軸方向はN-50°-W。

壁は約75°の傾斜で70cmほど立ち上がる。

底面は平坦。

TP02おとし穴状遺構 平面形は長さ3.20m・巾0.30m・深さ0.60mの溝状を呈す。長軸方向は東西に一致する。



第74図 SK 105 ~ 110・TP 01 ~ 05 実測図

壁は約80°～85°の傾斜で60cmほど立ち上がる。

底面は平坦。

埋土上層は焼土・炭化物を含んでいる。

TP03おとし穴状遺構 SD53によって切られている。平面形は長さ3.00m・巾0.50m・深さ1.20mの溝状を呈し、長軸方向は東西に一致する。

壁の上部20cmほどは約50°の傾斜で開いているが、その下は垂直に下る形を呈す。

底面はほぼ平坦。

埋土は中間層が堅くしまり焼土を多量に含んでいる。

TP04おとし穴状遺構 平面形は長さ2.80m・巾1.10m・深さ0.60mの溝状を呈し、長軸方向は東西に一致する。

壁の上部25cmほどは約30°の傾斜で開いているが、その下は垂直に下っている。

底面は平坦。

埋土は上層が堅くしまり焼土・炭化物をわずかに含む。

TP05おとし穴状遺構 平面形は長さ2.70m・巾0.80m・深さ1.10mの溝状を呈し、長軸方向は東西に一致する。

壁の上部20cmは約70°の傾斜で、その下はほぼ垂直に下る形を呈す。

底面はやや北へ傾く。

埋土は土層が堅くしまり焼土・炭化物が含まれている。(田口)

⑥ 溝

SD01溝 平面プランが、正確な隅丸方形を呈する環状溝である。プラン内に掘立柱建物遺構を有する。溝巾は上面で72～96cm・底面で50～80cm・深さ27～32cmである。

本遺構は遺跡内でも高地に存在し、SI04・SD02と切り合っているが、いずれもSD01に先行している。

埋土上層から、土師器・須恵器の小破片が出土したが、周辺からの流れ込みであろう。

断面の形状はU字形を呈する。

SD02溝 半リング状に掘られている。SK13と重複する。SD01と東端で切り合うが、両溝底は比高差が25cmありSD01とは関連しない。上面の巾は35～40cm、底面で24～30cm、深さは4～20cmである。

埋土中より須恵器、土師器の小破片を検出。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD03溝 東から西に傾斜する長さ18.4mの溝で、巾52～70cm・底面40～52cmを測る。西端部

の底面は、さらに深さ40~50cmの土壇状のクボミがあり、このクボミは数珠状に連なっている。

断面の形状はU字形を呈する。

SD04溝 東から西方向へ傾斜する小溝である。巾は中央部上面で28cm・底面で15cm・深さ6cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD05溝 溝内にSB01の柱穴と一部切り合っているが、本遺構が古い。溝の巾は上面で20~32cm、底面で10~17cm、深さ10~12cmである。

断面の形状は逆台形であり、東から西へ傾斜する。

底面から土錘が出土している。

SD06溝 SB03及びそれに近隣する柱穴群、土壇群を取り囲むように廻ぐる環状溝である。

SD06は東部で細く浅いが西部では巾広くなり、さらに一段深くなる。

溝の巾は上面で0.19~1.20m・底面で0.08~1.10m・深さ10~25cm。

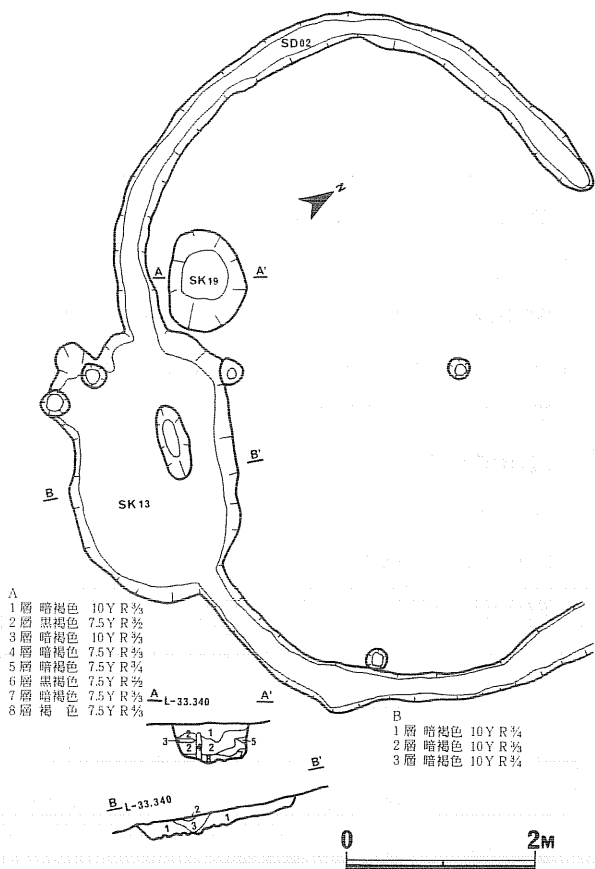
埋土は炭化物を少量混入する。しまり気味の暗褐色土であるが、深溝の場合NP001・NQ001部分で、長さ2.40mにわたり焼土炭化物が多量に混入。部分的には炭化した木材片が含まれていた。この溝は深い部分と巾の広い部分とは時期を異にするようである。

断面形状は深い部分がU字形をなし、他は鍋底形を呈する。

SD07溝 SB04・SB21と重複しSD07が古い。溝は深さ6~30cm・巾は上面で20~33cm・底面で8~22cm。北から南へ傾斜し、南方向に行くにつれて深くなる。埋土は自然堆積の黒褐色土で炭・焼土が上面に含有する。下面には少なく、重複する柱穴埋土には多量に炭化物を含有する。このことは、一帯の建物が焼失したとするなら、その焼失以前に溝は埋没していたことになる。

出土遺物は播鉢である。内面には10条の沈線を1単位とするおろし目を施す。胎土には小石をわずかに含み、焼成はあまり良くない。

SD08溝 本溝は、SD07及びSD13と接続している。巾が上面で20~48cm、底面で10~32cm、深



第75図 SD02・SK13・19実測図

さ10～40cmである。北から南に傾斜し、それにつれ深土、幅とも大になる。

埋土はしまり気味の暗褐色土の自然堆積であり、SD07同様上面に炭化物を含むが、下面になると微量になる。埋土上面から柱穴プランが確認され、柱穴埋土は炭化物を多量に含んでいるから、溝は柱穴に先行するものと思われる。

遺物は埋土中より内面に直径3cmのクボミ状あて痕を有する珠洲系土器の甕胴部片及び播鉢の体部片が出土。

SD09溝 SE02からSE04にかけて検出された溝である。溝の中は上面で18～31cm、底面で7～10cm・深さ9～20cmであり、南方向に傾斜しながら深さを増す。

断面の形状はU字形を呈する。

SD10溝 SE04周辺にのびる長さ12mの溝である。巾は上面で20～30cm・底面で11～20cm・深さ5～10cmである。東から西へ傾斜する。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD11溝 SE04からSE03を経由して、SD13に流れ込む。溝はSE02外側の南部分で一部が褐色土の中を貫通していた。この褐色土は井戸周辺を縁どりするようにわずかながら高くなっているもので、黒色粒が混入するしまりのないものである。このことからSD11が埋没した時点でSE03が掘られ、その掘り上げた土を周辺に積み上げたものと考えられる。溝は西方向に傾斜しており、巾は上面で15～30cm・底面で6～20cm・深さ13～25cmで壁面、底面共荒れは少なかった。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD12溝 SD17と合流し、同時期のものだろう。巾は中央部で上面が38cm・底面で30cm・深さ15～42cmと南側が深くなっている。

断面の形状はU字形を呈する。

SD13溝 溝の中は上面で19～40cm・底面で6～24cm・深さ20～40cmである。

北から南方向に傾斜する。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD14溝 調査区西端から始まり、SD17と合流する。溝の中は上面で21～39cm・底面で8～20cm・深さ16～40cmだが、西部の方が広く深い。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD15溝 北から南方向へ傾斜し、SD18と交わる溝である。溝の中は上面で30～48cm・底面で26～38cm、南へ行くにつれわずかに細くなり深さ6～30cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD16溝 東から北西へ緩やかに傾斜し、他の溝群と合流する。巾は上面で25～40cm・底面で20～32cm・深さ13～18cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD17溝 SE04から調査区南端までのびる。調査区域では最も長く掘り方もしっかりしている。SE04の水を排水する性格がうかがえる。溝は巾が上面で20～50cm・底面まで10～19cm・深さ20～45cmで南方向へ傾斜している。

断面の形状はU字形を呈する。

出土遺物はSD17・13・14・16が合流する地点の、埋土3層から青磁片一片、南部NI03地点の溝内埋土3層より須恵器破片一片出土している。

SD18溝 北西から南へ傾斜する溝である。巾は上面で30～42cm・底面で15～25cm・深さ20～50cmである。深さは南端に行くほど増し、かつ傾斜が大になる。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD19溝 西から東方向に傾斜をもつ小溝である。西端部は調査区外で明らかにできない。幅は上面で28～40cm、底面で20～26cm、深さ4～12cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD20溝 北から南へ緩やかに傾斜する長さ7.40mの溝である。巾は上面で23～40cm・底面で18～19cm・深さ4～10cmと浅い。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD21溝 SB01南面側柱列に沿うようにのびている溝であるが、建物との関連はうかがえない。溝の巾は上面で12～19cm・底面で5～9cm・深さはほぼ一定して6cmであり、細くて浅い溝であり、傾斜は認められない。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD22溝 SD26と交差し南方向へ傾斜をもつ長さ5.60mの溝である。巾は上面で41～70cm・底面で30～45cm・深さ15～28cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD23溝 建物群に隣接する長さの短い溝であるが建物との関連性は明らかでない。平面の形は長楕円形で中央部の巾が上面で48cm・底面で30cm・深さは全体を通じ18～27cmである。底面の傾斜はほとんどない。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD24・25溝 両端ともSD33と接続すると思われ、さらに北端の台地縁に沿って東進するようである。

巾はSD25が広く上面で42～90cm・底面で30～60cm・SD24は上面巾が41～50cm・底面で24～30cmである。埋土はほぼ同一で16～39cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD26溝 東から西へ傾斜しながらSD15と一部合流する長さ6.80mの溝である。上面巾は21～30cm・底面で15～28cm・深さ15～30cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD27溝 南西に向い緩やかに傾斜する長さ6mの溝である。巾は上面で15～22cm・平均43cm底面で10～14cm・深さ4～10cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD28溝 北から南へ傾斜をとる長さ8.20mの溝である。巾は上面で20～36cm・底部で11～30cmで一定したものでなく、深さ4～6cmと浅い。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD29溝 不整ながらリング状を呈する。上面巾34～40cm・底面で25～30cm・深さ25～40cmと巾・深さとも、比較的一定している。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD30溝 東西にのびる長さ3.60mの小溝である。巾は上面で18～22cm・底面で10～12cm・深さ8cmである。底面の傾斜はほとんどない。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD31溝 長さ4.40mの溝である。SB01との関連性は明らかでない。巾は上面で29～31cm・底面で19～28cm・深さ9～12cmであり南へ緩やかに傾斜している。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD32溝 長さ2.40m方形気味の小溝である。巾は中央部で、上面が30cm・底面で16cm・深さ15～20cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD33・34溝 遺跡内を南北にほぼ等間隔で(2～3.20m)走る。北部の方はそれぞれSD24・58に接続すると思われる。

両溝とも巾・深さ共ほぼ近値で、巾は上面で23～40cm・底面で8～23cm。

断面の形状は鍋底形を呈する。

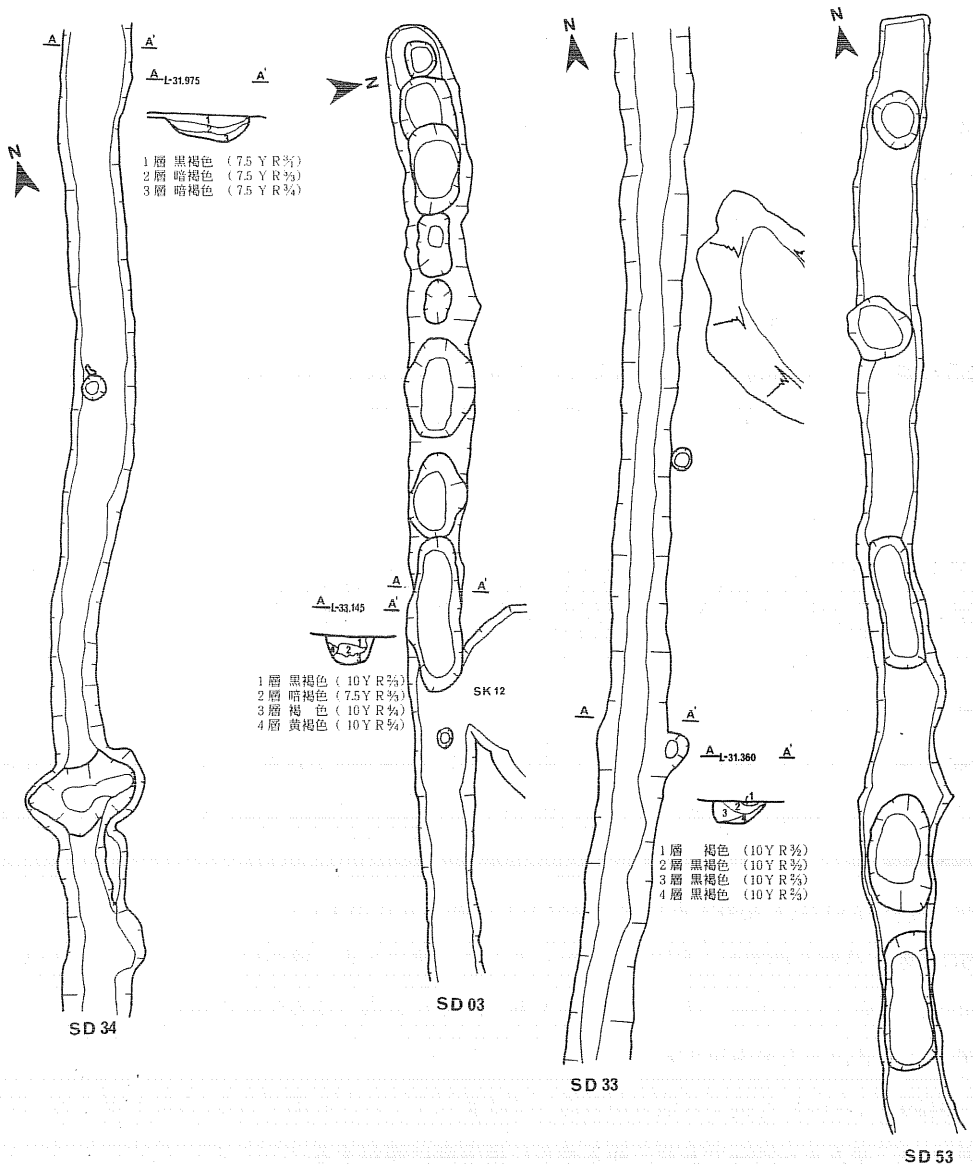
溝に沿って柱穴が認められる。この柱穴は上面の直径が14～18cm・深さ15～27cmで柱底跡はどれもみられない。

溝内からは、須恵器破片のほか、珠洲系土器(播鉢)破片・土錘が出土している。

断面の形状は両溝共、鍋底形を呈する。

SD35溝 SB25の北西・東面を廻るよう掘られている。溝の巾は上面で10～20cm・底面で6～10cm・深さ10～16cmと比較的細く浅い。

断面の形状は鍋底形である。



第76図 SD 03・34・33・53実測図



SD36溝 SB09の3面をめぐるが、東側で重複している。

溝の中は、上面で17~18cm、底面で10~13cm、深さ14~27cmで北面部分はほとんど傾斜をもたないが、他は南へゆるやかに傾斜している。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD37溝 溝の南端はSE06に近接するが井戸との関連性はうかがえない。西端ではSD33と合

流するようにみえるが、接点部分の深さはここだけ浅くSD37・SD33の両底面よりも約15cm高くなっている。

溝の中は上面で14～38cm、底面で8～29cm、深さ3～5cm。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD38溝 SD39・SD41と交差している。

溝の中は上面で20～40cm、底面で10～28cm、深さ4～16cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD39溝 SD38に接続し、西へゆるやかに傾斜する。長さ7mの溝であるが、時期的にはSD38に先行する。中は上面で16～41cm、底面で5～30cm、西に向かうにつれ細くなり、深さは5～9cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD40溝 SD53から枝分れし、SD38に流れ込む様相を示している。長さ10mの溝である。溝は南面に回ってゆるやかに傾斜しており、中は上面で20～38cm・底面で10～21cm・深さ8～15cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD41溝 SD53から枝分かれし、その過程でSD38と交差しSD52、SD51と接続する。中は上面で28～80cm、底面で8～60cmであり、西方向に行くほど巾広になる。深さ8～19cm。東から西へ傾斜する。

出土遺物はSD52と交差する付近で須恵器の胴部破片が出土した。

SD42溝 遺跡北部端からSE08に向かったのびる溝である。溝の中は、上面で23～40cm、平均45cm、底面で12～25cm、深さ8～15cmであり、北から南へゆるやかに傾斜する。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD43溝 SE08に近接する地点から南へほぼまっすぐのびる溝である。中は上面で20～50cm、平均72cm、深さ8～22cmであり、ゆるやかに南方向に傾斜する。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD44溝 SE08の周囲を半円状にめぐる溝である。中は上面で19～30cm、底面で8～12cm、深さ13～15cmである。

東から西へゆるやかに傾斜する。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD45溝 北から南に傾斜する溝である。中は不規則だが上面で12～30cm・底面で10～28cm・深さ7～12cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD46溝 東北方向に長さ4.20mを測る溝だが、傾斜はうかがえない。巾は上面で30～35cm・底面で15～20cm・深さ10～15cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD47溝 SD01と同様、平面プランが隅丸方形を呈し、内部に掘立柱建物遺構を有する環状溝であるが、北面の一部分は掘られてなく中断している。

遺構は、北からの極めてゆるやかな斜面に位置している。環状溝の全体プランはほぼ隅丸方形を呈する。溝の中は上面で24～40cm、底面で10～30cm・深さ27～90cmである。溝中には部分的に深さ20～30cmの小土壌が認められる。

本溝はSB22の柱穴と切り合うが、本遺構が古い。

遺物は埋土から青磁破片1片が出土している。

断面の形状はU字状を呈する。

SD48溝 SD01・SD47と同様プラン内に掘立柱建物跡を有する隅丸方形の環状溝である。溝の中は上面で13～22cm・底面で8～14cm・深さ7～27cmであり、巾、深さとも西側部分がせまく浅い傾向を示す。

遺構は、わずかに東南に傾斜する高地に位置する。

断面の形状は鍋底状を呈する。

SD49溝 SD43と枝分かれした様相を呈する溝であり、SD43とほぼ同時期に使用されている。巾は上面で13～32cm・底面で8～20cm・深さ10～17cmである。北から南東に向かって傾斜する。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD50溝 SD43から枝分かれし、南面に傾斜する長さ4.20mの小溝であり、両溝とも同時期に使用されていると考えられる。上面の巾は最大部で78cm・底面で68cm・深さ13～22cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD51溝 SD41と交差する溝であるが両者の時期的相違は不明。巾は上面で30～45cm底面で10～30cm・深さ10～20cmで、南に行く程深くなる。北から南に傾斜する。

溝内には径20～35cm・溝底面からの深さ10～20cmの柱穴が認められる。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD52溝 SD41から枝分かれし、南方向へ傾斜する溝である。SD41との時期的相違は明らかでない。巾は上面で30～41cm・底面で21～30cm・深さ18～22cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD53溝 遺跡内を南北方向にのびる長さ64mの長溝である。巾は南北端で細く中央部で広くなり、上面で20～41cm・底面で10～30cm・深さ20～30cmである。

断面の形状は鍋底形を呈する。

溝の底面には土壌状のくぼみを有する。

TP03と重複するが、本遺構が新しい。

SD54溝 SD48環状溝から張り出すように掘られた小溝だが、SD48とは直接関連性はない。

巾は上面で50cm・底面で40cm・深さ15cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD55溝 長さ2.60mの短い溝で中央部の巾は上面で41cm・底面で28cm・深さ25cm。

断面の形状は逆台形を呈する。

溝底面より須恵器甕・胴部破片出土。

SD56溝 南から北へゆるやかに傾斜する長さ1.50mの小溝である。巾は上面で10～25cm・底面で8～12cm・深さ5～15cmである。

断面の形状は逆台形を呈する。

SD57溝 SB24に隣接し、長さ1.90mの小溝である。巾は20～35cm・深さ8～14cmと浅い。

断面の形状は鍋底形を呈する。

SD58溝 南方向へ傾斜をとり、SD34と接続すると思われる。また溝は北進しながらやがて台地の縁に沿って西へ長く延長することを確認した。上面巾は60～95cm・底面で34～50cm・深さ15～44cmである。

断面の形状は鍋底状を呈する。（熊谷）

2 遺構外出土遺物

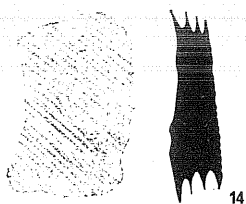
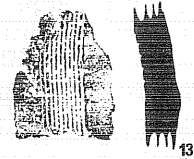
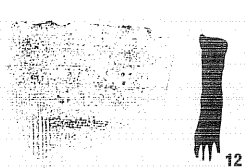
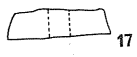
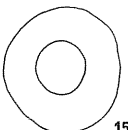
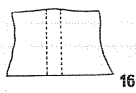
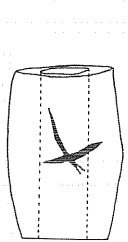
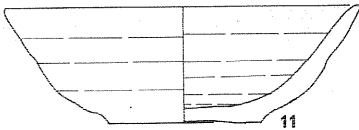
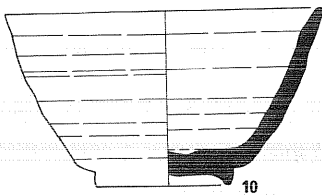
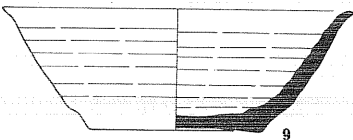
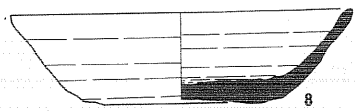
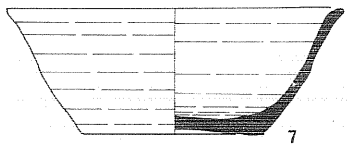
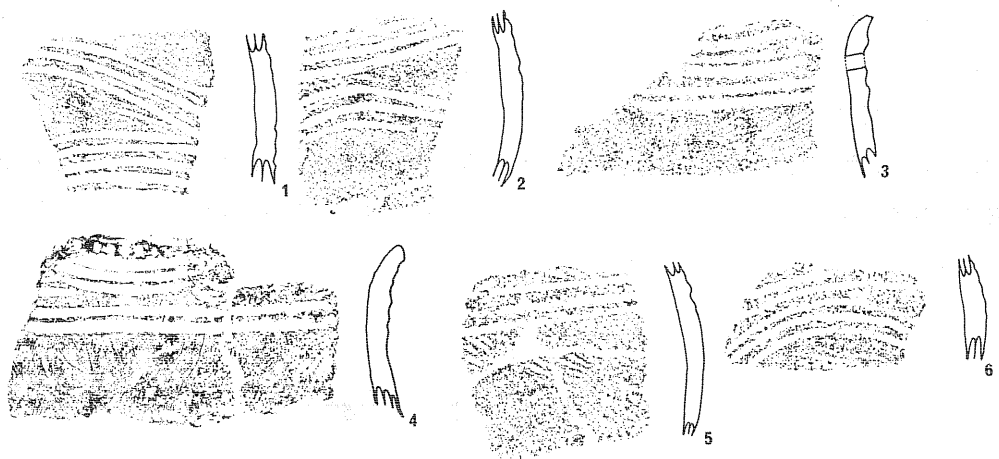
遺構外からの出土遺物は少なかった。主なものを第77図に示した。

1～6は弥生式土器である。壺の破片と考えられる。斜縄文を地文とし、口縁部に沈線文を施す。沈線文には、平行・波状・弧状とあり、これらの組み合わせによる。3の口縁部には小孔が穿たれている。胎土はいずれも砂粒を多量に含み、灰白褐色を呈する。

7～9は須恵器杯であり、10は須恵器高台付碗である。いずれも水挽き成形。回転糸切り・無調整である。法量は、7が底径6.1cm・口径13.4cm・器高5cm、8が底径5.5cm・口径13.5cm・器高3.5cm、9が底径7.2cm・口径13.4cm・器高5cmである。底径の口径比は0.45, 0.41, 0.53である。10は底径5cm・口径12.5cm・器高6.8cmである。

11は土師器杯であり、水挽き成形・回転糸切り・無調整である。褐色を呈する。法量は、底径6.8cm・口径13.7cm・器高4.8cmで、底径の口径比は0.50である。

12～14は珠洲系土器で、12と13が播鉢、14が甕の破片である。12と13の内面には、9から10条を1単位するおろし目が認められる。14の外面には条線状の叩き痕、内面には円礫状の押圧具



第77圖 遺構外出土遺物



痕と思われるクボミが認められる。

15は土錘であり、長さ 6.8cm・胴部最大径 4.5cm・内孔径 1.9cm・重量 132gを計る。表面に「×」の刻印が認められる。

16・17は紡錘車である。16は径 3.6～4.2cm・高さ 2.5cm・内孔径 0.6cmを計る。1面に放射状の刻印が認められる。17は径 3.3～4.0cm・高さ 0.9cm・内孔径 0.9cmを計る。1面は巾 0.5～0.7cmにくぼんでいる。(熊谷)

V ま と め

1 遺構について

竪穴住居跡 検出された9棟の竪穴住居跡は、いずれも調査区の東側に集中している。

SI01は、円形プランを呈し、石組炉を持つ。

SI02～SI09は、方形プランを呈し、カマドを付設する。カマドは、東壁か南壁かのどちらかにとり付けられる。煙道は比較的長い。主柱穴が認められる住居跡は、SI03・04・06である。

SI04と08・03と09は、それぞれ重複している。

掘立柱建物跡 検出された25棟の掘立柱建物跡は、下記のように分類できる。

A 庇なし建物

(1) 側柱建物 SB02・03・05・07・09・13・17・19・20・23・23・24・25

(2) 総柱建物 SB04・11・18・21

B 庇あり建物

(1) 1面庇建物 SB06

(2) 4面庇建物 SB01・08・10・12・14・15・16・22

以上、A-1・A-2・B-1・B-2の4類に分けたが、A-1類のSB03・07・23・24は、建物の周囲に溝が廻るようである。

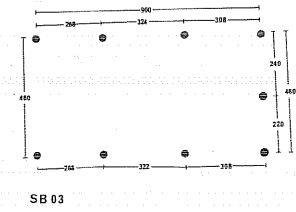
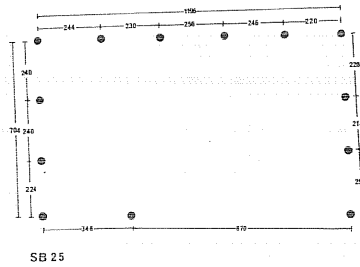
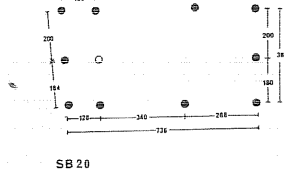
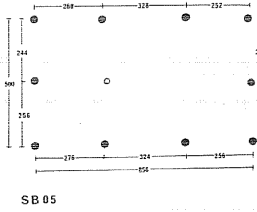
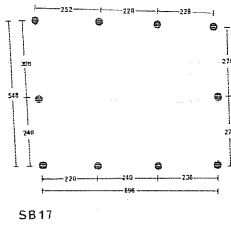
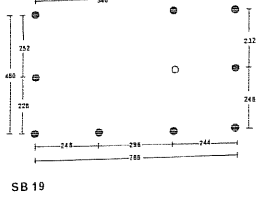
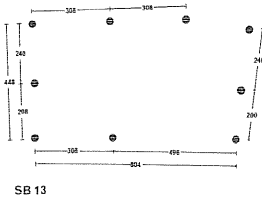
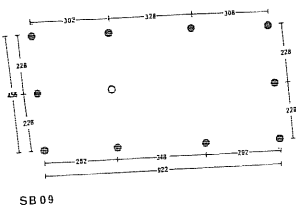
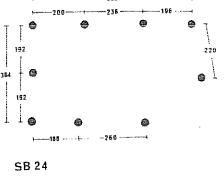
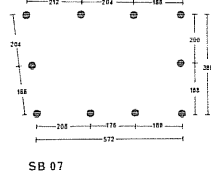
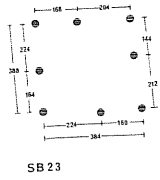
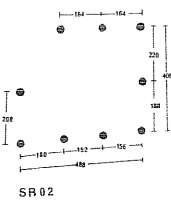
4面庇建物は、近世民家の四方下屋造り(註8)の先駆をなすものと考えられる。だとすれば、庇=下屋ということになるが、ここでは「庇」という用語を使用した。

建物は、東西棟が大部分であるが、SB06・17・18のように方向を異にする建物もある。

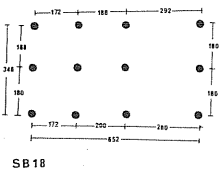
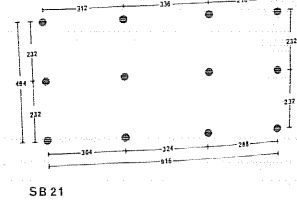
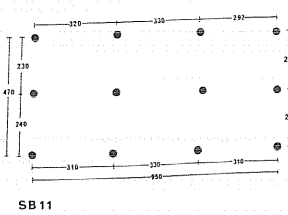
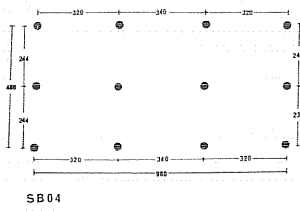
柱穴・柱痕跡とも円形を呈する建物が多いが、SB06・18の柱穴は方形に近い。したがって、SB06・17・18は、他の建物と時期を異にすると考えられる。

B-2類の4面庇建物は、第80図にみられるごとく、それぞれの建物と井戸1基との対応関係

A-1類



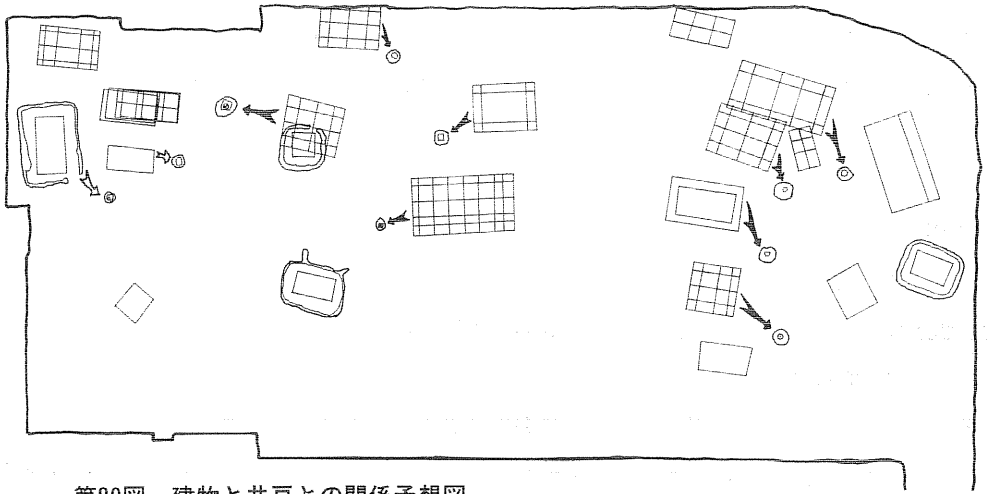
A-2類



第78図 掘立柱建物跡模式図(1)

単位：cm

が想定される。1棟1井戸という想定が正しいとすれば、4面庇建物は、当然のことながら居住性の強い建物であり、井戸を持たないA-1類・A-2類の建物は、居住性の弱い建物（たとえば、倉庫とか小屋）ということになる。A-1類・A-2類建物の場合、その性格づけは困難であるが、中田面遺跡の場合、井戸との関係で、上記のように建物の性格を想定しておきたい。



第80図 建物と井戸との関係予想図

なお、SB03・07・23・24のように溝を伴う建物の性格は不明であるが、床面が堅く締まっていたことから、使用度の高い建物であったと考えられる。

井戸 検出された10基の井戸は、調査区の東側に4基、西側に6基とグルーピングされる。前述のように、井戸と建物は1棟1井戸の対応関係が想定されるが、井戸は建物の東南か、西南に位置する。

井戸の掘り方は、第26表のごとくに4分類される。内部施設としての井側は、SE01が示すように、隅柱を立て、これに枘穴を穿ち、横棧をわたす。横棧の外側に板材を縦に列べ、土圧で動かないようにする。なお、板材の材質は杉（註9）である。井筒は遺存しない。SE02・06・07・09・10も同様の井側構造と考えられ、隅柱を立てた痕跡が認められる。SE03・SE04・05・08の内部構造は不明である。

外部構造としての井桁の遺存する例はないが、柱穴状ピットが井戸周囲に存在する。

土壌 検出された110基の土壌は、3類に分類できる。1類は、SK01のように平面形が楕円形を呈し、底面は鍋底状をなす。2類は、SK25のように平面形が円形を呈し、やや深い。3類は、SK02のように平面形が方形を呈し、やや大型である。

分類	特徴	SE	長径×短径	深さ	井側
1	ほぼ垂直に掘り込まれる。	03	200 × 148	142	×
		10	180 × 150	170	○
2	すり鉢状の掘り方から、垂直な掘り方になる。	04	240 × 220	150	×
3	すり鉢状に掘り込まれる。	06	284 × 248	240	○
		05	300 × 300	230	×
4	中程に段を形成する。	02	388 × 310	326	○
		07	254 × 246	270	○
		08	220 × 220	156	×
		01	244 × 240	238	○
		09	220 × 220	262	○

・cm。深さは地山上面から。

第26表 井戸分類表

いずれも用途は不明である。1類は東側に分布し、2・3類は全域に分布する。この分布状態と出土遺物から考えて、1類は竪穴住居跡と、2・3類は掘立柱建物と関連するものであろう。

溝 検出された58条の溝のうち、SD33・34溝が目目される。この2条の溝は、遺構を二分するかのように南北に走る。さらに、SD33はSD23・24に接続し、東側の遺構を取り囲むように廻るようである。SD34もまたSD58に接続し、西側の遺構を取り囲むように廻るようである。この溝が台地の縁に沿って廻ることは、ブルドーザーの表土除去作業の結果確認された。この2条の溝の両側には、柱穴状ピットが認められる。溝と桓根風のもので集落を取り囲んだのだろうか。

2 遺物について

石器 石匙、石斧、石錘が数点出土した。

弥生式土器 壺破片10点ほど出土した。頸部に並行沈線文が施文される。志藤沢式土器第3類（註10）に類似する。

土師器 出土した土師器の器種は、杯（内黒杯を含む）・高台付杯・甕である。出土量は少ない。杯は、粘土紐巻き上げ成形・ロクロ整形（a類）、ロクロ水挽き・回転糸切り・無調整（b類）、黒色処理・内面横方向のへラミガキ・高台付（c類）に分類できる。甕は、頸部に段で内外カキ目・底部木葉痕（a類）、口縁部「く」の字に外反ののち垂直に立ち上がる。胴部上半ロクロ整形・下半へら削り（b類）、内外面に叩き目を有する（c類）に分類できる。

甕a類は、国分寺下層式土器に近い時期と考えられる（註11）。杯b・c類、甕b・c類は、表杉ノ入式土器（註12）の範疇に入るものと考えられる。

須恵器 出土器種は、杯・高台付皿・蓋・壺・甕である。杯の底部切り離し技法は、へら切り、糸切りの2種類、いずれも無調整。皿・杯は、若美町海老沢窯（註13）からの移入品であろう。

中世陶器 すり鉢・甕 壺の破片約40点出土。石川県珠洲古窯の第Ⅱ期（註14）の製品に類似する。しかし、珠洲からの移入品ではないようである。近年、中田面遺跡から13km東南、二ツ井町茂谷山の麓で中世陶器窯（註15）が確認されたが、ここの製品でもないようである。

青磁 碗類の破片約30点出土。宗末～元代の製品と考えられる。（註16）。

鉄器 刀子1点・釘1点出土。

紡錘車 2点出土。

土錘 13点出土。重量が約140g（a類）、約80g（b類）、約6g（c類）となり、3分類できる。a類は、井戸や掘立柱建物の柱穴から出土することから中世に、b類は土壌のなかで土師器・須恵器と共伴することから古代に属するものと考えられる。c類は時期不明。

砥石 4点出土。

3 年代について

竪穴住居跡 SI01は、縄文時代後期以降の遺構であろう。

SI07からは、多賀城編年第6b類（註17）に比定される須恵器杯と国分寺下層式土器に類似する口縁部に段のある土師器甕が出土している。このことから、この住居跡の時期を9世紀前半に想定したい。SI02・03・04・06からは、多賀城編年第9b類に比定される須恵器杯のほか、表杉ノ入式土器に比定される土師器杯・甕が出土している。このことから、これら住居跡は、9世紀後半から10世紀を中心とする時期が想定される。SI04と08・SI03と09は重複している。土器組成・重複関係から、SI02～09は、9・10世紀を中心に何時期かに分けられそうである。

掘立柱建物跡・井戸 建物と井戸とは対応関係を示すことが想定されるので、同時期と考えられる。SE01・02・07・08からは、珠洲古窯第Ⅱ期類の中世陶器が出土している。またSB04から同様の土器が出土している。このことから、建物と井戸は、13世紀中葉を中心とする時期が想定される。なお、SB06・17・18の3棟は、柱穴掘り方・建物方向から、ほかの建物より古いと考えられる。

溝 溝については出土遺物がほとんどなく、時期決定は困難である。SD03は古代の土壇SK12を切っている。SD48からは青磁が出土している。古代の遺跡のない西側の溝と同様の溝が東側にもある。以上のことから考えて、溝の大部分は中世に属するものと考えられる。

土壇 出土遺物から、楕円形の浅い土壇は古代に、円形のやや深い土壇と方形のやや大型の土壇は、中世に属すると考えられる。

4 中世集落について

中田面遺跡は、縄文時代から人々によって使用されていたが、主に古代と中世の人々の生活の場であった。

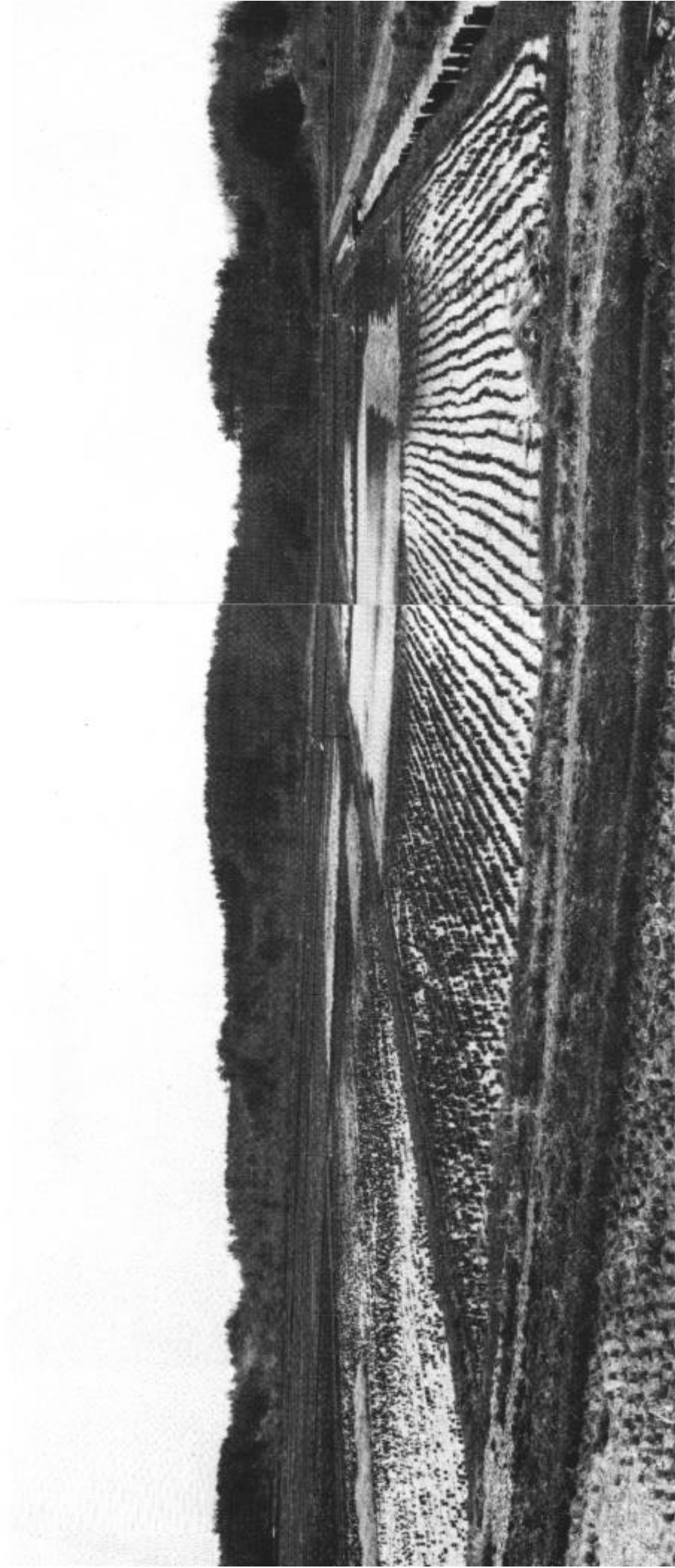
竪穴住居→1面庇建物→4面庇建物と変遷したと考えられるが、9世紀から13世紀まで跡絶えることなく、ある集団の生活の場となっていたかどうかの結論は、現段階では保留しておきたい。

本遺跡における中世集落の特徴は、①4面庇建物と井戸との関係、②これらの建物と井戸が西と東にグルーピングされることである。

4面庇建物については、13世紀における当地方の一般農民の住民とは考えられず、上層階級（土豪層）の住居であろう。類似する中世建物例は、手元の資料で、大館市片山館コ（註18）・秋田市下夕野（註19）・盛岡市繫Ⅲ（註20）・北上市鹿島館遺跡（註21）で検出されている。



図版1 航空写真



図版 2 遺跡遠景 (北▲南)



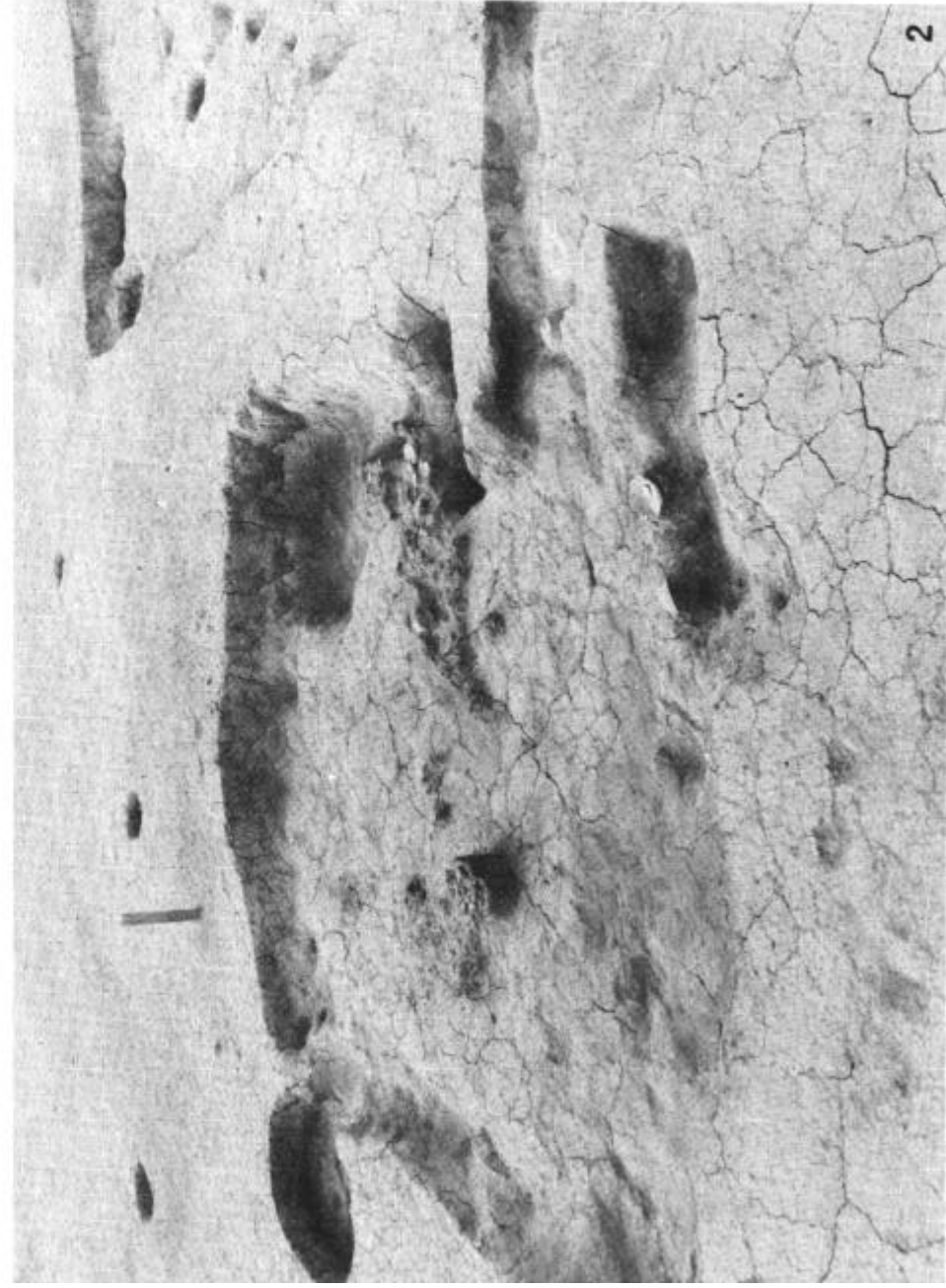
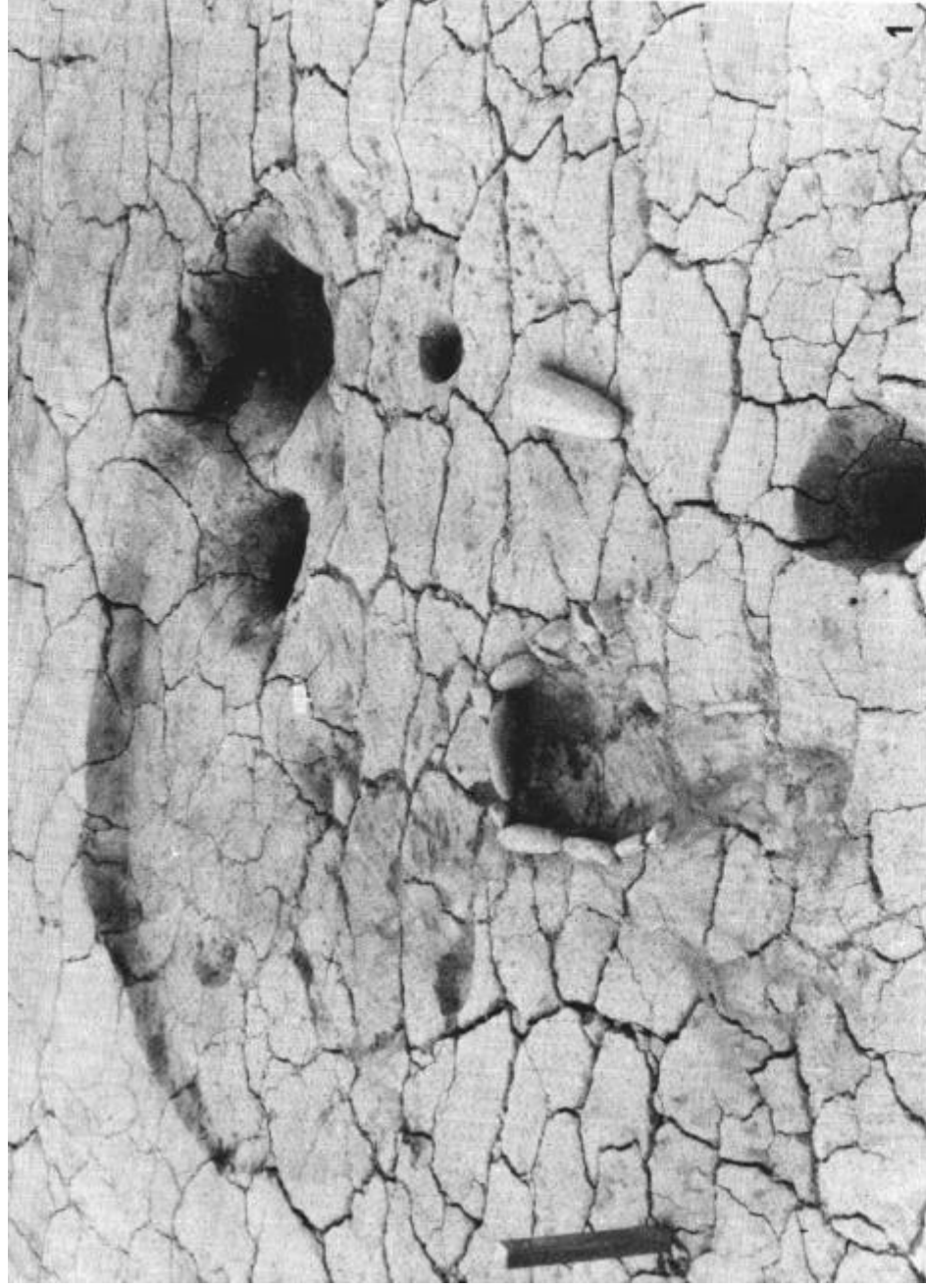
図版 3 1. I区発掘調査前（西▶東）
2. II区発掘調査前（北▶南）



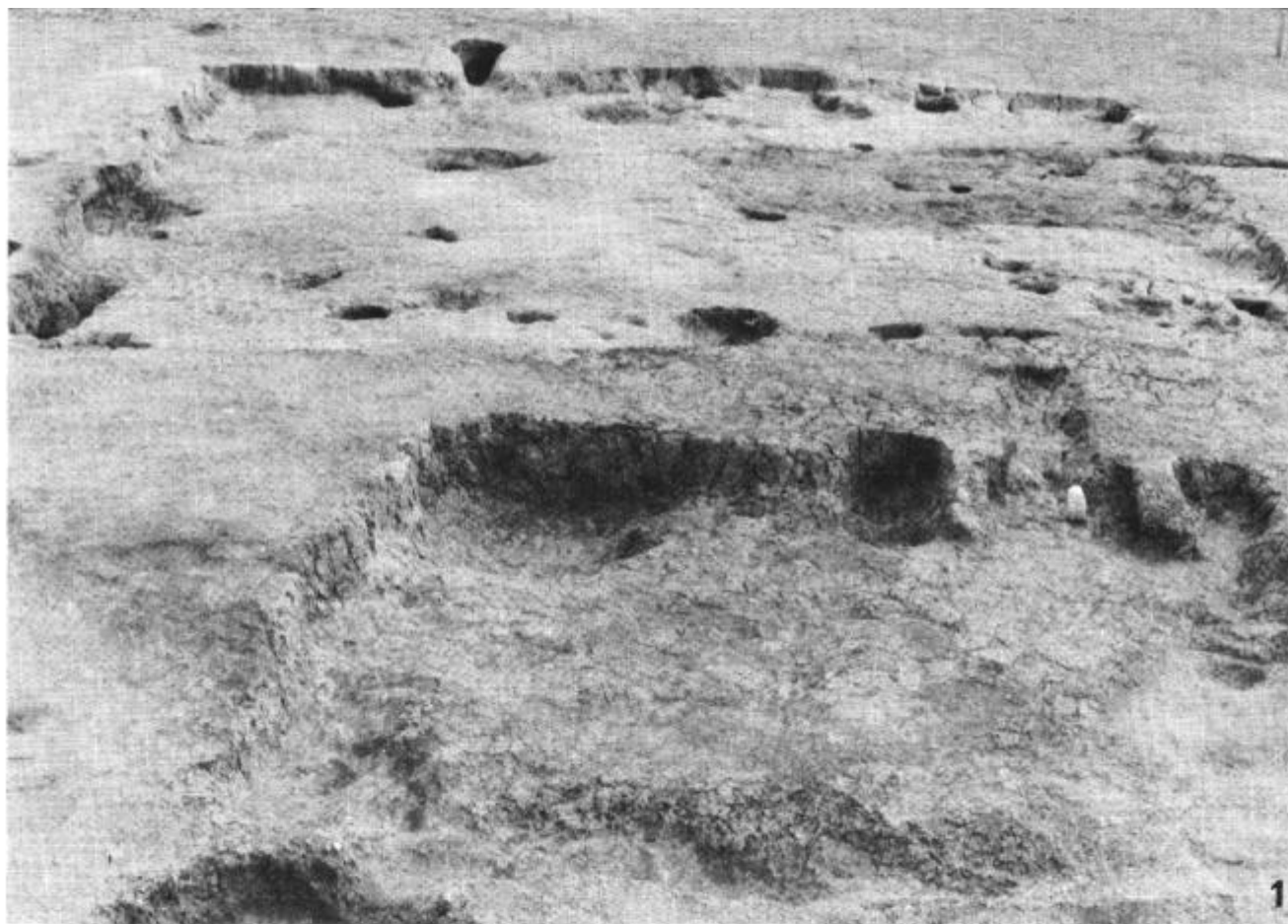
図版 4 1. I区調査風景 (北▶南)
2. II区調査風景 (北▶南)



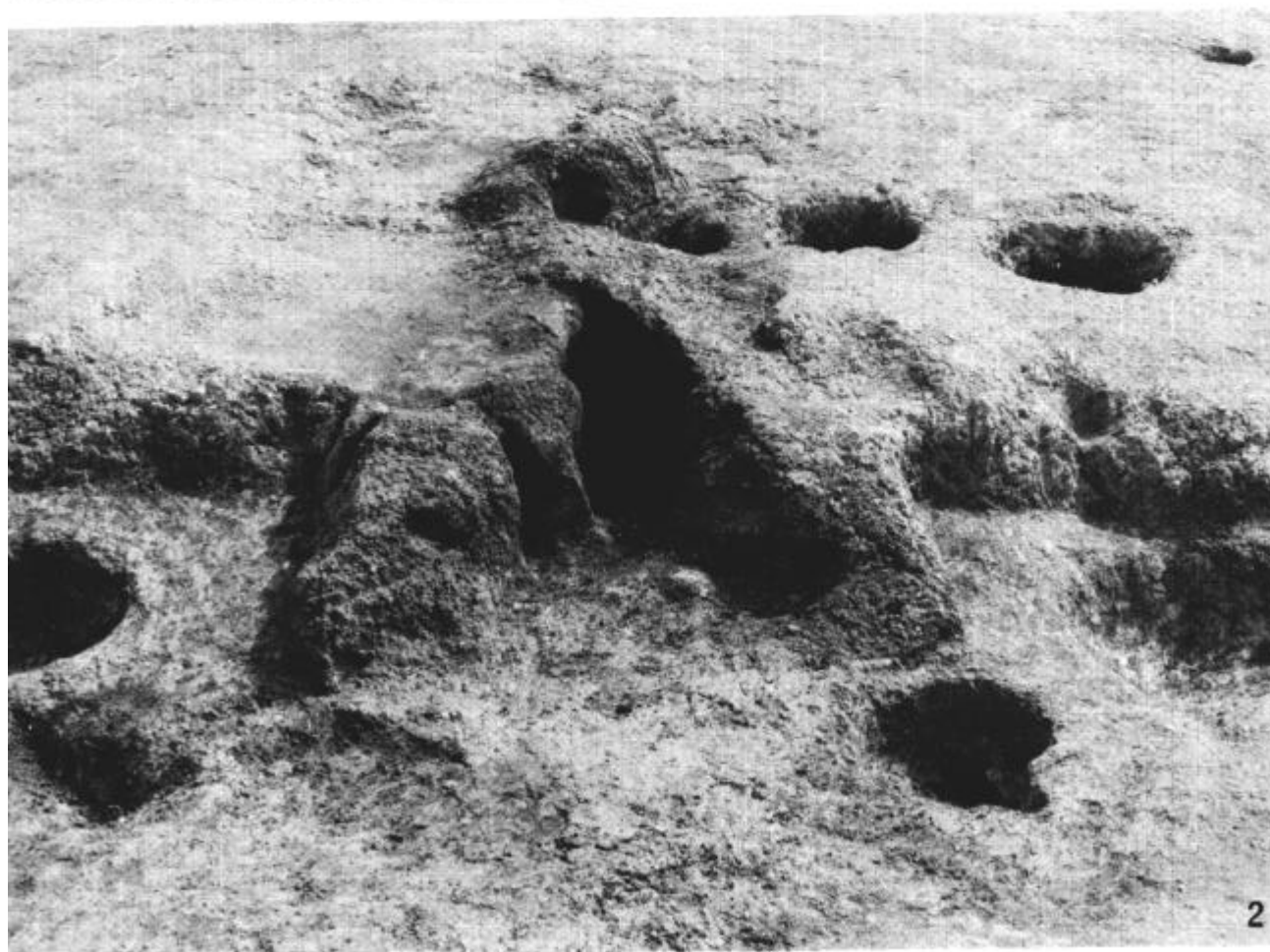
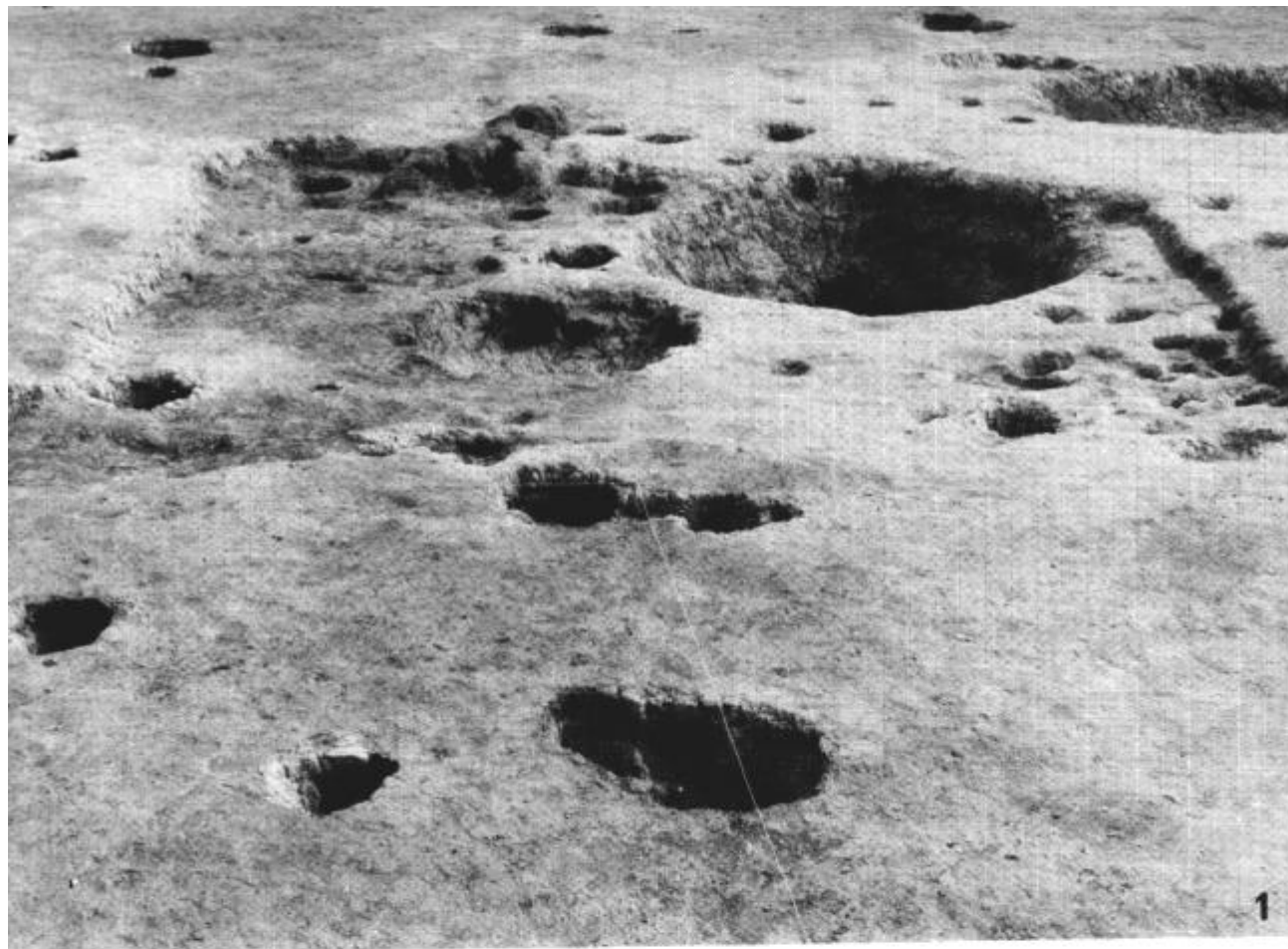
図版 5 発掘調査区 (西▶東)



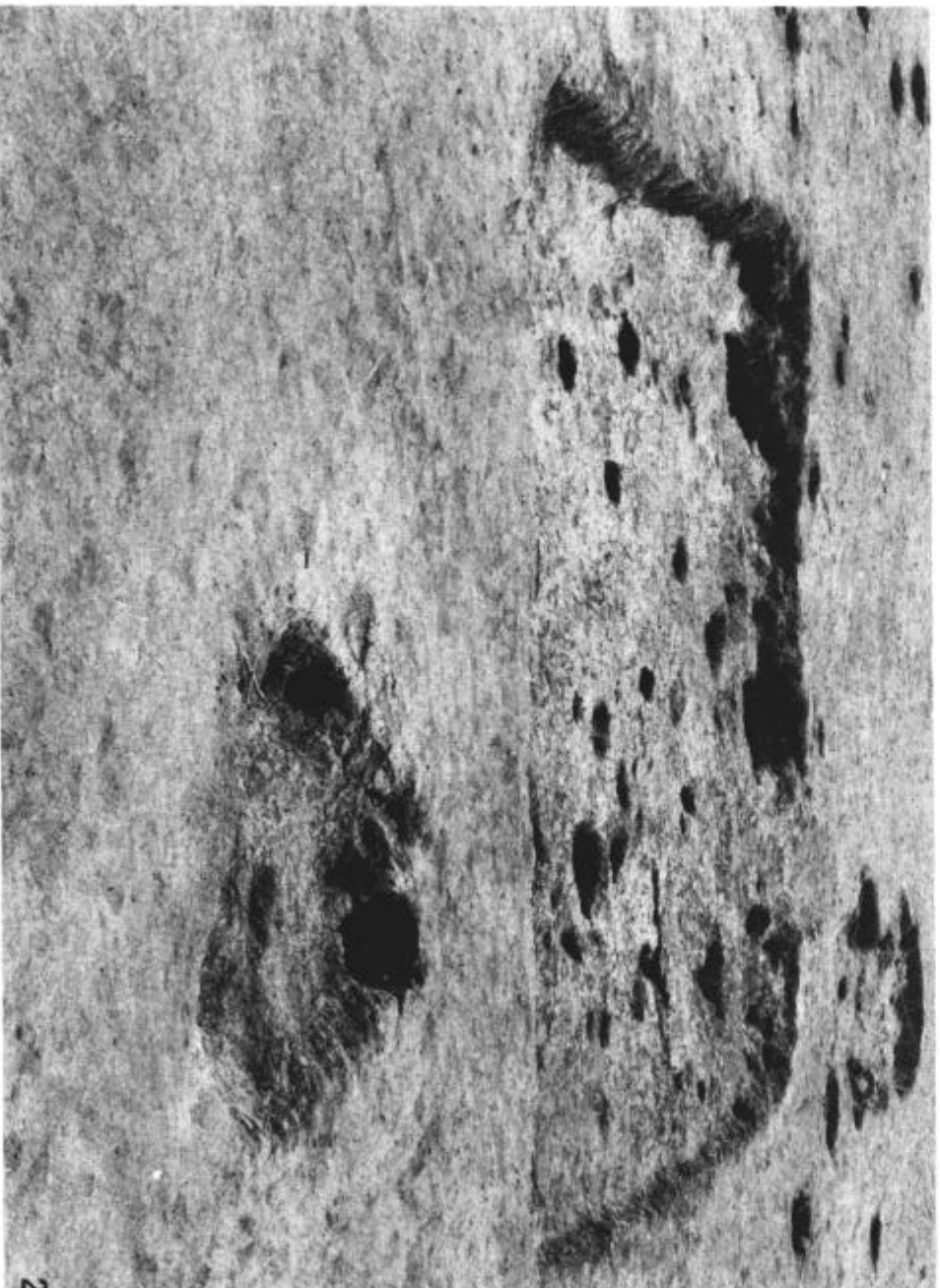
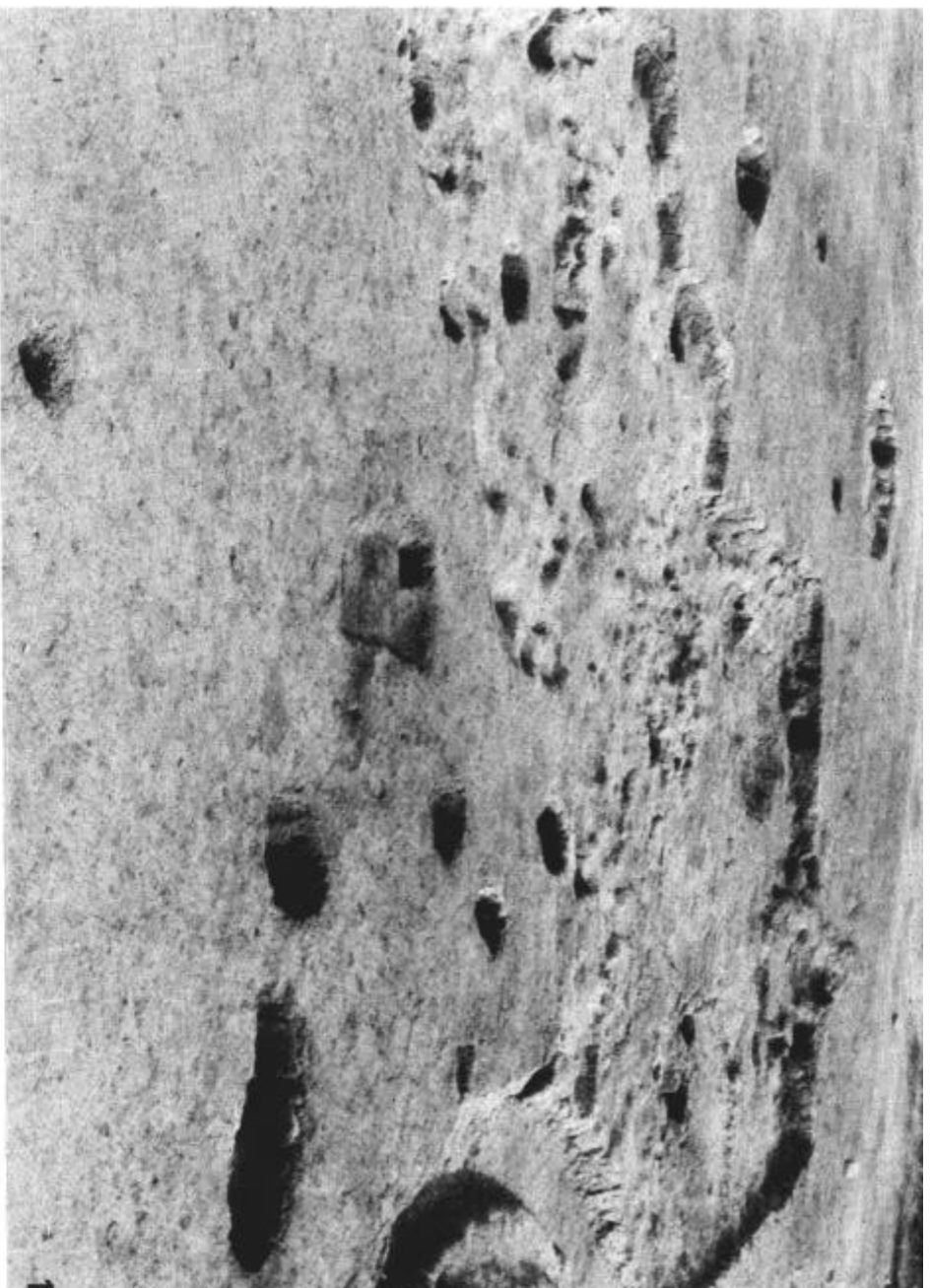
圖版 6 1. S I 01 (西▲北)
2. S I 02 (南▲北)



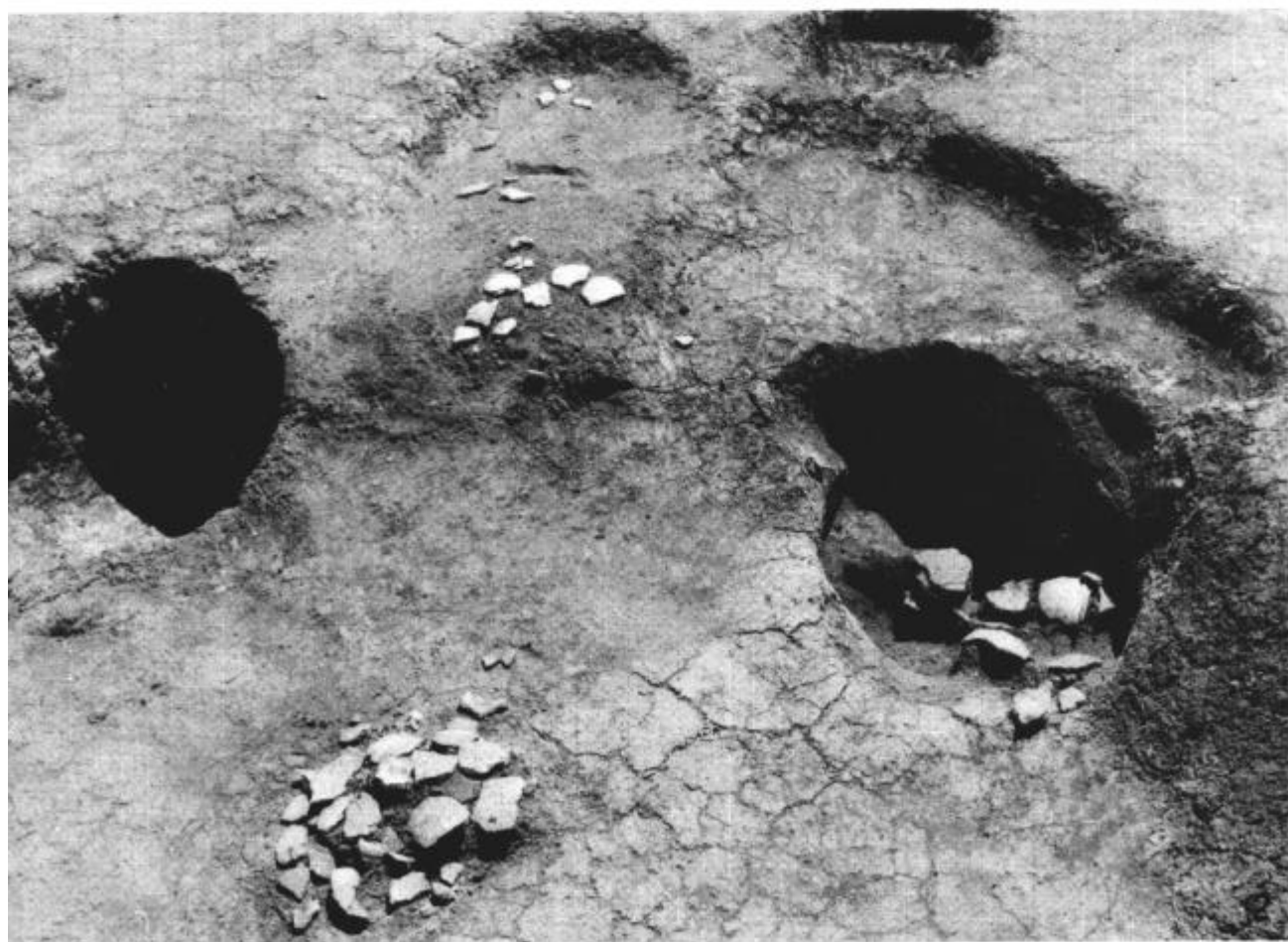
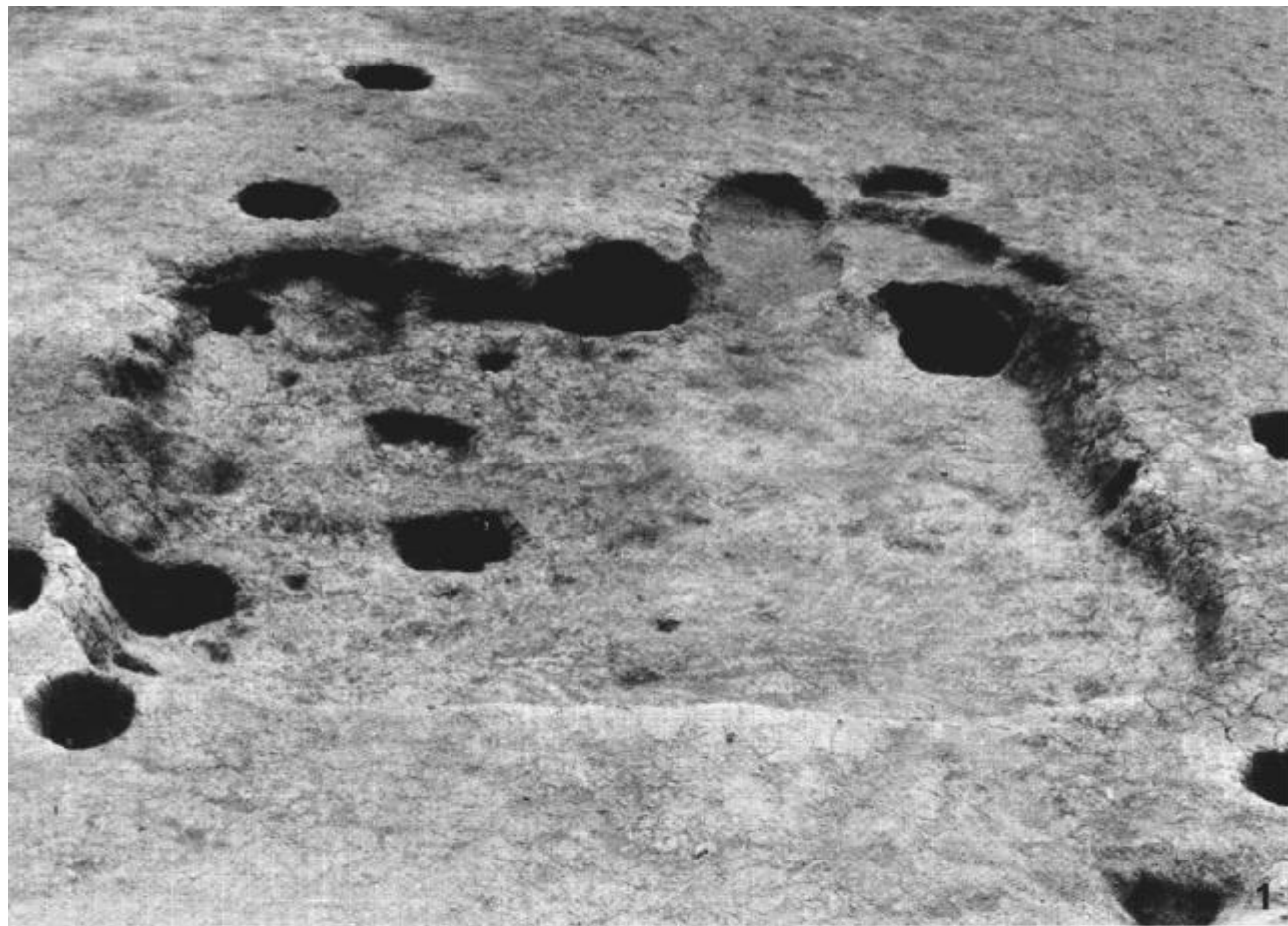
图版7 1. S I 02 · 03 · 09 (西▶東)
2. S I 03 · 09 (南▶北)



図版 8 1. S I 06 ・ S E 01 (西▶東)
2. S I 06 カマド



図版 9 1. S I 04・08 (西▶東)
2. S I 05 (北▶南)



図版10 1. S I 07 (南▶北)
2. S I 07 遺物出土状態



図版12 1. SB 11・SI 07 (東▶西)
 2. SB 18 (北▶南)

(西←北) 1192 1 1194
 (南←北) 1192 2



1



2

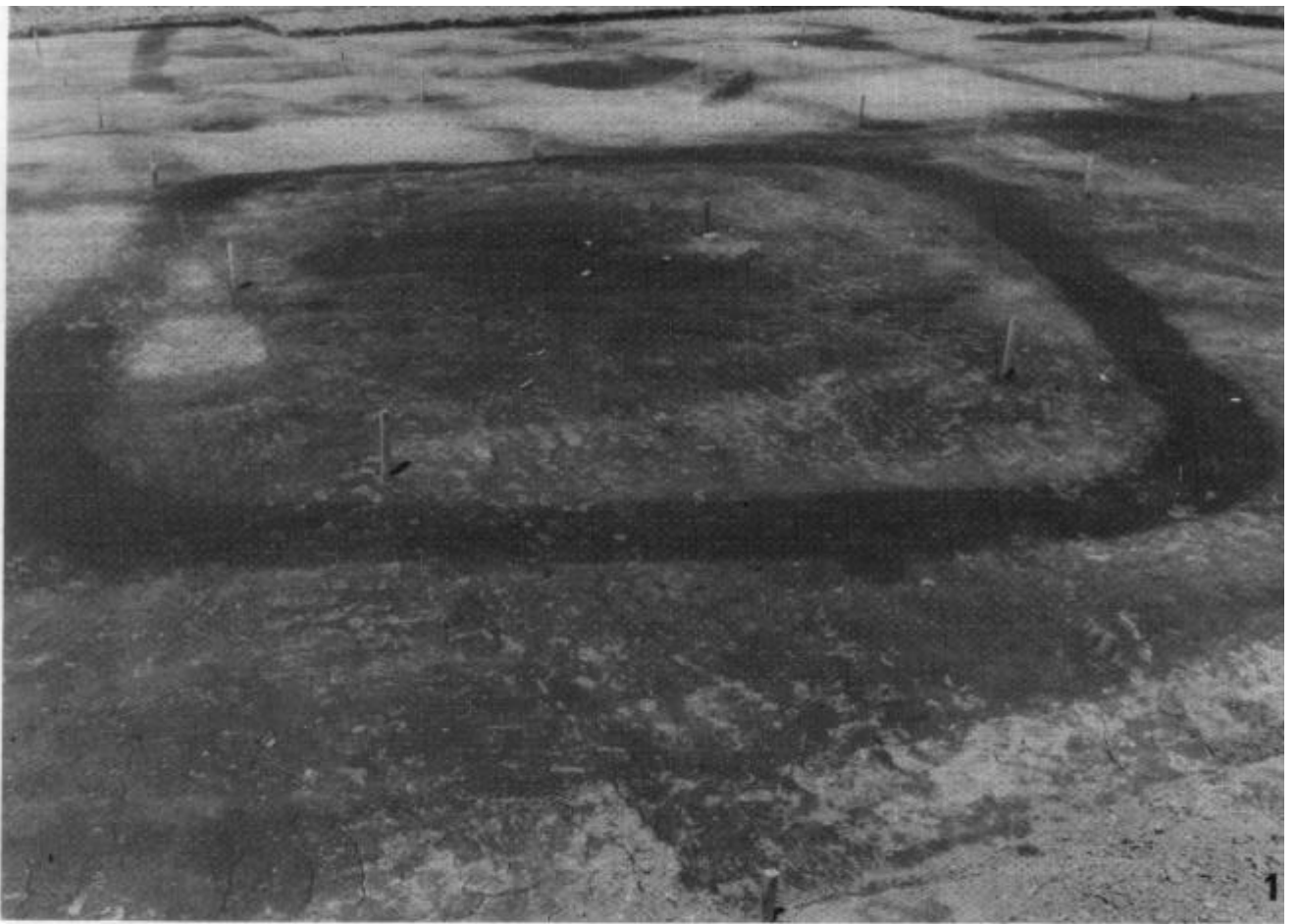
图版11 1. SB 17 (北▶南) 2. SB 13 (北▶南)

(西◀东) 70 [2] (18-2) 1. 月球图
(西◀东) 81 82 5



図版12 1. SB 11・SI 07 (東▶西)
 2. SB 18 (北▶南)

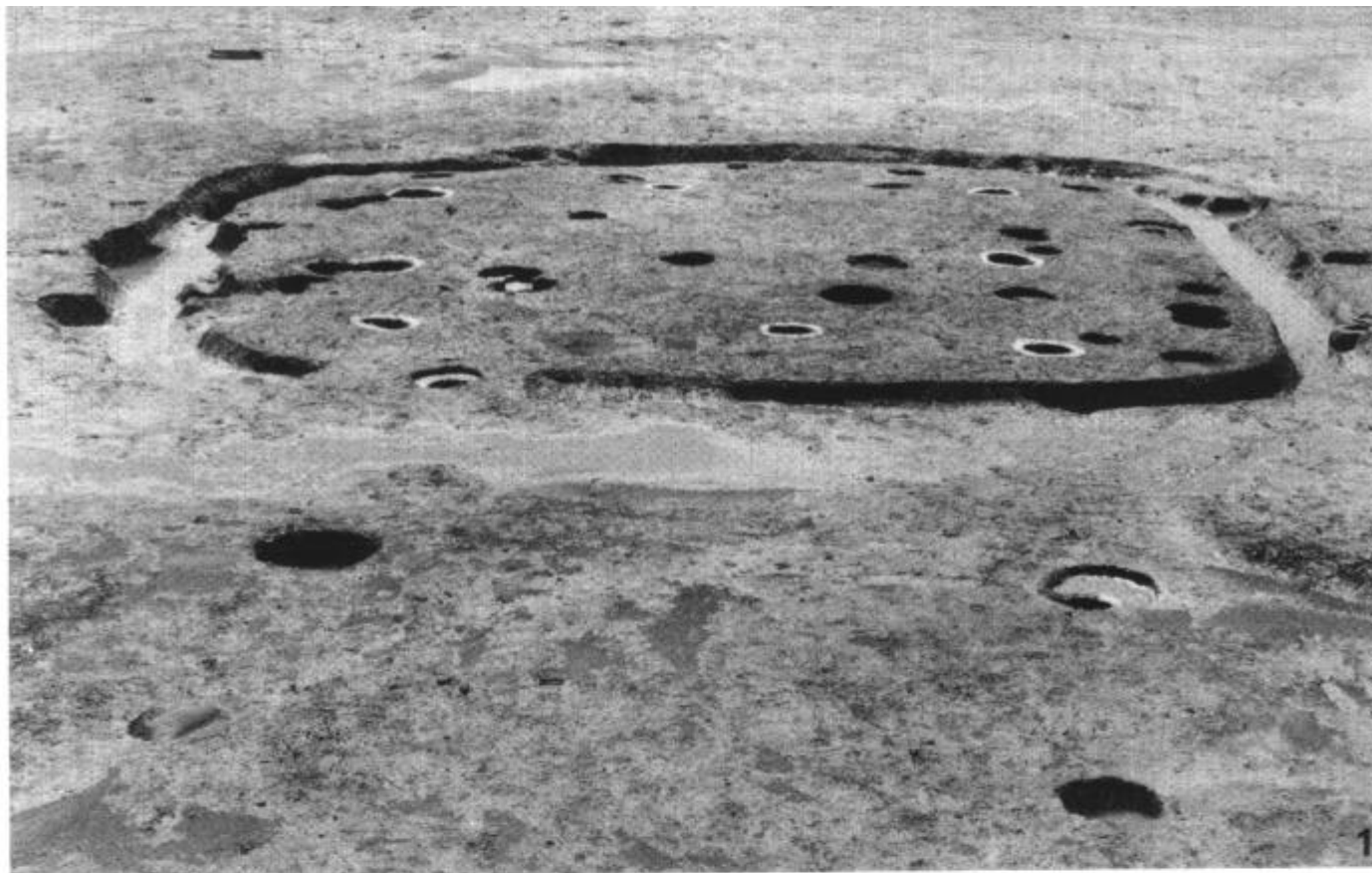
(西←北) 1192 1 1194
 (南←北) 1192 2



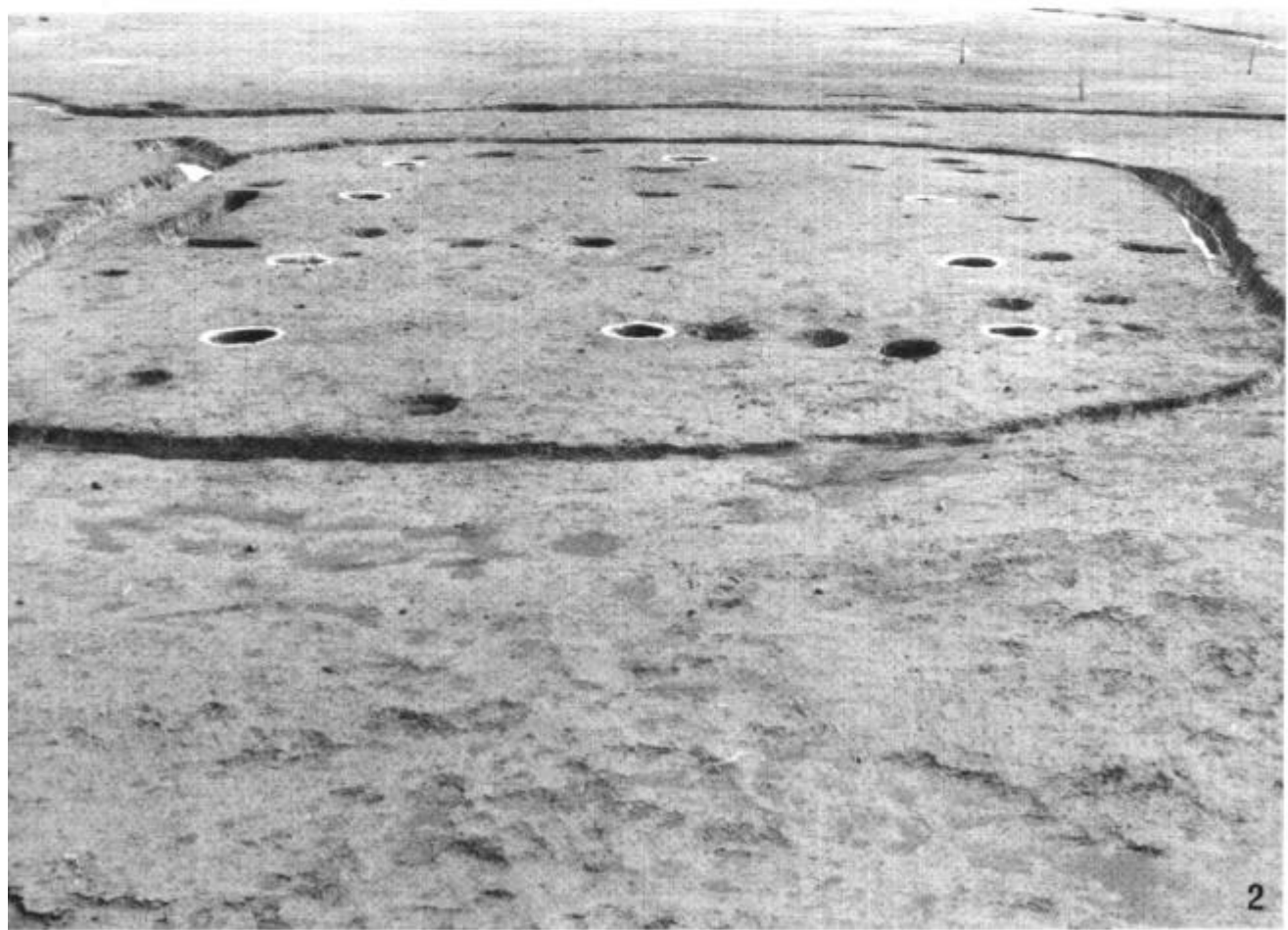
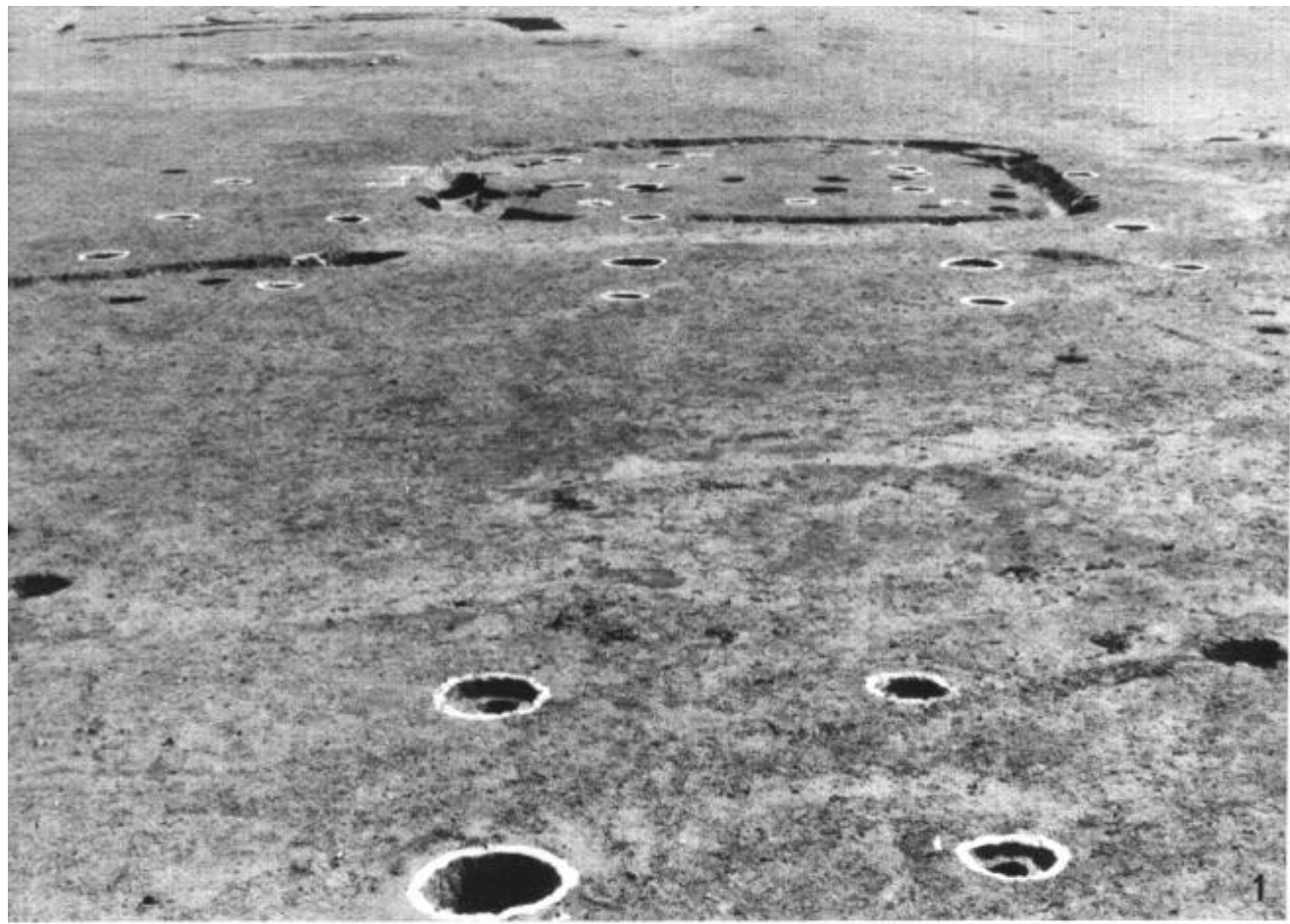
図版13 1. SD01の確認面(西▶東)
2. SD01・SB07・SK06(西▶東)



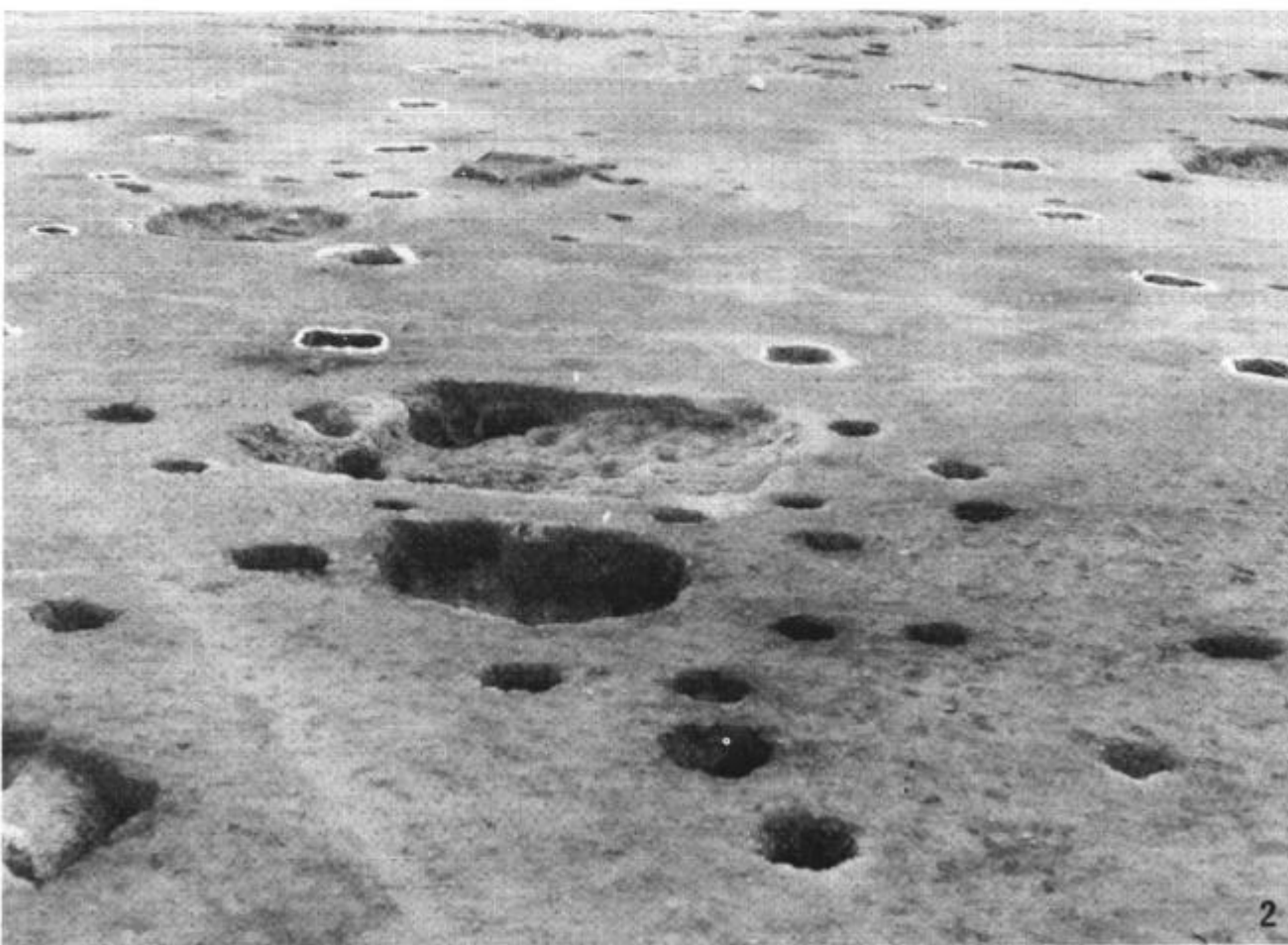
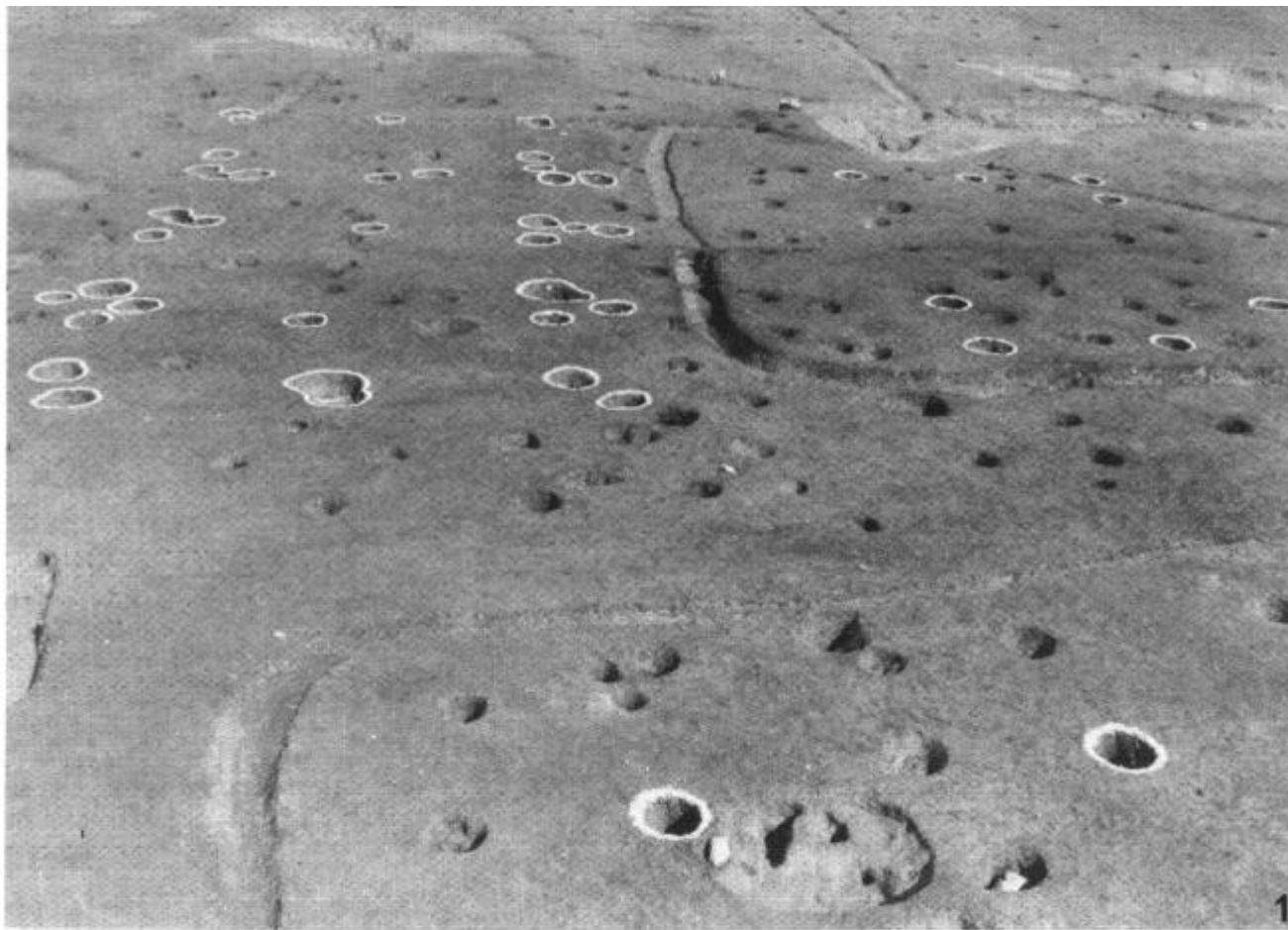
図版14 1. S D 06 の確認面
2. S D 06 ・ S B 03



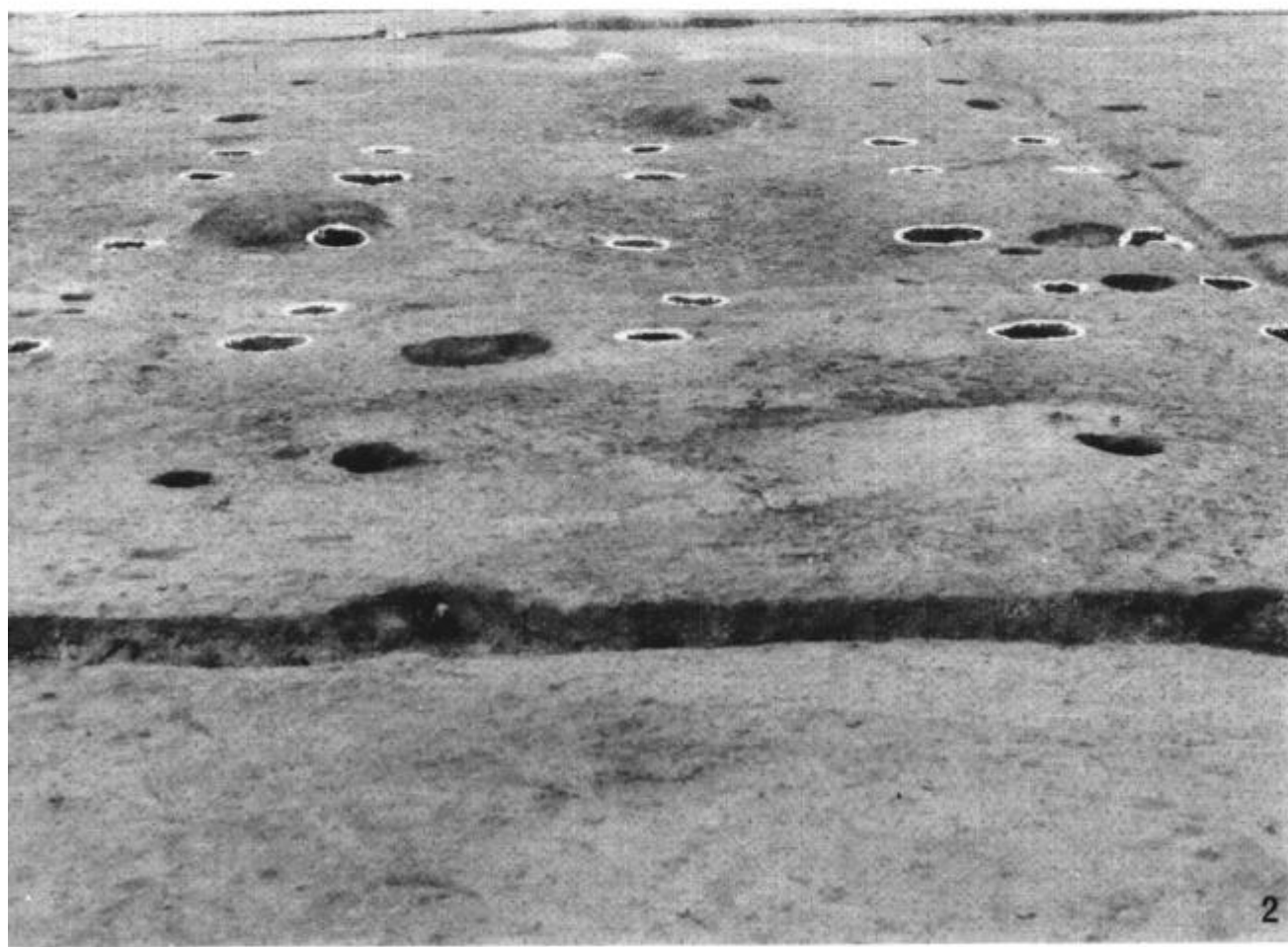
1. SB 23 • SD 47
(西▶東)
2. SD 47 南部分



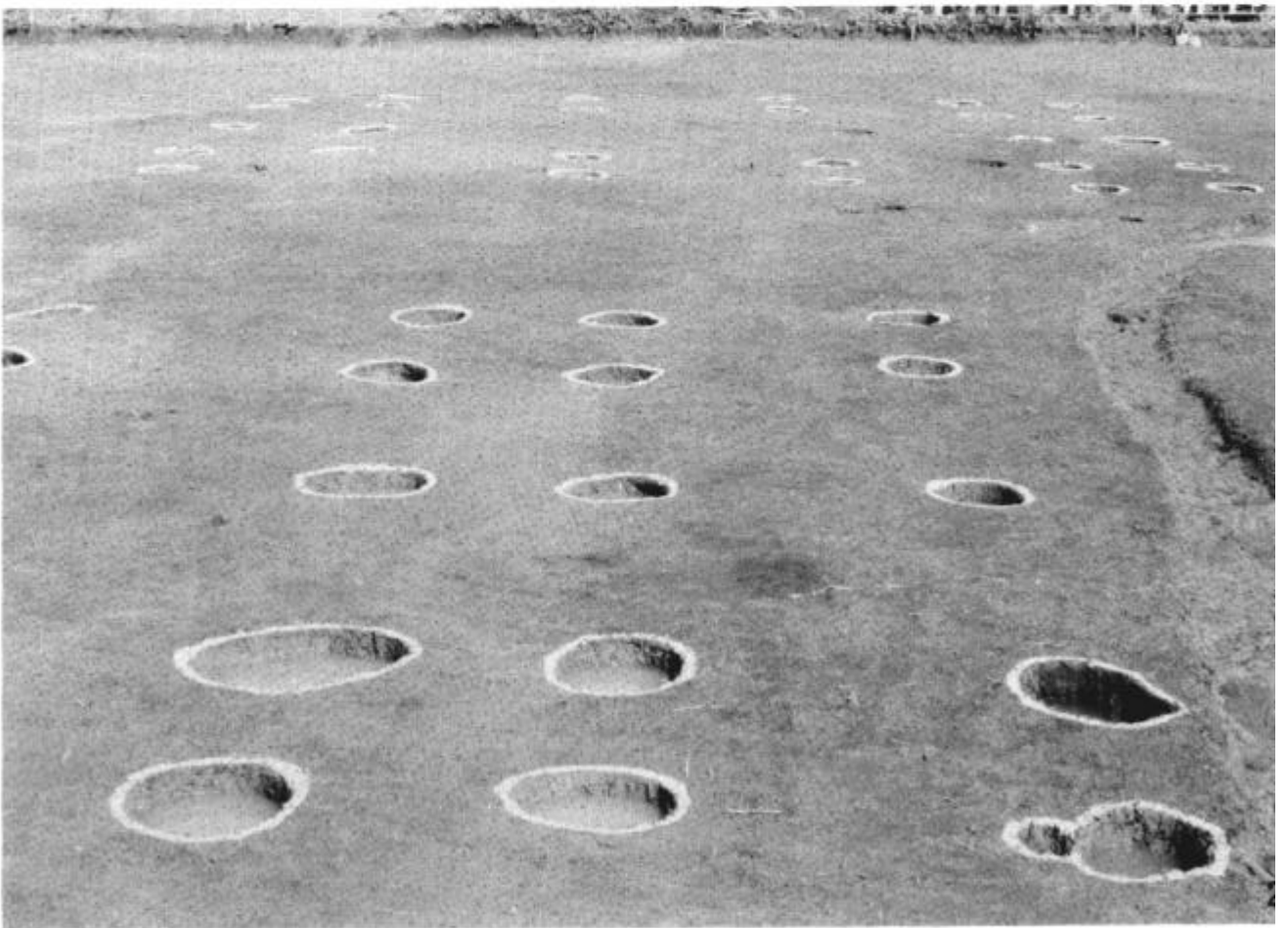
図版16 1. SB 22・23 (東▶西)
2. SB 24・SD 48 (西▶東)



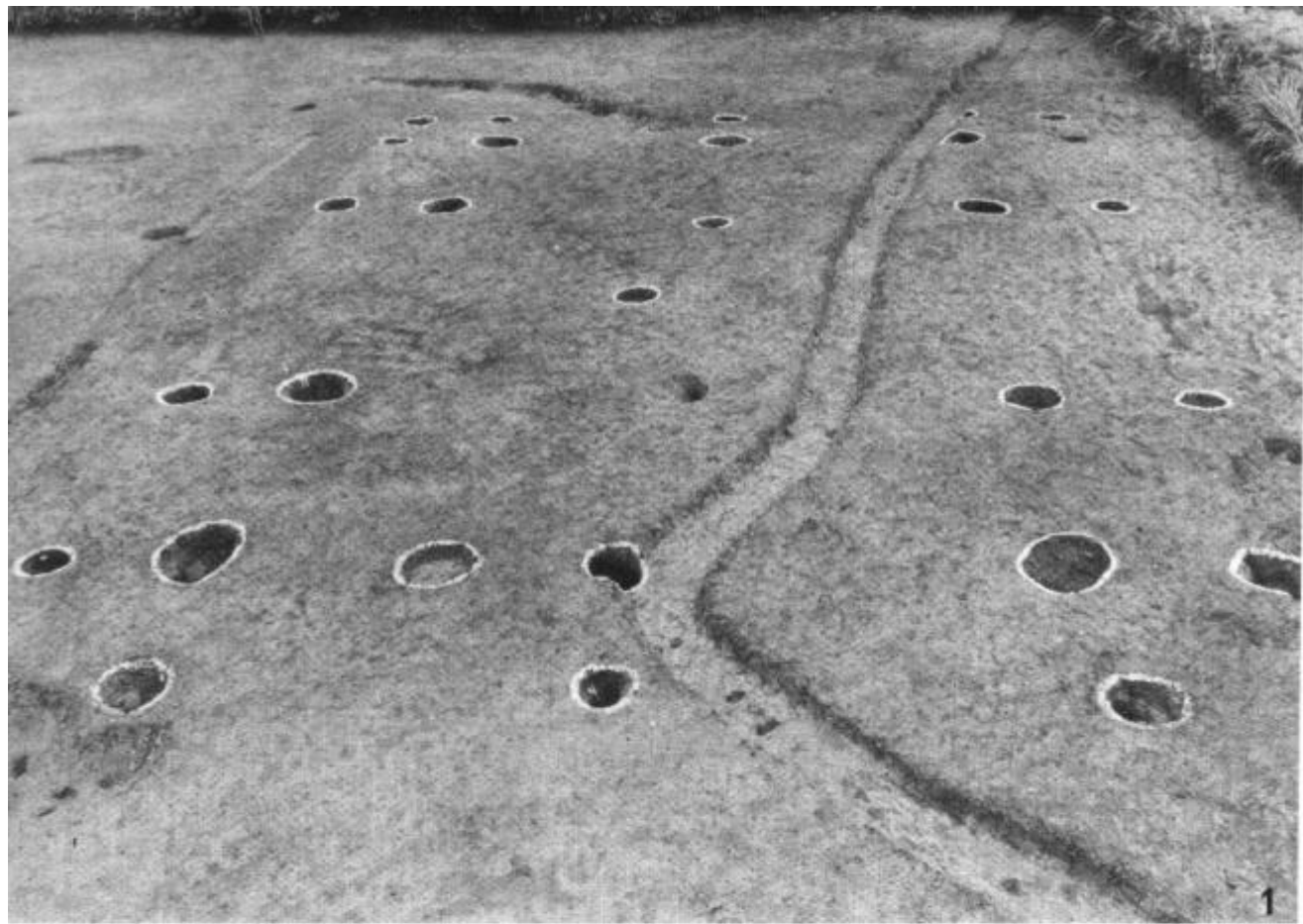
図版17 1. SB 04・05・19・20・21 (西▶東)
2. SB 06 (北▶南)



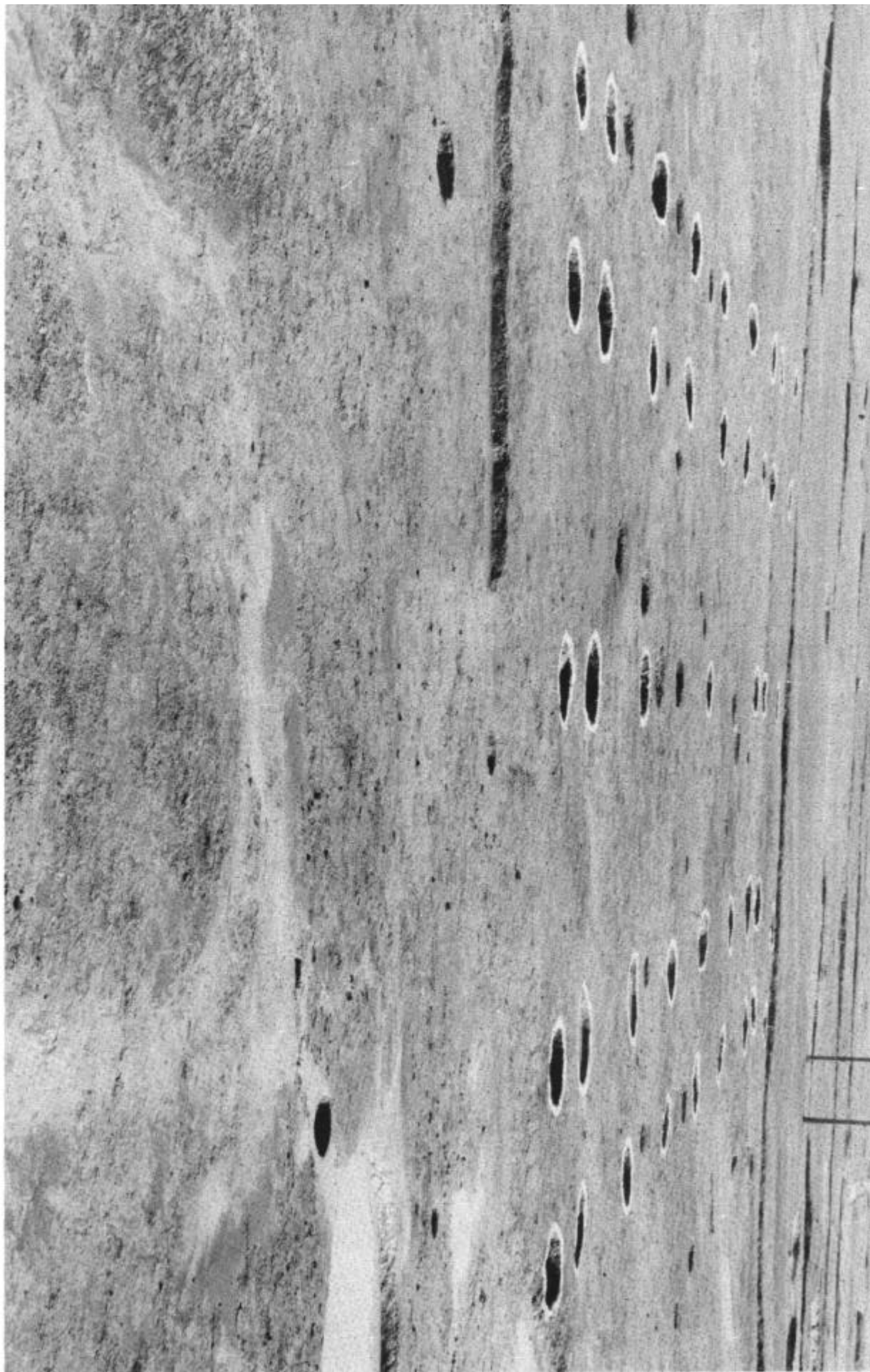
図版18 1. SB10 (西▶東)
2. SB12 (東▶西)



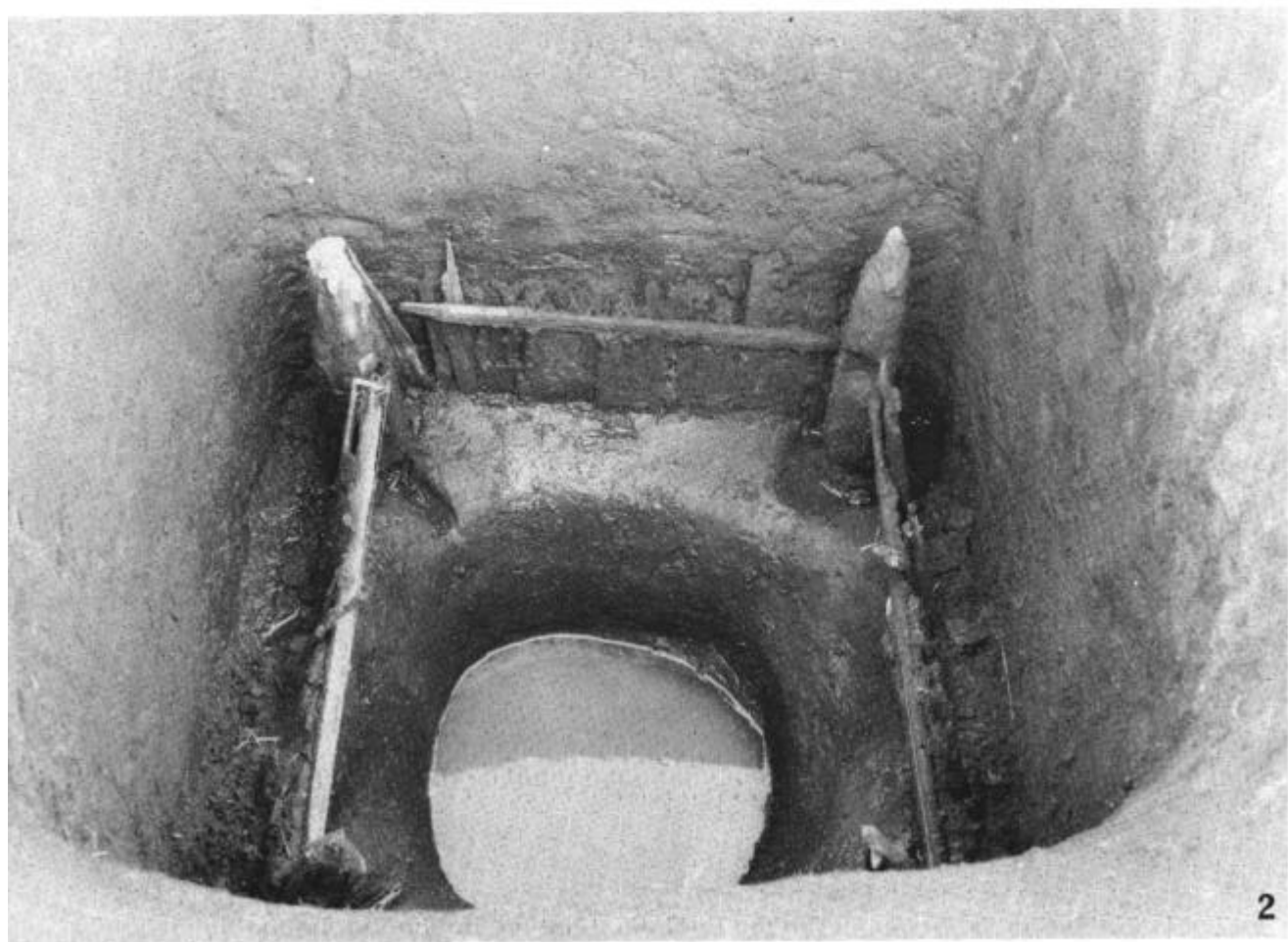
図版19 1. SB 15 (西▶東)
2. SB 08 の東端・SB 15 (南▶北)



図版20 1. SB01・SD05 (東▶西)
2. SB16 (西▶東)



图版21 SB 08 (西▶東)



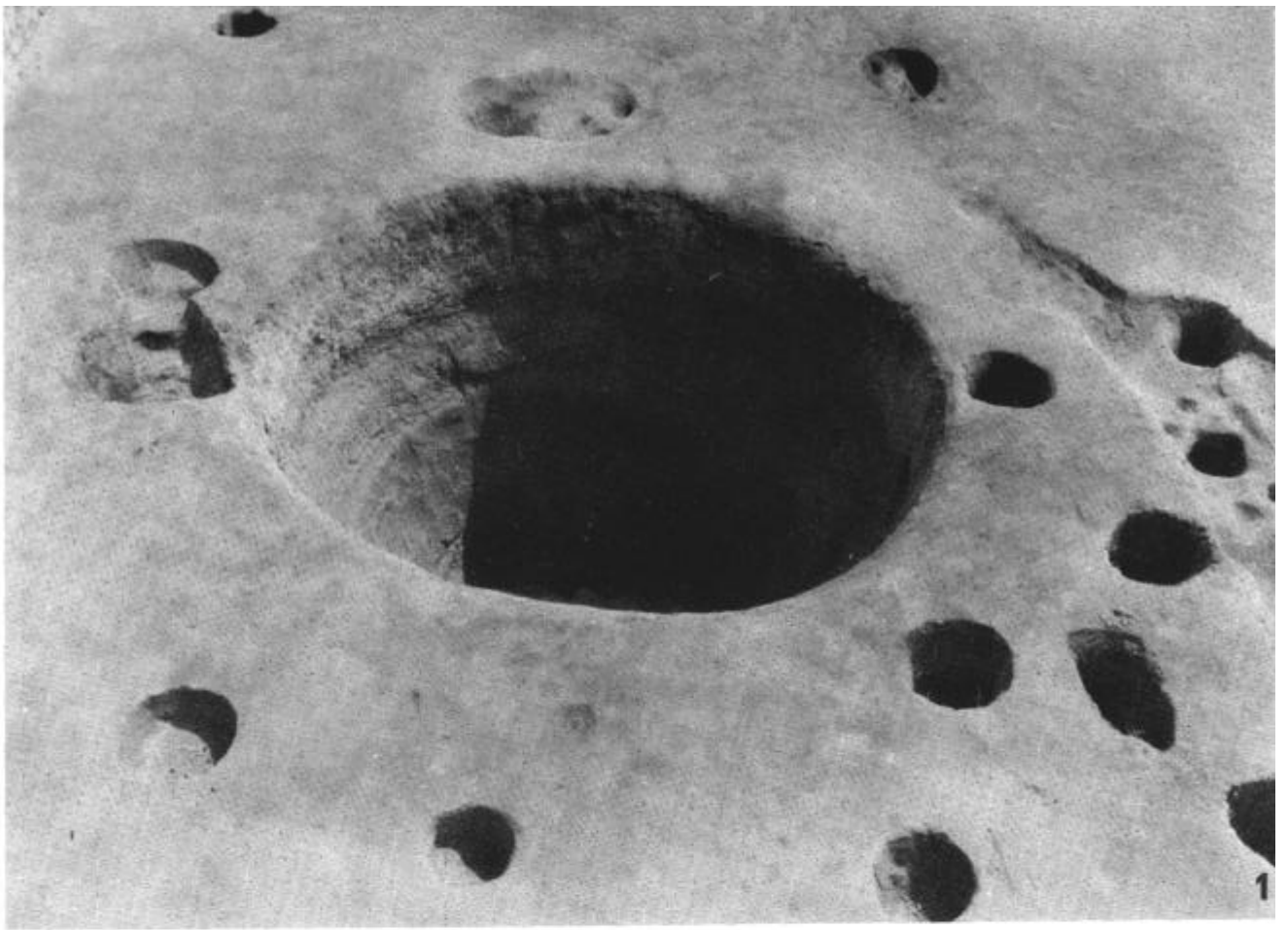
図版22 1. S I 06とSE 01
2. SE 01



图版23 1. SE 02埋土層
2. SE 02



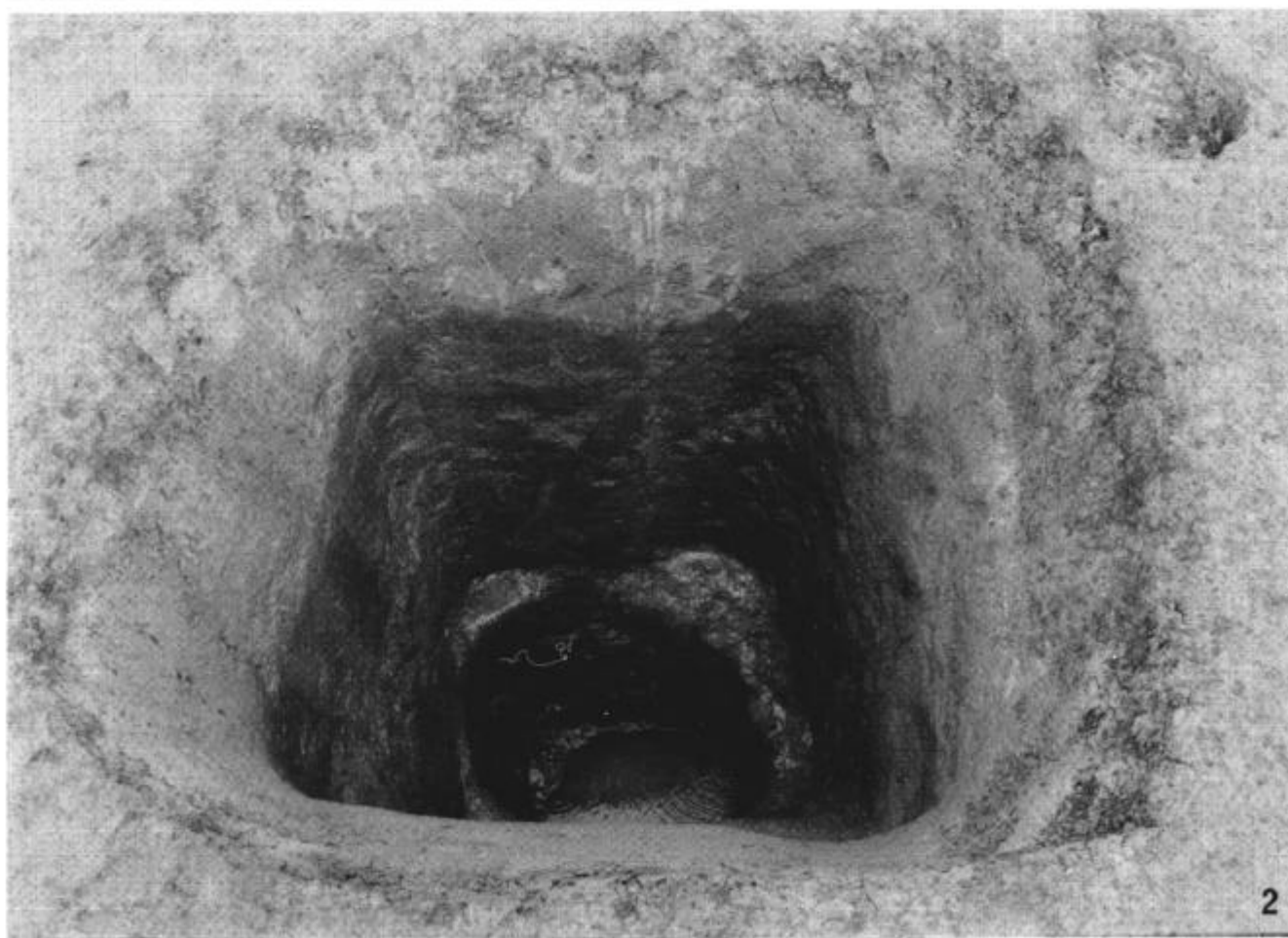
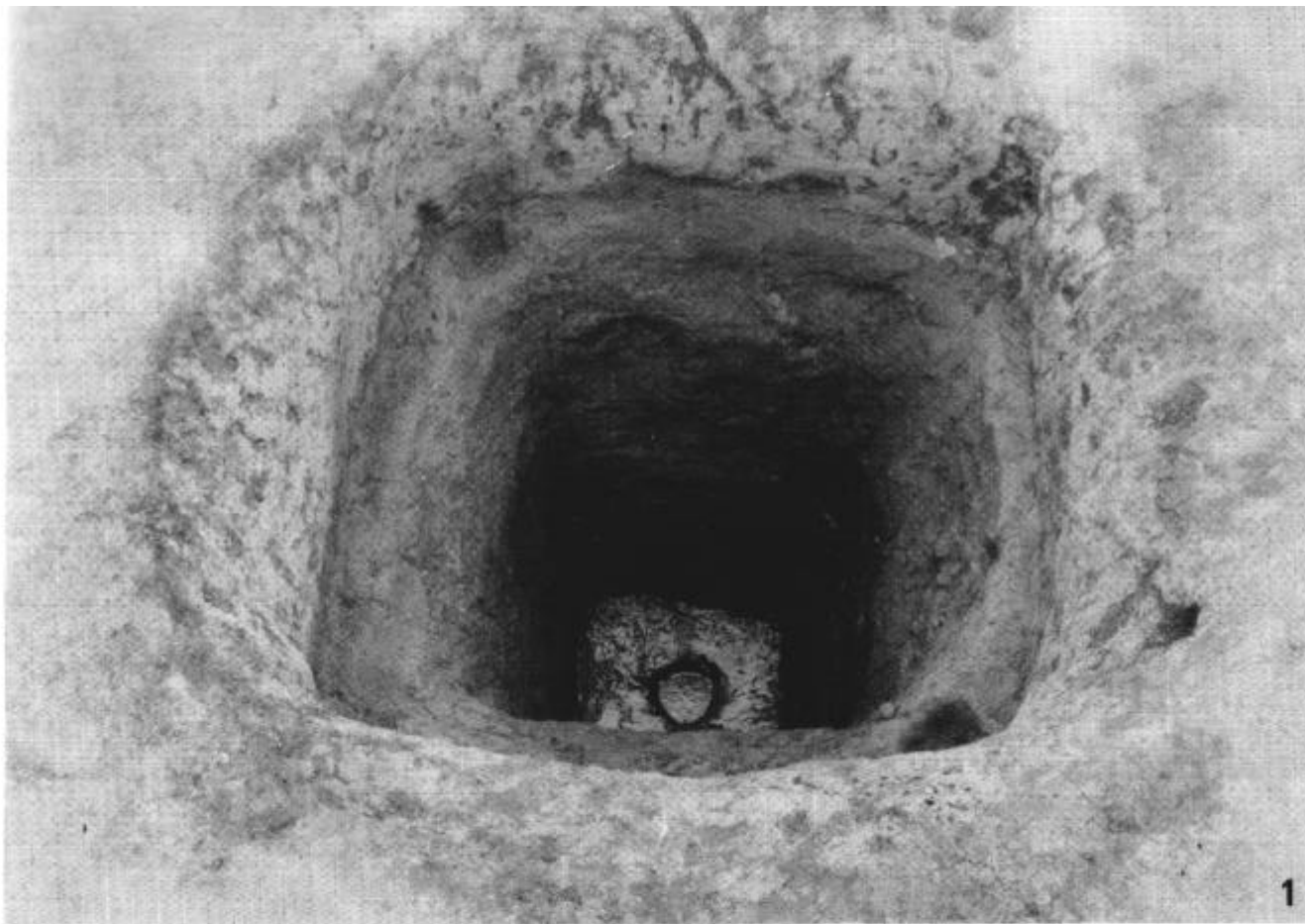
图版24 1. SE 03 2. SE 10



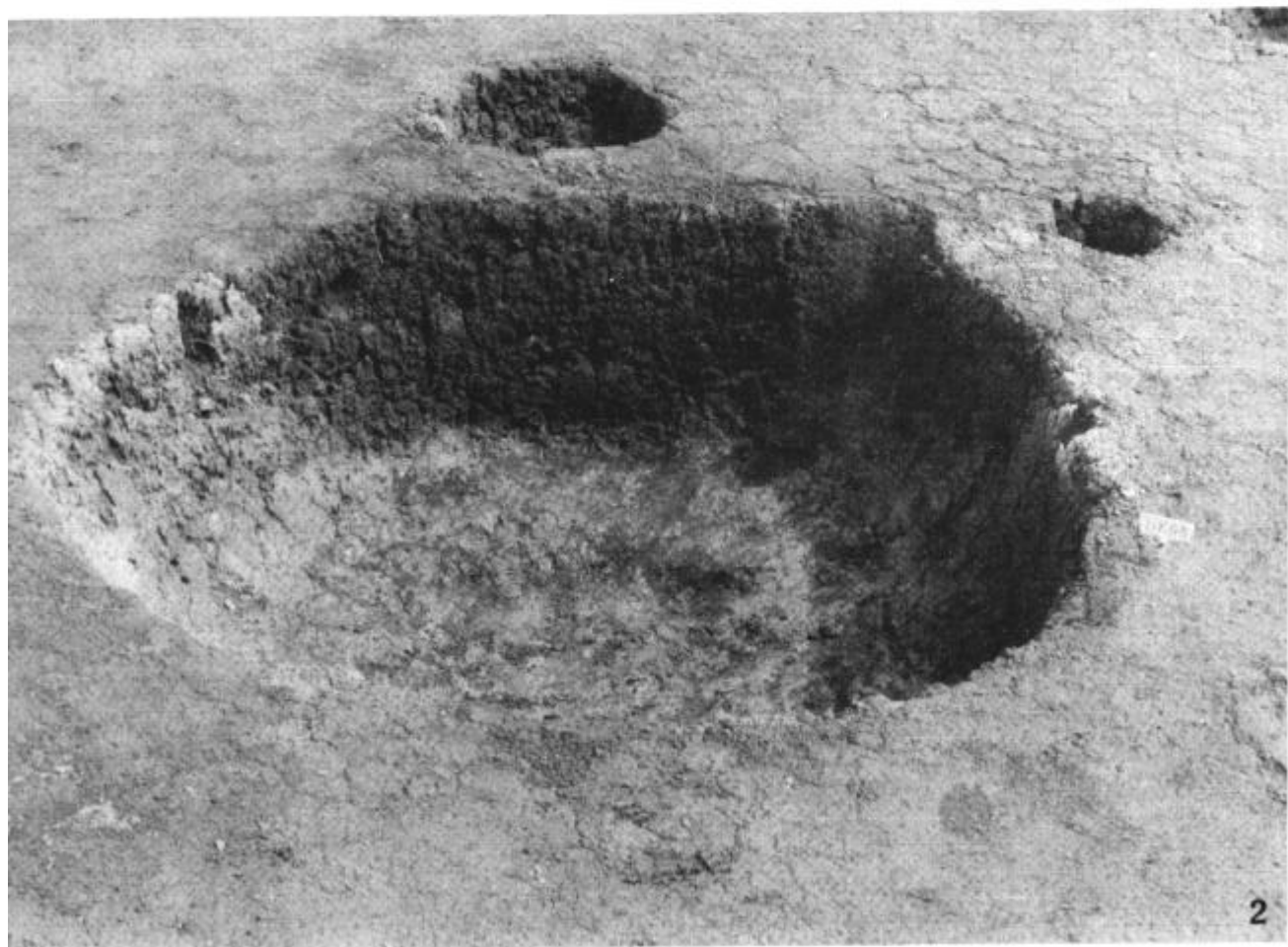
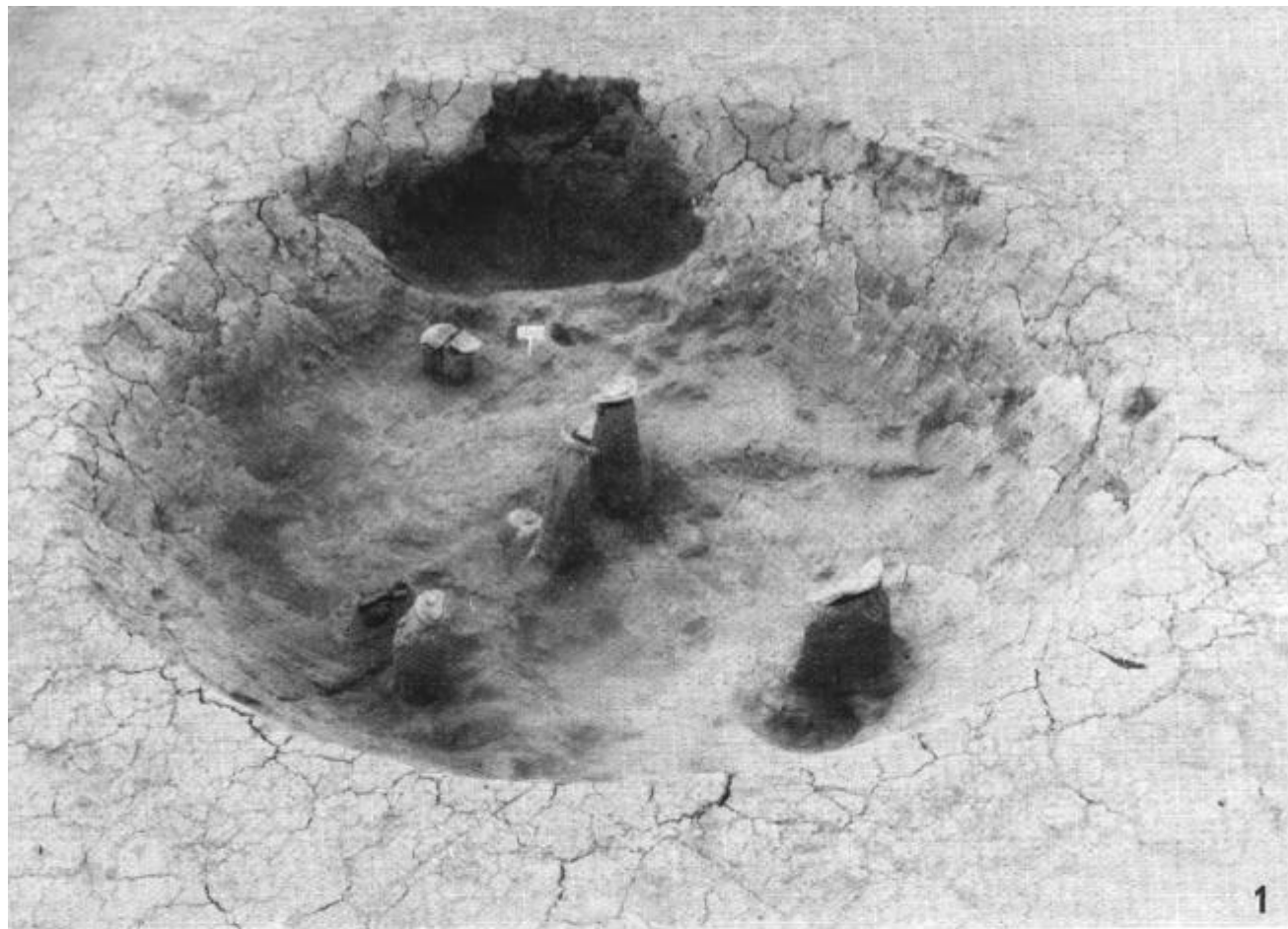
图版25 1. SE 06 2. SE 06



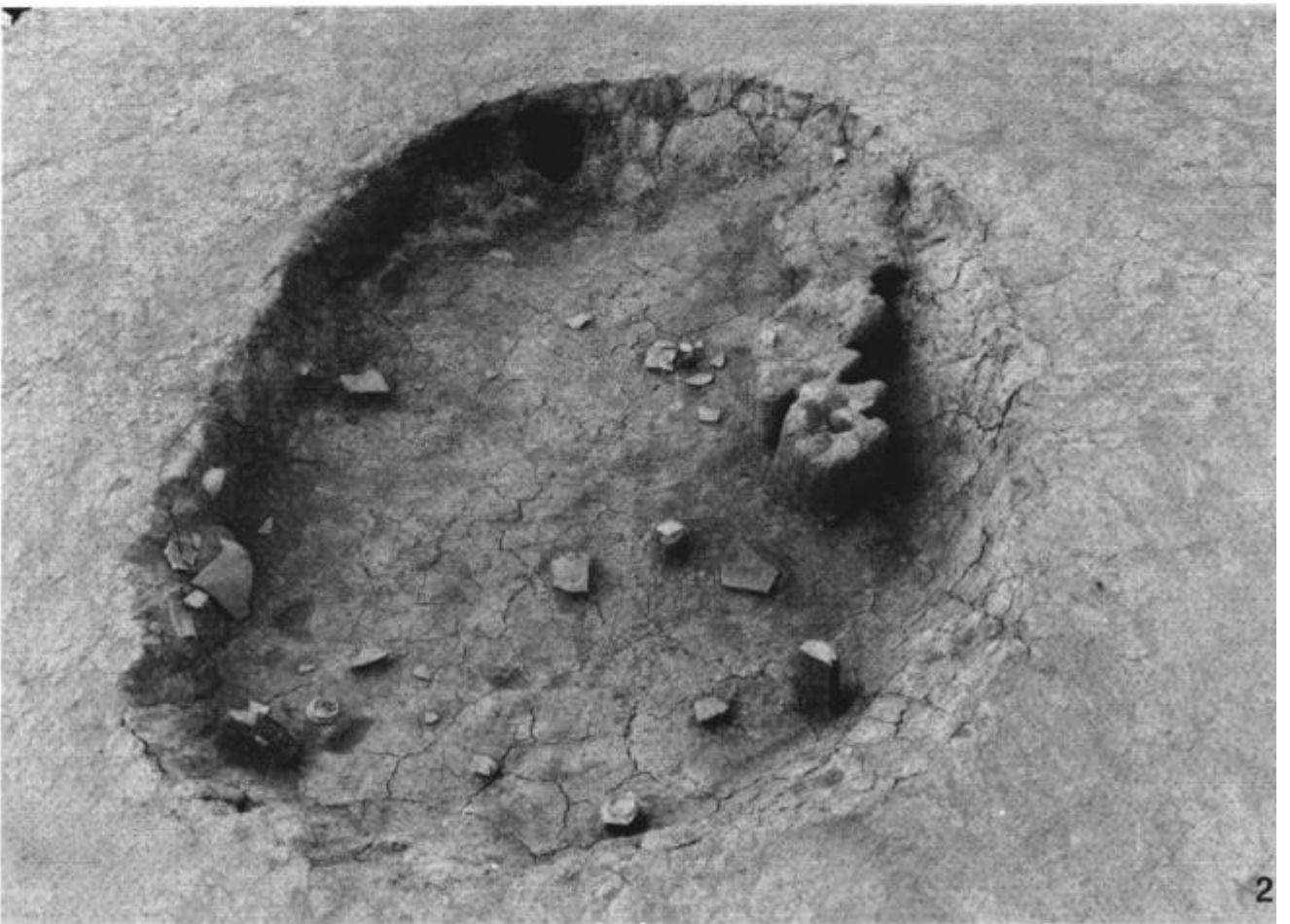
图版26 1. SE 05埋土層 2. SE 05



图版27 1. SE 07 2. SE 09



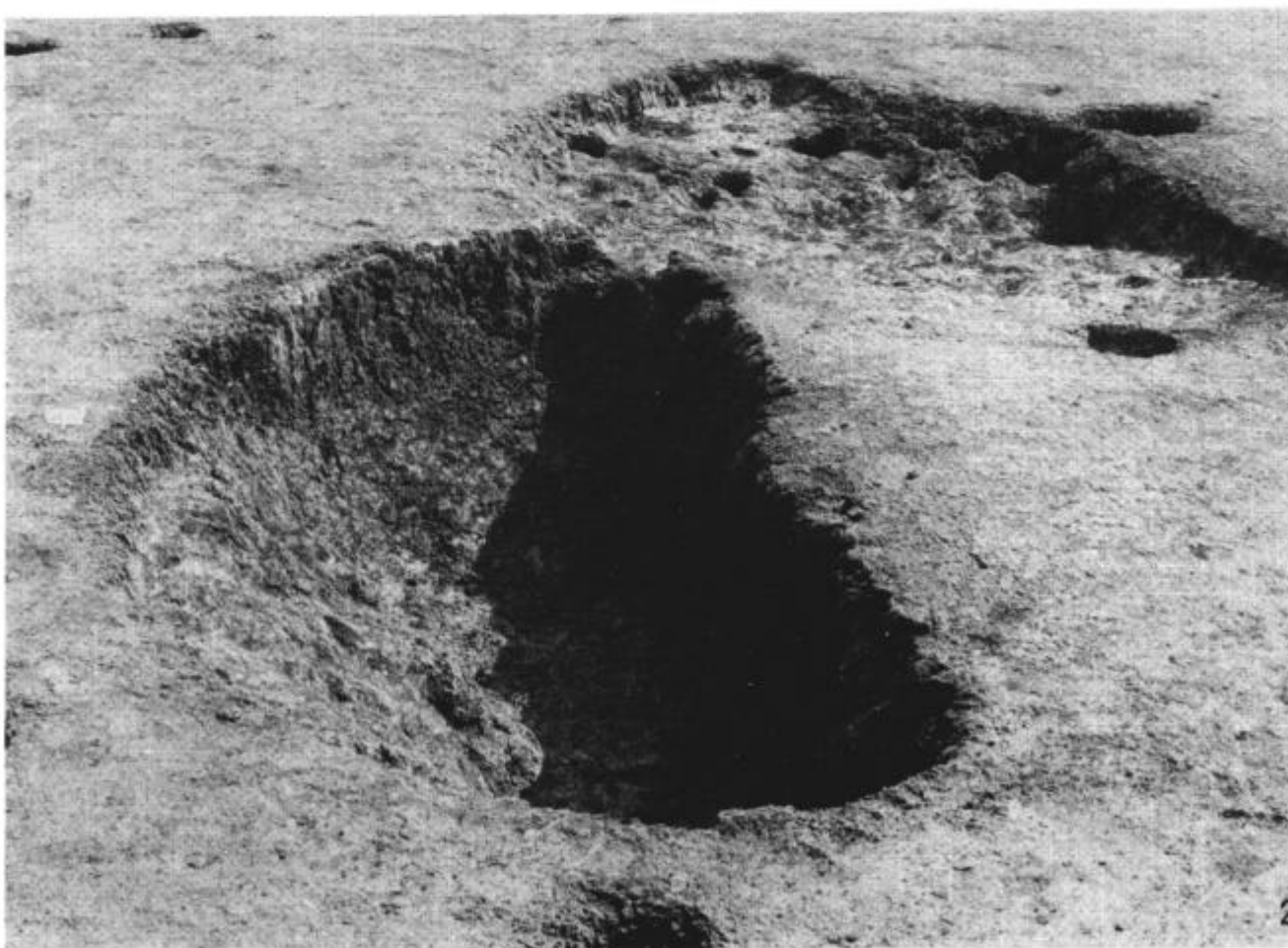
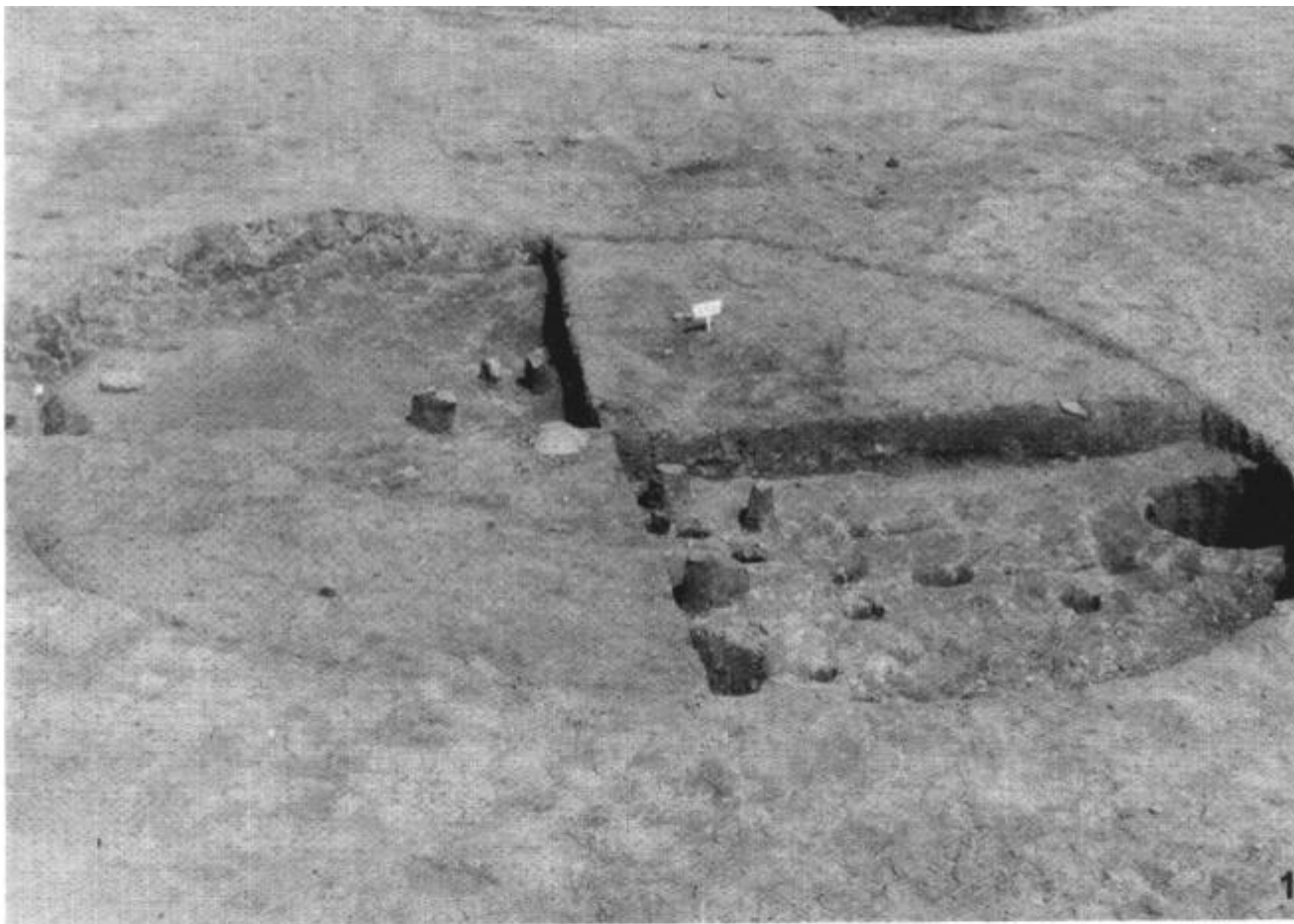
图版28 1. SK 01 2. SK 05



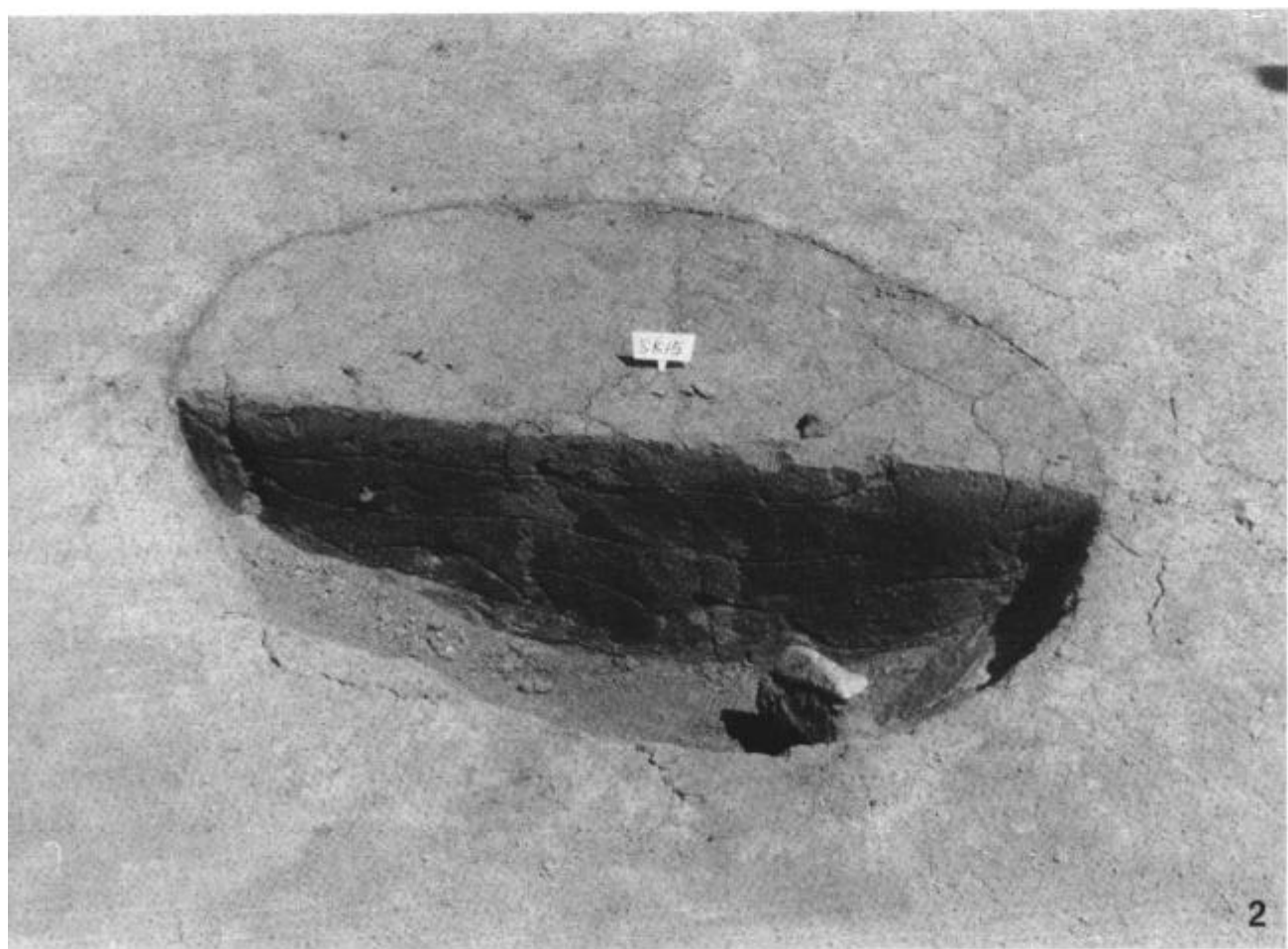
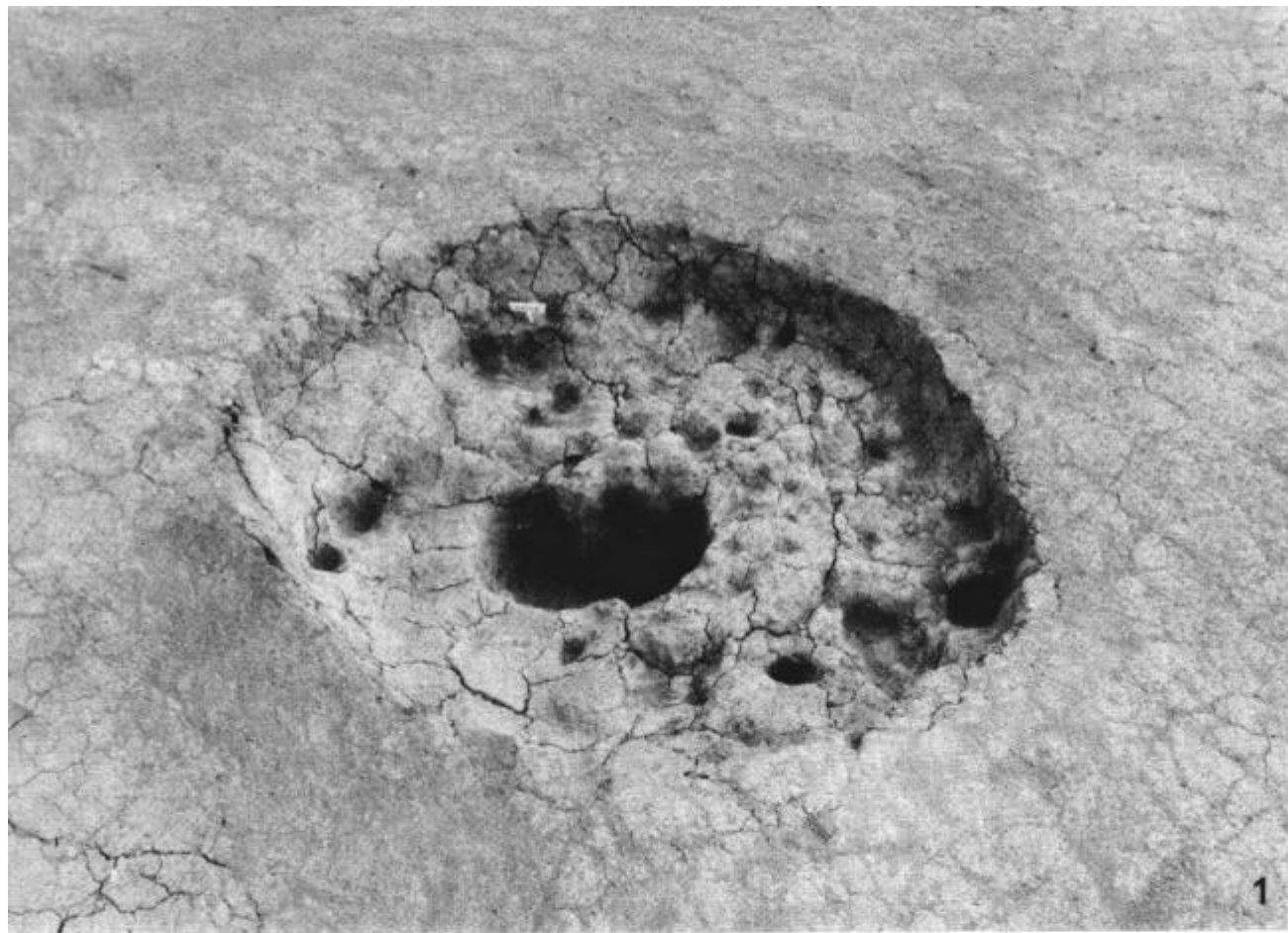
图版29 1. SK 06 2. SK 07



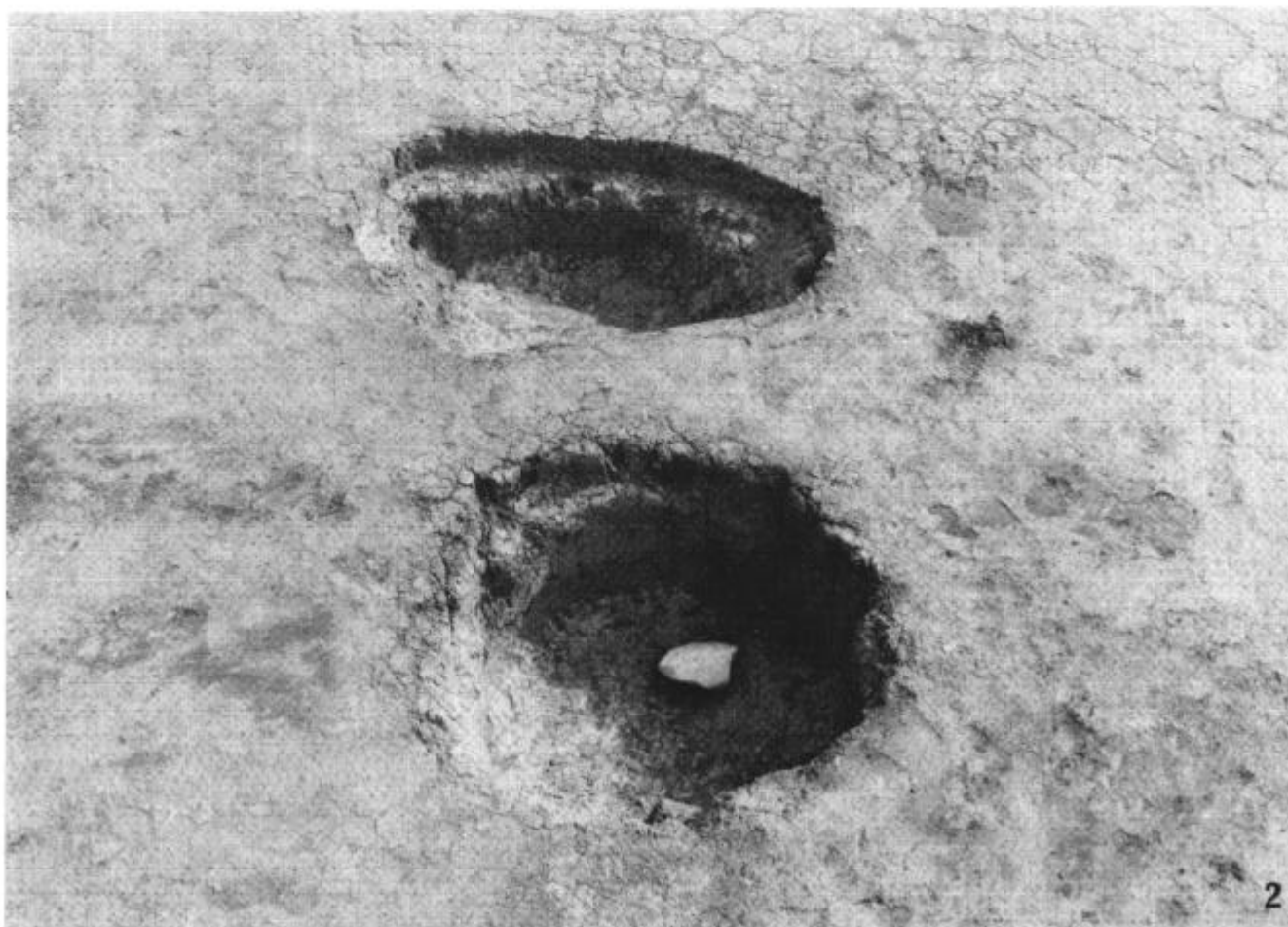
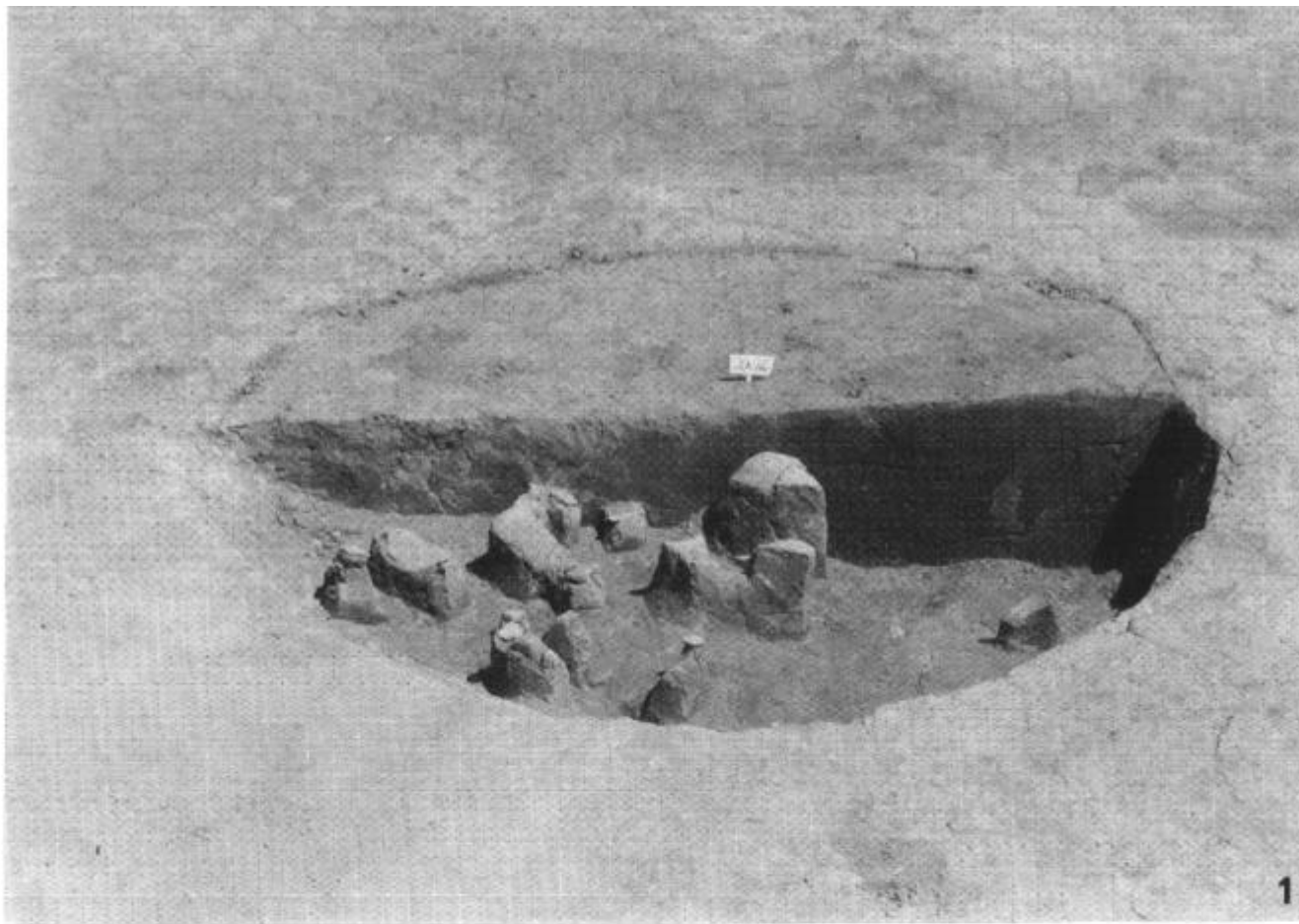
图版30 1. SK 08 2. SK 09



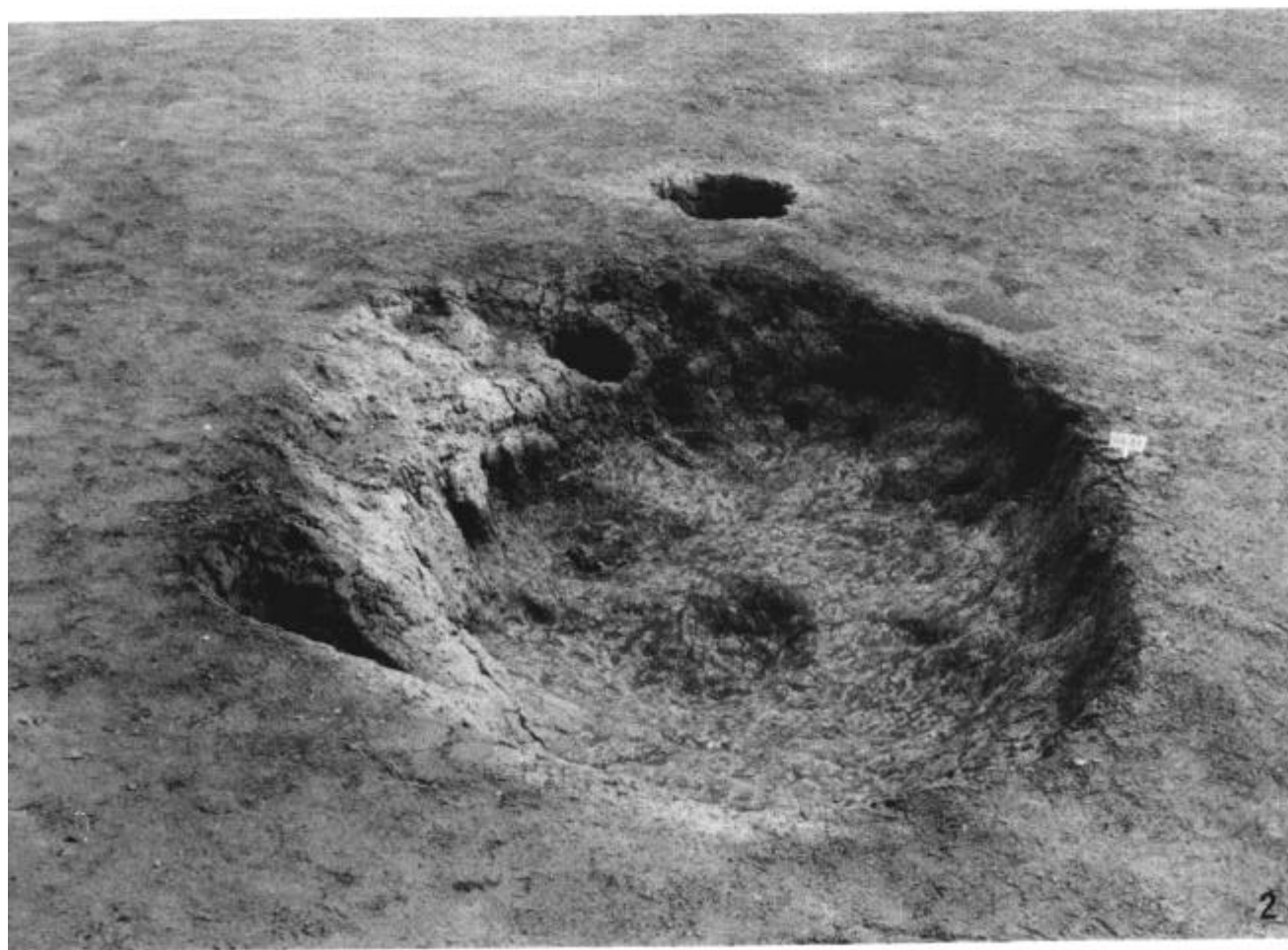
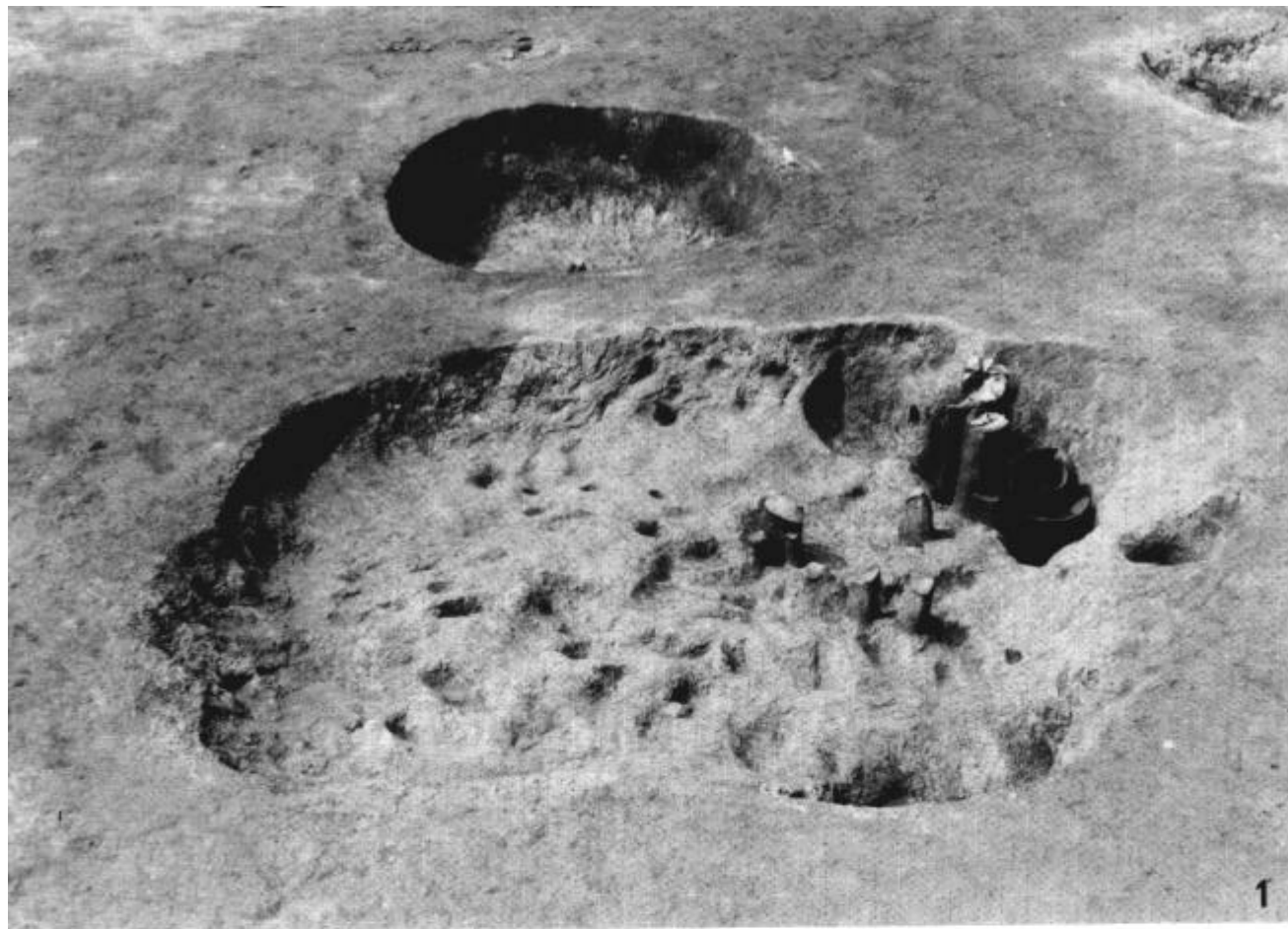
图版31 1. SK 10 2. SK 08 • 11



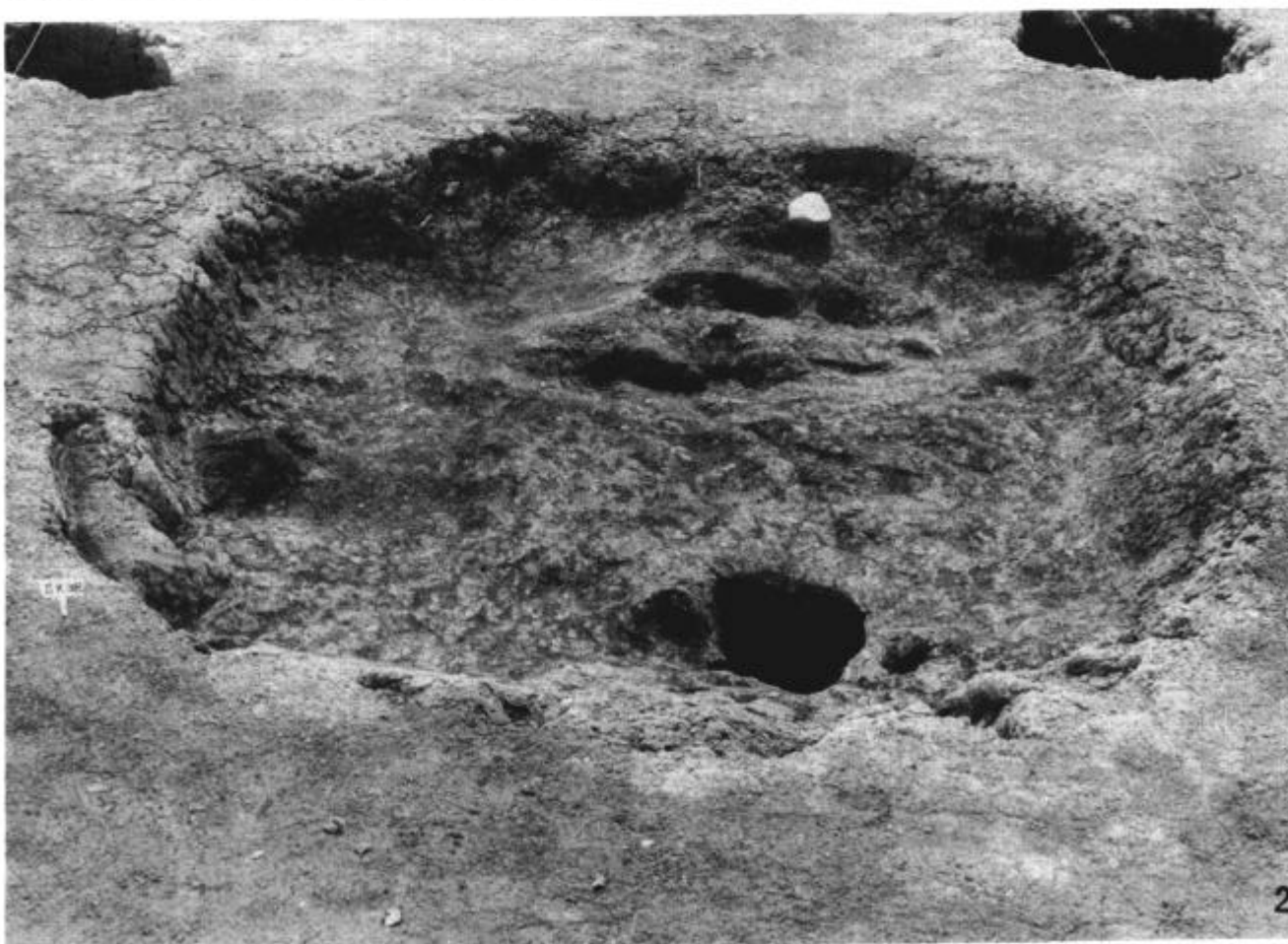
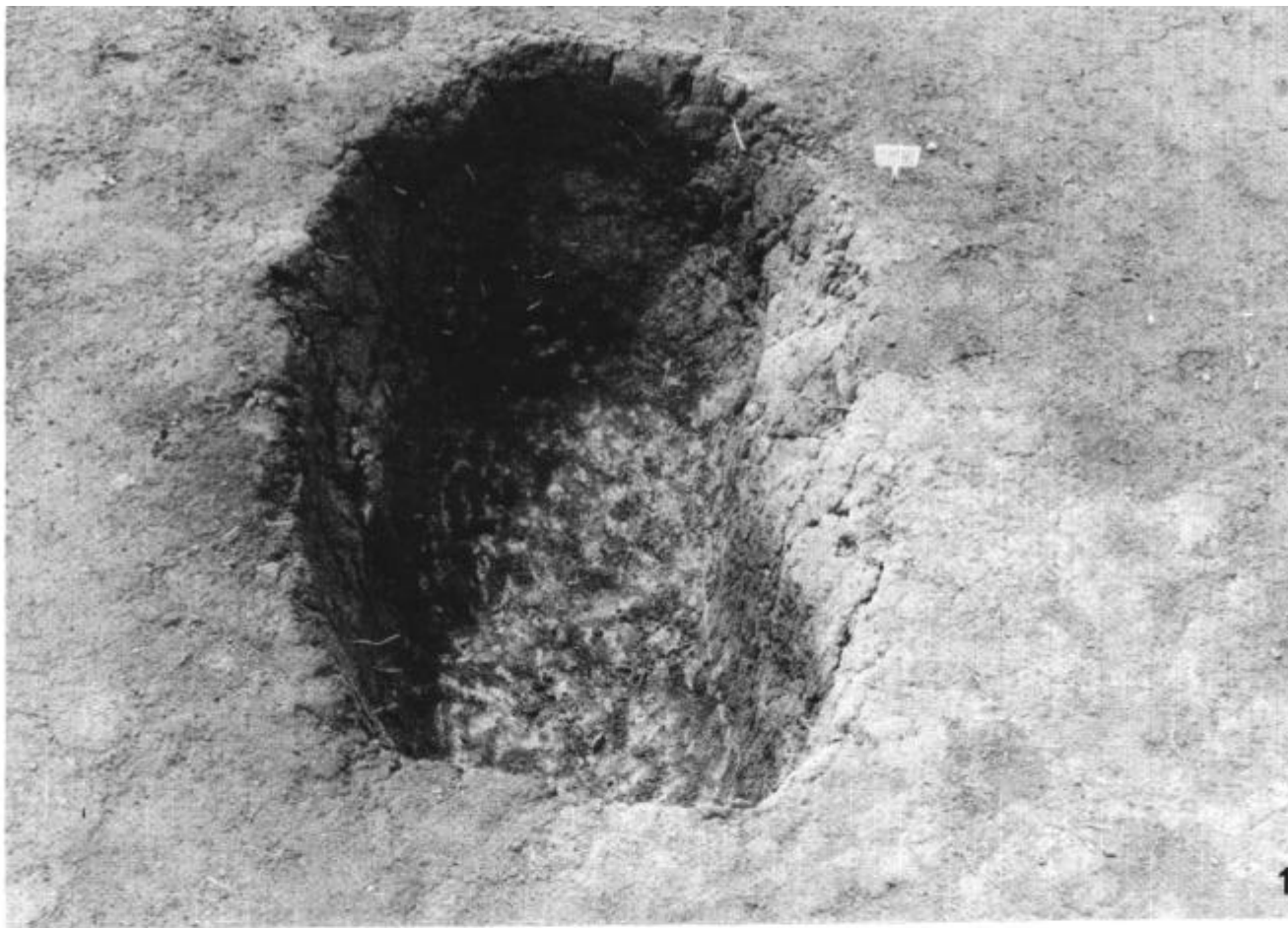
图版32 1. SK14 2. SK15



图版33 1. SK 16 2. SK 17 • 18

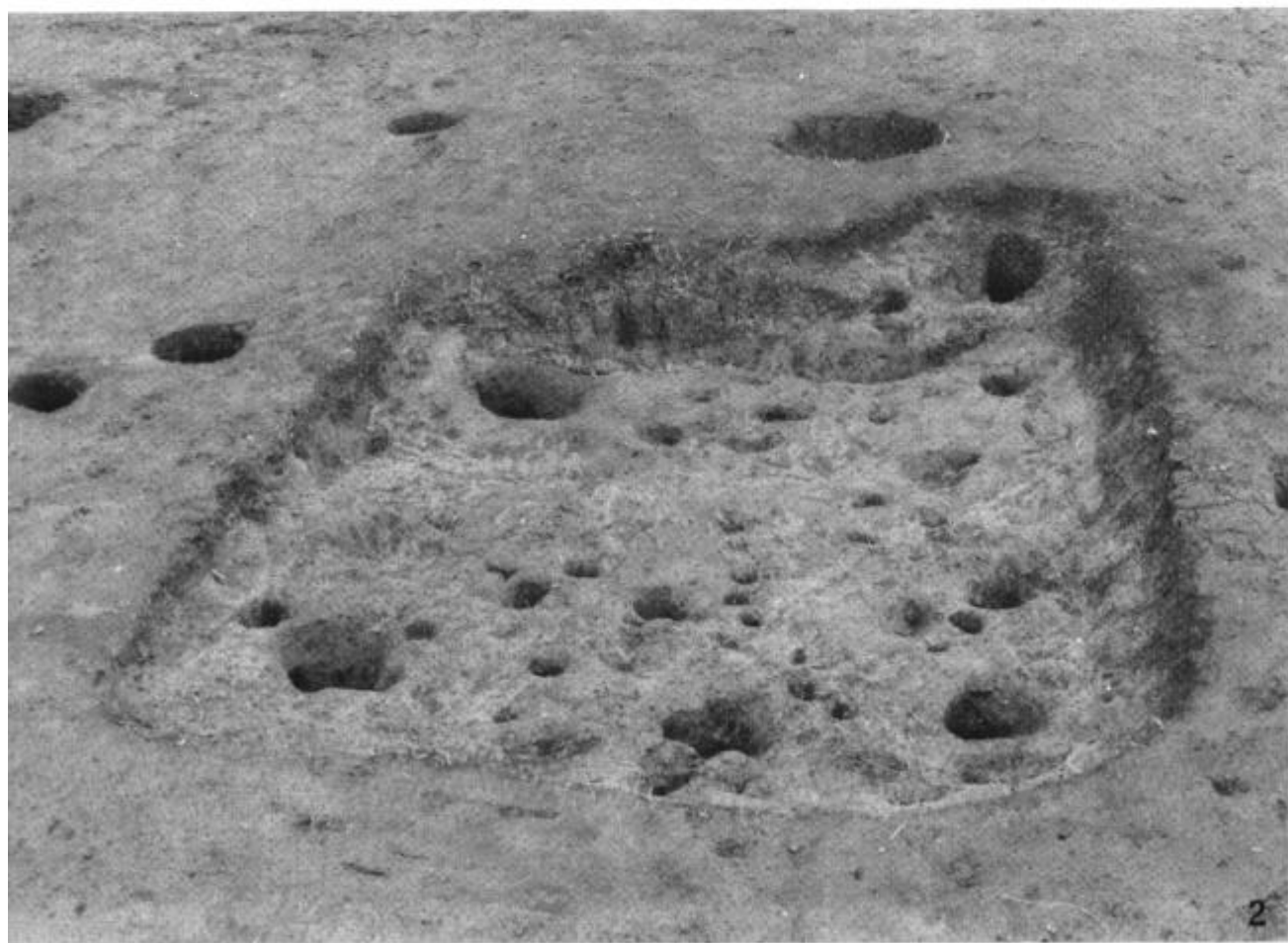


图版34 1. SK 05 • 30 2. SK 31



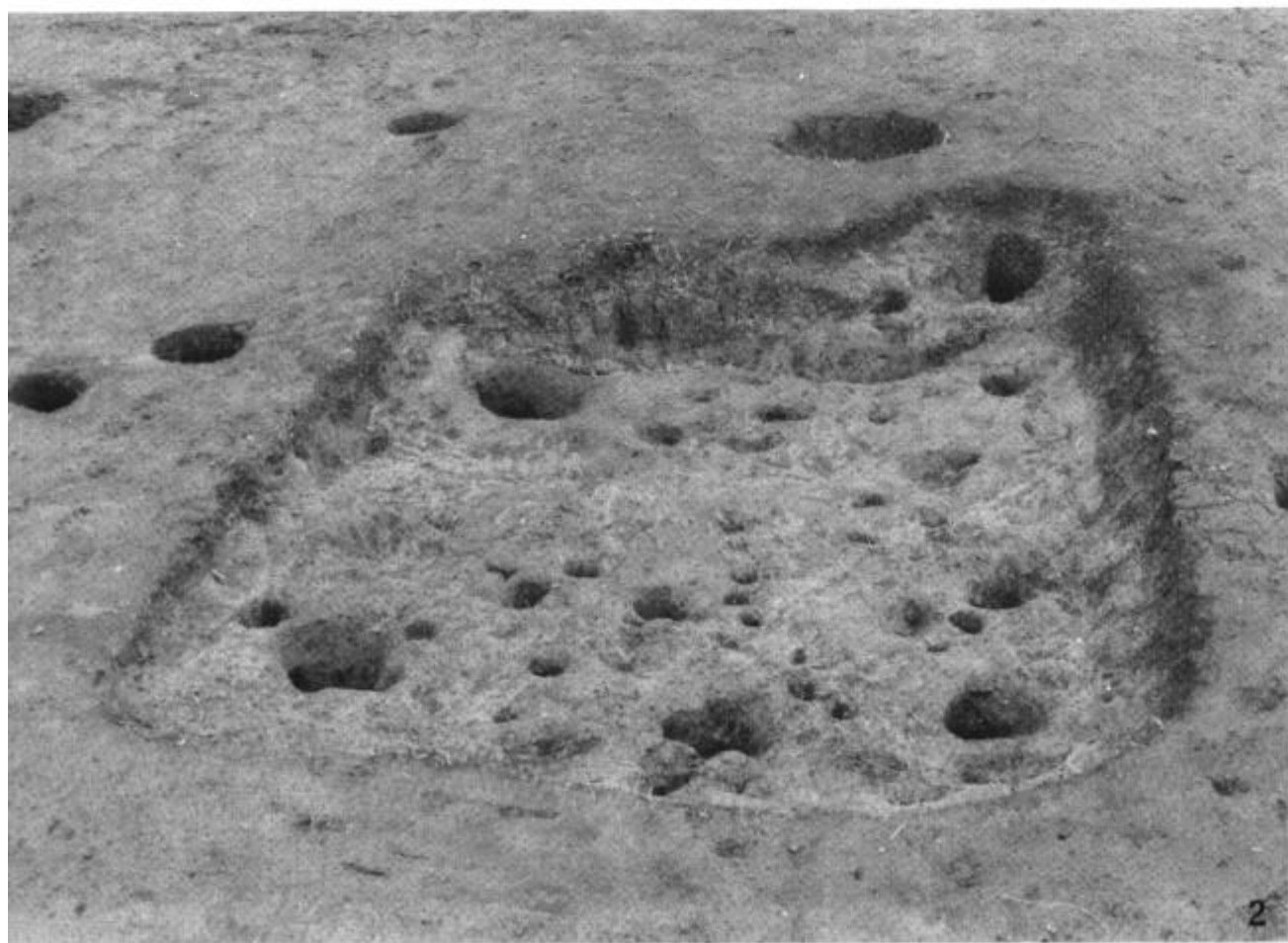
图版35 1. SK 36

2. SK 38



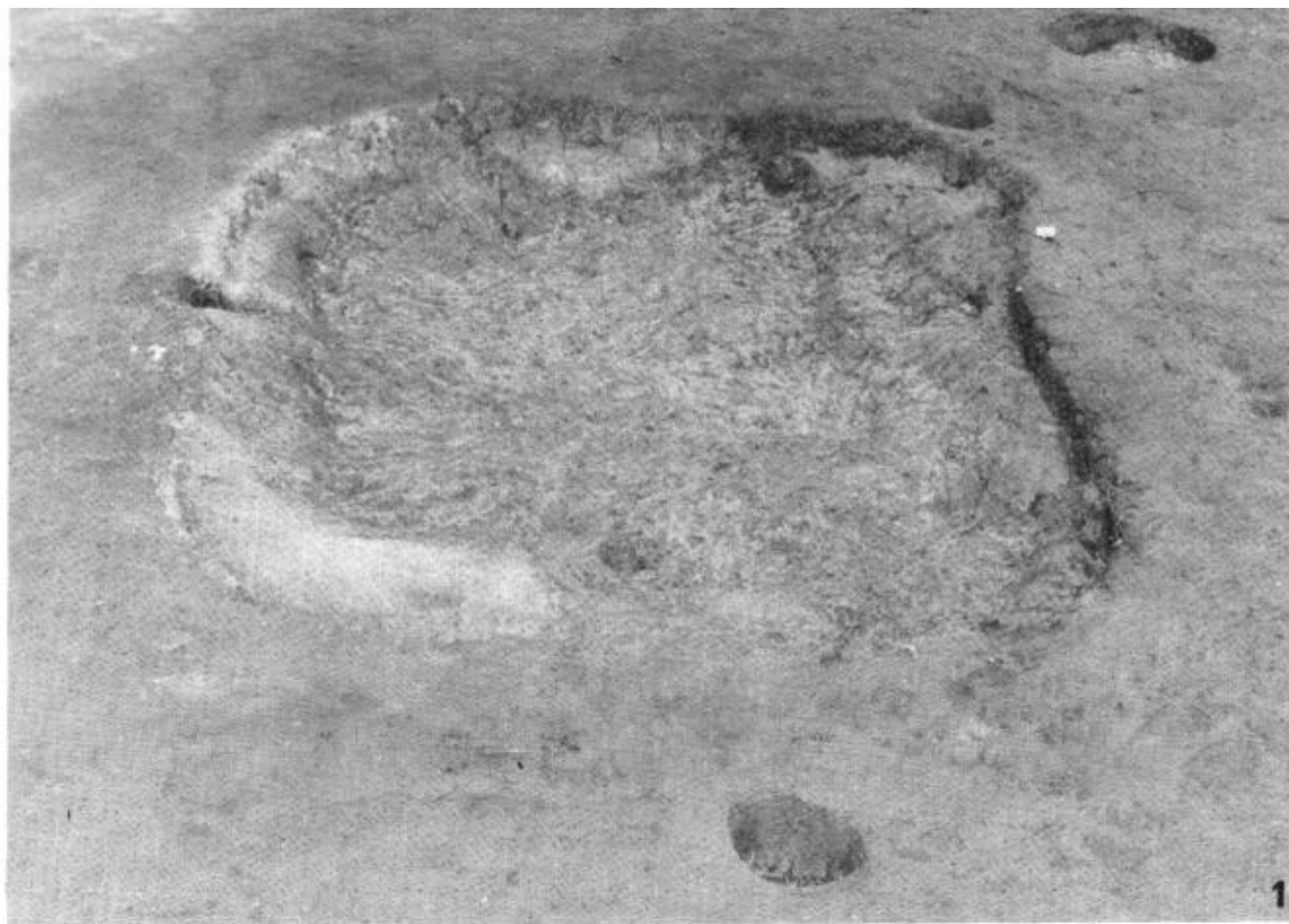
图版36 1. SK 43

2. SK 70

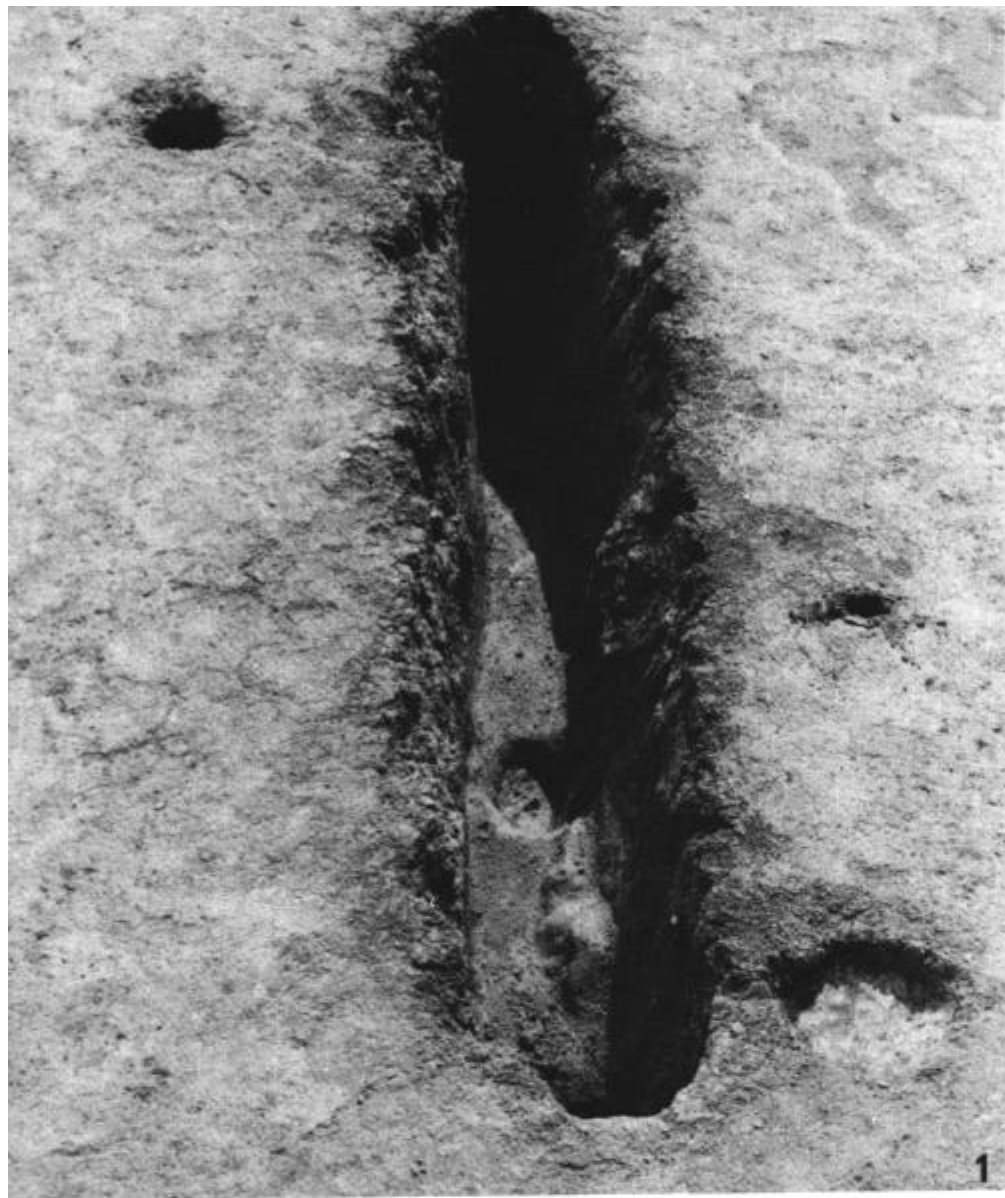


图版36 1. SK 43

2. SK 70



图版37 1. SK 71 2. SK 89



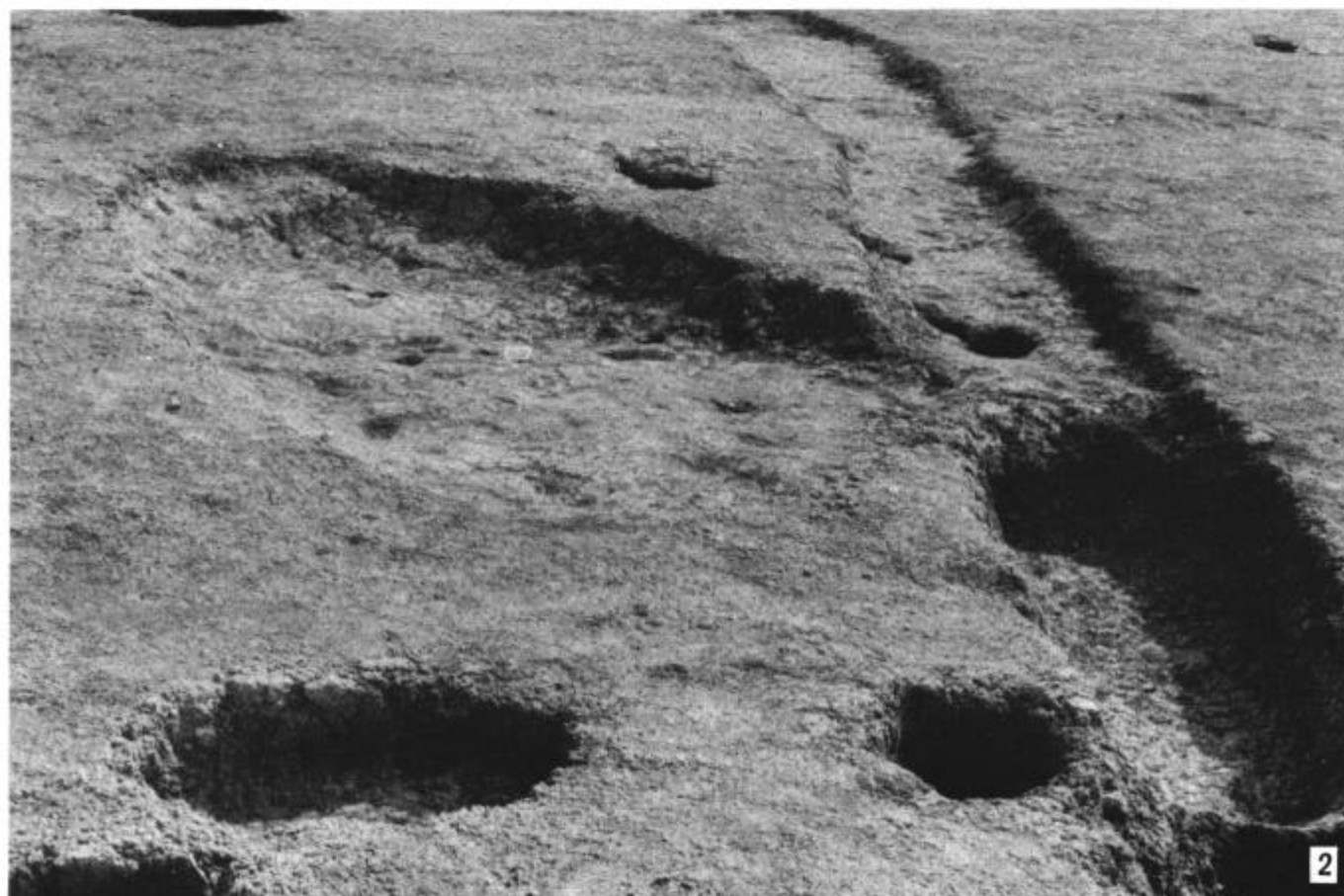
1. TP 01

2. TP 02

图版38

1. SD 03 (西▶東)
2. SK 12・SD 03 (西▶東)

图版39





图版40 1. SD 38 · 41 (南▶北)
2. SD 51 (南▶北)

1.
S D 33・34の確認面
(北▶南)

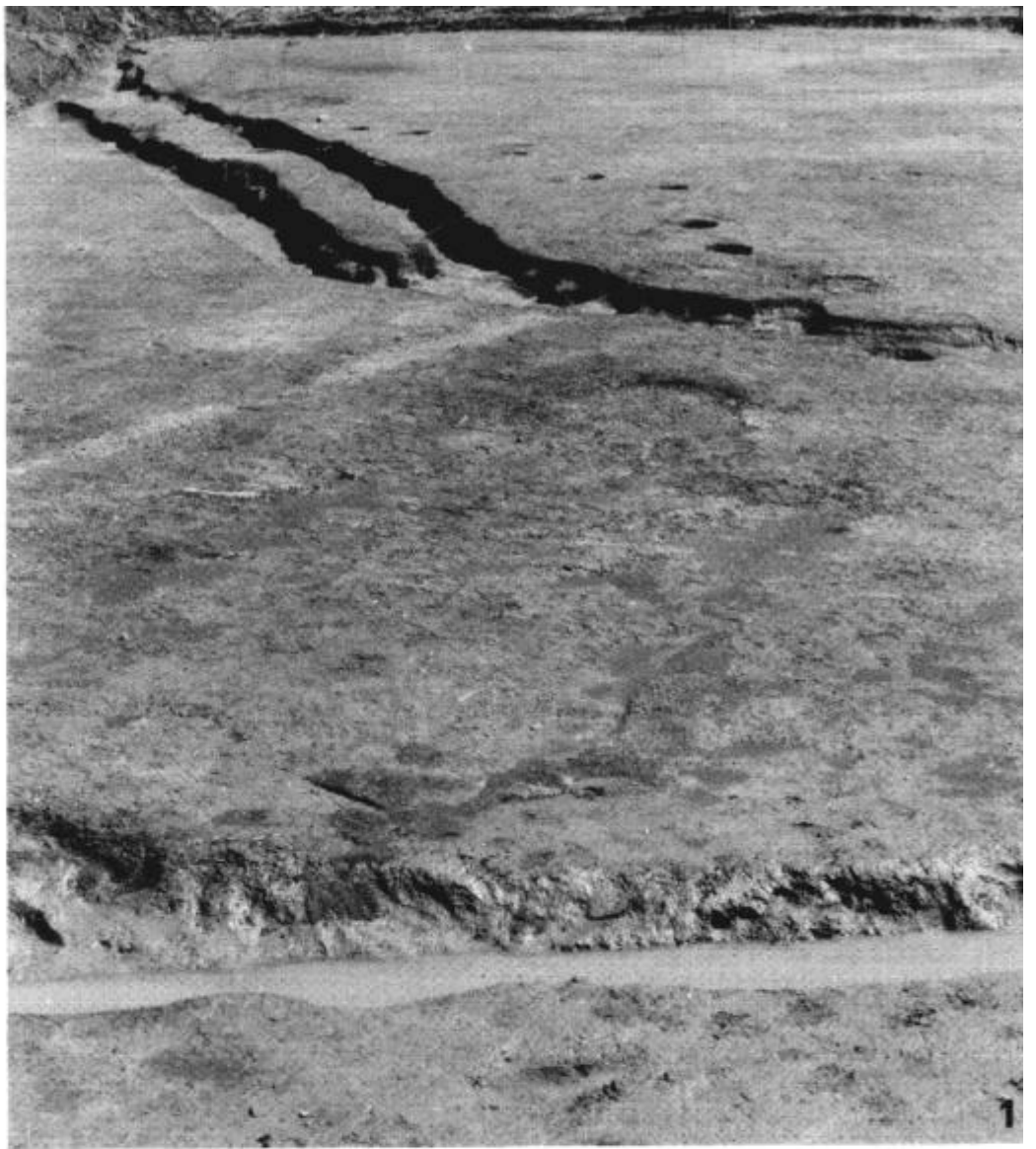
2. S D 33・34

図版41





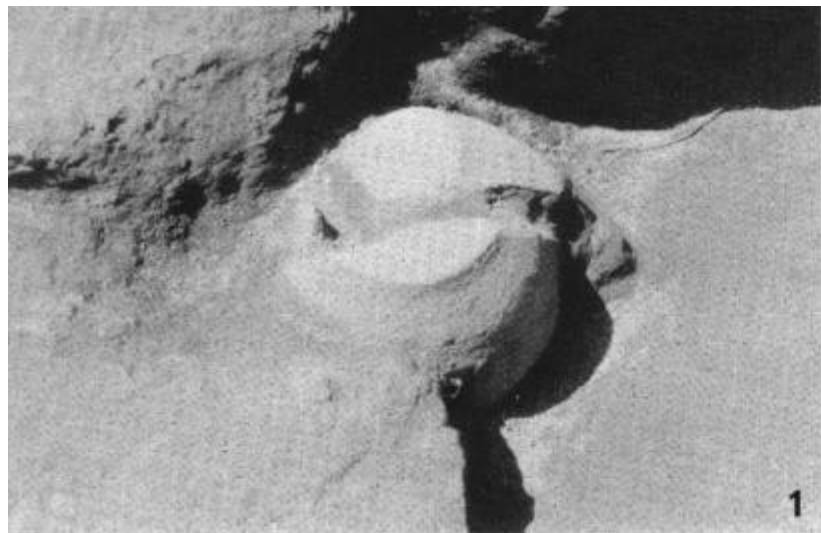
1. S D 53 (南▶北)
2. S D 46 (東▶西)



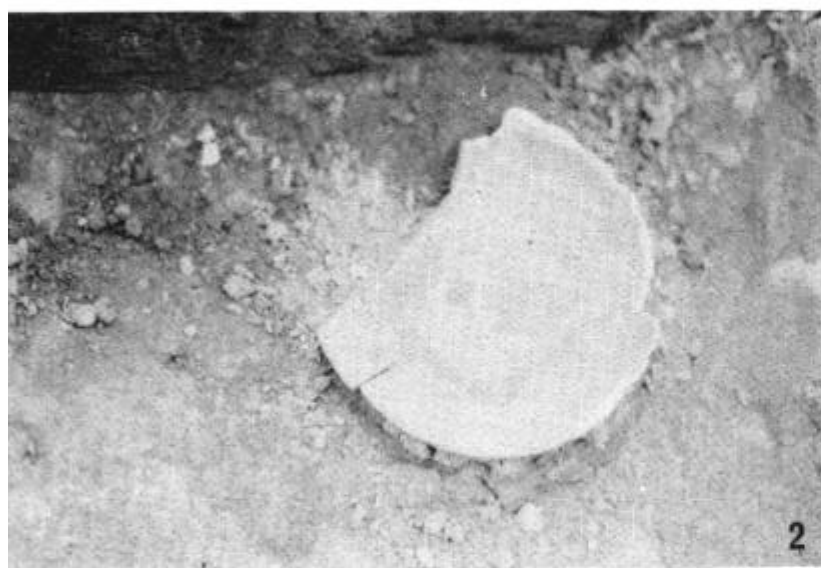
1. S D 20 ・ 25 ・
58 (西▶東)

2. S D 58 の延長か
(南▶北)

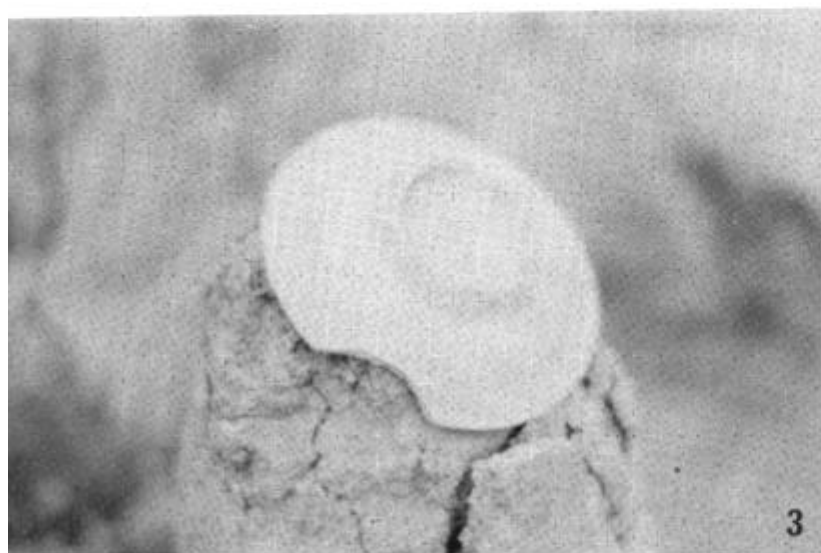




1. S I 02の土師器甕

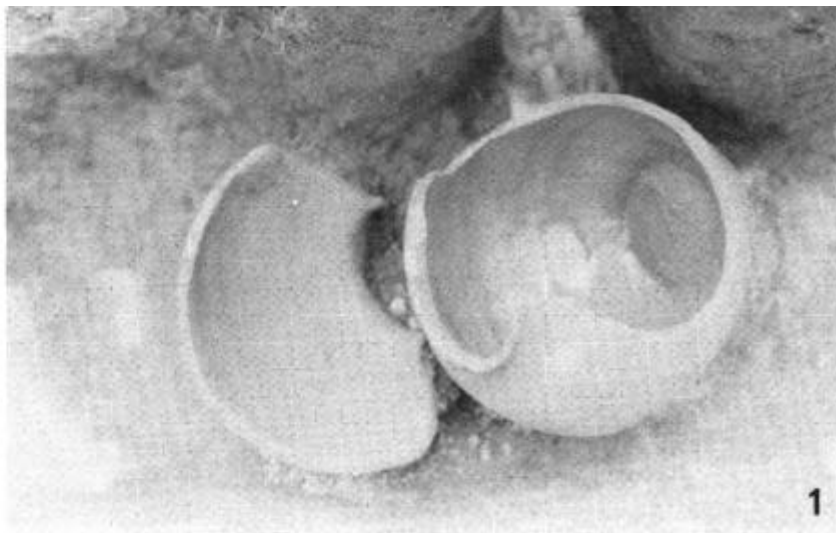


2. S I 05の土師器杯

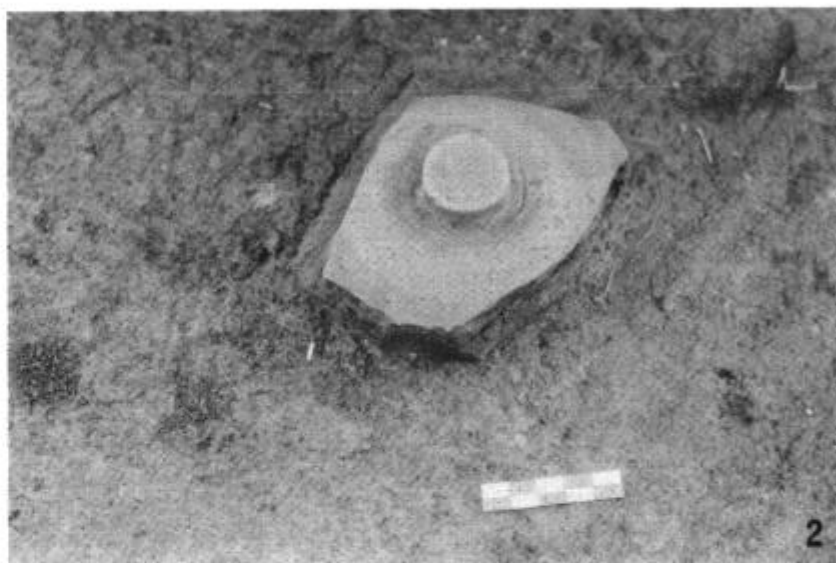


3. S I 05の須恵器杯

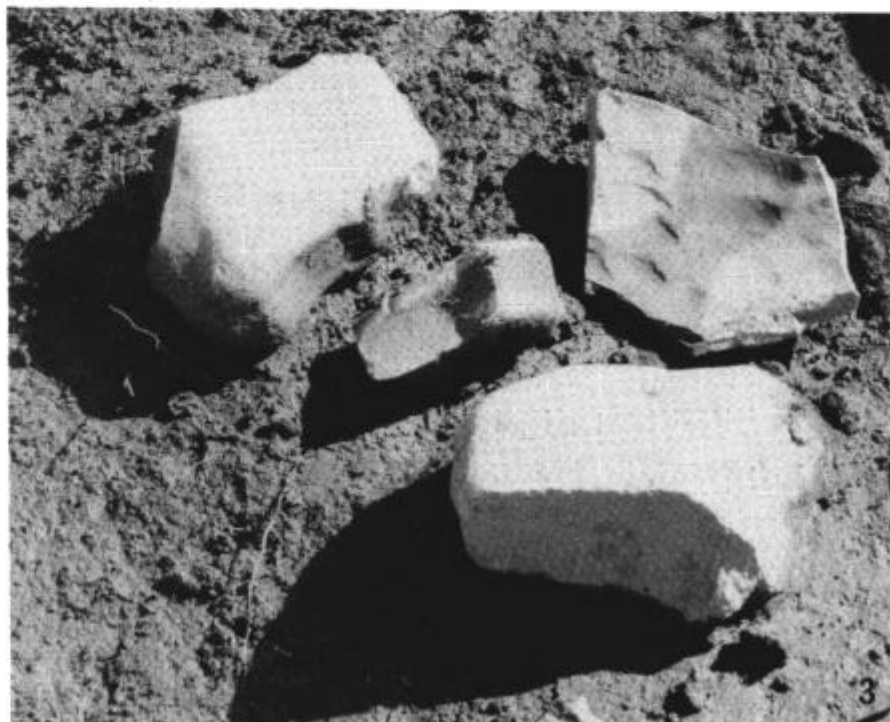
1. SK 30 の須恵器壺



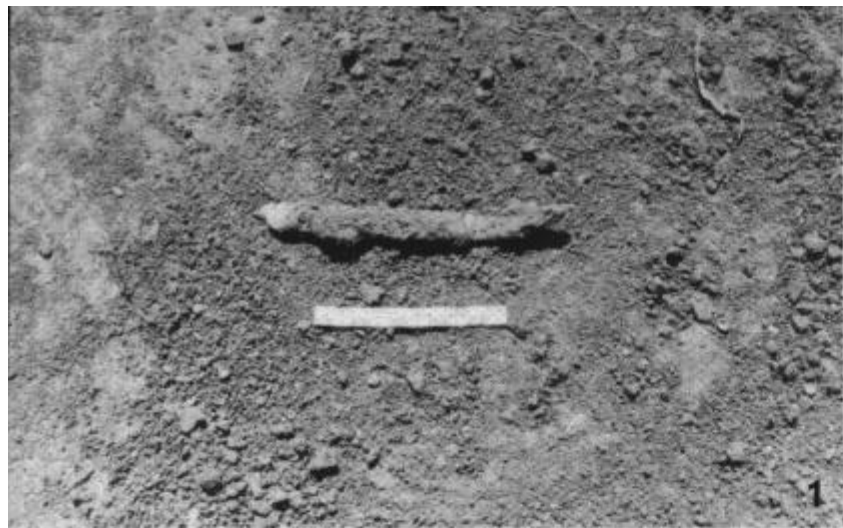
2. SK 06 の須恵器蓋



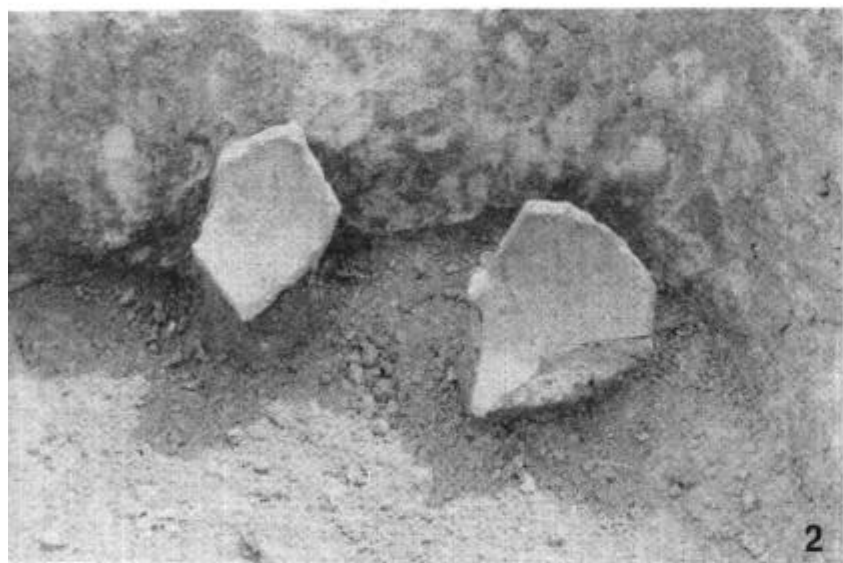
3. SK 89 の珠洲系土器



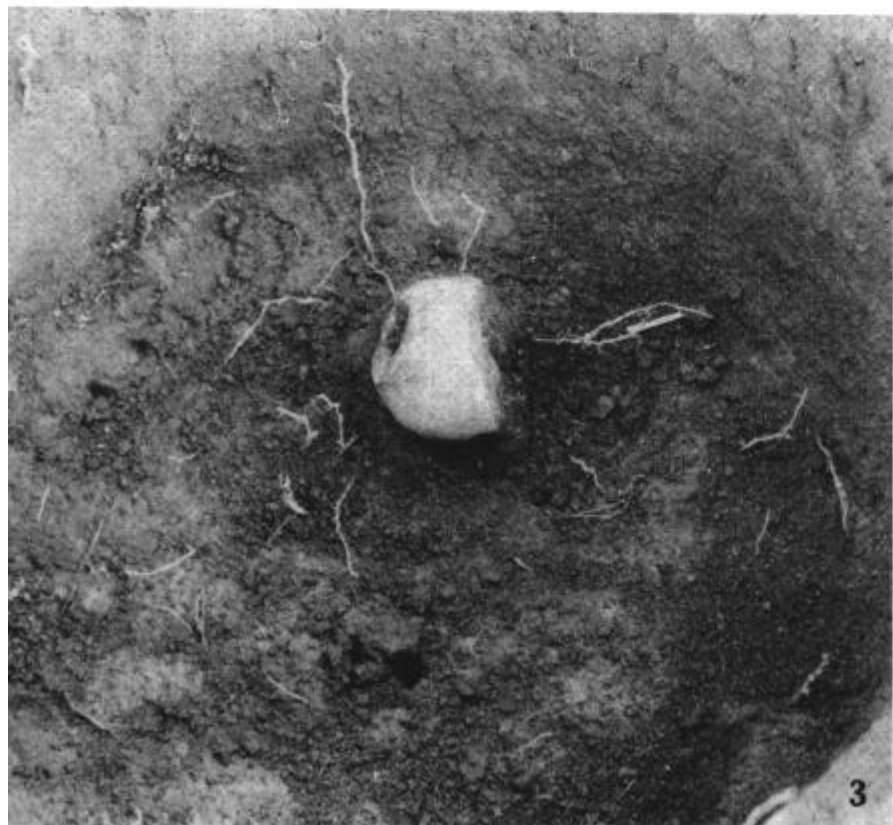
図版45 遺物出土状態



1. S E 05 の鉄器 (刀子)



2. S E 01 の播鉢



3. 土壇内の土鍾

1. S D 47 の青磁



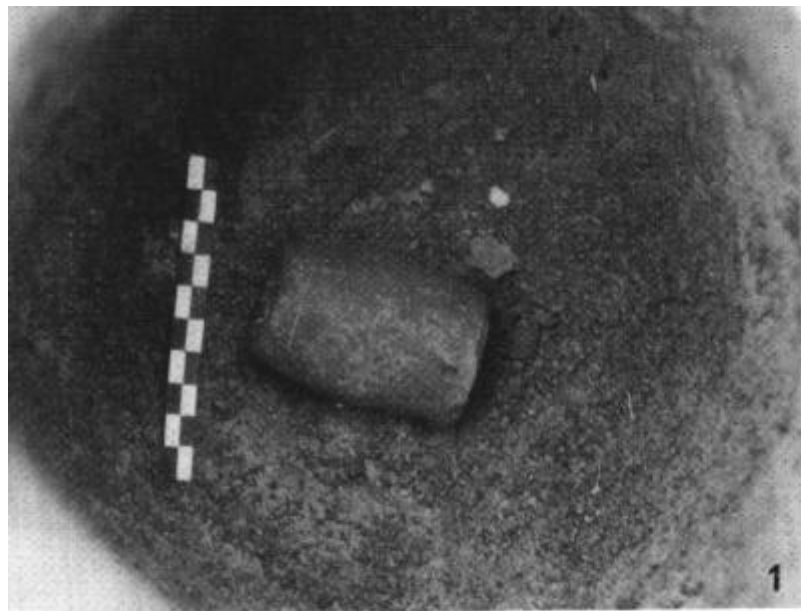
2. 溝内の土錘



3. 溝内の土錘



図版47 遺物出土状態



1. 柱穴内の土鍾

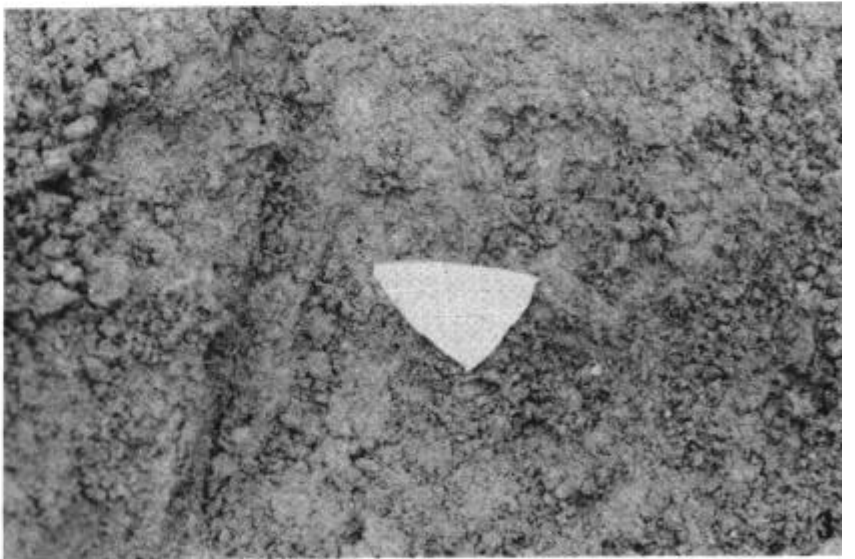
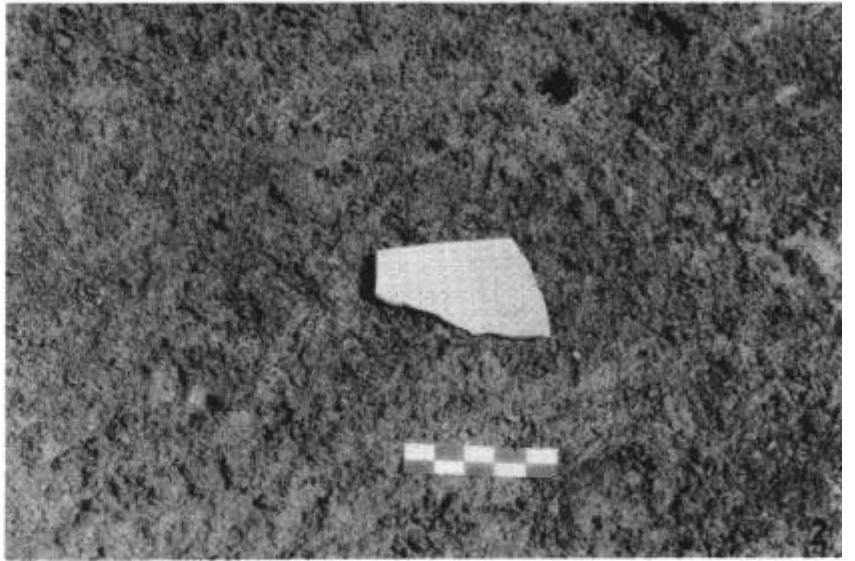


2. 紡錘車

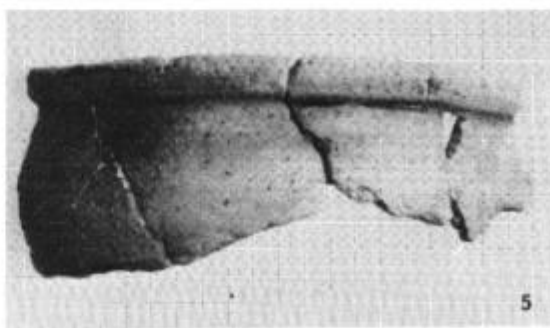
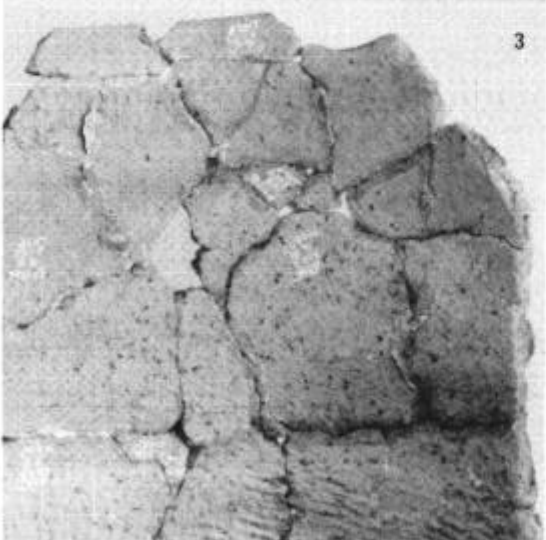
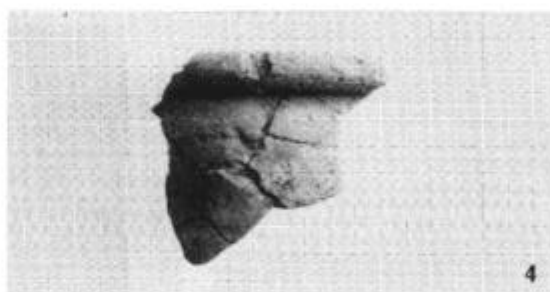
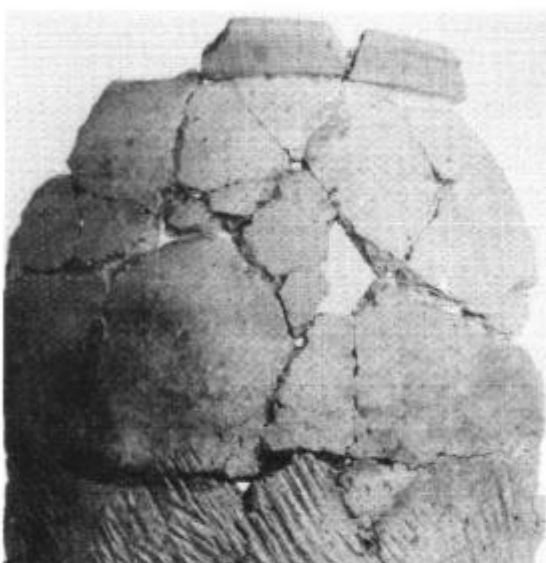
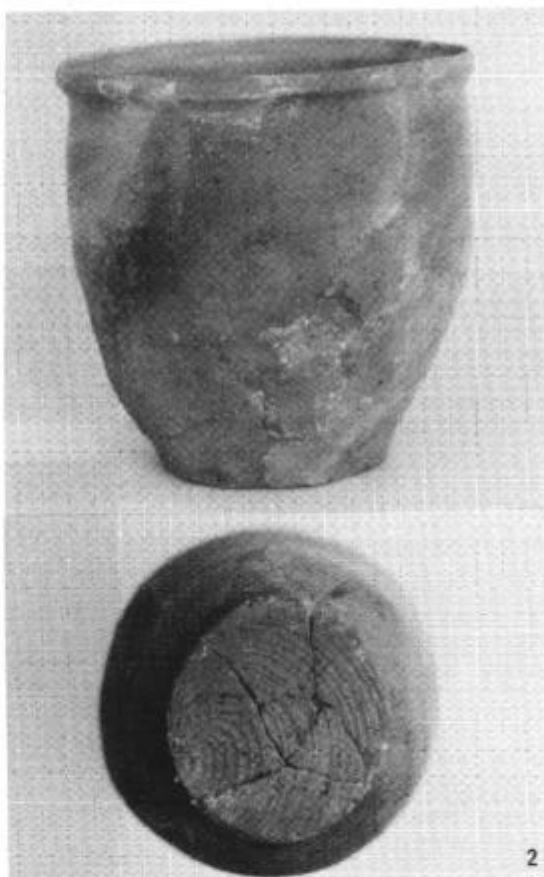
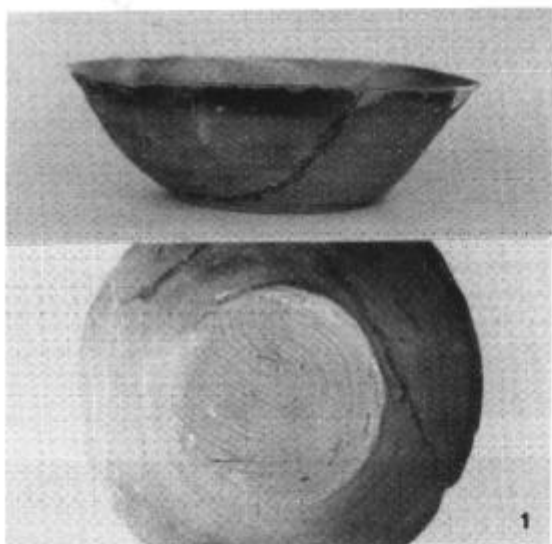


3. 砥石

図版48 遺物出土状態



图版49 青磁出土状态



図版50 遺構内出土遺物
1・2 SI 02 3~5 SI 03

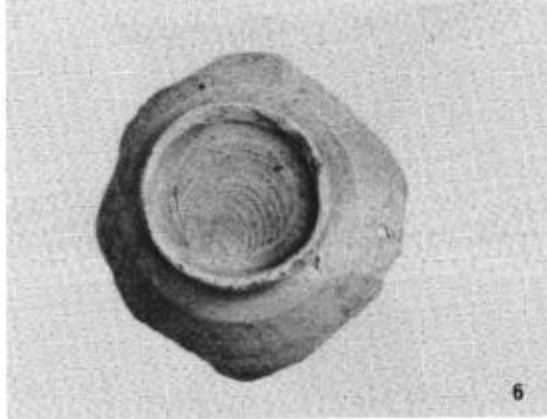
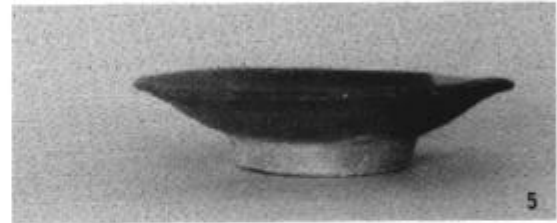
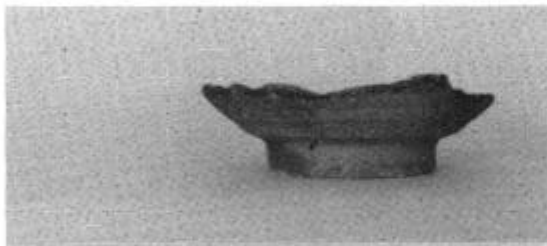
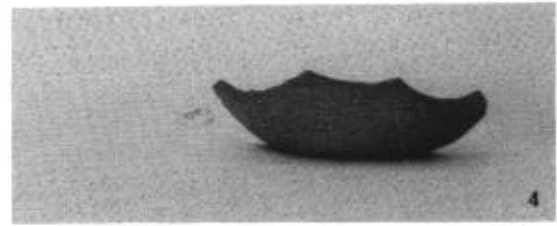
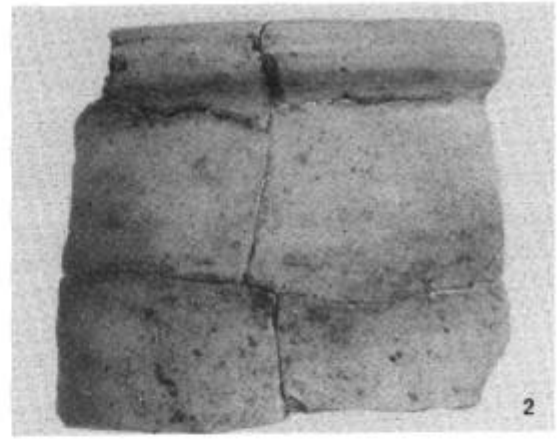
館コ、鹿島館遺跡では、館主の居宅を想定しておられる。

西側のグループと東側のグループには時間的前後関係があると思われるが、出土遺物をみる限りでは、いずれも珠洲古窯第Ⅱ期に比定される土器が出土しているのみである。

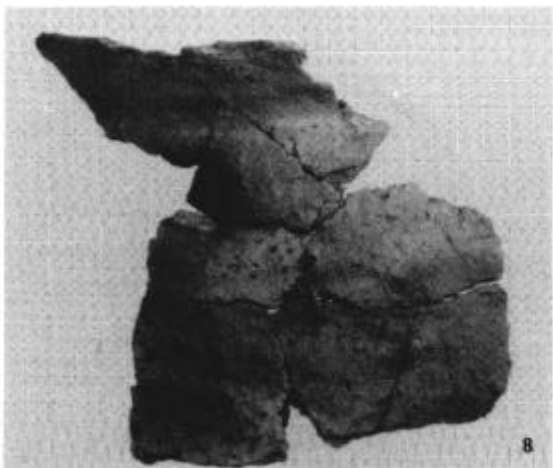
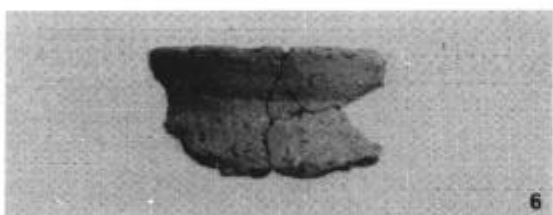
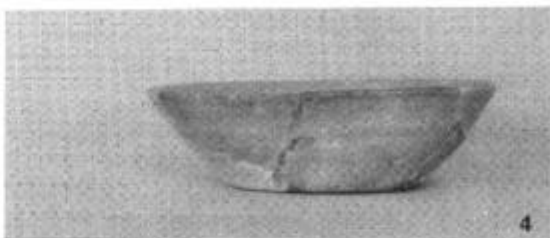
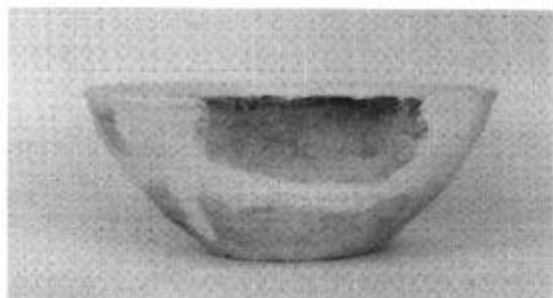
本遺跡は、日本海に通ずる古代からの道路沿いに位置し、竹生川・埴川流域を一望できる。交易・生産に適した地であったと思われるが、中世末期の文献である「出羽国秋田郡知行目録」・「秋田実季分限帳」・「秋田実季侍分限」には登場しない。中世前半に廃棄された集落である。

(永瀬)

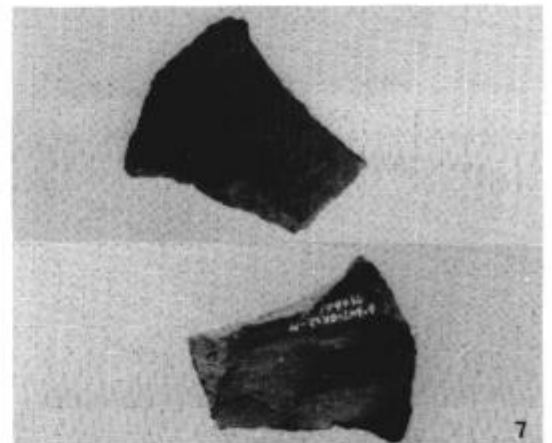
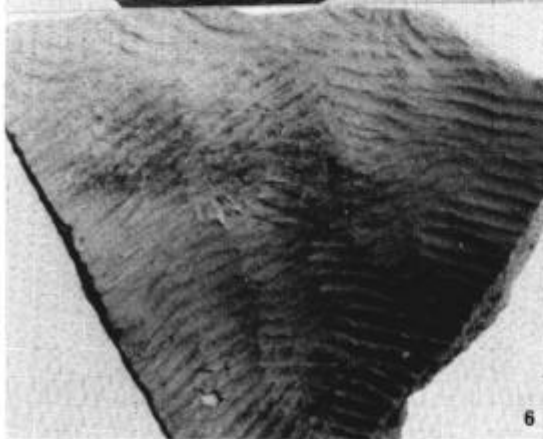
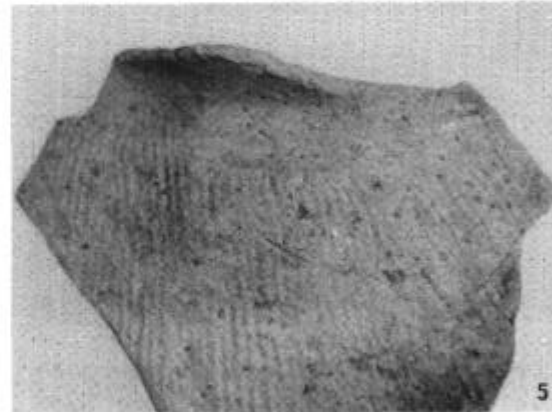
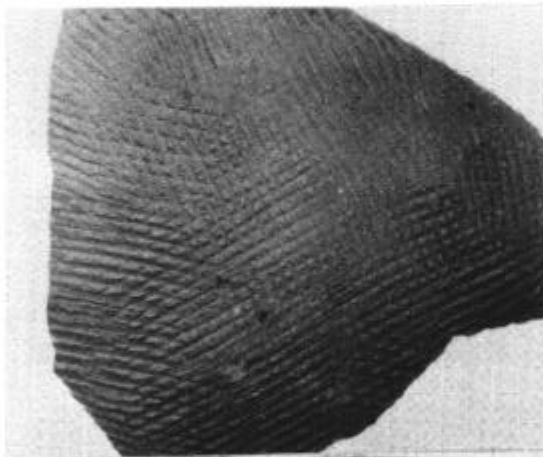
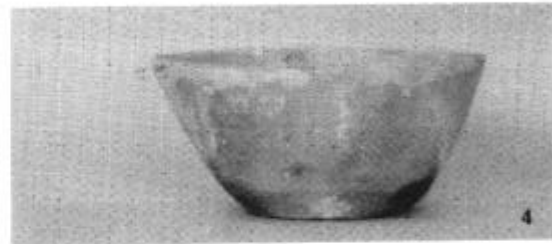
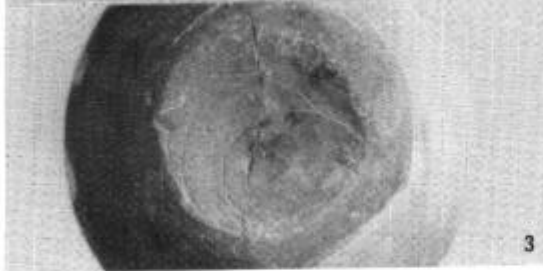
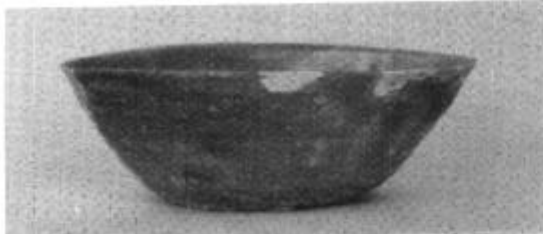
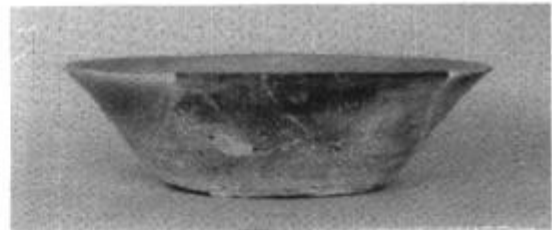
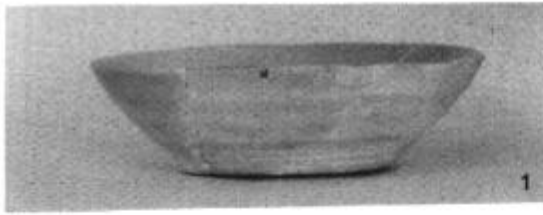
- 註1 能代開拓建設事業所『東北農政局能代開拓建設事業概要書』 1973年
- 註2 秋田県教育委員会『秋田県遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第60集
1979年
- 註3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』 1976年
- 註4 秋田県『秋田県史資料古代・中世』 1961年
- 註5 新野直吉・遠藤巖編『日本地名大辞典 5 秋田県』 角川書店 1980年
- 註6 白石建雄・工藤英美 秋田第4紀研究グループ「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」
『秋田大学教育学部研究紀要第27集』 1977年
- 註7 白石建雄・潟西層団研『男鹿半島の第4系』巡検案内書 日本地質学会 1979年
- 註8 秋田県教育委員会『秋田県の民家』 1973年
- 註9 佐藤成右氏(能代市木工指導所)のご教示による。
- 註10 橘善光「弥生土器一東北・北東北2」『考古学ジャーナル第162号』 1979年
- 註11 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題—」
『柏倉亮吉教授還暦記念論文集・山形県の考古と歴史』山教史学会 1967年
- 註12 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』 1957年
- 註13 秋田県教育委員会「海老沢窯跡緊急発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第32集
1975年
- 註14 平田天秋・吉岡康暢「珠洲古窯跡」『石川県珠洲市史第一巻』 1976年
- 註15 中世陶器窯が数基存在し、珠洲古窯第Ⅰ期に比定されるようである。
- 註16 井上喜久夫(宮内庁・陵墓課)・武田孝義(武田事務所)氏等のご教示による。
- 註17 岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所 1974年
- 註18 大館市史編さん委員会『大館市片山館コ発掘調査報告書』 1974年
- 註19 秋田市都市開発部、秋田市教育委員会『下夕野遺跡』 1979年
- 註20 岩手県埋蔵文化財センター『岩手県文化財発掘調査略報(昭和52年度付)』 1978年
- 註21 北上市教育委員会『鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ』 1975年



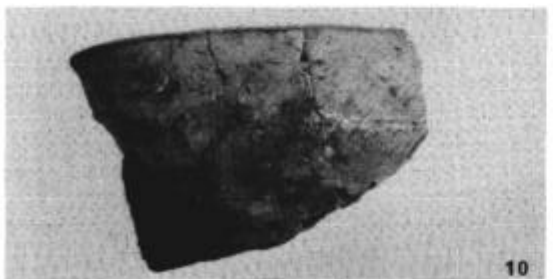
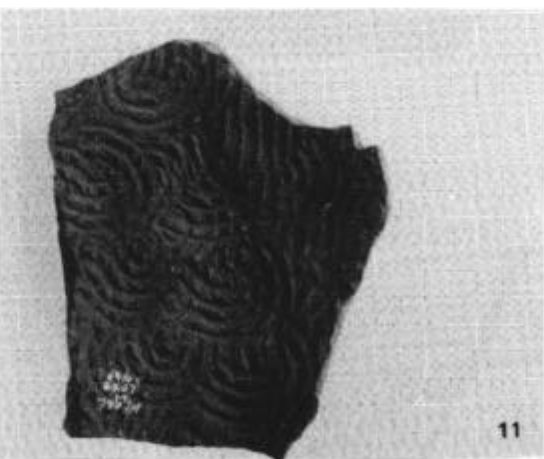
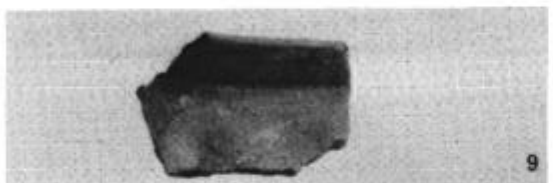
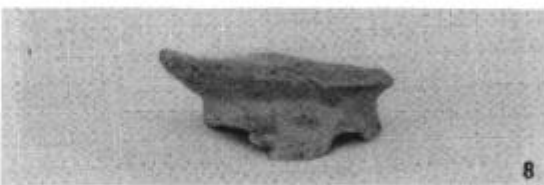
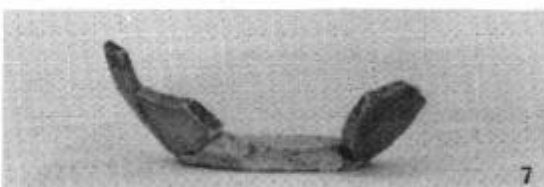
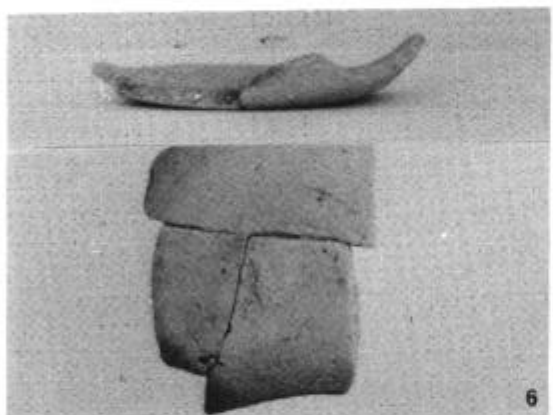
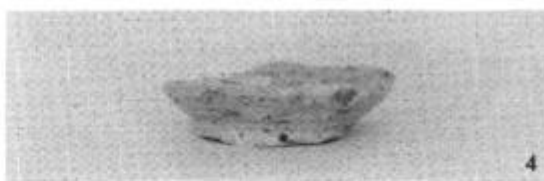
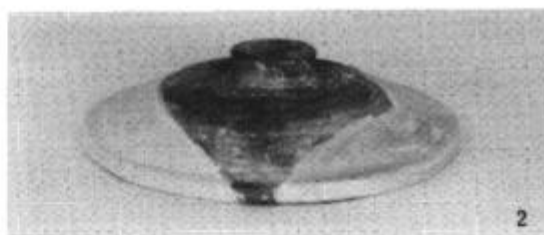
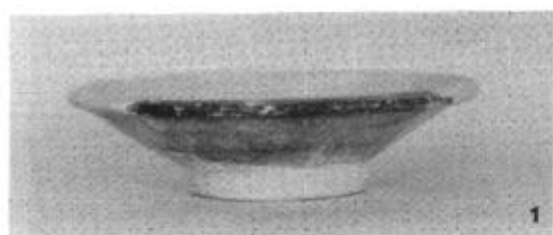
図版51 遺構内出土遺物
1・2 S I 04 3~8 S I 05



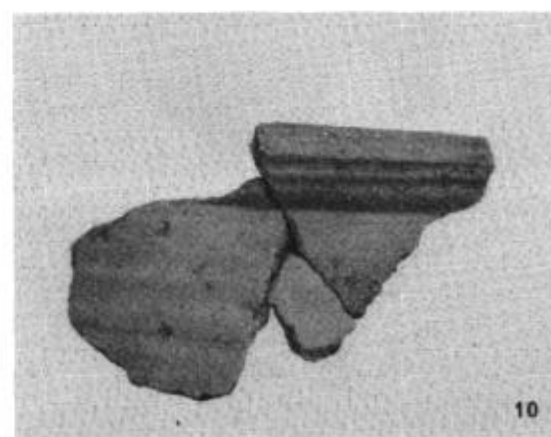
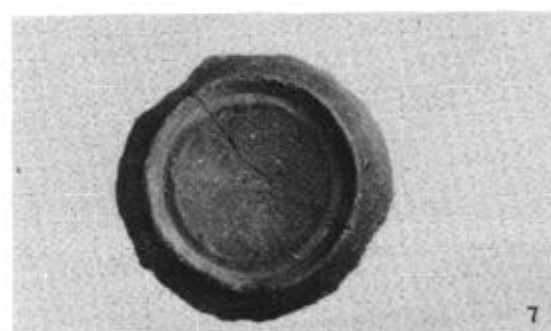
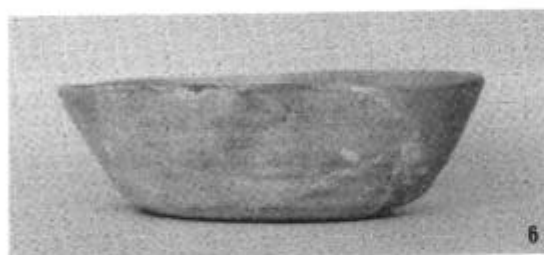
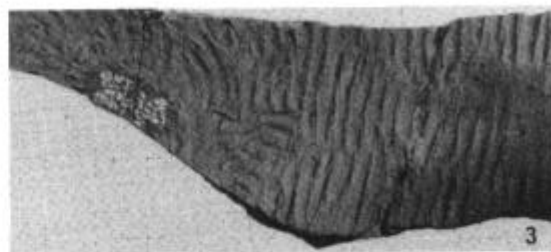
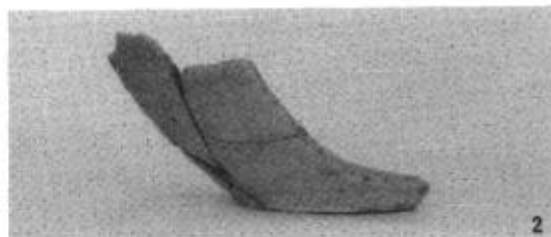
図版52 遺構内出土遺物
1~3 S I 06 4~9 S I 07



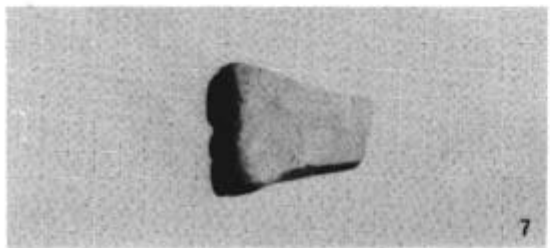
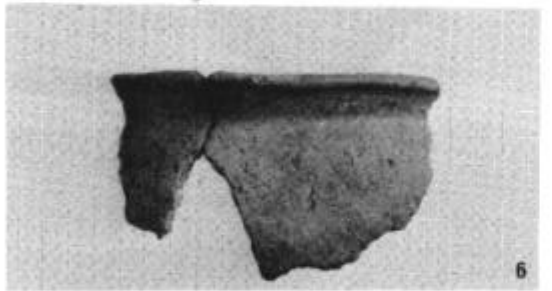
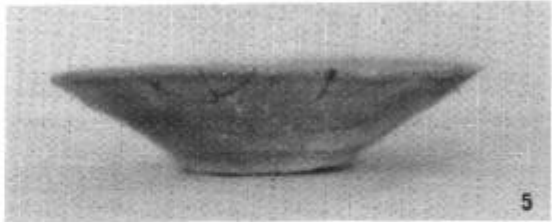
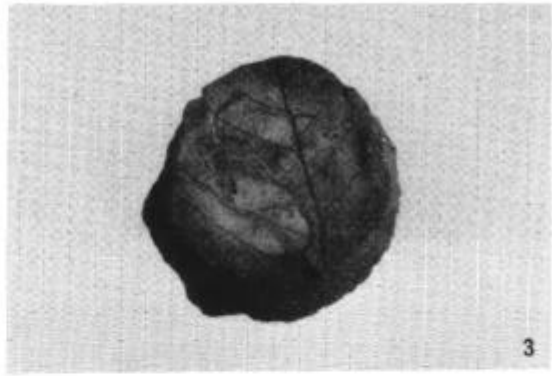
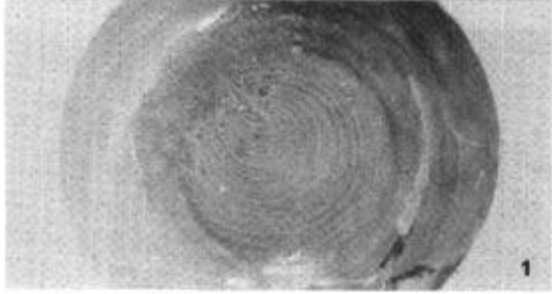
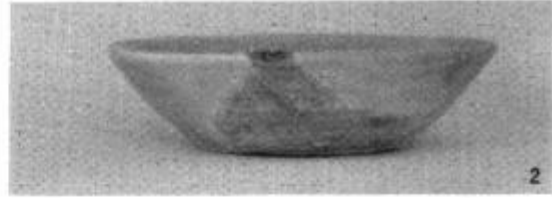
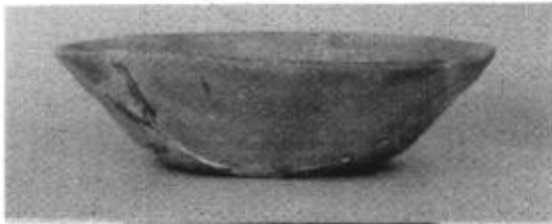
图版53 遺構内出土遺物
1~6 SK01 7 SK02



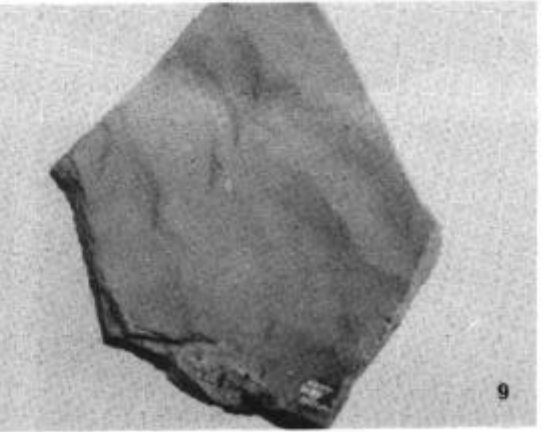
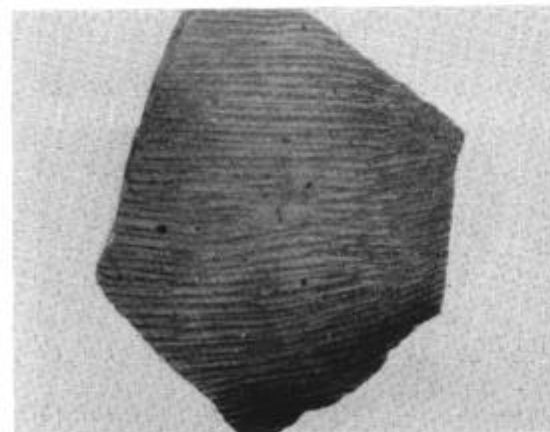
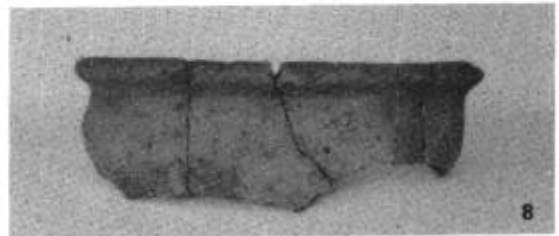
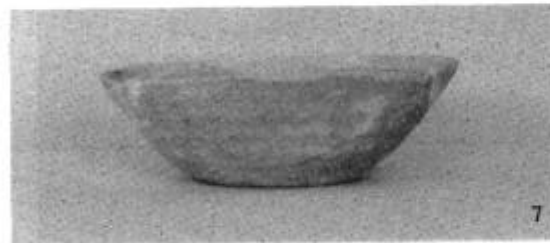
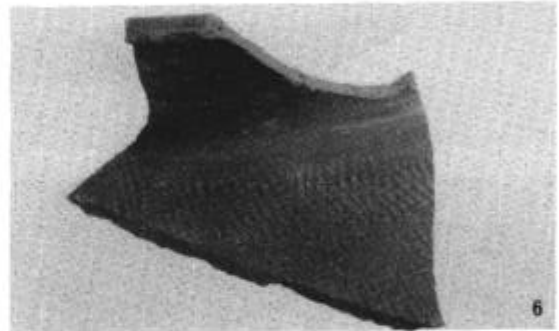
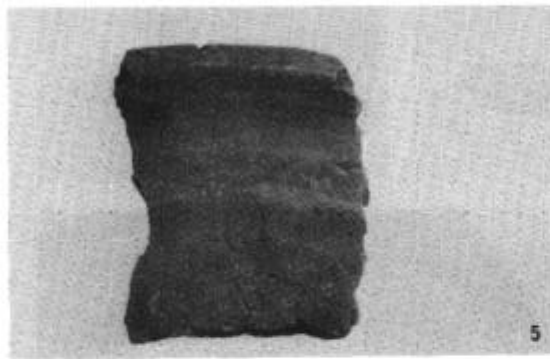
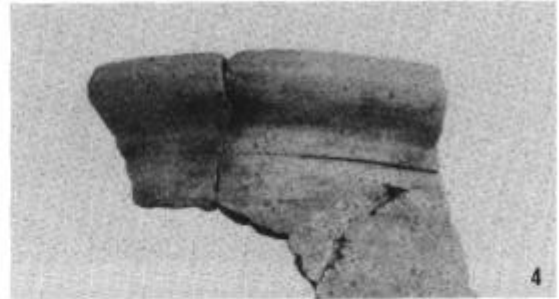
図版54 遺構内出土遺物
1~5 SK06 6~11 SK07



図版55 遺構内出土遺物
 1 SK08 2・3 SK09
 4・5 SK10 6~10 SK16

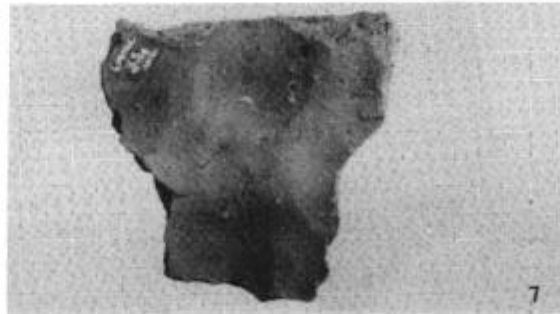
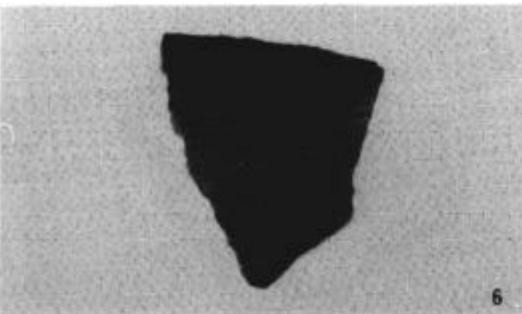
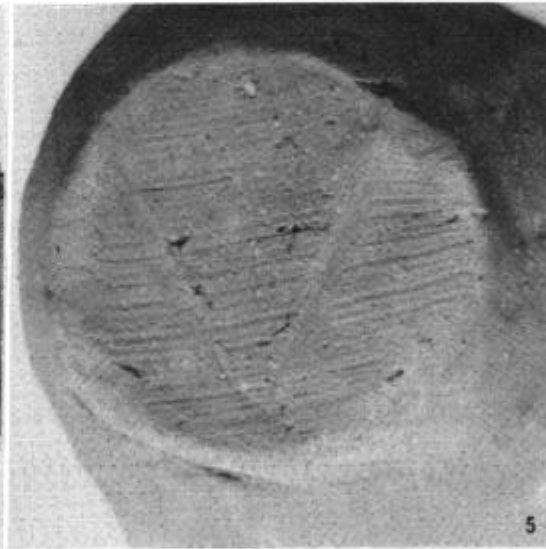
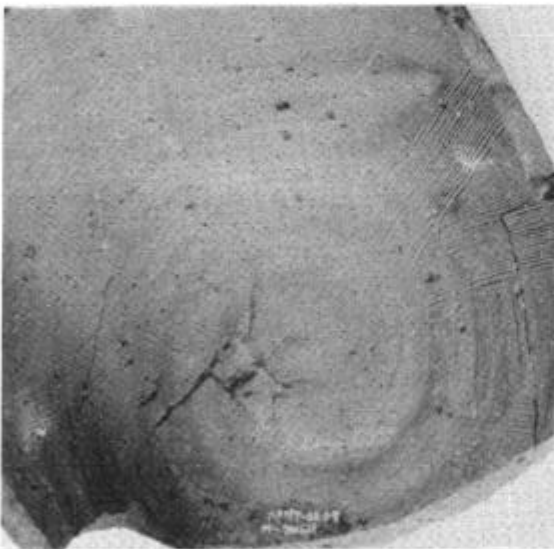
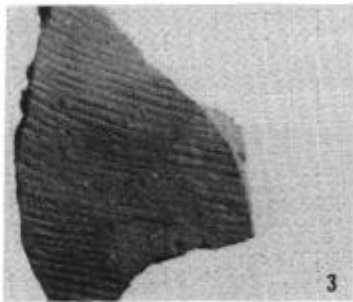
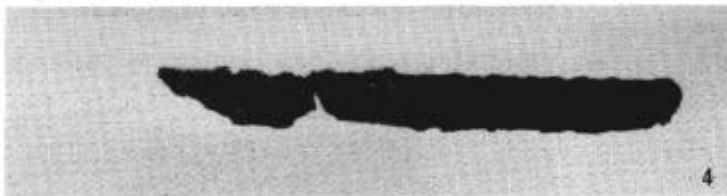
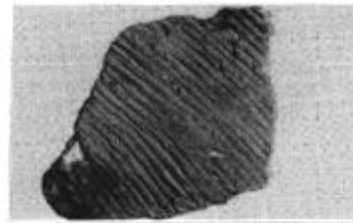


図版56 遺構内出土遺物
 1~3 SK 26 4~7 SK 30
 8 SK 38



図版57 遺構内出土遺物

1~5 SK41 6 SK71
7・8 SK76 9 SK89

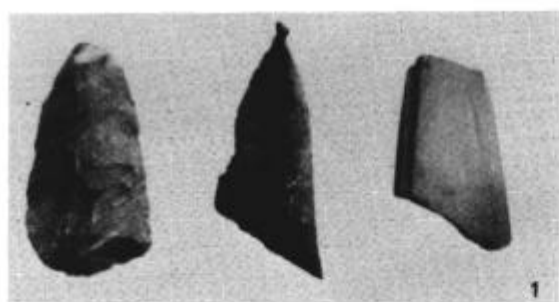


図版58 遺構内出土土器

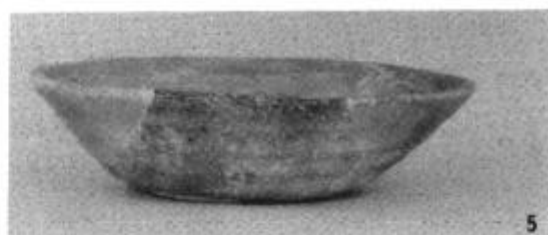
1 SE 01 2・3 SE 02

4 SE 05 5・6 SE 07

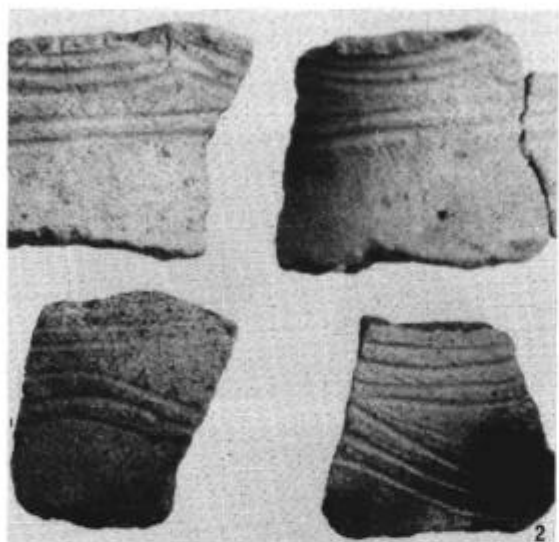
7 SE 08



1



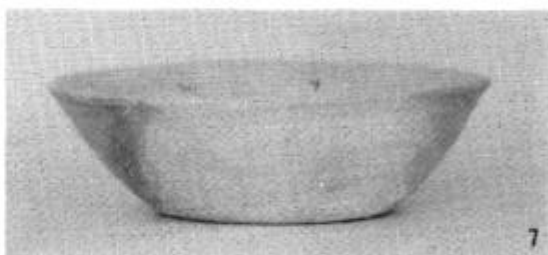
5



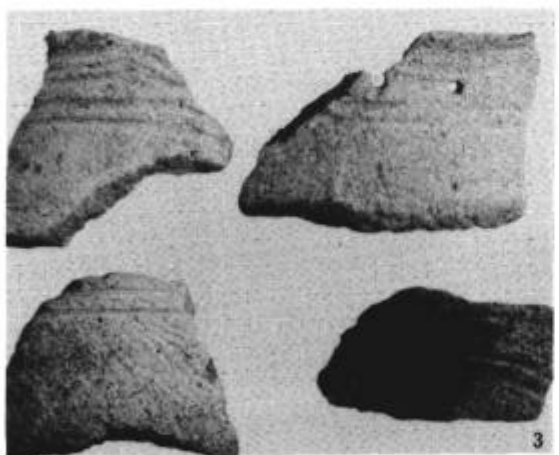
2



6



7



3



8

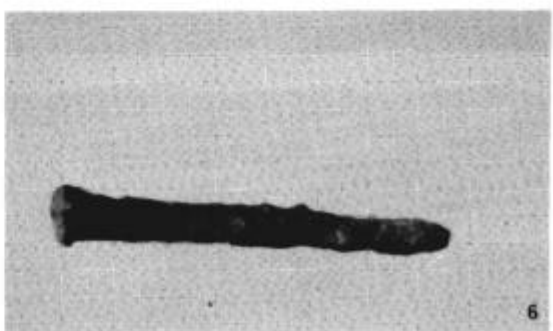
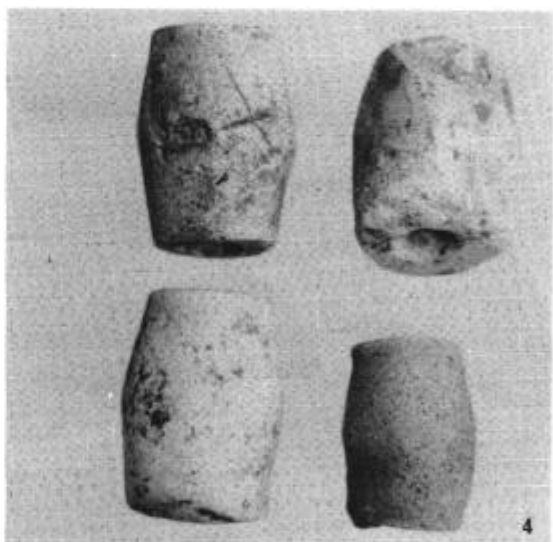
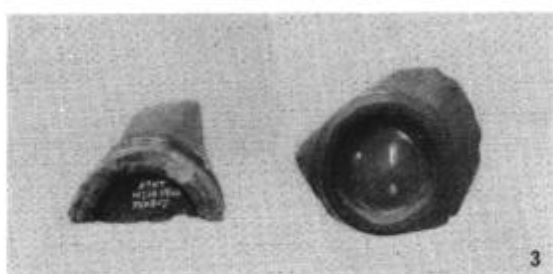
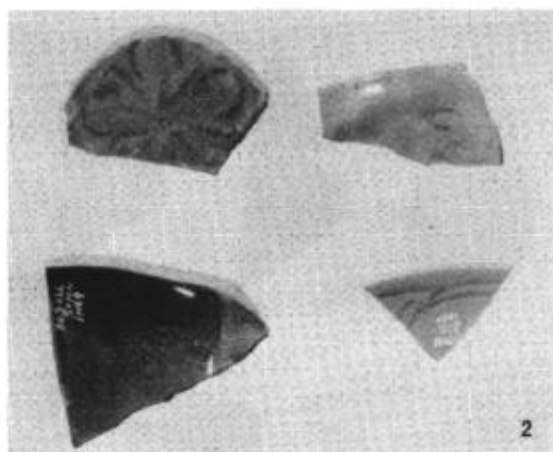
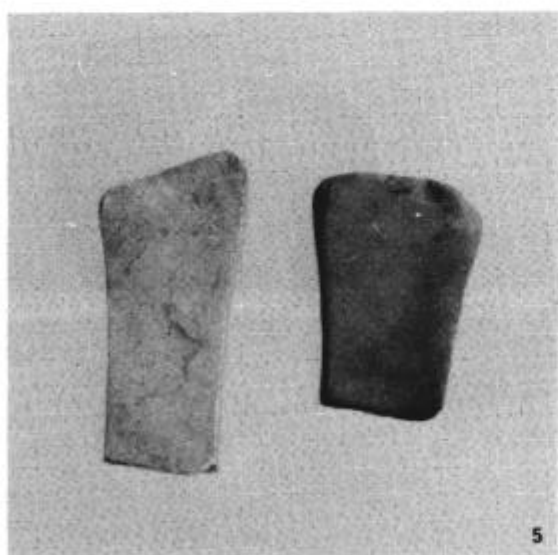
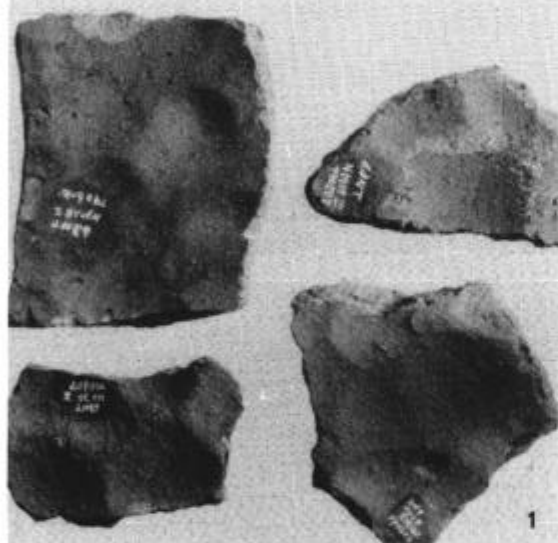
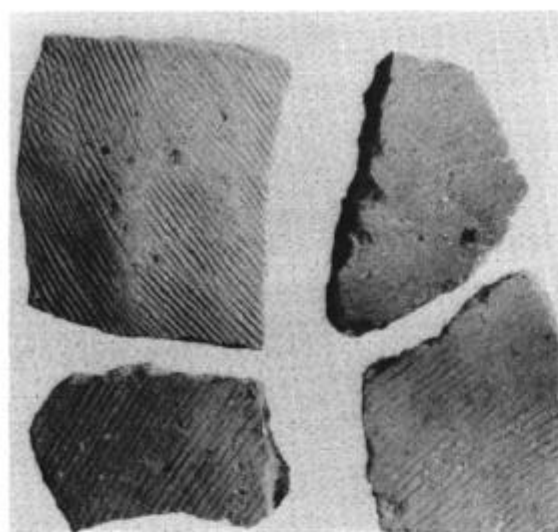


4



9

図版59 遺構外出土遺物
 1 石器 2・3 弥生式土器
 4~8 須恵器 9 土師器



図版60 遺構外出土遺物

- 1 珠洲系土器 2・3 青磁
4 土錘 5 砥石 6 鉄釘

重兵衛台 I 遺跡

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

重兵衛台 I 遺跡は、秋田県能代市坂形字重兵衛台10-61他に所在する。昭和53年度に、秋田県教育委員会が実施した国営能代開拓建設事業関係遺跡分布調査により、確認された遺跡である。

今回の発掘調査は、同事業による排水路工事計画が具体化したため、記録保存を目的に事前の緊急発掘調査を実施したものである。(大高)

2 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

調査期間 昭和54年7月17日～8月4日

調査地 能代市坂形字重兵衛台10-61 他

調査面積 1,154m²

調査員, 補佐員, 補助員, 事務局, 調査作業員, 調査協力機関 中田面遺跡参照

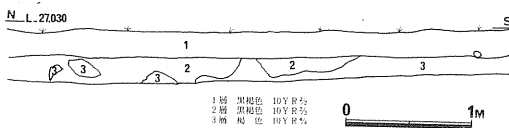
II 遺跡の立地と環境 中田面遺跡参照

III 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

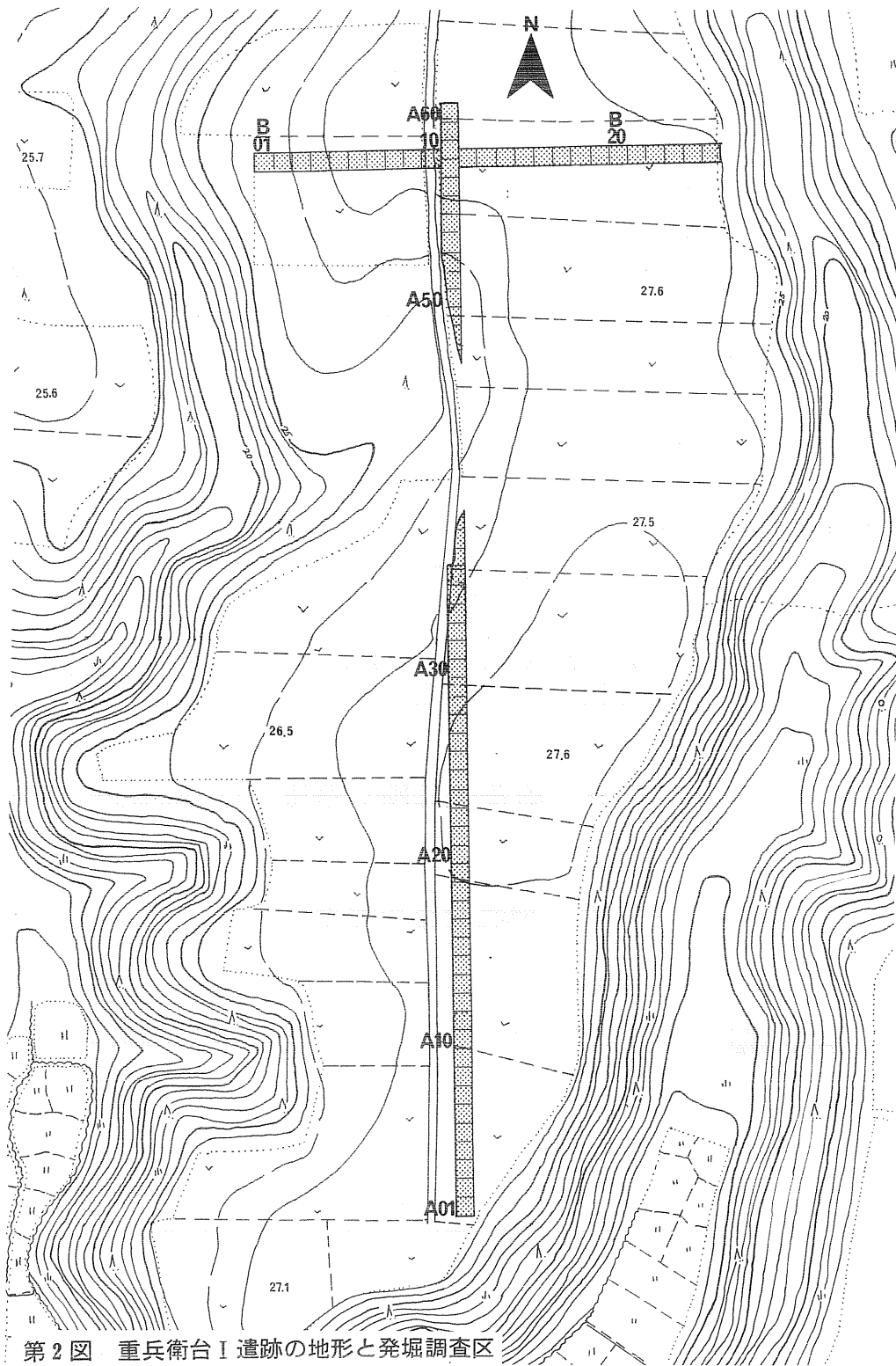
重兵衛台 I 遺跡は、北より南へのびる舌状台地にある。台地上は平坦地で、標高は27cmを測り、下の水田との比高は16m前後である。

遺跡面積は、昭和53年度の範囲確認調査で南北 230m、東西70mの16,100m²と推定されている。現状は畑地であるが、作付はなく雑草がおいしげ、農道が一本南北に走っている。



第1図 重兵衛台 I 遺跡の地層

地層は3層からなる。第1層は約20cmの厚さで水平にある耕作土で柔らかく、その下には粘性のある第2層と、ローム層である第3層とが混入している。(大高)



第2図 重兵衛台Ⅰ遺跡の地形と発掘調査区

0 100M

2 調査の方法

調査は、排水路となる中心線を基準に、4×4mのグリッドを排水路線上へ設定して実施した。南北線をA区、東西線をB区とし、それぞれのグリッドには、算用数字で通し番号をつけた。遺構の実測はすべて平板測量で行ない、遺構名は、土壌-SK、溝-SDとした。(大高)

3 調査の経過

調査は、7月17日～8月4日まで実施した。

7月17日、テント設営、発掘機材用具を運びこむ。18日、調査区の草刈りとグリッド設定。19日、調査開始。20日、SK01、02確認。21日、SK03確認。25日、各SKの土層断面実測と平板測量。SK04確認。26日、SK05確認。30日、B区の発掘調査開始。SK06確認。31日、SD01確認。SK多数確認。8月1日、SD02と12基目のSKを確認。各実測を終え、調査を終了する。4日、テント撤去。(大高)

IV 調査の記録

1 遺構と遺物

SK04土壌 方形のプランを呈すると思われる土壌の一部で、床面に不定形な焼土痕を検出した。床面は平坦で、掘り込みは鋭い。

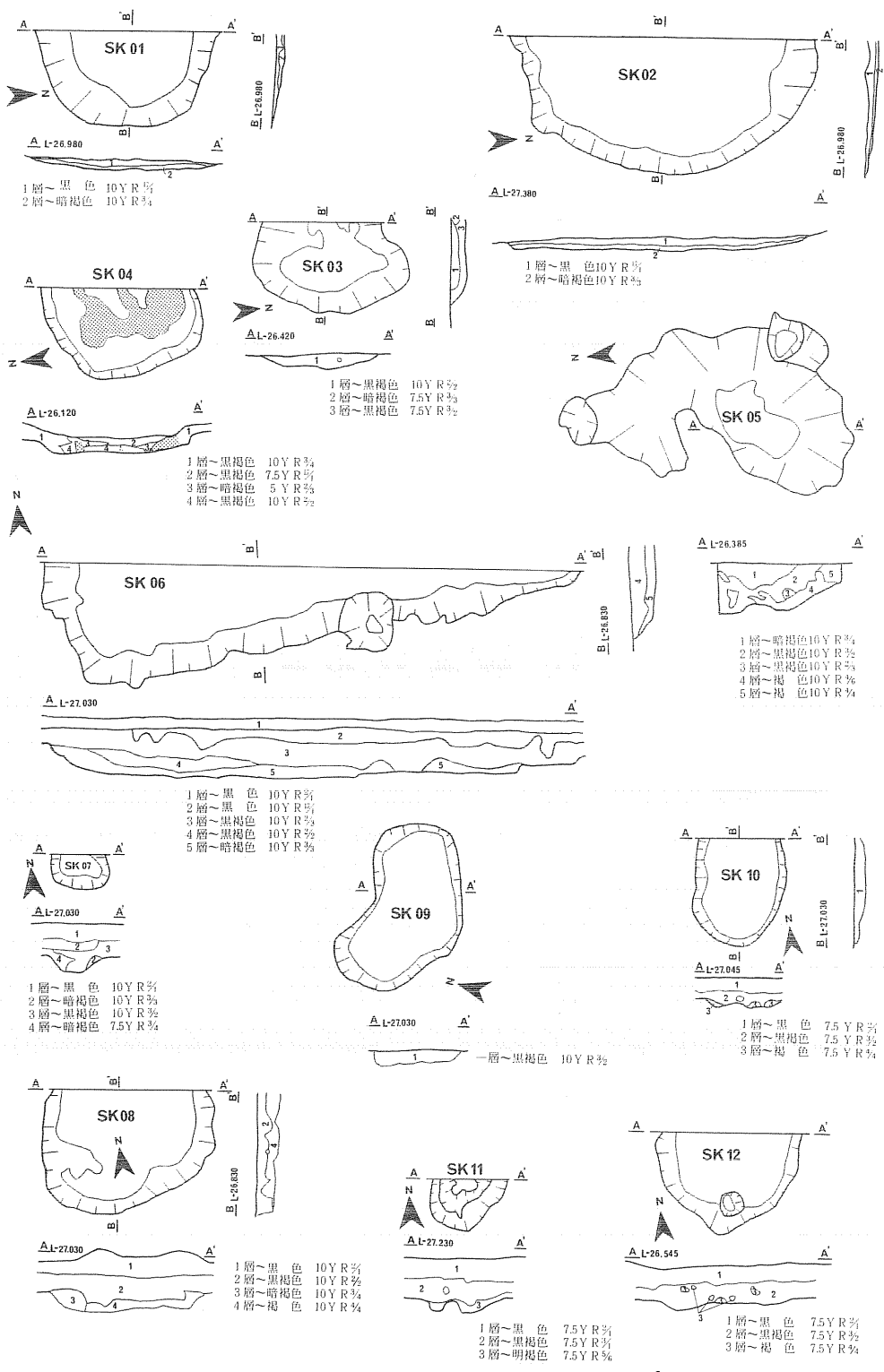
SK05土壌 不整の楕円形を呈し長軸3.40m、短軸1.20mで、深さは40～60cmと一定していない。床面は凹凸が激しく、壁面も雑である。

SK06土壌 確認段階で、東端部より北部へ曲りをみせる方形プランの一辺と思われ、住居跡の可能性も考えられる。掘り込みは皿状になされ、壁面は鋭く床面は平坦でしまっている。

SK09土壌 エンドウ豆状の楕円プランを呈し、長軸2.00m、短軸1.00m、深さ15cmで床面は多少荒れているが、ほぼ平坦である。

SD01溝 B19グリッド南側部より北西へ傾斜を持ち、グリッド内で途絶えている。上面巾は0.8～1.20mと不定で、深さは20cm前後である。掘り方は鍋底型である。

SD02溝 B03グリッド北側部より西南へ傾斜を持ち、グリッド内を貫通している。上面巾は0.8～1.20mと不定で、深さは浅く15cmである。掘り方は鍋底型である。



第3図 SK 01 ~ 12 実測図

2 遺構外の遺物

石器（スクレイパー）、及び須恵器片を検出。須恵器は甕の胴部片で、外面は摩耗が激しいが条線状の叩き痕を認め、内面には比較的深い幅広の圧痕を留めている。（熊谷）

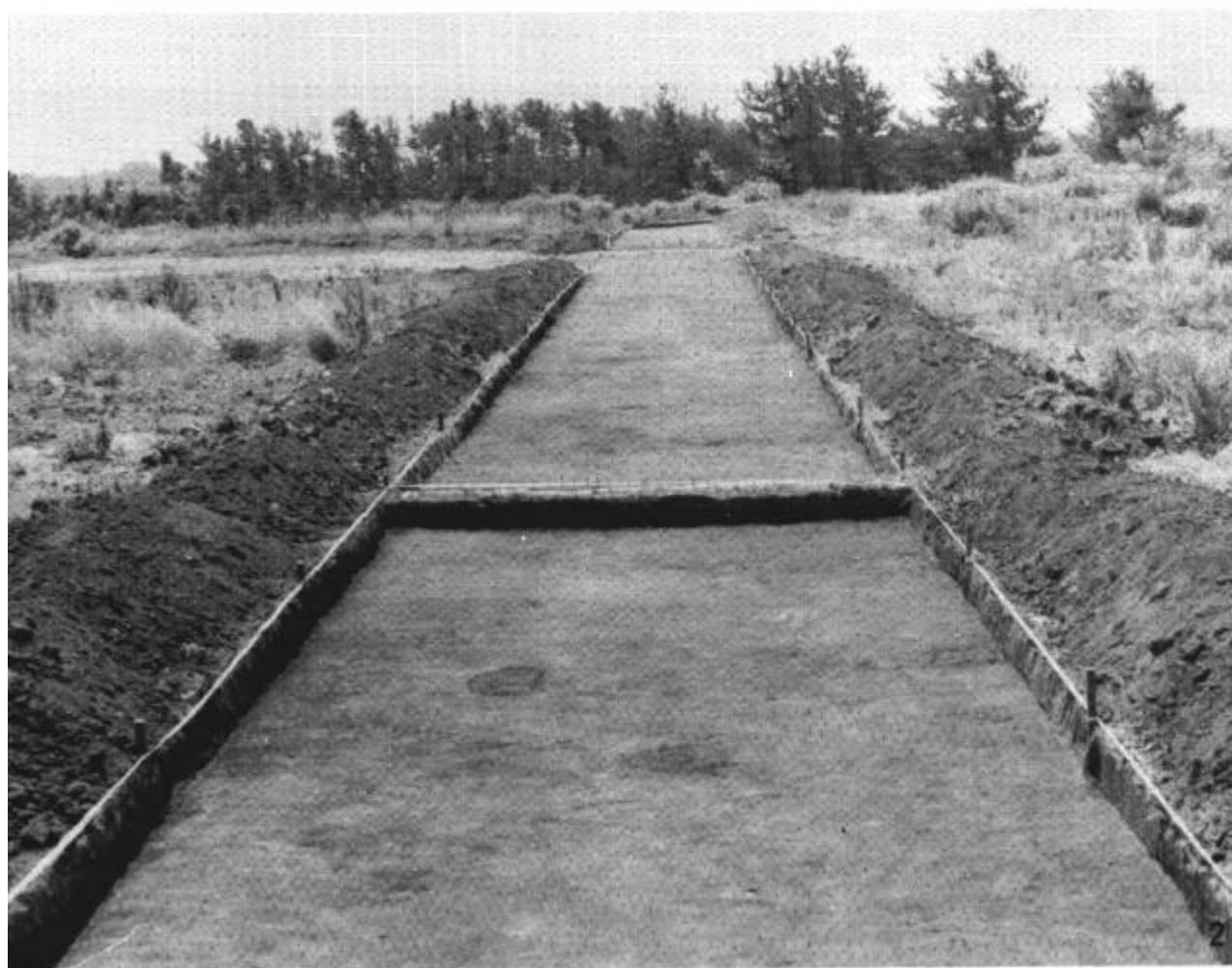
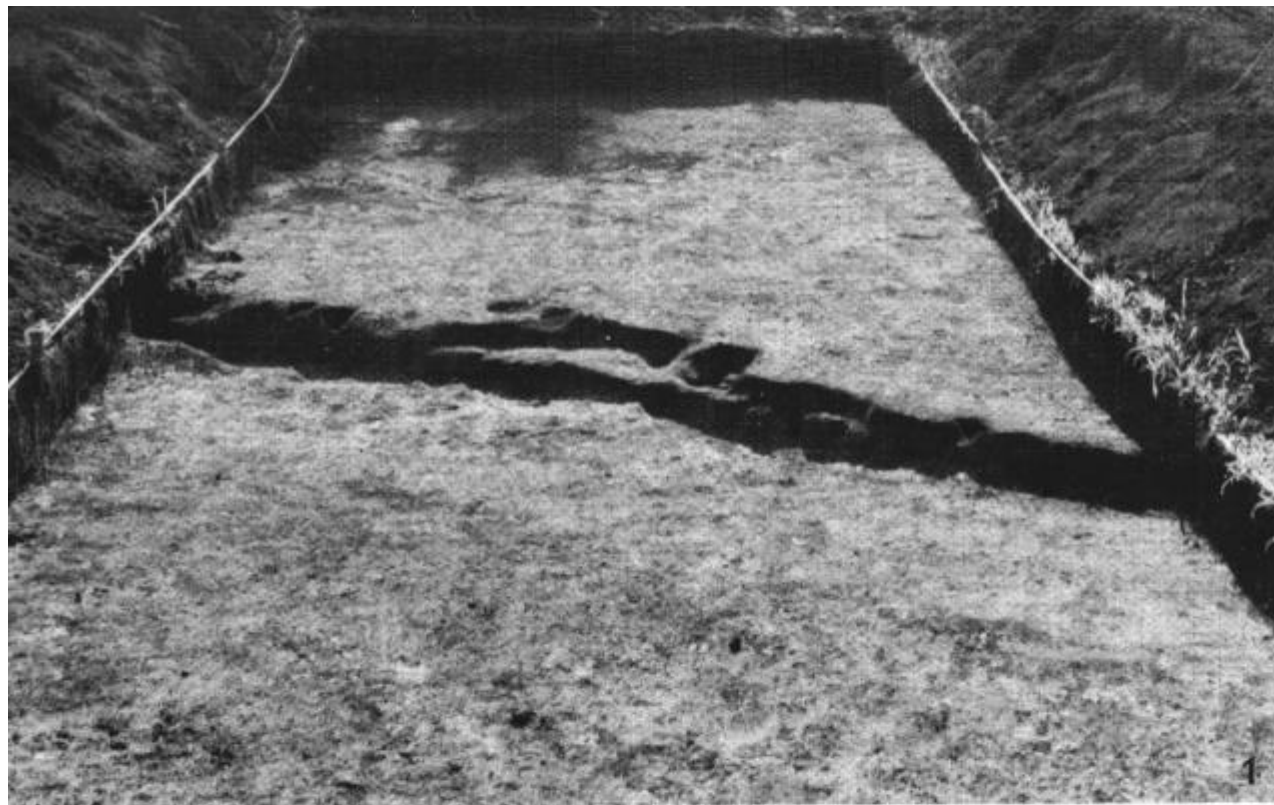
V ま と め

今回の調査は、排水路工事に伴う緊急発掘調査で、巾4 mのグリッドを排水路施行区域に設定して実施した。昭和53年度の遺跡分布調査では、縄文、弥生時代の遺跡と確認されている。

遺構は主に、調査区域北側に確認されたが、遺物は検出されず、遺構外からわずかに石器と須恵器片が出土しただけである。時期は、縄文時代から古代までが想定される。（大高）



図版 1 1. 発掘調査前 (西▶東)
2. SK 04 (北▶南)



図版 2 1. S D 02 (南▶北)
2. A区発掘調査後 (東▶西)

重兵衛台Ⅱ遺跡

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

重兵衛台Ⅱ遺跡は、秋田県能代市坂形字重兵衛台10-13他に所在する。昭和53年度に、秋田県教育委員会が実施した国営能代開拓建設事業関係遺跡分布調査により、確認された遺跡である。

今回の発掘調査は、同事業による排水路工事計画が具体化したため、記録保存を目的に事前の緊急発掘調査を実施したものである。(大高)

2 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

調査期間 昭和54年8月4日～9月3日

調査地 能代市坂形字重兵衛台10-13 他

調査面積 1,632m²

調査員, 補佐員, 補助員, 事務局, 調査作業員, 調査協力機関 中田面遺跡参照

II 遺跡の立地と環境

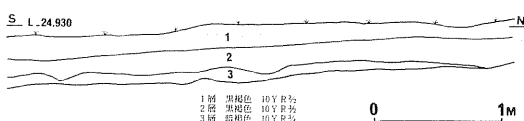
中田面遺跡参照

III 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

重兵衛台Ⅱ遺跡は、南にのびる舌状台地にある。南北の標高は、ほとんど差がなく26mを測り、下の水田との比高は16m前後である。

遺跡面積は、昭和53年度の範囲確認調査で37,000m²と推定されている。現状は畑地であるが



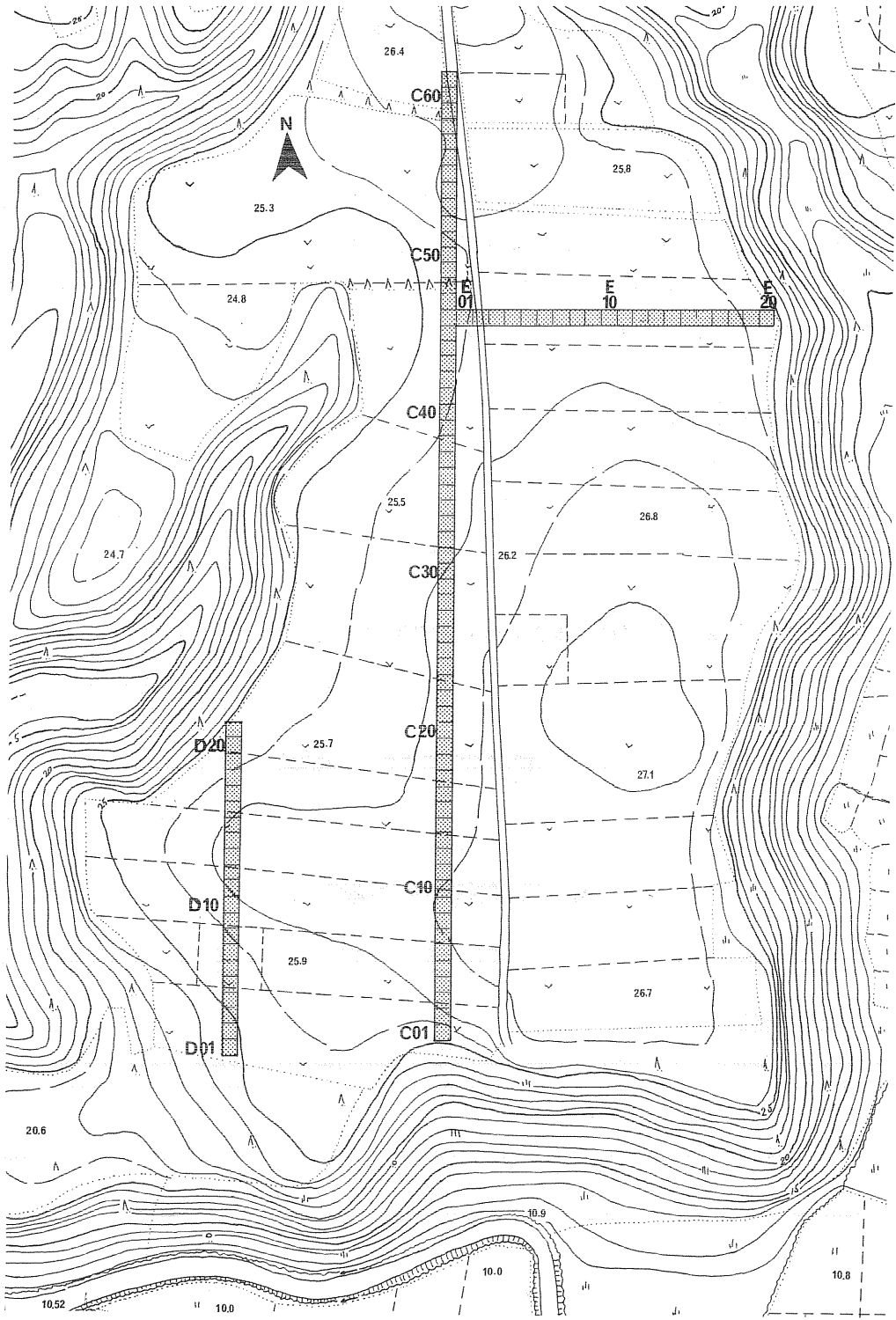
1 黒 黒褐色 10 Y R 2
2 黒 黒褐色 10 Y R 2
3 黒 黒褐色 10 Y R 2

作付はなく雑草がおいしげ、農道が1本南北に走っている。

地層は、厚さ20cm前後の耕作土である第1層と約20~30cmの厚さをもつ黒褐色第2層、そして第3層は10cm前後と薄い暗褐色である。

第1図 重兵衛台Ⅱ遺跡の地層

(大高)



第2図 重兵衛台Ⅱ遺跡の地形と
発掘調査区

2 調査の方法

調査は、排水路となる中心線を基準に、4×4mのグリッドを排水路線上へ設定して実施した。南北線東側をC区、西側をD区とし、北側東西線をE区とした。それぞれのグリッドには算用数字で通し番号をつけた。

遺構の実測はすべて平板測量で行ない、遺構名は竪穴住居跡—SI、土壇—SK、溝—SDとした。(大高)

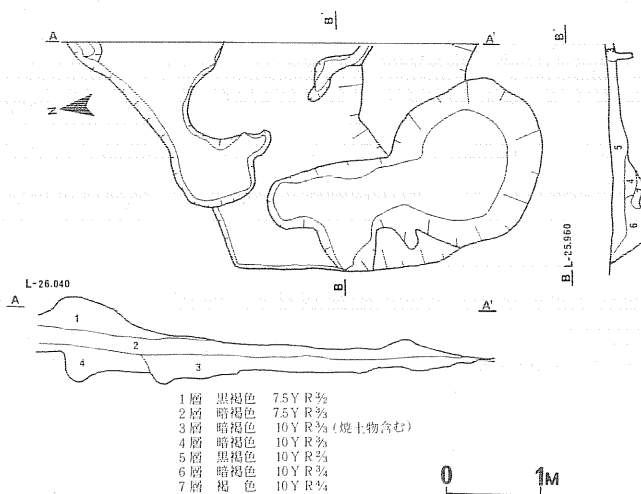
3 調査の経過

調査は、8月4日～9月3日まで実施した。

8月4日、テントを設営しD区設定。6日、発掘作業開始。8日、SK、SD確認。縄文土器出土す。9日、SK01・02・03発掘。C区発掘作業開始。10日、SI01とSK多数確認。17日、各遺構の土層断面実測と写真撮影。18日、SI02、SD03確認。20日、各遺構の平板測量を始める。23日、E区発掘作業開始。27日、SI03確認。28日、SI03より須恵器、土師器多数出土。29日、SK23、24、SD08の土層断面実測。9月1日、各遺構の平板測量を終了する。3日、テント撤去。(大高)

IV 調査の記録

1 遺構と遺物



第3図 SI 01 実測図

SI 01竪穴住居跡 東面部はグリッド外で確認できないが西面辺で約2.40mを示す方形プランの住居跡と考えられる。遺構は内部に土壇及び溝状土壇を重複し、確認された現状では複雑な形を呈す。深さはそれぞれ北面より46cm, 18cm, 36cmを測り、床面は起伏がある。

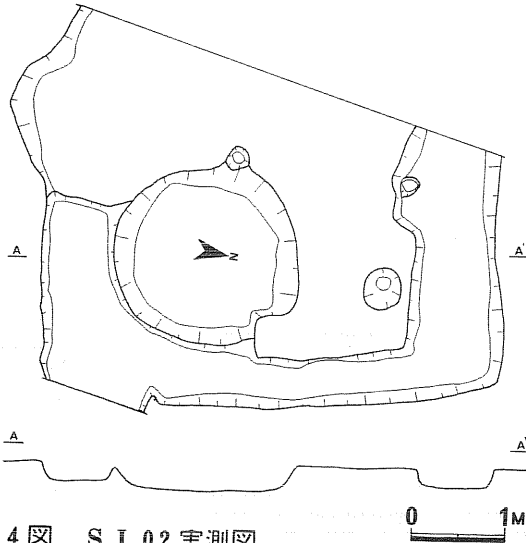
柱穴は遺構外に、不規則に構築される。南側床面からは多量の炭化物が検出された。

出土遺物は、遺構内埋土中より土師器片出土。いずれも杯破片でロクロ成形され、胎土緻密焼成は良好である。

SI 02 竪穴住居跡 東面部が一部グリッド外で検出できなかったが、確認段階では一辺4.00mの方形を呈する住居跡である。遺構内のへりに沿い、北、東、南各面の一部に上面巾0.6~1.00

m、深さ20cmの溝がめぐっている。遺構内東南端には直径2.00m、深さ27cmで皿状の掘り方を呈するほぼ円形の土壇が位置する。

南西部には小規模の焼土マウンドを検出、中心部に土製支脚がえられ、その回りをめぐるように復元可能な土師器片が確認された。柱穴は3個確認された



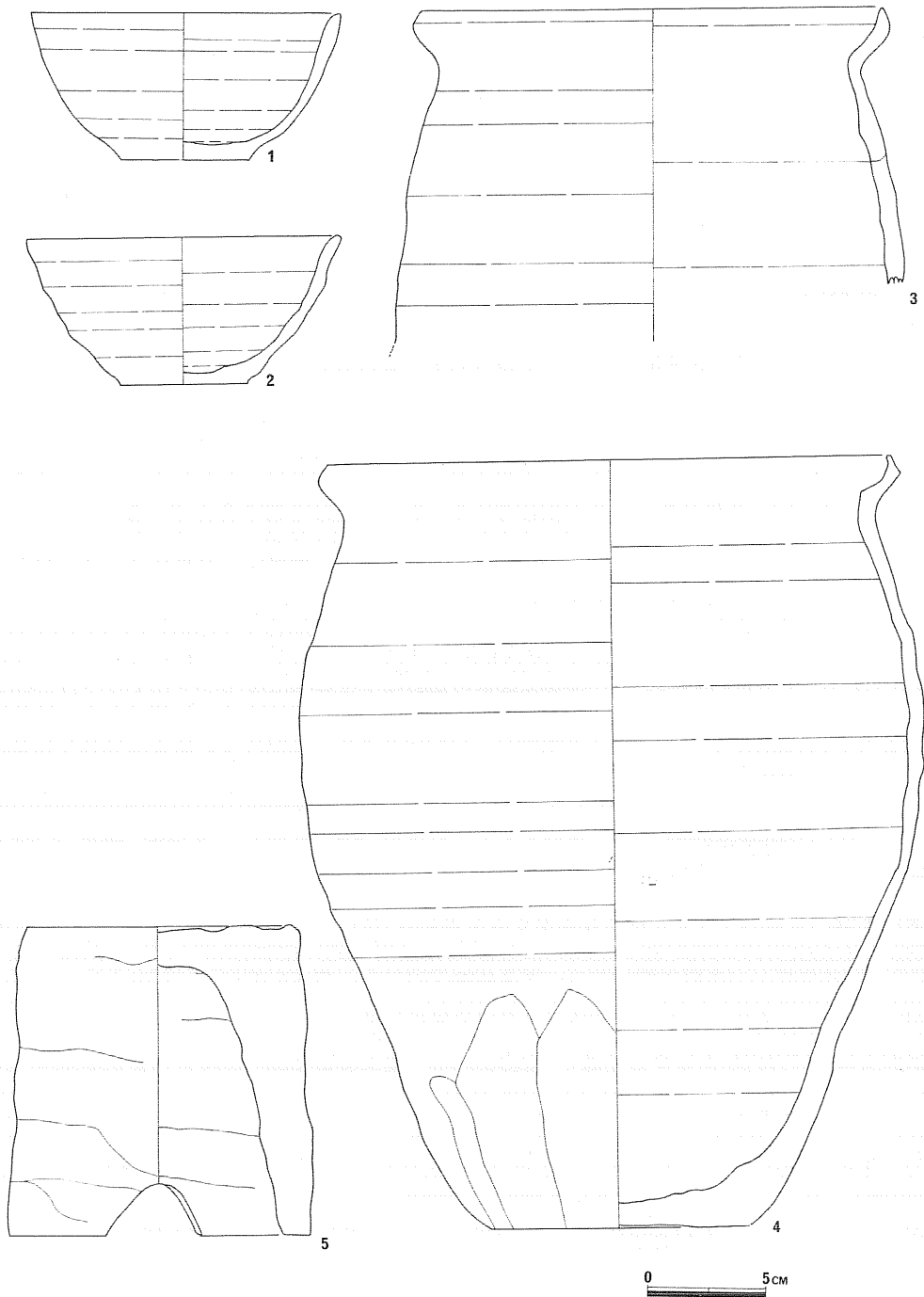
第4図 SI 02 実測図

が、その位置、形状とも規則性を持たない。

出土遺物は土師器杯、甕、土製支脚であり、支脚(5)は巻き上げ痕を留め、内面には斜位にカキ目痕を留める雑なつくりで、直径11cmの円筒を呈する土器である。胎土は粗砂を含み、焼成は不良である。色調は鮮赤褐色で部分的に強く熱を受けている。

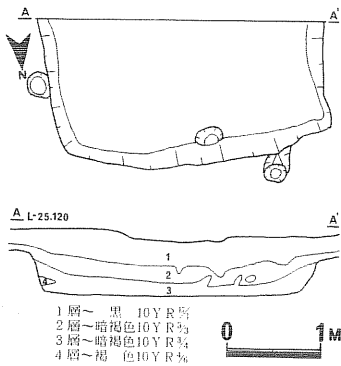
甕上部(3)は、口縁部を新たに接合させた痕跡を留めて、ロクロ整形を施している。外面には部分的に斜位にカキ目痕を有す。器形は口縁部がくの字形に強く外反し、口唇部でわずかに内反気味に9mm程垂直に立ち上がる。口径は19.5cm、胎土は粗砂を少量含み、焼成は良好である。色調は薄赤褐色である。

甕(4)は、胴部に巻き上げ痕跡をわずかに留め、外面の器面調整は、底部から上部にかけヘラデを施している。また、胴部には部分的にカキ目痕を薄く留めている。器形は、床面から内反気味に強く立ち上がり、口縁部でくの字形に屈折して口唇部に至る。口唇部はその後11mm程わずかに内傾する。胎土は粗砂を含み、焼成は良好である。色調は灰褐色で、部分的に黒色の焼きむらを生じている。



第5図 S I 02 出土土器

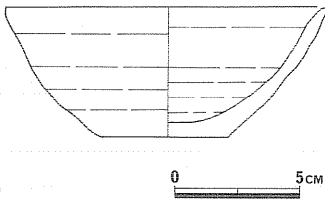
SI 03 竪穴住居跡 南面はグリッド外で確認できなかったが、1辺が2.80mで確認面からの深



第6図 SI 03 実測図

土師器底部片は、比較的厚みのある底部を有し、立ち上がりは内反気味に外傾する。成形はロクロによって施され、底部に回転糸切り痕を留めるが二次調整は行なわれていない。焼成は良好だが、部分的に黒色の焼きむらが生じている。胎土は粗砂を若干含んでいる。

須恵器（杯類底部片）は、高さ0.7cmの高台を付しており、底部には回転糸切り痕を留める。胎土は粗砂をほとんど含まず、焼成は不良でもろい。色調は灰白色を呈す。



第7図 SI 03 出土遺物

土師器（杯）（第7図）は、ロクロ成形が施されているが底部の痕跡は摩耗のため確認できない。立ち上がりは胴部下半分で、やや内反気味に外傾する。胎土は砂粒を多量に含み、器表面に浮き出ている。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈す。口径12.3cm、底部直径4.9cm、器高5.5cmである。

SK02土壇 全体のプランが楕円形を呈すると思われ、遺構のほぼ半分がグリッド内に現われている。確認段階での東西長軸4.00m、深さ10cmで浅いが、西面が部分的に25cmと深くなる。

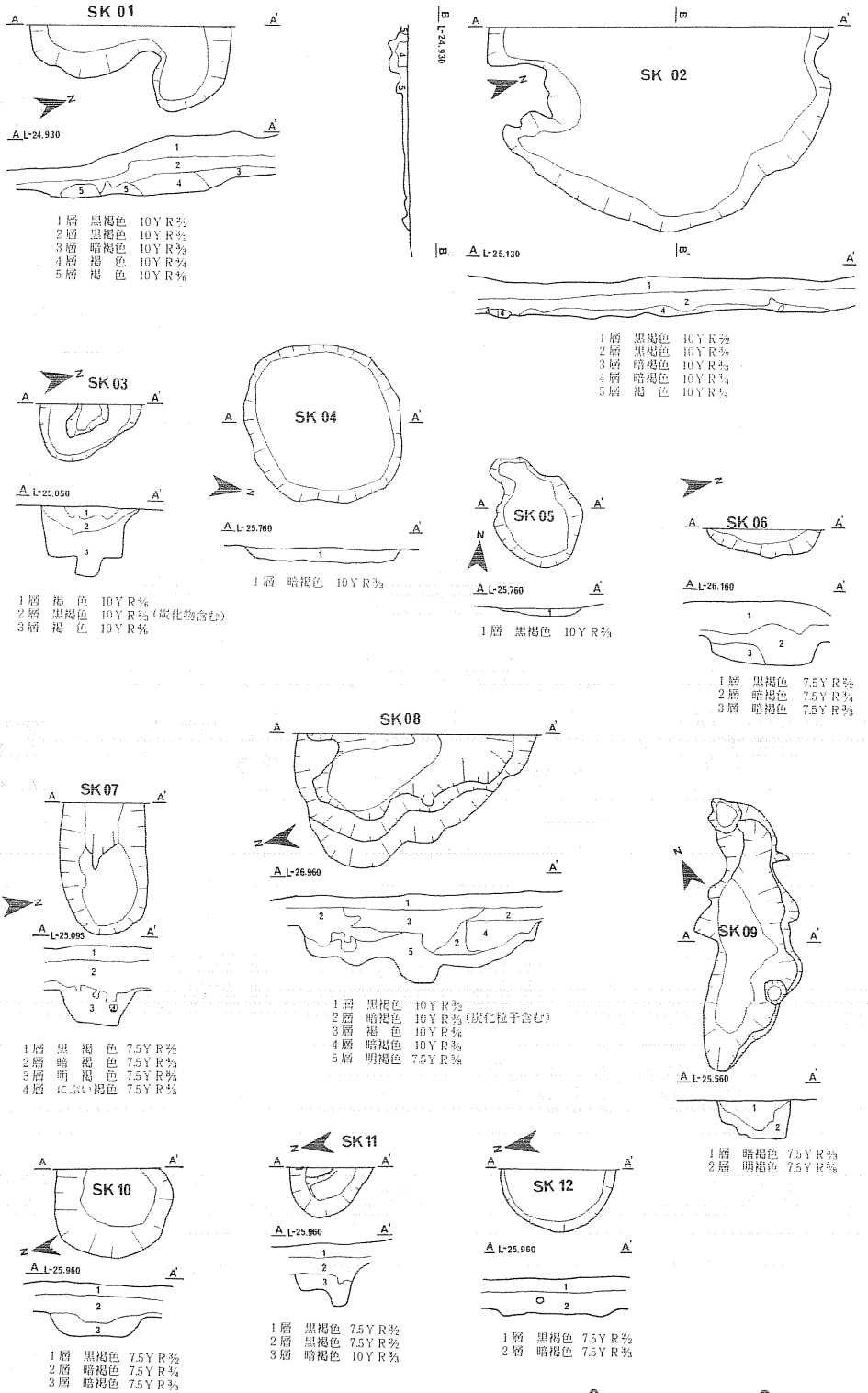
床面凹凸を呈す部分もあるが、全体的に平坦で皿状を呈す。

SK04土壇 ほぼ円形を呈する土壇で、直径1.80m、深さは最深部で20cmを測るが床面はほぼ平坦で、掘り方断面は皿状を呈し、壁面はしまっている。

SK05土壇 北面部分に小突起を呈する楕円状の小土壇で、長軸1.40m、短軸1.20m、深さは12cmと浅い。床面は平坦ながらも皿状を呈す。

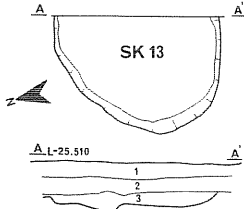
SK09土壇 南北に長く不整楕円状を呈し、南北長軸3.00m、東西長軸1.00m、深さは東部分が一段深く掘られ44cmを示す。床面は比較的平坦で、壁面も鋭く掘り込まれる。土壇内部及び周辺には多くの柱穴が確認されたが、遺構内のものは土壇が先行して構築されている。

SK13土壇 楕円形を呈すると思われる土壇の一部である。確認段階で南北長軸は1.30m、確

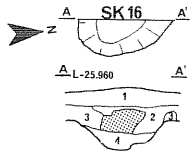


第8図 SK 01~SK 12実測図

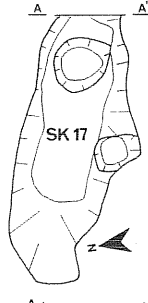




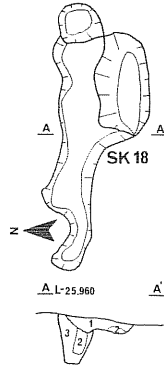
- 1層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 極暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



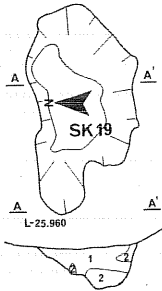
- 1層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$ (燒土粒子含む)
- 3層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 4層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



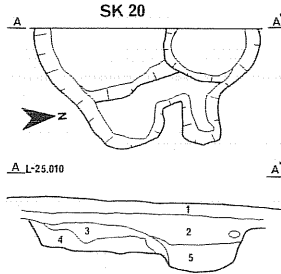
- 1層 黑褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 黑褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 褐色 10Y R $\frac{3}{4}$



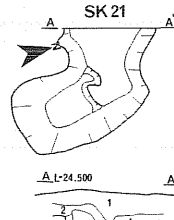
- 1層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 明褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



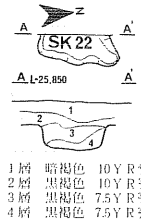
- 1層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



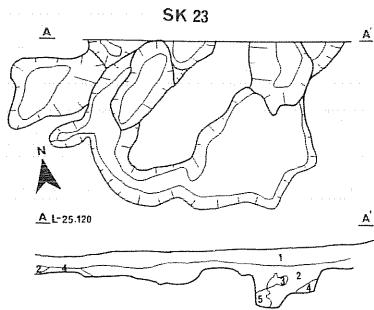
- 1層 極暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 4層 極暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$ (燒土粒子含む)
- 5層 極暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



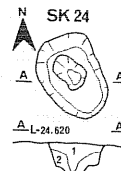
- 1層 極暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 暗褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 4層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 5層 褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



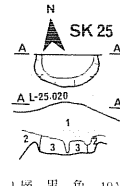
- 1層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 黑褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 黑褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$
- 4層 黑褐色 7.5Y R $\frac{3}{4}$



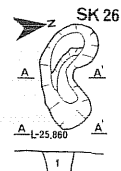
- 1層 黒色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 黒褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 4層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 5層 黄褐色 10Y R $\frac{3}{4}$



- 1層 黑褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 褐色 10Y R $\frac{3}{4}$



- 1層 黒色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 3層 褐色 10Y R $\frac{3}{4}$



- 1層 黑褐色 10Y R $\frac{3}{4}$
- 2層 黑褐色 10Y R $\frac{3}{4}$

第9図 SK 13~SK 26 実測図



認面からの深さは13～16cm、掘り方は皿状を呈しているが、部分的には底面に窪み、を有す。
埋土は自然堆積による一層で、炭化物を混入する。床面より土師器杯片出土。

SK18土壙 西南部でふくらみを持つ東西に長い溝状土壙で、東西軸2.80m、南北最大巾92cmである。床面は北面部が深く53cm、南面部は12cmと浅い。

SK19土壙 西面部分に張り出し状にのびている部分を有した、東西に長い不整楕円形である。東西の最長軸2.20m、東西最大巾1.10mで、中心部に播鉢状に深くなっており、最深44cmである。

SK20土壙 グリッド内に、ほぼ半分確認された楕円形のプランを有すると思われる遺構である。東寄り部と中央部で17cm、35cmと深さが異なるが、それぞれの床面はほぼ平坦であり、北寄り部はさらに直径42cmの小土壙状に掘られている。

SK24土壙 楕円形を呈し長軸80cm、短軸60cm、深さ24cmで床面北側にさらに長軸40cm、短軸24cm、深さ16cmの小穴を有する土壙である。

SD01溝 D08グリッド西より東へ3.70m進みUターンする際一端括れ西進、カギ状の溝を形成する。壁面床面ともかなり荒れており、巾は上面で30～60cm、深さは10～23cmと不定である。

SD02溝 C05グリッド西側部からグリッド内を貫通、東へ傾斜する溝である。壁面は荒れているが底面は平坦であり、掘り方は逆台形を呈する。上面で巾50cm、深さは20cmと整ったつくりである。

SD03溝 C12グリッド東側部から3.00m北西へのび、グリッド内で途絶えている。壁面底面とも荒れがひどい。上面で巾60cm、深さ1.15mで巾、深さとも一定の数値を呈しており、Tピットの可能性もうかがえる。

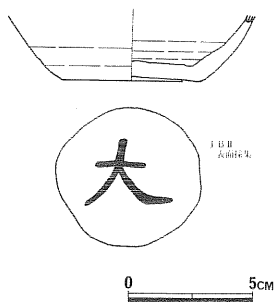
SD04溝 C33グリッド東側部からグリッド内を貫通し、西へ傾斜する溝である。壁面は荒れているが底面は比較的平坦で、鍋底を呈す。上面で巾60cm、深さ20cmで一定している。

SD05溝 C36グリッド東側部から西方向へ傾斜しながら、一時中断してグリッド内を貫通する。上面で巾60cm、深さ20cmを測る。SD05の北面には多数の小穴とSK20が位置し、SD06と共にこれらをはさみ込むような形で位置する。

SD06溝 C39グリッド東側部からグリッド内を貫通し、西へ傾斜する溝である。上面で巾60cm、深さ15cmでほぼ一定しており、掘り方は逆台形で、壁面底面とも荒れは少ない。

SD07溝 E08グリッド北側端より80cm南進し、グリッド内で途絶えている。壁面床面とも荒れており、掘り方は鍋底状を呈している。上面で巾40cm、深さ10cm。

SD08溝 E11グリッド北側端より1.00mグリッド内に南進し、途絶えている。壁面底面とも荒れており、掘り方は鍋底を呈す。上面で巾35～40cm、深さ17cm。



第10図 採集土器

2 遺構外の遺物

表面採集された土師器杯の底部片で、底面に「大」の字が書かれた墨書土器である。ロクロ成形がなされ、直径5.4cmの底部には回転糸切り痕を留める。立ち上がりは体部下端で段を形成することなく、わずかに内反気味に外傾する。

胎土は緻密で砂粒を含み、明赤褐色を呈している。(熊谷)

V ま と め

今回の調査は、排水路工事に伴う緊急発掘調査で、前回の分布調査において遺構、遺物が多数検出されたことから、当初より注目された遺跡である。調査は、4 m巾で遺跡台地上を縦断する部分調査であったので、その全貌を明らかにすることはできなかった。

しかし、200mにおよぶ調査区の南端、中央、北端部に、住居跡、土塀、溝の各遺構が確認されたことから、遺跡はこの台地全体にわたっているものと思われる。時期としては、出土遺物から表杉ノ入式土器の範疇に入ると思われるが、底径は口径に比べて小さく、比率が0.4である。なお須恵器杯類は伴わない。

以上のことから、11世紀に近い時期を想定したい。(註1、註2)(大高)

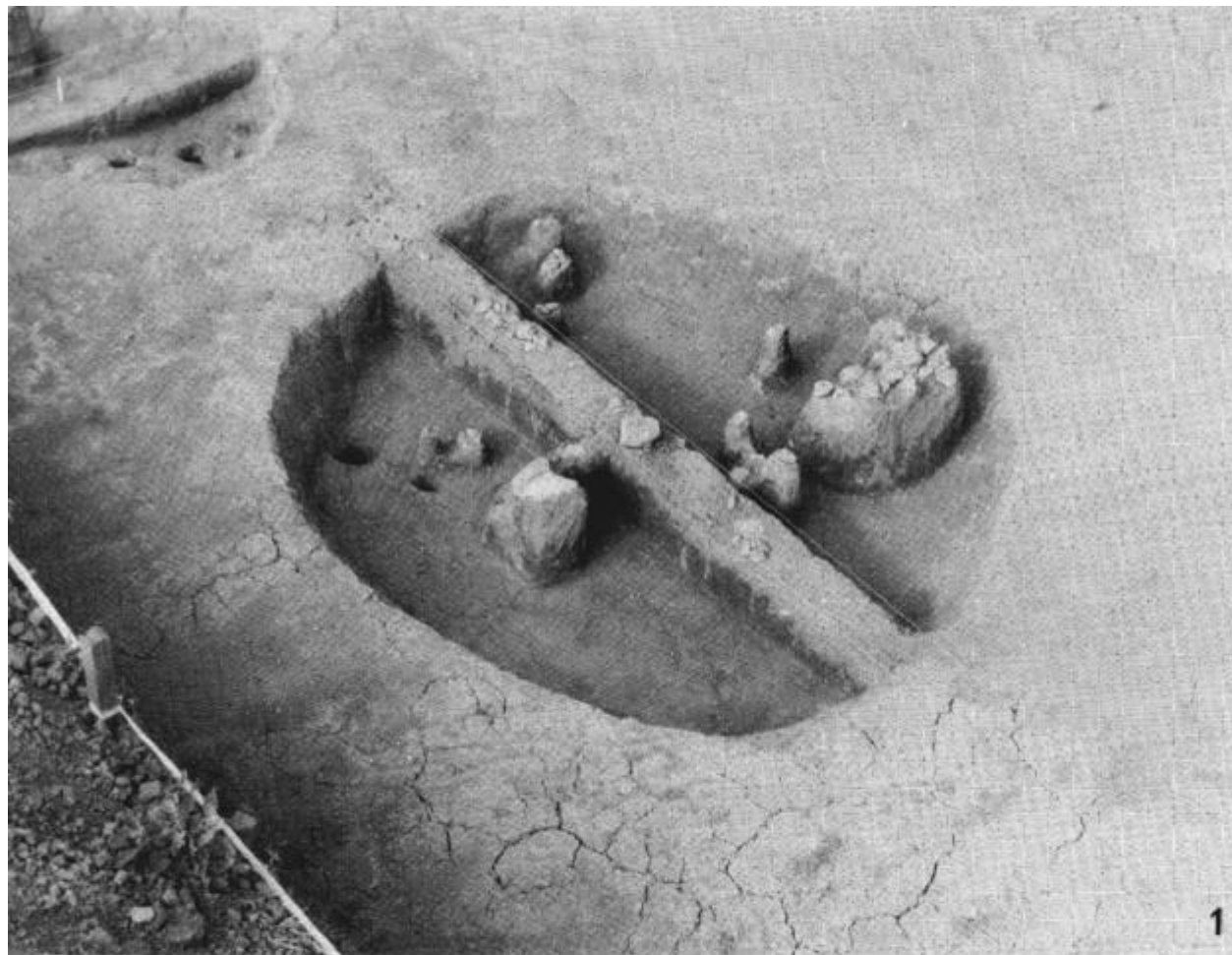
註1 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐる一奈良、平安期土師器の諸問題一」

『柏倉亮吉教授還暦記念論文集、山形県の考古と歴史』山教史学会 1967年

註2 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』 1957年



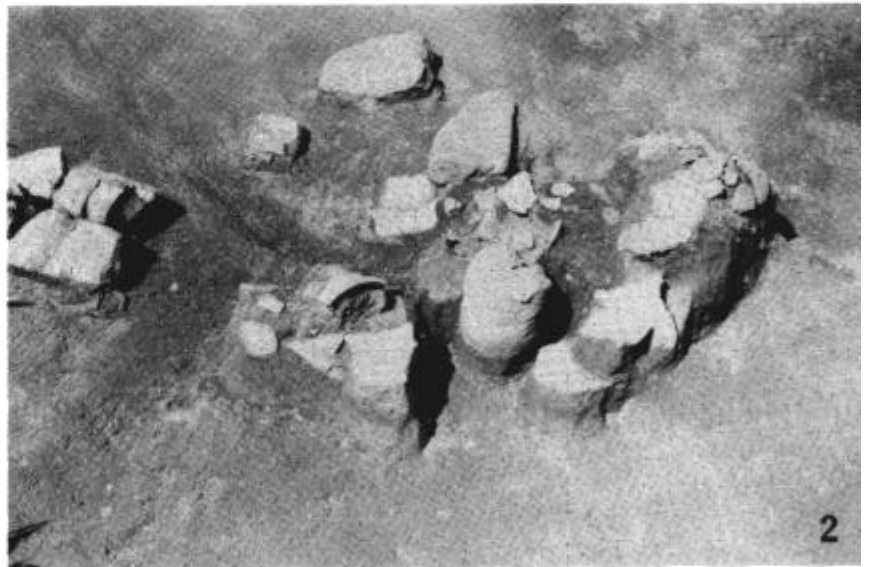
図版 1 1. 発掘調査前 (東▶西)
2. S I 01 と S D 02 (西▶東)



図版 2 1. SK 04 遺物出土状態 (西▶東)
2. SD 04 (北▶南)



1. S I 02 (東▶西)



2. 遺物出土状態
(土製支脚)

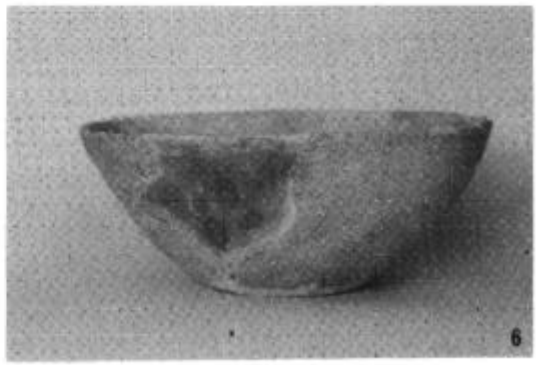
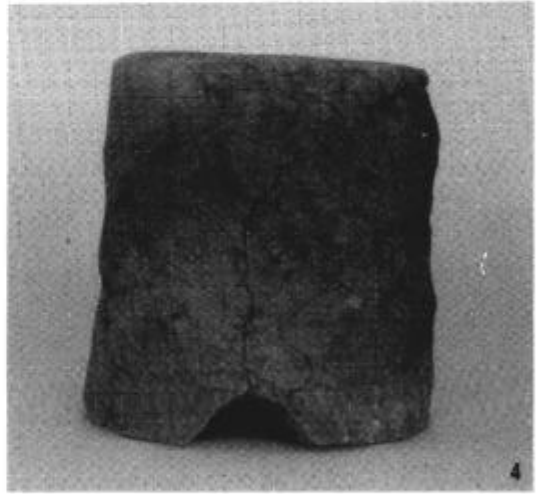
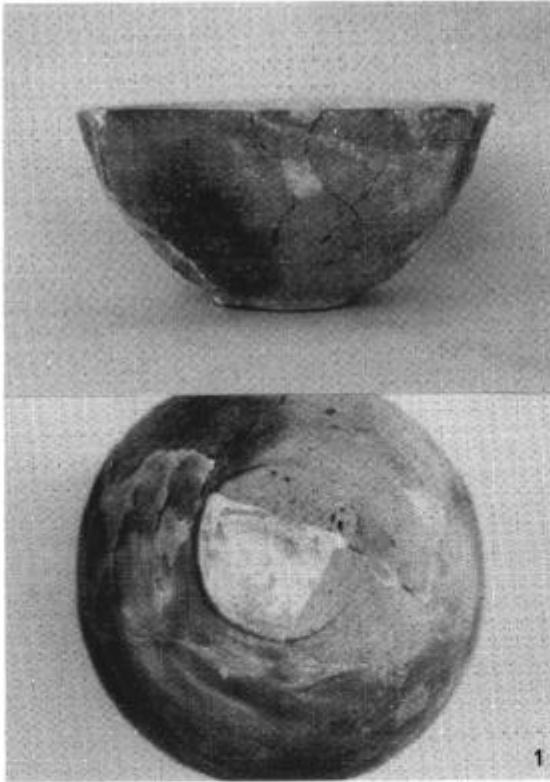


図版 3

3. 土師器



図版 4 1. S I 03 遺物出土状態 (北▶南)
2. C区 発掘調査後 (東▶西)



図版 5 遺構内出土遺物 1~5 S I 02
 6 S I 03

根 洗 場 遺 跡

I はじめに

1 発掘調査に至るまで

根洗場遺跡は、秋田県能代市坂形字根洗場36他に所在する。昭和53年度に、秋田県教育委員会が実施した国営能代開拓建設事業関係遺跡分布調査により、確認された遺跡である。

今回の発掘調査は、同事業による排水路工事計画が具体化したため、記録保存を目的に事前の緊急発掘調査を実施したものである。(大高)

2 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

調査期間 昭和54年9月3日～9月17日

調査地 能代市坂形字根先場36 他

調査面積 372.8m²

調査員, 補佐員, 補助員, 事務局, 調査作業員, 調査協力機関 中田面遺跡参照

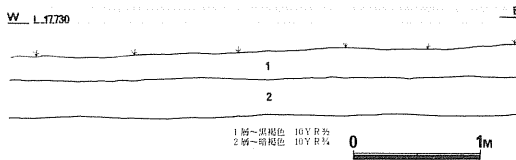
II 遺跡の立地と環境 中田面遺跡参照

III 発掘調査の概要

1 遺跡の概観

根洗場遺跡は、東西にのびる台地の南側に位置し、北側には鳥形部落がある。標高は17mで下の水田との比高は、7m前後である。

遺跡面積は、昭和53年度の範囲確認調査で約14,500m²と推定されている。今回の調査区は、



みょうが畑と杉林の境にあり、雑木が調査区をはばんでいた。

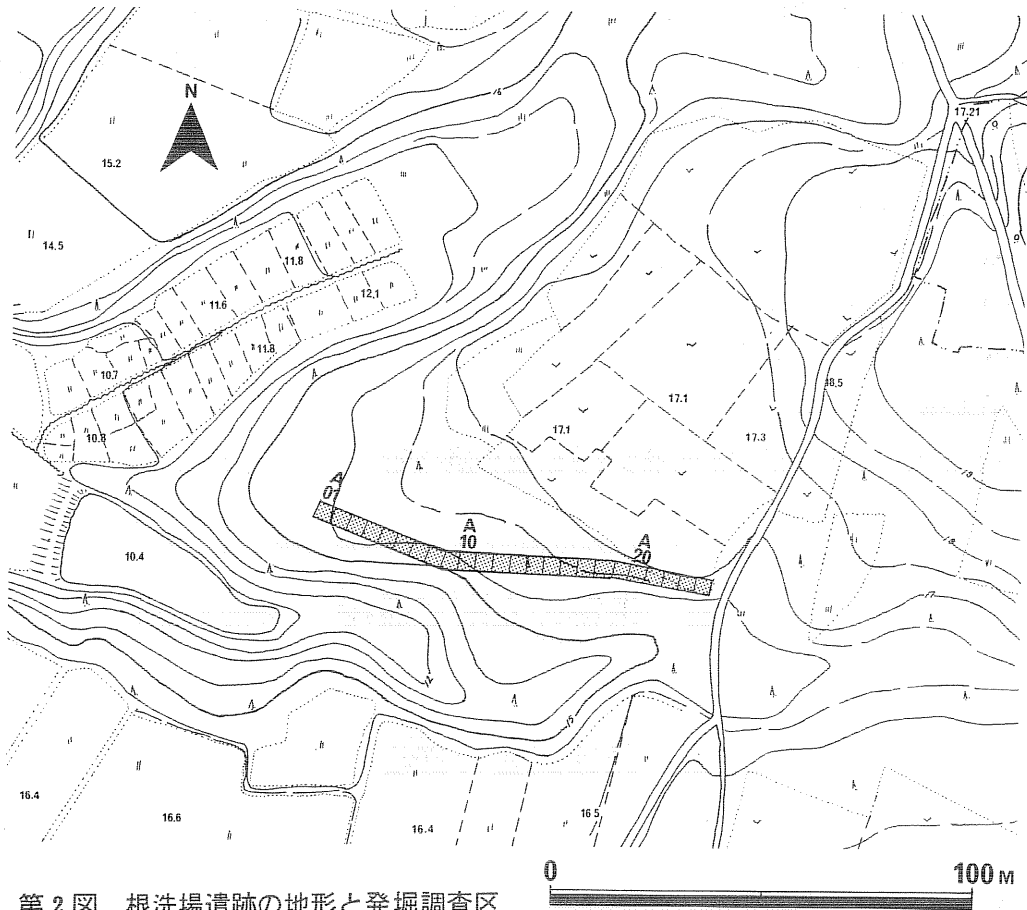
地層は2層からなり、厚さ約20～30cmの第1層(黒褐色)と、約30cm前後の厚い第2層(暗褐色)とに別れている。(大高)

第1図 根洗場遺跡の地層

2 調査の方法

調査は、排水路となる中心線を基準に、4×4 mのグリッドを排水路線上へ設定して実施した。グリッドには、西から東へ算用数字で通し番号をつけ、A区とした。

遺構の実測は、すべて平板測量で行ない、遺構名は、土壇-SK、溝-SDとした。(大高)



第2図 根洗場遺跡の地形と発掘調査区

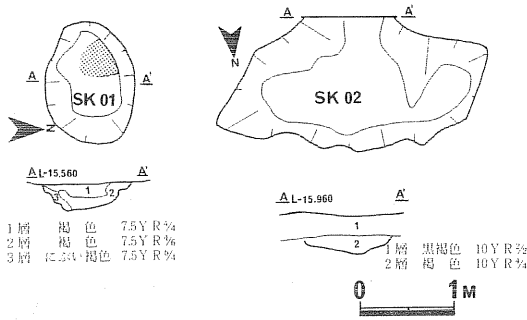
3 調査の経過

調査は、9月3日～9月18日まで実施した。

9月3日、テントを設営。調査区の刈払い。4日、調査グリッド設定。発掘作業開始。5日、1～6グリッドは耕作による攪乱のため、発掘中止。6日、SK01,02確認。7日、縄文土器多数出土。12日、各土器取り上げ作業。13日、各遺構の土層断面実測と平板測量。17日、土器取り上げ後の地山精査。18日、全調査を終了し、テントを撤去する。(大高)

IV 調査の記録

1 遺構と遺物



第3図 SK 01, 02 実測図

SK01土壌 平面形は長軸1.40m短軸1.00mの楕円形。壁は約50°傾斜し、20~25cm立ち上がる。床面は北から南へ緩く傾斜する。北西には40×40cmの範囲で焼土が薄く堆積していた。

SK02土壌 平面形は長軸3.00m短軸1.60mの不整形を呈するものと思われる。断面は緩く皿状に窪み、中央での深さは20cmを測る。床面はほぼ平坦で

埋土からは縄文土器片と石錘が出土した。

SD01溝 N-50°-Eの方向で北東から東西へ走る。巾30cm深さ10cmで、断面は緩い皿状を呈す。

2 遺構外の遺物

18~22グリッドから多数の出土をみた。耕作土下の第2層が包含層である。

土器 廃棄されたような状態で、層的には確認できなかった。

第1類土器 (3) 口唇部にわずかに無文帯を残し、胴部全面に特異な縄文を施す。

第2類土器 (4) 口縁部と胴部の境に粘土紐をはりつけた隆帯が巡る。

第3類土器 (1・2・5) 口縁部と胴部の境に2~3段の爪形文を刺突する。本遺跡ではこの類が1番顕著で、特に5のように隆帯文を伴うものが多い。

第4類土器 (8) 口縁部文様帯を沈線で区画する。文様帯は広い。

第5類土器 (6) 縦位に条痕を施す。器面は磨かれ、焼成も良好。

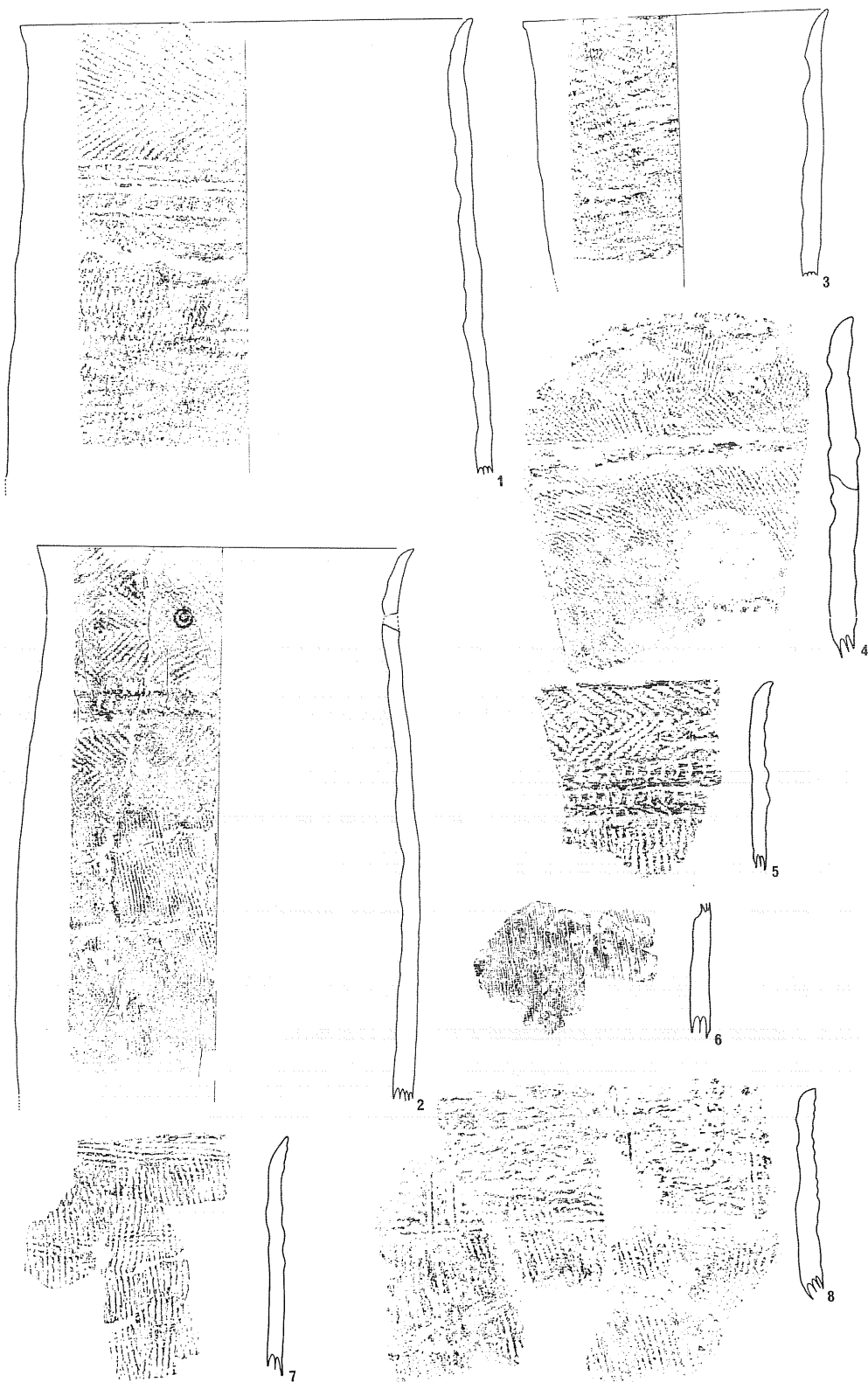
第6類土器 (7) 狭い口縁部文様帯をもつ。

石器 57点出土している。

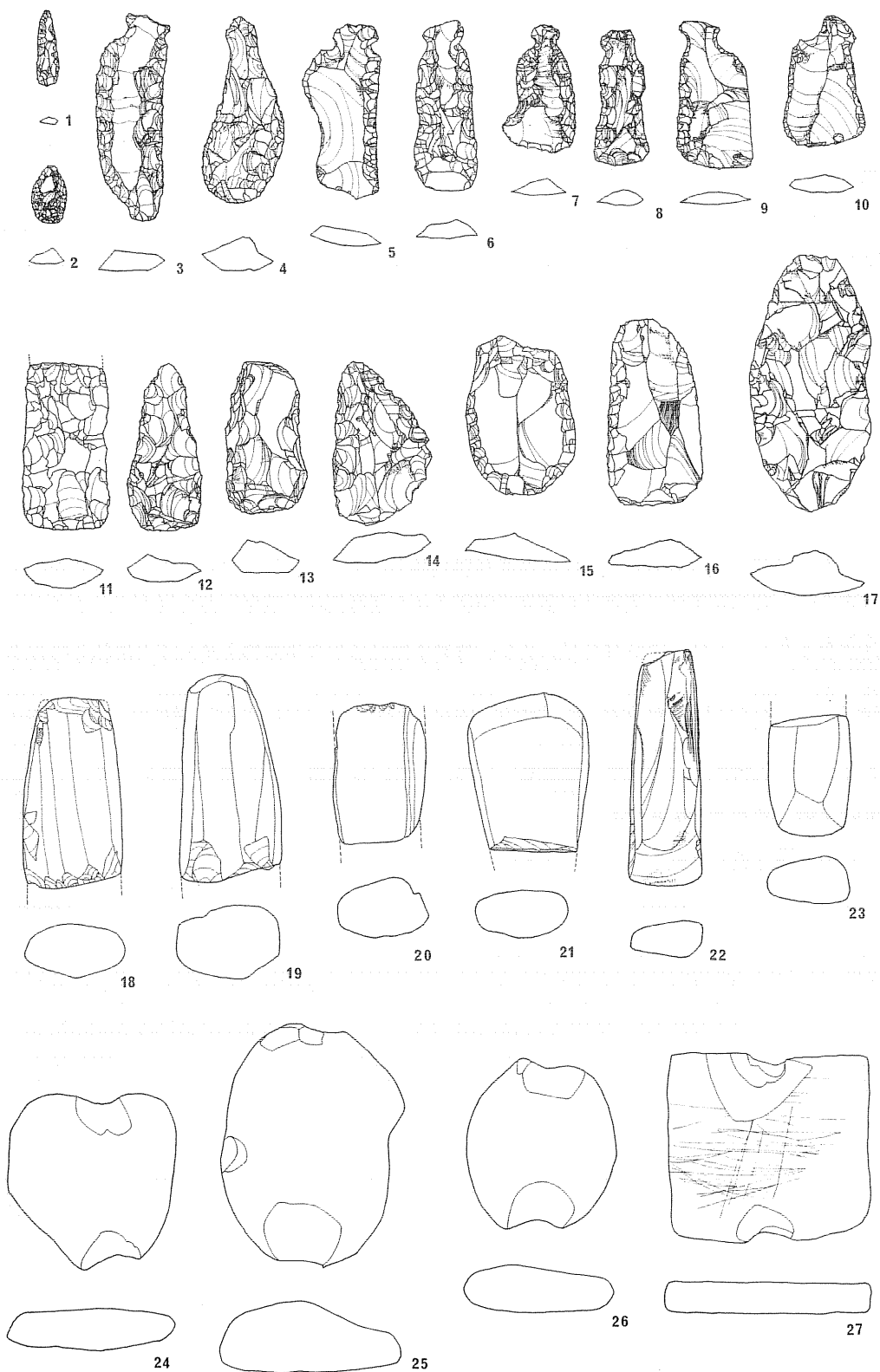
石鏃 (1・2) 2点のみ。1は1.65gで頁岩、2は2.90gで黒曜石。

石匙 (3~10) 出土総数12点中1点のみ横形。すべて頁岩。

筥状石器 (11~16) 出土総数11点中3点のみ片面加工。ほとんど頁岩で、玉髓と流紋岩も



第4図 2層出土土器



第 5 图 2 層出土石器

0 10cm

若干混じる。

石槍 (17) 3点とも頁岩。

磨製石斧 (18~23) 出土総数7点で、すべて緑色凝灰岩。20は弱凸強平片刃で偏刃。22は弱凸強凸片刃。21と23は両凸刃。

石錘 (24~27) ほとんどが両端を欠く切目石錘で、100~200gのものが多い。出土総数20点中70%が安山岩で、凝灰岩や泥岩も混じる。表面に鋭い搔傷のあるものが2点含まれる。

(田口)

V ま と め

今回の調査は、排水路工事に伴う緊急発掘調査で、巾4m、長さ96mと限られた調査区であったので、昭和53年度の遺跡分布調査で確認された遺跡面積の西側一部に過ぎず、その中心部や性格を知ることはできなかった。また、調査区殆どが畑地造成工事により攪乱され調査不能であった。

しかし、18~22グリッドにわたって濃密に重り合って出土した復元不可能な遺物(土器片、石器)から、斜面上に位置する廃棄場とも考えられ、本遺跡の中心部は、前述の分布調査からも北東部にあると推定される。

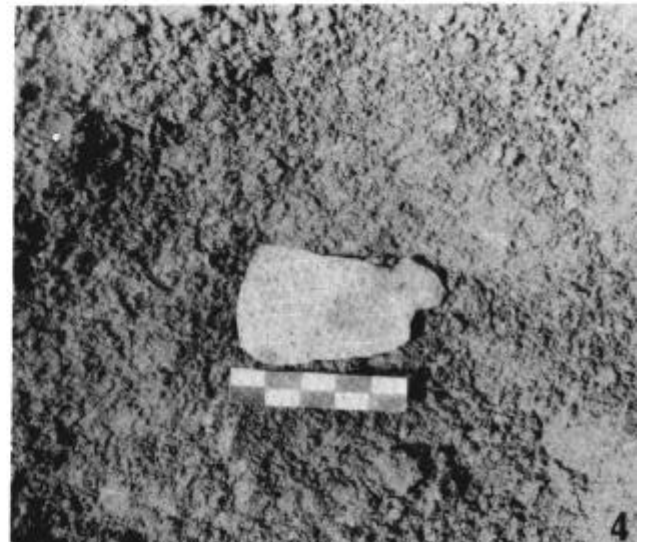
時期は縄文前期と考えられる。(大高)

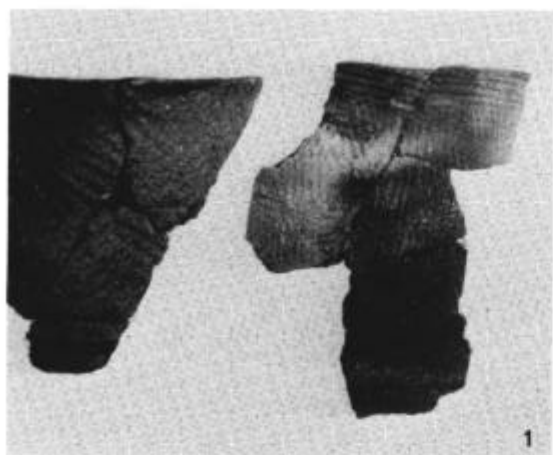


1 発掘調査風景（北▶南）

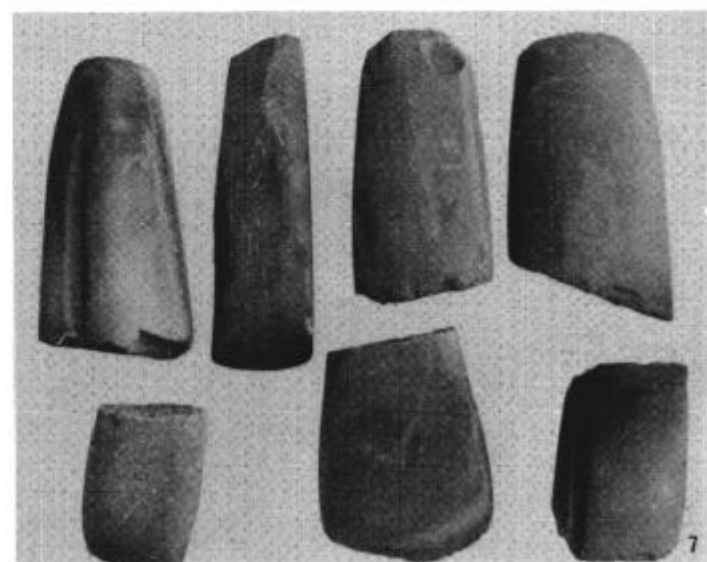
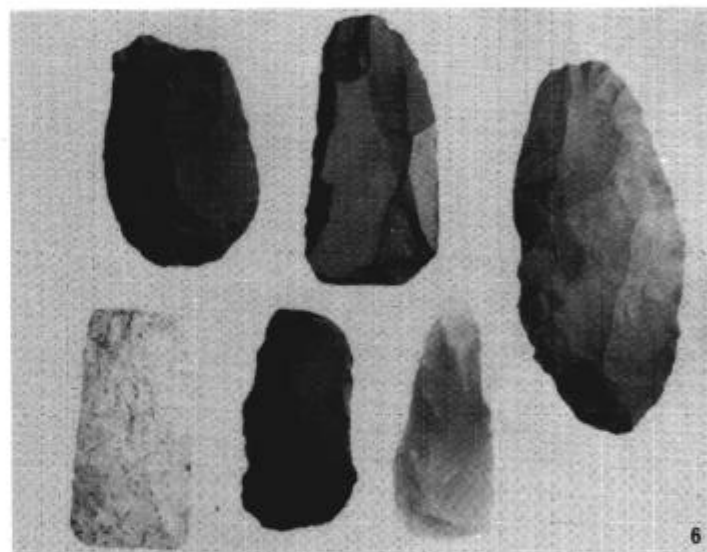
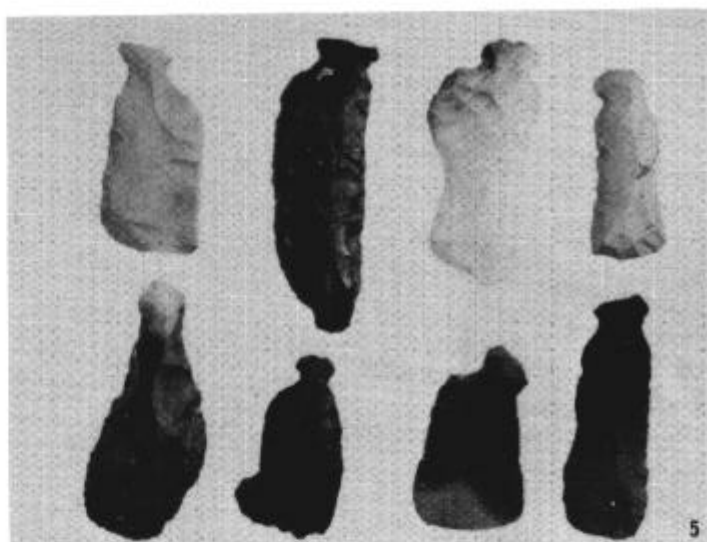
2～4 遺物出土状態

図版 1





図版 2 出土遺物



図版3 出土遺物 1~4 縄文式土器
5~7 石器